

計算機用日本語基本名詞辞書 IPAL  
(Basic Nouns)  
解説編

平成 8 年 3 月

情報処理振興事業協会  
技 術 セ ン タ ー

## はじめに

情報処理振興事業協会（I P A）では、昭和56年の技術センター発足当初から、情報処理分野における日本語処理の重要性に着目し、計算機用日本語辞書の研究・作成に取り組んでおります。動詞に関しては、昭和62年度より『計算機用日本語動詞辞書I P A L (Basic Verbs)』として、形容詞に関しては、平成2年度より『計算機用日本語形容詞辞書I P A L (Basic Adjectives)』として公開致しましたところ、幸いにして産業界ならびに学界から好意的な評価を受け、多数の方々にご利用いただいております。また、その続編ともいえる名詞の辞書『計算機用日本語基本名詞辞書I P A L (Basic Nouns)』については、平成6年度よりF T P形式で公開致してはりましたが、このたび名詞辞書についても、報告書の形式で公開する運びとなりました。報告書は次のような二分冊になっています。

『計算機用日本語基本名詞辞書I P A L (Basic Nouns) - 辞書編 - 』  
F T P形式で公開する1082語のうちから、142語を抜粋して印刷したものを。

『計算機用日本語基本名詞辞書I P A L (Basic Nouns) - 解説編 - 』  
辞書の枠組みを示すため、辞書の利用に必要な項目を説明的に書いたものを。

I P A Lの研究グループは、I P Aの研究員、並びに、専門的立場で共同研究を行うワーキンググループ（W G）、臨時ワーキンググループ（臨時W G）から成っています。見出し語の選定や、辞書の仕様については、月に1度の割合でW G委員会を開催し、検討いたしました。執筆は、主に臨時W G委員が中心になって行いました。また、年に1度コンサルティンググループ（C G）委員会を開催し、助言・指導を賜りました。

辞書の執筆においては、全項目を執筆者が記述する第一次記述、異なる執筆者による区分の校閲、項目ごとに担当者が全見出し語を校閲する第二次記述、という手順で行ないました。

校閲担当項目名と担当者名を以下に示します（所属は平成8年3月現在）。

### 意味素性

青山文啓（東海大学文明研究所助教授）

橋本三奈子（I P A研究員）

### 区分

鈴木高志（埼玉大学文化科学研究科言語文化論専攻修了）

山下智弥（津田塾大学大学院博士前期課程英語学専攻）

橋本三奈子（上掲）

桑畑和佳子（I P A研究員）

### 意味情報《意味記述》

鳥飼浩二（I P A Lコンサルティンググループ委員）

鈴木高志（上掲）

### 意味情報《関連語》

鈴木高志（上掲）

### 意味情報《助数詞》

高松正毅（江戸川女子短期大学人文学会専任講師）

### 意味情報

外池俊幸（名古屋大学言語文化部助教授）

緒方典裕（筑波大学大学院文芸言語研究科言語学専攻）

渡辺和恵（ニューヨーク州立大学大学院生）～95年3月

加藤安彦（国立国語研究所主任研究官）

渡辺恵子（筑波大学留学生教育センター非常勤講師）～92年3月

項としての用法

- 山下智弥 (上掲)
- 木田敦子 (東京女子大学大学院文学研究科日本文学専攻)
- 佐藤幸子 (獨協大学外国語学部ドイツ語学科卒)
- 井口厚夫 (獨協大学外国語学部専任講師)
- 猪塚元 (東邦大学非常勤講師)
- 窪田美穂子 (東北福祉大学専任講師) ~ 95年3月
- 桑畑和佳子 (上掲)

連体修飾語としての用法

- 木村朗子 (東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻)
- 加藤安彦 (上掲)

連体被修飾語としての用法 1

- 塩谷英一郎 (帝京大学経済学部専任講師)
- 斎藤初江 (埼玉大学文化科学研究科言語文化論修了)

連体被修飾語としての用法 2

- 本多啓 (横浜国立大学教育学部非常勤講師)
- 中島尚樹 (調布学園女子短期大学英語英文学科専任講師) ~ 94年3月

サ変動詞としての用法

- 三枝令子 (一橋大学法学部教授)
- 山下智弥 (上掲)
- 小川裕花 (日本学術振興会特別研究員) ~ 94年3月

述語としての用法 1

- 堤正典 (神奈川大学外国語学部専任講師)

述語としての用法 2

- 堤正典 (上掲)
- 佐藤安希子 (日本女子大学大学院文学研究科英文学専攻博士課程前期修了)
- 小島幸子 ~ 91年3月

形態情報

- 山本清隆 (信州大学教育学部助教授) ~ 95年3月
- 宗意幸子 (獨協大学外国語学部ドイツ語学科卒)
- 加藤久雄 (奈良教育大学助教授)

慣用表現ほか《慣用表現》

- 高松正毅 (上掲)

慣用表現ほか《他の合成語》

- 宗意幸子 (上掲)

慣用表現ほか《区分間の意味的關係》

- 桑畑和佳子 (上掲)
- 本多啓 (上掲)

項目間の整合性

- 宗意幸子 (上掲)

全体の査読

- 鳥飼浩二 (上掲)

辞書執筆の資料となる用例を、新聞やマニュアルなどのデータベースから検索するシステム、並びに作業支援ツールのプログラミングと操作を、玉井陽子が担当しました。

計算機入力をはじめとする各種の補助作業については、長島みどり、井澤泰子、木村由記子、飯田秋江、陣内貴子、金杉友子、相原明子、槇裕子、田中住枝、国松眞智子、横尾由香里、堀内マリ香、大塚由比子、真柄麻樹、佐藤智子、佐々木秀子の協力を得ました。

なお、辞書データを編集するためのデータベースシステムは、富士通エフ・アイ・ピー株式会社の松本博之氏、佐々木光博氏、今泉忠氏が、利用者のための清書用のプログラムは、龍谷大学の渡辺靖彦氏が開発しました。『辞書編』を印刷するための LaTeX 用プログラムは、株式会社 S R A の鈴木裕信氏のご好意によって実現しました。また、計算機の運用にあたっては技術センターの佐藤徳幸氏、山崎真裕氏の応援がありました。

利用者の方々からも有益なご意見を頂きました。皆様に感謝申し上げます。

情報処理振興事業協会 技術センター

村田 賢一 (研究員, グループリーダー)

はじめに

目次

## 第一部

### 第一章 名詞辞書の概要

橋本三奈子・桑畑和佳子

1. I P A L 名詞辞書で扱う名詞の用法 ..... 1
2. 対象とする見出し語 ..... 4
3. I P A L 名詞辞書の構成 ..... 5

### 第二章 見出し語の区分

橋本三奈子・桑畑和佳子

1. 区分の方法 ..... 10
  - 1.1 区分の判断基準 ..... 10
  - 1.2 基準 A : 用法の有無 ..... 11
    - 1.2.1 「サ変用法」の有無 ..... 11
    - 1.2.2 「述語用法 1」の有無 ..... 12
    - 1.2.3 「項の用法」の有無 ..... 12
  - 1.3 基準 B : 「項の用法」の情報 ..... 13
    - 1.3.1 連体修飾語の違い ..... 13
    - 1.3.2 結びつく述語の違い ..... 15
    - 1.3.3 連体修飾語と結びつく述語との違い ..... 17
    - 1.3.4 見出し語以外の項の違い ..... 18
  - 1.4 基準 C : その他の用法の情報 ..... 19
    - 1.4.1 「サ変用法」の違い ..... 19
    - 1.4.2 「連体用法」の被修飾語の違い ..... 20
    - 1.4.3 「被連体用法 1」の意味関係の違い ..... 20
  - 1.5 基準 D : 意味索性 ..... 21
    - 1.5.1 意味索性の組み合わせ ..... 21
    - 1.5.2 目安にした意味索性の違い ..... 22
  - 1.6 基準 E : 意味的な情報 ..... 23
    - 1.6.1 類義語や対語の組み合わせ ..... 23
  - 1.7 区分の判断基準外のもの ..... 25
    - 1.7.1 形状の違い ..... 25
    - 1.7.2 表記や合成語の違い ..... 26
2. 区分ごとに記載される情報 ..... 26
3. 区分とは別に見出し語ごとに記載される情報 ..... 27
  - 3.1 「慣用句」 ..... 27
  - 3.2 合成語の要素でしか用いられないもの ..... 29
  - 3.3 専門用語など ..... 30

### 第三章 意味索性

青山文啓

1. 名詞辞書の意味索性 ..... 31
  - 1.1 索性と役割 ..... 31
  - 1.2 索性の必要性 ..... 32
  - 1.3 名詞辞書における意味索性の記載欄 ..... 33
2. 索性を与えるための原則 ..... 34
  - 2.1 名詞句に索性を与える場合 ..... 34

2.2	見出し語の名詞に素性を与える場合	42
2.3	連体修飾部の名詞に素性を与える場合	46
2.4	意味素性を決定する構文と決定しない構文	46
3.	意味素性の並立	48
3.1	五つの領域	48
3.2	意味素性の隣接と並立	49
3.3	並立しやすい素性	50
3.4	並立素性と区分	53
4.	記載例	56
4.1	「区分一覧」「述語の項としての用法」および「意味情報」	56
4.2	「サ変動詞としての用法」および「述語としての用法1」	58
4.3	「連体被修飾語としての用法」および「述語としての用法2」	58

#### 第四章 見出し情報および区分一覧

桑畑和佳子

1.	記載項目	62
2.	見出し情報	63
2.1	見出し	63
2.2	コード1	63
2.3	ファイル	63
2.4	版	64
2.5	区分数	64
2.6	表記	64
3.	区分一覧	64
3.1	区分番号	64
3.2	表記	64
3.3	意味記述	64
3.4	素性数	64
3.5	意味素性と用例	65
3.6	サ変文例	65
3.7	連体文例	65
3.8	被連体文例	65
3.9	異音同語	65
3.10	参照語	65
3.11	備考	66
4.	記載例	66

#### 第五章 意味情報

1.	『I P A L 名詞辞書』の意味情報	鈴木高志	68
1.1	概説		68
1.2	記載項目		69
2.	意味記述	鈴木高志・鳥飼浩二	69
2.1	意味記述の基本的な方針		69
2.2	記載方法		70
3.	関連語	鈴木高志	71
3.1	関連語欄について		71
3.2	同義語・類義語		72
3.2.1	同義語		73
3.2.2	類義語		74
3.3	対語		76
3.3.1	対語1		76

3.3.2 対語 2	77
3.3.3 対語 3	78
3.3.4 対語 4	79
4. 助数詞	高松正毅 80
4.1 記載内容	80
4.2 その他	81
4.3 記載しないもの	81
4.4 記載方法	82
4.5 記載例	82
5. 備考欄	83
6. 記載例	83

## 第六章 統語情報

### 述語の項としての用法

井口厚夫・猪塚元・桑畑和佳子・山下智弥

1. 「述語の項としての用法」について	86
2. 記述語の選定方針	86
2.1 網羅的に記述した述語 1	87
2.2 網羅的に記述した述語 2	87
2.3 網羅的に記述しなかった述語	89
2.4 記載する際のその他のチェック項目	90
3. 記載方法	90
3.1 コロケーションと意味素性	90
3.2 記載項目	93
3.2.1 見出し欄	94
3.2.2 格助詞欄	94
3.2.3 その他の格助詞欄	95
3.2.4 先行句と後行句	96
3.2.5 述語欄	97
3.3 「述語の項としての用法」がない場合	98
3.4 備考欄	99
4. 記載例	100

### 連体修飾語としての用法

木村朗子

1. 連体修飾語としての用法について	104
2. 記載項目	104
2.1 《NP0ノ》	104
2.2 《NP0ナ》	104
2.3 《NP0ノノナ》	104
2.4 《連体文例》	105
3. 「形容動詞」あるいは「ナ形容詞」について	105
3.1 形容動詞辞書と名詞辞書	105
4. 記載方法	109
5. 記載する用例について	115
6. 用例に記載しないもの	116
7. 《連体備考》欄について	118
7.1 述語用法について	118
7.2 連体用法について	119
7.3 表記について	120
7.4 その他	121

## 連体被修飾語としての用法 1

塩谷英一郎・斎藤初江

1. 「連体被修飾語としての用法 1」について	123
2. 記載項目	123
2.1 《ノNP0》	124
2.1.1 「NP1のNP0」について	124
2.1.2 《ノNP0》欄の記述の対象から外した語	124
2.2 《ノNP0補》	125
2.3 《～ノNP0》	125
2.4 《他NP0》	125
2.5 《被連体文例》	125
3. 分類規定	125
3.1 分類の枠組	125
3.2 生起し得る「NP1」分類の多層性	126
3.3 「NPのNP」の機能の分類	127
3.4 「NPのNP」の機能の解説	127
3.4.1 時空間の規定・限定	130
3.4.2 具体化・内容補充	131
3.4.3 関与者・対象の規定・補充	133
3.4.4 性状・価値の規定・修飾	136
4. 記載例	139
付録 先行研究との比較・対応	142

## 連体被修飾語としての用法 2

本多啓

1. 「連体被修飾語としての用法 2」について	149
2. 記載項目	149
3. 背景	149
3.1 述語による連体修飾の二つのあり方：「内の関係」と「外の関係」	150
3.2 「外の関係」の二つのあり方：内容補充と相対的補充	150
3.3 内容補充と「という」	150
3.4 述語連体形による連体修飾に関する寺村説のまとめ	151
3.5 寺村以降の研究	151
3.5.1 「内の関係」とも「外の関係」とも言いがたい例	151
3.6 「という」、「との」、「とする」	152
4. 当フォーマットの記載内容	152
4.1 「S見出し語」	152
4.1.1 『IPAL名詞辞書』における「外の関係」の認定	152
4.1.2 「外の関係」の補助的な認定基準	153
4.1.3 「内容補充」と「相対的補充」	155
4.1.4 連体修飾部の末尾、および主語	156
4.2 「Sという見出し語」	156
4.2.1 認定基準	156
4.2.2 連体修飾部の末尾、および主語	156
4.2.3 「との」、「とする」	157
4.2.4 「かという」、「かの」	157
4.3 副平叙・副用例	157
5. 記載方法	157
5.1 S平叙	157
5.2 S文例	157
5.3 Sト平叙	158

5.4	Sト疑問	158
5.5	Sト文例	158
5.6	副平叙	159
5.7	副文例	159
5.8	備考	160
6.	記載例	160

## V サ変動詞としての用法

三枝令子

1.	「サ変動詞としての用法」について	163
2.	記載項目	163
3.	記述の対象	163
4.	文型	165
4.1	文型の表示方法	165
4.2	文型の種類	165
5.	名詞の意味素性	166
6.	文型に現れる名詞句	166
6.1	ト格	167
6.2	デ格	167
7.	文例	168
8.	《ノNP0》	168
9.	《NP0ヲスル》	170
10.	記載例	171

### 述語としての用法 1

堤正典

1.	「述語としての用法 1」について	174
2.	記載項目	174
3.	記述の対象	174
4.	文型	175
4.1	格形式の範囲	175
4.2	格形式の交替	175
4.3	文型の表示方法	175
5.	名詞句の意味素性	177
6.	文型に現れる名詞句	177
7.	見出し語を主要部とする名詞句化	177
8.	文例	177
9.	共起する副詞	178
10.	記載例	178

### 述語としての用法 2

堤正典

1.	「述語としての用法 2」について	180
2.	記載項目	180
3.	記載の方法	181
4.	《NP x 素性》と《NP y 素性》	181
5.	記載例	182

## 第七章 形態情報

山本清隆・宗意幸子・加藤久雄

1.	記載項目	184
2.	表記	184

2.1	<区分>の《表記》	185
2.2	<見出し>の《表記》	185
3.	《異音同語》	186
4.	合成語	187
4.1	《合成語要素》	187
4.2	《要素表記》	189
4.3	合成語	191
4.4	合成名詞	195
4.4.1	合成語要素が前項要素となる場合：<形態情報>の《合成 名前》	195
4.4.2	合成語要素が後項要素となる場合：<形態情報>の《合成 名後》	196
4.5	合成形容詞：<形態情報>の《合成 形》	197
4.6	合成動詞：<形態情報>の《合成 動》	197
4.7	合成副詞：<形態情報>の《合成 副》	198
4.8	その他の品詞：<形態情報>の《合成語 他》	198
4.9	その他の合成語	198
4.9.1	<慣用句等>の《他合成語1》	199
4.9.2	<慣用句等>の《他合成語2》	199
5.	《参照語》	199
5.1	動詞からの転成：《参照語》	200
5.1.1	語形無変化の転成	200
5.1.2	合成語による転成	201
5.2	形容詞からの転成：《参照語》	201
5.2.1	「語形無変化の転成」	201
5.2.2	語幹共通の転成	201
5.2.3	「合成語による転成」	201
6.	《備考》	202
6.1	表記に関するもの	202
6.1.1	当該合成語要素表記が前後に結合する要素によって異なる場合	202
6.1.2	当該合成語の漢字表記が複数あり、漢字によって意味が異なる場合	202
6.2	当該合成語要素が合成語を生成する際の傾向	202
7.	記載例	203

## 第八章 慣用表現ほか

### 区分の対象外の表現

高松正毅

1.	「慣用表現」について	206
1.1	記載項目	206
1.2	記載内容	206
1.3	同語の認定について	207
1.4	区分内で扱った「慣用句」について	207
1.5	《-のような》《-のように》	208
1.6	「慣用表現」の記載方法	208
2.	「その他の合成語」について	209
2.1	記載項目	209
2.2	その他の合成語	209

### 見出し語についての備考

桑畑和佳子・本多啓

1.	記載項目	210
2.	備考	210
3.	区分間の意味的關係	211

3.1	比喩に基づく意味の拡張	212
3.2	見出し語の用法に見られる比喩的拡張	213
3.3	意味的關係の辞書記述方法 1	218
3.4	意味的關係の辞書記述方法 2	219
3.5	特例「さき【先】」	222
3.6	区分間以外の意味的關係	224
4.	記載例	225

## 第二部

### 素性の詳細

青山文啓・橋本三奈子

1.	五つの領域	229
2.	/ANI/の下位素性	229
3.	/CON/の下位素性	230
4.	/SPA/の下位素性	231
5.	/PRC/の下位素性	234
6.	/ABS/の下位素性	239
6.1	二重主格構文の回帰を制止する名詞句の素性	239
6.1.1	<A>数量を表示する名詞句が述語として現れる場合などに振られる素性	240
6.1.2	<B>程度を表わす述語と共起するもの	242
6.1.3	<C>評価を表わす述語と共起するもの	244
6.2	二重主格構文の述語の位置に現れる名詞句の素性	247
6.3	二者間の關係を表わす素性	249
6.4	その他の素性	252
7.	その他の素性	260
付録 1	意味素性一覧	262
付録 2	名詞辞書と形容詞辞書・動詞辞書との意味素性の対応	297
	橋本三奈子	
用語索引		310
意味素性索引		314

# 第 一 部

## 第一章 名詞辞書の概要

### 1. I P A L 名詞辞書で扱う名詞の用法

『計算機用日本語基本名詞辞書 I P A L (Basic Nouns)』(以下では単に「名詞辞書」と呼ぶ)は、公開済みの『計算機用日本語基本動詞辞書 I P A L (Basic Verbs)』(動詞辞書)、『計算機用日本語基本形容詞辞書 I P A L (Basic Adjectives)』(形容詞辞書)の流れを引き継ぎ、名詞の持つ構文内部の文法的な働きに主眼を置くものである[橋本・桑畑 1993]。ここでは、名詞の文法的な働きを大掴みにするために、「机」という見出し語を例に取る(以下、見出し語を【 】で括って示す)。

- (1)a. 【机】を運ぶ
- b. それは【机】だ
- c. 【机】の上
- d. 大きい【机】

(1a)では「机」は格助詞ヲを介して動詞「運ぶ」と共起している。(1b)では「机」はダを伴って文の述語の位置にある。(1c)では格助詞ノを介して「上」という他の体言を修飾し、(1d)の「机」は形容詞「大きい」の連体形を受けた被修飾語である。上に示したように、名詞は構文上、次のような四つの働きをされると考えられる。

- (a) 格助詞を介して(つまり、連用修飾句として)述語と結びつく。
- (b) 助動詞ダを伴って文の述語になる。
- (c) ノを介して他の体言を修飾する。
- (d) 連体修飾を受ける。

一般に、名詞は構文上単純な振る舞いをするかのように思われやすいが、様々な用法を持つものもある。仮に、上に示した(a)から(d)の用法を持つことが名詞の条件であるとすれば(注1,注2)、これらの条件を満たす名詞の中には、さらに幾つかの構文上の役割を果たすものがあるからである。

例えば、「交代」という見出し語は上にあげた四つの用法を持つ以外に、(2e)のようにスルを伴って文の述語になる用法がある。

- (2)a. バッターの【交代】を告げる
- b. ピッチャーが【交代】だ
- c. 【交代】の挨拶
- d. 世代の【交代】
- e. 二人が当番を【交代】する

I P A 技術センターでは、(2e)のような用法を I P A L 動詞辞書の枠組みで記述する方法について試案を出し、その結果を報告書にまとめた[須田・小島 1988]。しかし、動詞辞書の枠組みでは、(2a)から(2d)までの用法を記述することができない。今回の名詞辞書でこれらの用法を網羅的に扱えるように辞書項目を構成したのはそのためである。

また「健康」という見出し語は(3e)のようにナを介して他の体言を修飾する用法がある。

- (3)a. 【健康】を気づかう
- b. 大切なのは【健康】だ
- c. 【健康】の秘訣
- d. 家族の【健康】
- e. 【健康】な身体

「健康な」は学校文法では形容動詞という独立の品詞に分類される。また、形容動詞を独立の品詞として認めず、形容詞に含まれるものとする立場もある（「ナ形容詞」と呼ばれる）。後者の立場に立った場合を想定して、I P A L 形容詞辞書の枠組みによる形容動詞の記述についても報告書としてまとめた[堤 1992]が、この場合にも(3a)から(3d)までの用法を記述することができない[第六章 連体修飾語としての用法]。このため、無理に二つの品詞を分離して別々に辞書記述を進めるより、「名詞」として一括しその連続性に詳細な記述を与える方が、現象を体系的にとらえることができると考え、今回の名詞辞書では形容動詞語幹を名詞として扱う[水谷 1951, 水谷 1952]。

また、次の「健康」もダを伴って文の述語となる用法であるが、程度副詞の修飾を受けることができ、(3b)とは異なる用法である。

(4) 彼はとても【健康】だ

これは、「健康」のようにナを介して他の体言を修飾する用法を持つ見出し語だけに見られる用法なのではなく、「美人」「右」「田舎」のように一般の名詞でも、ダを伴って文の述語となる場合に、程度副詞の修飾を受ける用法を持つ見出し語がある。

- (5)a. あの人はとても【美人】だ
- b. その地方はかなり【田舎】だ
- c. 太郎は次郎よりもっと【前】だ

ダを伴って文の述語になる場合、見出し語単独で現れるとは限らない。(6)(7)のように何らかの連体修飾を受けた場合に、述語になる用法が可能になる見出し語もある[野田 1981]。

- (6)a. 彼は医者【卵】だ
- b. \*彼は【卵】だ
- (7)a. 広島はカキ料理【本場】だ
- b. ?広島は【本場】だ

ところで、連体修飾を受ける用法というのは、「名詞句ノ」の形だけでなく、連体修飾句を受ける場合もある。句による連体修飾を受ける場合に、(8)のように被修飾名詞の部分が欠けている句によって修飾される場合と、(9)のように欠けていない完全な句によって修飾される場合とがある[寺村 1981]。

- (8) 私が彼から聞いた【話】  
私 が その話を 彼から 聞いた
- (9) 女房の幽霊が3年目に現れる【話】

後者のような連体修飾は「外の関係」の連体修飾と呼ばれる。このような連体修飾を受ける見出し語は限られているため、これを辞書に記述する。このような連体修飾句は、被修飾名詞との間に「という」や「との」の介在を必要とする見出し語もあれば、逆に必要でない見出し語もある。

- (10)a. 誰かが階段を降りてくる【音】
- b. 映画を見に行こうという【誘い】
- c. 魚を焼く【匂い】

以上のように見ていくと、「名詞」に分類される見出し語は、上にあげた(a)(b)(c)(d)の用法を基本として、見出し語に応じて、次の用法を持つことがわかる。

- (e) スルを伴って文の述語になる用法
- (f) ナを介して他の体言を修飾する用法
- (g) 程度副詞の修飾を受けて、文の述語になる用法
- (h) 連体修飾を受けて、文の述語になる用法
- (i) 「外の関係」の連体修飾節を受ける用法

名詞辞書では、上にあげた用法を網羅的に取り扱い、名詞の文法的な特性を捉えることを試みる。辞書では、上の(a)から(i)までの用法を整理し、統語情報として次の欄を設けた。

#### 述語の項としての用法

見出し語が格助詞を介して(連用修飾句として)述語と結びつく用法

- 例 【机】を運ぶ  
ピッチャーの【交代】を告げる  
【健康】を気づかう  
【健康】に留意する  
理事の挨拶をパーティの【最初】に入れる  
【健康】に過ごす  
彼が【最初】に到着する

#### 連体修飾語としての用法

ノあるいはナを介して他の名詞句を修飾する用法

- 例 【机】の上  
【健康】の秘訣  
【健康】な身体

#### 連体被修飾語としての用法 1

ノを介して他の名詞句から修飾を受ける用法

- 例 世代の【交代】  
家族の【健康】

#### 連体被修飾語としての用法 2

「外の関係」の連体修飾を受ける用法

- 例 女房の幽霊が3年目に現れる【話】  
誰かが階段を降りてくる【音】  
映画を見に行こうという【誘い】  
魚を焼く【匂い】

#### サ変動詞としての用法

スルを伴って文の述語になる用法

- 例 二人が当番を【交代】する

#### 述語としての用法 1

主に程度副詞の修飾を受けて、ダを伴って文の述語になる用法

- 例 彼はとても【健康】だ  
あの人はとても【美人】だ  
その地方はとても【田舎】だ

太郎は次郎よりもっと【前】だ  
お前は【首】だ

#### 述語としての用法 2

連体修飾を受けて、ダを伴って文の述語になる用法

例 彼は医者【の】だ  
広島はカキ料理【の本場】だ

なお、名詞辞書では、(1d)のように「外の関係」ではない連体修飾を受ける用法は扱わない。また述語としての用法 1 において、「お前は首だ」のように、述語になることが語彙的な特徴として認められる場合には、程度副詞の修飾を受けない用法も扱う。ただし、(1b)のように「A ガ B ダ」の文型で、A が代名詞、あるいは、A B 二つの名詞句とも具体物を指し、「イコール」であることを表わす場合や、「僕はウナギだ (= 僕はウナギを注文する)」のような、いわゆる「ウナギ文」の場合は扱わない。さらに、その名詞を連体修飾することは可能なのに、述語用法のガ格に立つことが不可能な場合(例「嫌な顔をする」 × 「顔が嫌だ」)には、連体修飾語としての用法の備考欄に、述語用法が不可能であることを記した。

また、「健康」は(11)のように、二を介して述語と結びつく。「最初」という見出し語も先にあげた(a)から(d)までの条件をすべて満たすが、それ以外に(12)のように、二を介して述語と結びつく用法もある。

- (11)a. 彼は【健康】に留意する
- b. 彼は【健康】に過ごす

- (12)a. 理事の挨拶をパーティの【最初】に入れる
- b. 彼が【最初】に到着する

(11a)(12a)では、「健康に」「パーティの最初に」の連用修飾部分が述語「留意する」「入れる」にとって必須であるのに対し、(11b)(12b)では「健康に」「最初に」の部分は任意的である。このような違いはあるが、名詞辞書では両者ともに、格助詞を介して連用修飾句として述語と結びつく用法であると捉えることにする(記載欄は分けてある。詳細は[第六章 述語の項としての用法])。

また、「最初」には(13)のように、単独で文を修飾する用法もある。

- (13) 【最初】、私は彼がとても恐かった

動詞辞書も形容詞辞書も単文レベルでの肯定平叙文に限って記述を行った。今回の名詞辞書でもその記述方針は変わらない。したがって、(13)のような、文を修飾する用法については名詞辞書では周道的に扱うだけである[参照：第七章 形態情報]。

以上のように、名詞の構文上の役割は、一般に思われているほど単純ではない。今回の名詞辞書では、基本的な用法から周道的な用法までを取り上げ、名詞が果たす構文上の働きを整理し、その全域を覆うように努めた。従来、体系的には研究されてこなかった名詞の文法的特徴を明らかにすることも本辞書の目的の一つである。

## 2. 対象とする見出し語

見出し語の選定にあたっては、記述対象語彙の総数は少ないながらも、基本的な名詞から他の品詞との境界領域に位置するような名詞までを対象とし、1 節にあげた名詞の構文上の働きの全域を記述できるようにした。

記述対象語のうち、代表的な例を、文法的に特徴のある見出し語、意味的に特徴のある見出し語に分類して列挙するが、重複して分類されるものもある。なお、[ ]内に示す見出し語は、『I P A L名詞辞書 - F T P版 - 』（1082語）に収録されている語で、『計算機用日本語基本名詞辞書 I P A L (Basic Nouns) - 辞書編 - 』（142語）には収録されていない（注3，注4）。

#### (1) 文法的な特徴のある見出し語

- (1.1) スルを伴って文の述語になる用法のあるもの  
違反，営業，回転，交代，指導，勝負，[ 検討，スタート，死亡 ]，...
- (1.2) ナを介して他の名詞句を修飾する用法のあるもの  
勝手，嫌い，健康，公平，[ 明らか，鮮やか，哀れ，頑固，安易 ]，...
- (1.3) 程度副詞の修飾を受けて述語になる用法のあるもの  
後，上，内側，奥，北，大人，おばさん，嫌い，[ 軽め，頑固 ]，...
- (1.4) 連体修飾を受けて文の述語になる用法のあるもの[野田 1981,新屋 1989,小島 1992]  
間，最初，子供，社長，原点，趣味，[ 先，末，主役 ]，...
- (1.5) 「外の関係」の連体修飾を受ける用法のあるもの[寺村 1981]  
軽さ，重み，数，関係，記録，決定，[ 重さ，辺り，うち，形 ]，...
- (1.6) 基本的な用法を持たないもの  
[ 急ぎ，肝心 ]，...
- (1.7) 単独であるいは連体修飾を受けて文を修飾する用法のあるもの[猪塚 1992]  
最初，他，上，[ 末，いろいろ，かなり ]，...
- (1.8) 転成名詞  
育ち，含み，振る舞い，軽さ，狭さ，[ 軽め，狭め ]，...

#### (2) 意味的な特徴のある見出し語

- (2.1) 動物 生き物，犬，豚，人，蛇，貝，卵，[ 牛，羽，馬，海老 ]，...
- (2.2) 植物 芋，桜，根，[ 麻，莓，柿，実，稲，海草，薺，枝 ]，...
- (2.3) 食べ物 ごはん，おやつ，クリーム，葉，酒，水，[ 餌，お菓子 ]，...
- (2.4) 身体 肉体，足，首，尻，口，毛，神経，涙，骨，[ 魂，体 ]，...
- (2.5) 洋装品 袖，傘，[ 衣類，着物，雨具，上着，エプロン，襟 ]，...
- (2.6) 乗り物 電車，船，特急，[ 車，鉄道，気球，エレベーター，空車 ]，...
- (2.7) 建物・家具 家，一軒家，城，トイレ，柱，舞台，窓，絨毯，畳，...
- (2.8) 場所 九州，美術館，道，[ アジア，アメリカ，田舎，海外 ]，...
- (2.9) 組織・団体 学校，企業，世の中，社会，[ 銀行，グループ，家庭 ]，...
- (2.10) 自然物 雨，太陽，月，化石，谷間，電気，波，風土，星，[ 土，日 ]，...
- (2.11) 自然現象 [ 火事，霞，風，雷，傷，染み，煙，洪水，地震，災害 ]，...
- (2.12) 仕事・役割 医者，先生，農家，窓口，父，母，女，娘，客，[ 代表，役 ]，...

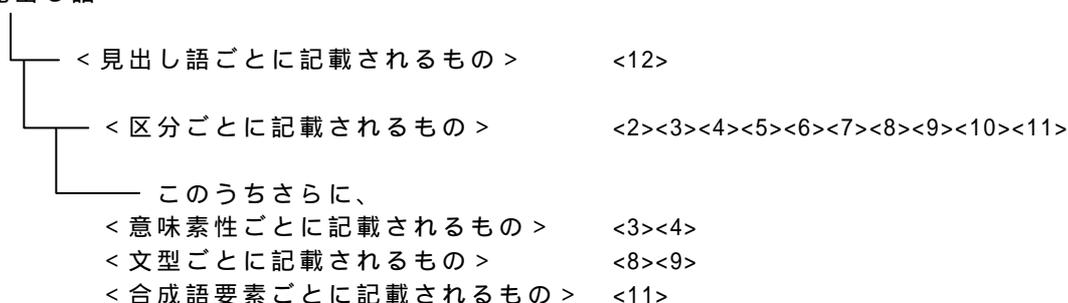
### 3. I P A L 名詞辞書の構成

名詞辞書では、上に述べた文法的な働き以外に、形態、語構成、意味などについても取り上げる。したがって、記述項目は、次に示す見出し語情報、区分一覧、意味情報、統語情報、形態情報及び慣用表現などに関する記述から構成される。（各欄の詳細については、[ ]内に示した各章を参照）。< >内に示すのは記載欄の略称である。

<1> 見出し語情報	見出し語に共通する情報 見出し，表記，区分数，コード1，ファイル [ 第四章 見出し語情報および区分一覧 ]
<2> 区分一覧 < 区分 >	区分した用法の概要（表記，意味記述，例文） [ 第四章 見出し語情報および区分一覧 ] [ 第三章 意味素性 ] [ 第二部 意味素性の詳細 ]
<3> 意味情報 < 意味情報 >	意味に関する情報 関連語（同義語，類義語，対語），助数詞 [ 第五章 意味情報 ]
<4> 統語情報： 述語の項としての用法 < 項の用法 >	見出し語が格助詞を介して述語と結びつく用法 格助詞，共起する述語，意味素性など [ 第六章 述語の項としての用法 ]
<5> 統語情報： 連体修飾語としての用法 < 連体用法 >	見出し語がノやナを介して他の名詞句を修飾する用法 N P 0 ノ / ナ N P に該当する N P の例 [ 第六章 連体修飾語としての用法 ]
<6> 統語情報： 連体被修飾語としての用法 1 < 被連体 1 >	見出し語がノを介して他の名詞句に修飾される用法 N P ノ N P 0 に該当する N P の例，その分類 [ 第六章 連体被修飾語としての用法 1 ]
<7> 統語情報： 連体被修飾語としての用法 2 < 被連体 2 >	見出し語が外の関係の修飾を受ける用法 その可能性，例文など [ 第六章 連体被修飾語としての用法 2 ]
<8> 統語情報： サ変動詞としての用法 < サ変用法 >	見出し語がスルを伴って述語として働く用法 文型，名詞句の意味素性，例文など [ 第六章 V サ変動詞としての用法 ]
<9> 統語情報： 述語としての用法 1 < 述語用法 1 >	見出し語が程度副詞の修飾を受けてダを伴って述語として働く用法 文型，名詞句の意味素性，例文など [ 第六章 述語としての用法 1 ]
<10> 統語情報： 述語としての用法 2 < 述語用法 2 >	見出し語が連体修飾を受けてダを伴って述語として働く用法 文型，名詞句の意味素性，例文など [ 第六章 述語としての用法 2 ]
<11> 形態情報 < 形態情報 >	形態に関する情報 表記，異音同語，参照語，合成語 [ 第七章 形態情報 ]
<12> 慣用表現ほか < 慣用句等 >	各区分で扱わない表現についての情報 慣用表現，他の合成語，備考 [ 第八章 慣用表現ほか ]

上の記述項目には、見出し語ごとに記載されるものと、第二章で述べる区分ごとに記載されるものがある。各用法ごとにさらに幾つかの分類ができる場合（例えば、述語になる用法1において文型が異なる場合、「述語の項としての用法」において意味素性が異なる場合など）には、項目内でさらに下位区分する。

<見出し語>



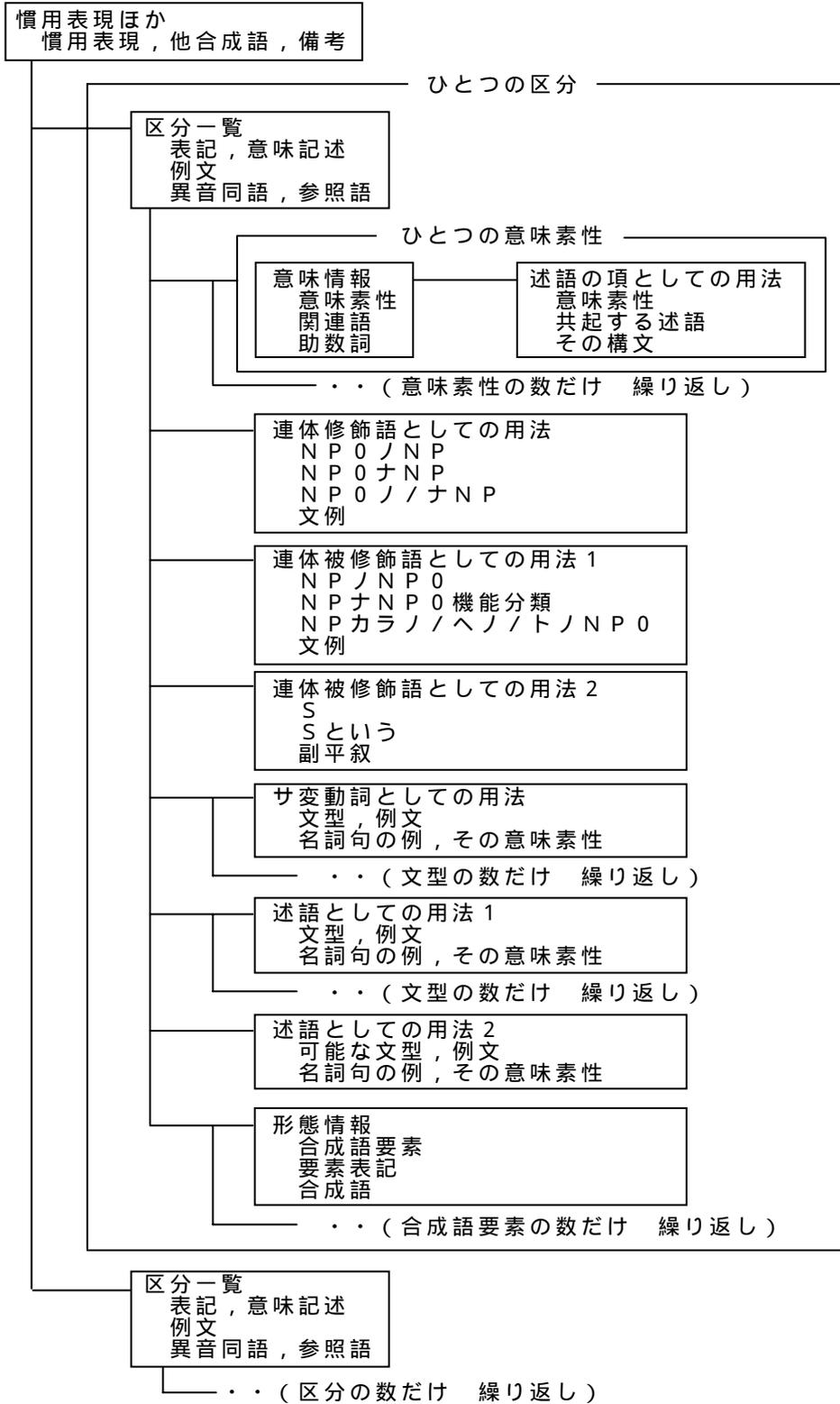
辞書構成の概略を図示すると、次ページのようになる。『計算機用日本語基本名詞辞書 I P A L (Basic Nouns) - 辞書編 - 』において、太線で囲んだものは必ず印刷されるが、細線で囲んだものはその用法を持たない場合には印刷されない。

注

- 1 . 名詞に分類される見出し語の中には、(a)(b)(c)(d)の基本的用法を持たないものも存在する。例えば「急ぎ」は、「急ぎの仕事」のようにノを介して他の名詞句を修飾する用法以外は持たない。また「肝心」は、文の述語になる用法、あるいはノ/ナを介して他の名詞句を連体修飾する用法しか持たない。この他「図星」「格別」「従来」なども特殊である [水谷 1995, 城田 1982]。
- 2 . (a)(b)(c)(d)の四つの条件のいずれかを満たすものを見出し語の範囲とすると、副詞と言われるもののほとんどが候補に含まれてしまう。名詞と副詞との境界は非常に曖昧である [水谷・星野 1994, 水谷 1995]。
- 3 . 一次記述として、他に次のような特徴からも見出し語を拾って行なった。
 

(1) 二者関係	相性, 愛情, 圧力, 仲, 縁, 格差, 角度, 関心, 興味, ...
(2) 材料・物	燃料, お金, ゴミ, 商品, ちらし, 油, ...
(3) 道具	テーブル, 椅子, 机, こたつ, 棚, 糸, 鉛筆, 玩具, ...
(4) 活動・出来事・状態	結婚式, テニス, 環境, インフレ, コンクール, ...
(5) 作品	本, 落書き, 文章, 論文, 新聞, 歌, 映画, ...
(6) 人間属性	精神力, 学力, 自己, 得, 好奇心, 嘘, ...
(7) 感情	爽快感, 夢心地, 情熱, 友情, 誠意, 恩, ...
(8) 概念	愛, 悪, 生きがい, 真理, 主体, 体系, 経緯, 永遠, ...
- 4 . 以下の章で例として取り上げた見出し語は、主に『I P A L 名詞辞書 - F T P 版 - 』(1082語)より選んだ。したがって、その抜粋版である『計算機用日本語基本名詞辞書 I P A L (Basic Nouns) - 辞書編 - 』(142語)に収録されていない語も含まれる。

「名詞辞書の構成図」



## 参考文献

- 猪塚元(1992) "吸着名詞"について, 『ソフトウェア文書のための日本語辞書の研究』11, 情報処理振興事業協会, pp.199-214.
- 小島幸子(1992) 自立性が低い名詞と名詞述語文, 『ソフトウェア文書のための日本語辞書の研究』11, 情報処理振興事業協会, pp.175-198.
- 城田俊(1982) 体言の体系, 『国語国文』51巻12号(京都大学), pp.1-14.
- 新屋映子(1989) "文末名詞"について, 『国語学』159, pp.74-88.
- 須田直英・小島幸子(1992) サ変動詞辞書作成手引き, 『ソフトウェア文書のための日本語辞書の研究 - 11』, 情報処理振興事業協会, pp.173-295.
- 堤正典(1992) 形容動詞辞書, 『ソフトウェア文書のための日本語辞書の研究』11, 情報処理振興事業協会, pp.251-417.
- 寺村秀夫(1981) 『日本語の文法(上)(下)』(日本語教育指導参考書5), 国立国語研究所.
- 野田尚史(1981) 『カキ料理は広島が本場だ』構文について, 『待兼山論叢』15, 大阪大学, pp.45-66.
- 水谷静夫(1952) 形容動詞と謂ふもの, 『國文學解釈と鑑賞』17(12), 至文堂, pp.37-42.
- 水谷静夫(1951) 形容動詞辨, 『國語と國文學』28(5), 東京大学国語国文学会, pp.395-413.
- 水谷静夫・星野和子(1994) 名詞から副詞まで - 語類の新しい枠づけ -, 『計量国語学』19(7), pp.331-340.
- 水谷静夫(1995) 包括的規準による名詞・副詞類の仕訳, 『I P A L シンポジウム '93 論文』情報処理振興事業協会, pp.45-53.
- 橋本三奈子・桑畑和佳子・村田賢一(1991) 名詞の文法的性質とI P A L 名詞辞書, 『情報処理振興事業協会技術センター第10回技術発表会論文集』情報処理振興事業協会, pp.101-110.
- 橋本三奈子(1993) I P A L 名詞辞書の概要, 『I P A L シンポジウム '93 論文集』情報処理振興事業協会, pp.1-12.

## 第二章 見出し語の区分

### 1. 区分の方法

『I P A L 名詞辞書』では、見出し語のもつ用法を意味からだけでなく統語的特徴からも分類するが、これを「区分」と呼ぶ（市販の辞典の意味ブランチに該当するものである）。また、見出し語の用法について、各統語情報について記述し、意味情報を記述することを「区分を立てる」と呼ぶことにする（注1）。ここでは、区分の判断基準とそれを用いた区分の例を示す。

#### 1.1 区分の判断基準

辞書記述の際には、複数存在する用法をいくつかに「区分」することになる。名詞辞書の記述を進める際は「区分」を一貫して行うことが重要である。結びつく述語の違いが顕著であれば、そこに見出し語の意味の違いを見出しやすいが、実際には述語にくる動詞や形容詞なども多義であるため、見出し語の用法が違って結びつく述語に差はなく、それだけでは「区分」の判断がつかないものが多い。また、辞書を共同作業で執筆する場合、担当者によって区分数が多かったり少なかったりという問題も生じる。そのため、「区分」の客観的な判断基準として、統語的な基準と意味的な基準と、あわせて12通りの基準を設けた（注2）。これらは相互に関係しあっていて、どれか一つの基準だけで十分であるということは少なく、いくつかの基準を組み合わせて「区分」するものである。

「区分」の判断基準として用いるものを列挙すると、以下の通りである。

[A] 用法の有無を用いた基準

- A1. 「サ変動詞としての用法」の有無
- A2. 「述語としての用法1」の有無
- A3. 「述語の項としての用法」の有無

[B] 「述語の項としての用法」の情報を用いた基準

- B1. 連体修飾語（NP / NP0）
- B2. 結びつく述語
- B3. 見出し語以外の項

[C] その他の用法の情報を用いた基準

- C1. 「サ変動詞としての用法」の違い
- C2. 「連体修飾語としての用法」（NP0 / ナNP）の被修飾語の違い
- C3. 「連体被修飾語としての用法」（NP / NP0）の意味関係の違い

[D] 意味素性を用いた基準

- D1. 意味素性の組み合わせ
- D2. 目安にした意味素性

[E] 意味的な情報を用いた基準

- E1. 類義語や対語の組み合わせ

以下、これらの基準を組み合わせて用いて、総合的な判断を行いながら「区分」をした具体例をあげ、名詞辞書における「区分」の方法と記載情報について解説する。

## 1.2 基準A：用法の有無

第一章で、名詞はさまざま文法的用法を持ち、見出し語によって可能な用法が異なるということ述べた。このことは一つの見出し語内にも見られる現象である。つまり、ある見出し語に、スルを伴って述語になる「サ変動詞としての用法」が可能であるとしても、その見出し語がどんな名詞句と結びついて常にも常にサ変用法が可能になるわけではない。この節では、このように、見出し語内に見られる用法の有無に着目して区分する方法について述べる。区分の基準となるのは、「サ変動詞としての用法」（以下「サ変用法」）「述語としての用法1」（以下「述語用法1」）「述語の項としての用法」（以下「項の用法」）の有無である。

### 1.2.1 「サ変用法」の有無

見出し語「収穫」には次のような用例がある。

- (1) ブドウの 【収穫】が 始まる / 終わる
- (2)a. 大豆の 【収穫】が ある / ない
- b. 稲の 【収穫】が 多い / 少ない
- c. 梨の 【収穫】が 減る / 増える
- (3)a. 今日の会議は 【収穫】が ある / ない
- b. 今回の取材は 【収穫】が 多い / 少ない

(2)と(3)とでは、「減る，増える」を除いて、「ある，ない，多い，少ない」など、結びつく述語に類似性がみられるが、ここから(4)は(1)よりも(2)に近いと考えてよいだろうか。この問題を考えるために、同じ見出し語の「サ変用法」を(4)に例として取り上げる。

- (4)a. 農夫が ブドウを 【収穫】する
- b. 農家が 大豆を 【収穫】する

「収穫する」のヲ格にたつ名詞句は、「ブドウ」や「大豆」などの作物を表す名詞句である。これらの名詞句は、(2)(3)の「収穫」の連体修飾語として現れるものである。一方、以下の(5)に示すように、(3)の「収穫」と共起する名詞句を組み合わせても、「サ変用法」は成り立たない。

- (5)a. \* 議長が 会議を 【収穫】する
- b. \* 今日の会議で 知識を 【収穫】する

したがって、(1)(2)の「収穫」と(3)の「収穫」とでは、結びつく述語に同じものがあったとしても、修飾成分が異なり、その文法的振る舞いに違いがあることがわかる。よって「収穫」は次のように(1)(2)(4)と(3)の二つに区分される。

- [区分01] 農作物をとり入れること。または取り入れた農作物など。 (1)(2)(4)
- [区分02] ある事をして得た有益な結果。 (3)

なお、[区分01]で、「農作物をとり入れること」と「取り入れた農作物」とを一つの区分で扱っていることからわかるように、「～すること」とそれに対応した「～する / したもの」とでは区分していない。

### 1.2.2 「述語用法1」の有無

ここでは、見出し語「田舎」の用例をあげる。

- (6) 【田舎】に 生まれる / 育つ
- (7)a. 【田舎】が ある / ない
- b. 【田舎】へ 帰る / 電話する

ここで、「とても」という程度副詞との共起関係をみると、違いがはっきり見えてくる。

- (8) とても【田舎】に 生まれる / 育つ
- (9)a.\* とても【田舎】が ある / ない
- b.\* とても【田舎】へ 帰る / 電話する

上の(6)は、次の(10)のように、見出し語が程度副詞を伴ったまま述語にもなる。

- (10) 私が生まれたところは とても【田舎】だ
- (11)a. 私は 津軽が 【田舎】だ
- b.\* 私は 津軽が とても【田舎】だ

『IPAL名詞辞書』では、(10)のように程度副詞を伴って述語になる用法を「述語用法1」と呼び、(11a)のように程度副詞が介在し得ないものは「述語用法1」の対象外とした。つまり「田舎」は、「述語語用法1」があるものとないものとの二つに区分される。

[区分01] 都会から離れた所。 (6)(8)(10)

[区分02] 故郷または出身地。 (7)(11)

### 1.2.3 「項の用法」の有無

一般の名詞は見出し語が述語の項として働く用法を持つが、中にはこの用法を持たない場合がある。

「評価」には次のように「項の用法」がある。

- (12)a. 部長が 部下に 【評価】を 下す
- b. 部下への【評価】が 厳しい
- c. 部長が その提案に対する【評価】を 見直す
- d. その提案への【評価】が 下がる

また、(12)のガ格や連体修飾部に現われる名詞句を用いて、次のように「サ変用法」を作ることができる。

- (13) 部長は 今期の業績で 部下を 【評価】した
- (14) 部長は その提案は目新しさが全くないと 【評価】した
- (15) 部長が その提案を 目新しさが全くないと 【評価】した
- (16) 部長が その部下を とても 【評価】した

(13)はヲ格をとる他動詞の用法であり、(14)は文相当の項がト格に立つ用法である。この文相当部に現われるガ格が、「評価する」のヲ格に立ったものが(15)である。これらは文型は異なるが、このような項の数の違いだけでは区分を行なう必要はない。一方、(16)には「とても」という程度副詞が現われている。(13)には、(16)と同様に「部長」「部下」という名詞句が現われているが、「とても」を付加することはできない。(14)(15)も同様

である。(16)の「評価する」は、「あるものが持つ優れた点や長所を見つけてほめること」と解釈することができるが、この解釈に対応する、「項の用法」は見つからない。そこで、(15)は「項の用法」を持たないものとして、(13)(14)(15)とは別の区分を立てることができる。したがって、「評価」は次の二つに区分される。

- [区分01] あるものを優劣・よしあしの面から判断すること。(12)(13)(14)(15)  
また、その内容
- [区分02] あるものが持つ優れた点や長所を見つけてほめること。(16)

次の例は同様に、「項の用法」がない場合であるが、「連体修飾語としての用法」(以下「連体用法」)しか持たないものである。

(17) 【問題】の人物が不意に現れた

(17)では、「(批判の対象として)話題に取り上げられる事柄」という意味に解釈できる。「問題」には(18)(19)(20)(21)のような「項の用法」があるが、いずれも(17)とは異なる解釈になる。(22)の述語としての用法でも異なる解釈になってしまい、(17)には対応しない。

- (18) 先生が 生徒に 数学の 【問題】を 考える  
(19) そのことは 社会的な 【問題】に 発展した  
(20) その人物の言動には 大いに 【問題】が ある  
(21) その人物が 【問題】を 起こした  
(22) その人物は 【問題】だ

この点を重視し、(17)は「項の用法」を持たないものとして、独立の区分を立てる。したがって、「問題」は次のように区分される。[区分01]から[区分04]を分ける基準は、次節以降に述べる。

- [区分01] 知識や学力を試すためにつくられた問い。(18)
- [区分02] 解決すべき重要な事柄。(19)
- [区分03] 批判の対象になり、改善や撤回を要求されるような点。(20)(22)
- [区分04] 容易に解決できない厄介な事。(21)
- [区分05] 「もんだい03」に関わるものとして話題に取り上げられること。(17)

### 1.3 基準B：「項の用法」の情報

1.2節では見出し語が持つさまざまな用法の有無を基準にした区分について述べた。この節では、特に「項の用法」に現れる情報をもとにして区分する方法について解説する。見出し語を「NP0」として「項の用法」を簡略化して示すと次のようになる。

<1> ( NP <格助詞> ... )	<2> ( NP / ) NP 0 <格助詞>	<3> 述語
例：( 外 <から> )	( ピアノの ) 音 <が>	聞こえる

この構文に現れる、<1>見出し語以外の項となる語、<2>見出し語を連体修飾する語、<3>見出し語が結びつく述語、以上三種類の性格の違いが区分の基準となる。

#### 1.3.1 連体修飾語の違い

はじめに、「壁」という見出し語について考察する。この「壁」という見出し語には、「サ変用法」や述語用法がないため、1.2 節であげた方法では区分することができない。このような場合に区分の判断基準となるのは、「連体修飾語」の違いである。

- (23)a. 部屋の 【壁】が 薄い
- b. 教室の 【壁】に 貼る
  
- (24)a. 胃の 【壁】に 穴があく
- b. 子宮の 【壁】が 破れる
  
- (25)a. 言葉の 【壁】が 厚い
- b. 予算の 【壁】に つき当たる

(23)では、連体修飾部に、建物などの具体物が現れる。(24)には、動物の臓器や血管などが現れる。また、(25)には、抽象的なことがらが現れる。このような連体修飾語の違いに着目して、「壁」は三つに区分される。

- [区分01] 建物の一部で建物と外の空間や部屋と部屋を仕切るもの。 (23)
- [区分02] 臓器や血管、細胞の表面を形づくる部分。 (24)
- [区分03] 障害となるもの。 (25)

次にあげる「雨」は、連体修飾語を必要とする場合と必要としない場合に分けることができる。例えば、(26)から(30)では、液体としての側面や、具体物としての側面、自然現象としての側面などに分類することができるが、連体修飾語を必ず必要とする(31)と比較すれば、これらはすべて天候現象としての「雨」を表わすものである。

- (26)a. 【雨】が 漏る
- b. 【雨】が しみ込む
- c. 【雨】に 濡れる
- (27)a. 【雨】が たまる
- b. 【雨】が 冷たい
- c. 【雨】を よける
- (28)a. 【雨】が 降る
- b. 【雨】に あう
- c. 【雨】が 激しい
- (29)a. 【雨】が 来る
- b. 【雨】が 近づく
- (30)a. 【雨】に なる
- b. 【雨】が 続く
  
- (31)a. 血の 【雨】が 降る
- b. 爆弾の 【雨】が 降り注ぐ
- c. 花粉の 【雨】を 浴びる

このため、「雨」は次のように二つに区分し、着目する側面の違いは、後で述べる意味素性の違いとして記述する [第三章 意味素性]。

[区分01] 大気中の水蒸気が上空で冷やされ、水滴となって落ちてくるもの。  
またそれが降り続けている状況。

< LIQ : 液体 > (26)

< CON : 具体物 > (27)

< PHE : 出現・消滅・変化する自然現象 > (28)

< NAT : 存在・移動する自然現象 > (29)

< STA : 状態 > (30)

[区分02] 上から絶え間なくたくさん降り注ぐもの。

< CON : 具体物 > (31)

上にあげた例の、「部屋の壁が厚い」に対する「言葉の壁が厚い」や、「雨が降る」に対する「血の雨が降る」のように、ある名詞がその指されたものの性質・特徴とよく似た性質・特徴を持つ別のものを表すことがある。これらは、はじめは比喩として使用されたと推測されるが、現代語ではかなり一般的に使われ、一つの用法として定着していると判断してよいものである。名詞辞書では、このような名詞の表現を見出し語の持つ一つの用法として認め、区分としてたてる[橋本1994]。このような場合には、結びつく述語には差異がない場合が多く、連体修飾語の違いが基準となる。

次の例にあげる「背後」も、連体修飾語の部分に明らかな違いが観察できる。

- (32)a. そのビルが 【背後】に ある  
b. その建物が 【背後】に 隠れる  
c. 彼の 【背後】から 撃つ

- (33)a. その事件が 【背後】に ある  
b. その問題が 【背後】に 隠れる  
c. その法案が 【背後】を 調べる

(32)には、建物などの具体的な物が現れ、(33)には、事件や問題などの抽象的なことがらが現れるため、次のように二つに区分される。

[区分01] 人の背中が向いている方や、物の後ろ。 (32)(34)

[区分02] 事件や出来事などに関わりのある、表立って表れない陰の部分。 (33)(34)

ただし、(34)の場合には、[区分01][区分02]のどちらの解釈も可能である。

- (34) その政治家が 【背後】に いる

この場合には、「政治家」という連体修飾語や「いる」という述語は、[区分01]にも[区分02]にも記述されることになる。

このように、連体修飾語の違いによって区分できる場合にも、区分されたそれぞれに同じ連体修飾語や述語が記述されることは多々あるので注意が必要である。

### 1.3.2 結びつく述語の違い

次にあげる「貝」という見出し語は、「結びつく述語」の違いが顕著に見られる例である。

- (35)a. 【貝】が 棲む  
b. 【貝】が プランクトンを食べる  
c. 【貝】を 育てる

- (36)a. 【貝】が おいしい
- b. この 【貝】は 新鮮だ
- c. 【貝】を 食べる
- d. 【貝】を 焼く
- e. 【貝】を 塩抜きする

- (37)a. 【貝】を 拾う
- b. 【貝】を 細工する
- c. 【貝】を 削る

(35)では生き物としての側面に、(36)では食べ物としての側面に、(37)では、具体物としての側面に焦点を合わせた述語が現れている。このように、結びつく述語の性格の違いに着目して「貝」は三つに区分される。

- [区分01] 硬い殻をもつ軟体動物。 (35)
- [区分02] 「かい(貝)01」の食用部分。 (36)
- [区分03] 「かい(貝)01」のからだを覆っている硬い殻。 (37)

ところで、『IPAL名詞辞書』では、ある見出し語に結びつく述語の性格の違いを意味素性の違いとして捉えている。一つの区分に、複数の意味素性を振ることも可能である(参照:[第三章 3. 意味素性の並立])。このため、結びつく述語の違いが即ち、区分の対象になるわけではない。この点に留意が必要である。

次に別の例について説明する。次の「ごはん」の用例では、おかずやパンなどと対照させて、米を炊いて作る和食の主食となる食べ物を指していることがわかる。

- (38)a. 【ごはん】を おかわりする
- b. 【ごはん】を 炊く

一方、(39)では、これを含めて「食事一般」として一括し、飲み物などと対照させている。

- (38)a. 【ごはん】を ごちそうする
- b. 【ごはん】を 支度する
- c. 今日の【ごはん】は 豪華だ

こうした事例は狭義/広義という用語で区別されるが、ここでは結びつく述語の違いに着目して区分する。

なお、次の例に現れる「食べる」「できる」は、両者の解釈が可能である。

- (40) 【ごはん】を 食べる
- (41) 【ごはん】が できる

このような場合には、両者に同じ述語を記載してある。結びつく述語の違いによって区分できる場合にも、区分されたそれぞれに同じ述語が記述されることがあるので注意が必要である。

「ごはん」は以下のように、二つに区分される。

- [区分01] 米を炊いて作る和食の主食となる食べ物。 (38)(40)(41)
- [区分02] 食事。 (39)(40)(41)

次の例において、(42)の「足」は、(43)の「足」を全体とした時の一部分を表わす。

- (42)a. 彼女は 【足】が 長い
- b. 幽霊には 【足】が ない
  
- (43)a. 彼は 【足】が 大きい
- b. 満員電車で 【足】を 踏まれた

このように、見出し語が全体を表す場合と、全体の一部を表わす場合とで、結びつく述語が異なる場合には両者を区分する。「足」には他の区分もあるが、ここでは省略して以下に二つだけを示す。

- [区分01] 動物の胴に付属し、歩行や体を支える機能を果たす身体部分。 (42)
- [区分02] 「あし01」の一部で、くるぶしより下の部分。 (43)

なお、この場合、英訳として 'leg' と 'foot' との違いがある。また、「足」という表記はどちらにも用いられるが、「脚」という表記は[区分01]にしか用いられないという表記の違いなども援用して、区分することができる。

### 1.3.3 連体修飾語と結びつく述語との違い

「サ変用法」や「述語用法1」を持たない見出し語は、連体修飾語の違いと結びつく述語の違いとの両方から区分されることが多い。

見出し語「点数」には、次のような用例がある。

- (44)a. 応募作品の【点数】が 多い / 少ない
- b. 絵画の【点数】を 増やす / 減らす
- (45)a. 数学の【点数】が 高い / 低い
- b. 試験の【点数】を 上げる / 下げる / 稼ぐ

上の例では、(44)の「多い、少ない、増やす、減らす」と結びつく「点数」と、(45)の「高い、低い、上げる、下げる」と結びつく「点数」とでは、性格に違いがあると考えられる。また、それぞれの「点数」の連体修飾語にも、異なる性格の名詞句が現れている。(44)は修飾語に現れる名詞句が指示するものの個数を問題にするものであり、(45)は程度を問題にするものである。

さらに、「点数」には次のような用例もある。

- (46)a. あの部下への【点数】が 高い / 低い
- b. 上司からの【点数】を 上げる / 下げる / 稼ぐ

この(46)は、結びつく述語は(45)と同じであるが、連体修飾語の性格が異なる。この点を重視して、「点数」については(44)、(45)、(46)の三つに区分することができる。

- [区分01] 試験やゲームなどの成績を表した数。 (44)
- [区分02] 商品・作品などの数。 (45)
- [区分03] 他人からの自分への評価。 (46)

#### 1.3.4 見出し語以外の項の違い

見出し語とそれを項とする述語を含む単文を作成したときに、見出し語以外の項に現れる名詞句の違いも、区別の基準になるものである。

いわゆる学校文法で形容動詞語幹と呼ばれる見出し語の場合には、「項の用法」において述語には差が出にくいものがある。例えば「窮屈」という見出し語の場合である。

- (47)a. スボンが 【窮屈】に なる
- b. 私は 古い洋服を 【窮屈】に 感じる
- (48)a. 式典が 【窮屈】に なる
- b. 私は その式典が 【窮屈】に 感じる
- (49)a. 暮らしが 【窮屈】に なる
- b. 私は 今の暮らしが 【窮屈】に 感じる

述語には「なる」「感じる」などの限られた動詞しか現れない。この場合には、見出し語以外の項の違いで区分する。「なる」のガ格に、(47)には洋服などが現れ、(48)には儀式などが現れ、(49)には「暮らし」などが現れる。

このような違いに基づいて、「窮屈」は次のように三つに区分される。

- [区分01] 自由に身動きがとれなかったり、物理的な圧迫感があったりして、不快に感じられるさま。 (47)
- [区分02] 堅苦しく、気詰まりに感じるさま。 (48)
- [区分03] (生活などについて)ぎりぎりでゆとりがないさま。 (49)

次の例「根」は、「連体修飾語」の違いと「見出し語以外の項」の違いとを組み合わせで区分できるものである。

- (50)a. 苗木の 【根】が つく
- b. ヒアシンスの 【根】が 伸びる
- c. 桜の木の 【根】が 枯れる
- d. サツマイモの 【根】が 長い
- (51) バラが 【根】を 張る
  
- (52)a. 土地投機の 【根】を 絶やす
- b. 悪癖の 【根】を 絶つ
- (53)a. 若者の活字離れは 【根】が 深い
- b. その問題が 【根】を 張る
  
- (54)a. 彼女は 【根】が 優しい
- b. 妹は 【根】が 明るい
- c. 彼は 【根】が 卑しい

(50)には、連体修飾部に植物が現れ、(52)には抽象的なことがらが現れる。また、(51)(53)の「根」は連体修飾されていないが、連体修飾部に現れる名詞句と同様に、ガ格の位置に現れる名詞句に違いが見られる。さらに(54)の「根」は、連体修飾が難しいが、二重主格構文の外側のガ格にヒトが現れる。

このような違いから、次のように区分される。

- [区分01] 植物を支え、水分や養分を吸収するため、地中にある器管。 (50)(51)
- [区分02] 物事のもととなっている部分。 (52)(53)
- [区分03] 生まれ持った性格。 (54)

#### 1.4 基準C：その他の用法の情報

前節では、「項の用法」に現れるその他の語の違いから区分する例について述べた。見出し語の中には、「項の用法」がなかったり、「項の用法」だけを見ても違いが明確でないものがある。この場合には、「サ変用法」や「連体用法」「連体被修飾語としての用法1」（以下「被連体用法1」）などの情報を基準にする。

##### 1.4.1 「サ変用法」の違い

「サ変用法」しかないものや、「項の用法」だけでは違いが明確でない場合に、「サ変用法」における文型や項の違いに基づいて区分する場合もある。

次の「収容」という見出し語は「サ変用法」を持ち、次の三つの文型を持つ。

- (55) 救急隊が 負傷者を 病院に 【収容】した  
NP 2 ガ NP 1 ヲ NP 二
- (56) その病院が 負傷者を 三十人 【収容】した  
NP 2 ガ NP 1 ヲ NP
- (57) このホールは 五千人を / 【収容】できる  
NP 2 ガ NP 1 ヲ /

(57)の「収容できる」は、「収容する」とは言いにくい、「サ変用法」の一つであると考えられる。(56)の文型は、(57)に類似しているが、この点で違いがあり、(55)に近いことがわかる。

(55)(56)に対応する「項の用法」には(58)があり、(57)に対応する「項の用法」には(59)がある。この「項の用法」だけでは違いが明確でない。

- (58) 負傷者の 【収容】が 遅れる / 進む  
この病院が負傷者の 【収容】を する  
この病院は負傷者の 【収容】が できる  
この病院は負傷者の 【収容】が 可能だ
- (59) このホールは五千人の 【収容】が 可能だ

このような場合には、「サ変用法」同士を比較し、「収容する」が可能か否かに基づいて、次の二つに区分する。

- [区分01] 人などをある場所に連れていき、そこに入れること。 (55)(56)(58)  
[区分02] 人や物が建物や施設などに収まること。 (57)(59)

なお、この二つの区分には、次のような合成語の違いも援用できる。

- (60) 【収容】者 / 【収容】児 / 【収容】所 / 【収容】場  
強制【収容】 / 遺体【収容】
- (61) 【収容】力 / 【収容】能力 / 【収容】率 / 【収容】人員

ところで、「サ変用法」の文型の違いだけでは、名詞辞書では区分していない。自動詞と他動詞との違いも区分の基準とはしていない。また「サ変用法」における項の名詞句は、「項の用法」において、その見出し語を修飾する連体修飾語に対応する。したがって、項の名詞句の種類の違いを区分の基準にはしなかった。しかし、サ変動詞としての辞書の記載欄では、項の名詞句の種類の違いは、意味素性の違いとして記述される可能性が高いので、機械処理をする際には、「サ変用法」において、項となる名詞句の意味素性が参考に

なると思われる。

#### 1.4.2 「連体用法」の被修飾語の違い

いわゆる形容動詞語幹と呼ばれる見出し語には、「サ変用法」もなく、「項の用法」もないものがある。この場合には、「連体用法」を用いて区分する。

次の「けち」という見出し語は、「項の用法」として(62)がある。

- (62)a. 彼は 【けち】に なった  
b. 【けち】を しなくて 私にもそれを下さい  
(63)a. 彼は 結婚式で 席順に 【けち】を つけた  
b. この企画には 最初から 【けち】が ついていた

(62)は、「物や金を惜しんで出さないこと。また、そのさま」と解釈できる。(63)は、「評価を落としめたり、運気をそいだりする、とされる物事」と解釈できる。また、「けち」が「連体用法」で用いられる場合には、(64)(65)(66)のような例がある。

- (64) 【けち】な 人 / 性分 / 性質 / 会社 / 社長  
(65) 【けち】な 道具 / 商売 / もの  
(66) 【けち】な 考え / 料簡 / 根性 / こと

(64)は(62)の「項の用法」に対応するものである。(63)には、「連体用法」は対応しない。一方、(65)(66)には、対応する「項の用法」が作れない。

- (67)a.\* その道具は 【けち】に なった  
b.\* 彼は 考えが 【けち】に なった

このような場合には、(64)(65)に現れる被修飾語の違いから、区分を行なう。したがって、「けち」は次の四つに区分できる。

- [区分01] お金や物を必要以上に出し惜しみする性格。 (62)(64)  
[区分02] くだらなくて、とるに足りないさま。 (65)  
[区分03] (考え方や気持ちについて)浅はかで無分別なさま。 (66)  
[区分04] 評価を落としめたり、運気をそいだりする、とされる物事。 (63)

この節では、「項の用法」以外に区分の基準に用いられる用法として、「サ変用法」と「連体用法」とを取り上げた。この他にも「述語用法1」において項となる名詞句の違いから区分を行なうことが考えられる。しかし、今回の名詞辞書には「述語用法1」しか持たないものは存在しなかった。また、「述語用法1」において、その項となる名詞句は、「連体用法」における被連体修飾語と対応するため、特に基準には立てなかった。

#### 1.4.3 「被連体用法1」の意味関係の違い

次の「北」の用例には、二通りの解釈が可能である。

- (68) その山は 中国の 【北】に ある

一つ目の解釈は、「その山」が中国以北(例えばモンゴル共和国)に存在する場合であり、二つ目の解釈は、中国の領土内の北部に存在する場合である。この場合、連体修飾語も結びつく述語も同じであり、統語的な基準を用いて区分することができない。二つの解

釈の違いは、連体修飾語と見出し語との意味関係が異なることから生じている。一つ目は、連体修飾語が基準となり相対関係を表わす場合であり、二つ目は、連体修飾語が全体を表して見出し語と全体／部分関係を結ぶ場合である。このような違いを重視し、「北」は二つに区分される。それぞれの区分には、次のような用例が含まれる。

- (69)a. このビルは 【北】に 傾いている  
 b. 三の丸は 二の丸の 【北】に 位置している

- (70)a. その有袋動物は オーストラリアの 【北】に 生息している

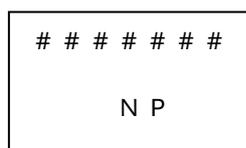
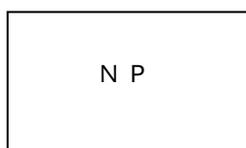
[区分01] 方角・方位の一つで、太陽が出る方向を向いたときに (68)(69)  
 左になる方向。た、その方向にある場所。

[区分02] ある地域の、中心部からみて「きた01」に位置する部分。 (68)(70)

なお、上のような違いは、次のように図示したときに、指す位置の違いを援用することによっても区分できる。

相対関係      N P の北                      全体／部分関係      N P の北

#####  
 #####



次の「左側」も同様の基準で二つに区分できる。

- (71)a. 左折する際には、車の 【左側】を よく確認しなければならない  
 b. 公衆電話の 【左側】に 立つ

- (72)a. 車の 【左側】が へこんでしまった  
 b. 日本では自動車は 道路の 【左側】を 走る

[区分01] 話者やその他の基準からみて、左の方。 (71)

[区分02] ものや場所の、中心より左にある部分。 (72)

## 1.5 基準D：意味素性

### 1.5.1 意味素性の組み合わせ

「第三章 意味素性」に述べるように、「項の用法」において、結びつく述語の性格に基づいて見出し語に意味素性が振られる。一つの区分の下に意味素性を一つだけ持つ見出し語もあれば、一つの区分の下に複数の意味素性を持つ見出し語もある。

例えば、「みかん」という見出し語では、「ミカン」という植物そのものと、「ミカン」という植物の果実部分とを表す場合が考えられる。それぞれ次のような用例がある。

- (73)a. 【みかん】を 栽培する < P L A : 植物 >

- b. 【みかん】が 枯れる
- (74)a. 【みかん】を 買う < CON : 具体物 >
- b. 【みかん】を 売る
- (75)a. 【みかん】を 食べる < EDI : 飲食物 >
- b. 【みかん】が 甘い
- (76)a. 【みかん】が なる < PLA : 植物 >
- b. 【みかん】が 熟れる
- (77)a. 【みかん】を 買う < CON : 具体物 >
- b. 【みかん】を 盛る

両者とも、具体物としての側面に焦点を合わせる述語として「売る」「買う」のように、同じ動詞と結びつくため、同じ< CON : 具体物 >という素性が振られる。さらに両者とも、植物としての側面に焦点を合わせる述語と結びつくので、同じ< PLA : 植物 >という素性が振られる。しかし、「みかん」が植物を表す場合には、「食べる」「甘い」のような述語との共起は考えにくい。したがって、前者には< EDI : 飲食物 >という意味素性は現れない。

両者の違いは、意味素性の組み合わせから、< EDI >の有無によって次のように区分することができる。

[区分01] ミカン科の常緑低木。

- < PLA : 植物 > (73)
- < CON : 具体物 > (74)

[区分02] 「みかん01」の果実で食用とされるもの。

- < EDI : 飲食物 > (75)
- < PLA : 植物 > (76)
- < CON : 具体物 > (77)

区分の基準となる意味素性の組み合わせについては、「第三章 意味素性 3.3 並立しやすい素性」に例をあげた。

### 1.5.2 目安にした意味素性の違い

意味素性の組み合わせを用いる他に、目安となる意味素性に注目した区分も行うことができる。例えば、< ANI : 動物 > < HUM : ヒト > < AML : ヒト以外の動物 > < PLA : 植物 > < EDI : 飲食物 > < PIT : 時点 > < TIM : 時間 > < LOC : 場所 > < SPA : 空間 >などの意味素性を目安に用いる。

見出し語「寸前」には、次のような用例が見つかる。

- (78)a. 締切りが 【寸前】に 迫る
- b. 爆発の 【寸前】に 出口を 発見する
- (79)a. タクシーの 【寸前】を 横断する
- b. ゴールラインの 【寸前】で ころぶ
- (80)a. その会社は 倒産の 【寸前】に ある
- b. 絶滅の 【寸前】で 持ちこたえる

(78)は時間的な側面に着目しているため、意味素性には< TIM >が振られる。(79)は場所的な側面に着目していて、意味素性として< LOC >が振られる。一方(80)は場所的

ではない。また、(81)と比較すれば、単純な時間的側面でもなく、ある状態に着目した用法であるといえる。そこで(80)の意味素性には< S T A >が振られる。

- (81)a. 彼は 会社の倒産の【寸前】に 退職した
- b. 絶滅の【寸前】に 保護策が 開始される

したがって、「寸前」は次のように、< T I M > < L O C >の意味素性を持つかどうかということを目安にして、三つに区分する。

- [区分01] ある出来事の起こる直前。  
< T I M : 時間 > (78)(81)
- [区分02] ある場所のすぐ前の場所。  
< L O C : 場所 > (79)
- [区分03] ある状態になる、あるいはある出来事の起こる直前の状態。  
< S T A : 状態 > (80)

次の見出し語「海老」は、< A M L > < E D I >の意味素性を持つかどうかということを目安にして区分される。

- (82)a. 【海老】が 泳ぐ
- b. 【海老】を 捕まえる
- (83)a. 【海老】を 食べる
- b. 【海老】を 炒める
- (84)a. 【海老】を 買う
- b. 【海老】が 安い

上の例で(82b)の「捕まえる」と(83a)の「食べる」は、「捕まえた海老を食べる」のように、一文中に現れることができる。したがって、「捕まえる」ことと「食べる」こととは、一つの区分内で焦点の合わせられる側面の違いと捉えることもできる。しかし、一般にヒトが食用とする場合には、動物「海老」のうちの限られた種類であり、また、殻を除いた部分でもある。このような点を重視して、動物としての側面と飲食物としての側面とを区分する。

このように、名詞辞書では、「貝」「海老」「豚」などの動物名や「みかん」「いちご」などの植物名を表わす見出し語で、その動植物の部分あるいは全体がヒトの食用になる場合には、必ず独立の区分を作るようにした(さらに「竹」「さくら」などの植物で、木材として使われるような場合も、独立の区分を立てる)。

つまり、「海老」は次のように、< A M L > < E D I >の意味素性を持つかどうかということを目安にして二つに区分する。

- [区分01] 甲殻綱十脚目長尾亜目に属する節足動物(の通称)。  
< A M L : ヒト以外の動物 > (82)
- [区分02] 「えび01」の食用とされるもの。  
< E D I : 飲食物 > (83)  
< C O N : 具体物 > (84)

## 1.6 基準E：意味的な情報

### 1.6.1 類義語や対語の組み合わせ

見出し語「悪質」は、先ほどの「窮屈」「けち」という見出し語と同様に、「項の用法」

には差がない。また、「サ変用法」も「被連体用法」もない。このような場合には、1.3.4で述べたように、「項の用法」において、見出し語以外の項になる名詞句や、1.4.2で述べたように、連体用法における被修飾語の違いを見ていく。

- (85)a. 最近、スリの手口はますます【悪質】になってきている
- b. 【悪質】な事件が多発している
- (86)a. 最近、その蔵元の酒が【悪質】になってきている
- b. 【悪質】な石炭を使わないようにする

この見出し語の場合、類義語の「粗悪」と対語の「良質」を用いることで違いがより明らかになる。

- (87)a.\* そのスリの手口は 粗悪だ / 良質ではない
- b.\* その事件は 粗悪だ / 良質ではない
- (88)a. その石炭は 粗悪だ / 良質ではない
- b. その酒は 粗悪だ / 良質ではない

つまり、類義語に「粗悪」を、対語に「良質」を持つものと持たないものとの区別される。

- [区分01] (物事のやり方について)ひどくたちの悪いさま。 (85)
- [区分02] 品質が悪いさま。 (86)

次の例の「薬」には、二通りの解釈が可能である。

- (89) 【薬】が 効きすぎたようだ

一つには、「病気を治すために服用あるいは塗布するもの」であり、もう一つには「その人にとってプラスになる経験」である。この場合、文脈の助けがないと区別は難しい。このような場合には、これまでに述べたような形式的な基準を用いて区分することはできないが、類義語の違いを認めて区分することができる。つまり、前者の解釈では、「薬品」「薬剤」「医薬品」を類義語として持つが、後者の場合には類義語を持たない。このような点に着目して両者を区分する。「薬」には他の区分もあるが、ここでは省略して二つだけを示す。

- [区分01] 病気やけがを治すためや、健康の維持・増進に服用したり塗布したりなどして用いるもの。 (89)
- [区分02] 体・精神状態に良い物事。 (89)

ただし、「名詞辞書」では、意味素性で分類した用例群ごとに該当する類義語や対語を記載してある。したがって、同一の区分に対して、複数の類義語が記載されることもある[第五章 意味情報 3.関連語]。次の例「学校」は、用例群ごとに類義語が書き分けられている例である。

- (90)a. あそこに【学校】がある
  - b. 【学校】を取り壊す
  - c. 【学校】が倒壊する
- 《意味素性》 < CON: 具体物 >      《類義語》 校舎

- (91)a. 【学校】に 侵入する  
 b. 【学校】から 運び出す  
 《意味素性》 < I N T : 内部空間 > 《類義語》校舎
- (92)a. 【学校】が 色ワイシャツを 禁止する  
 b. 【学校】に 在籍する  
 c. 【学校】に 寄付する  
 《意味素性》 < O R G : 組織 > 《類義語》学園, 学院
- (93)a. 【学校】を 創立する  
 b. 【学校】を 建てる  
 《意味素性》 < P R O : 生産物 > 《類義語》学園, 学院
- (94)a. 【学校】を 訪問する  
 b. 【学校】に 集合する  
 c. 【学校】で 遊ぶ  
 《意味素性》 < L O C : 場所 > 《類義語》(記載無し)
- (95)a. 9月1日に 【学校】がある  
 b. 9時から 【学校】が始まる  
 c. 【学校】を 休む  
 《意味素性》 < A P O : スケジュールに沿った活動 > 《類義語》(記載無し)

このように、名詞辞書に記載した類義語や対語は、区別の違いを表わすためのものではない。区別の基準として、「類義語や対語の組み合わせ」としたのは、一つの用例群に与えた類義語や対語の違いではなく、それらの組み合わせであることを意図したためである。

## 1.7 区別の判断基準外のもの

1.1節から1.6節まで、12通りの区別の基準をあげた。また、その判断を助けるものとして、「図示した時に指す位置の違い」「対訳の違い」「表記の違い」「合成語の違い」などもあげた。対訳や表記の違いは、あくまでも他の基準を満たしたときに援用するものであり、独立の基準とはしなかった。この節では、区別の基準外のものについて、簡単に解説しておく。

### 1.7.1 形状の違い

区別の判断基準として用いなかったものに、「形状」の違いがある。物を指す名詞の場合、形状によって「結びつく述語」に違いが生じる。しかし、その違いで必ずしも区別をする必要はない。例えば、「時計」には形状によって次のように「結びつく述語」と「対訳」に違いがある。

- (96)a. 【時計】を かける / 飾る (掛け時計)  
 b. 【時計】を 置く / 飾る (置き時計)  
 c. 【時計】を 下げる (懐中時計)  
 d. 【時計】を つける / はめる (腕時計)
- (97)a. 掛け時計 : a (wall) clock  
 b. 置時計 : a (table) clock

- c. 懐中時計 : a (pocket) watch
- d. 腕時計 : a (wrist) watch

しかし、(98)のように、形状が異なっているにもかかわらず「時計」が持つ本来的な機能や性質に沿う述語としては、共通の動詞が現れる。

- (96)a. 【時計】が 動く
- b. 【時計】が 止まる
- c. 【時計】が 進む
- d. 【時計】が 遅れる
- e. 【時計】を 見る
- f. 【時計】を 合わせる

名詞辞書では、形状に沿う述語の違いよりも、本来的な機能や性質に沿う述語の共通性を重視し、区分は一つにまとめる。

[区分01] 時刻を知るための機械。 (96)(98)

### 1.7.2 表記や合成語の違い

「表記」や「合成語の組み合わせ」の違いは、判断基準には入れない。例えば、見出し語「ひげ」については、「髭」は口ひげ、「髯」はほおひげ、「鬚」はあごひげを表わすという使い分けがあるが、そのような部位の違いに対応した表記の違いでは、区分しない。また、区分された枠組みに合成語を分類することはできても、最初に合成語を分類することは難しい。実際の記述の際に合成語を見て区分を判断した例がなかったため、合成語の組み合わせについても基準外とした。

例えば、「ふね」は、次のように二つに区分してある。

[区分01] 人や荷物をのせて海や川などの水面を移動する乗り物。

例：船 / 舟 を 出す / 漕ぐ / 待つ

《表記》船, 舟

[区分02] 料理屋や旅館などで刺身や貝などをもりつけて食膳

にだす、船の形をかたどった入れ物。

例：舟 / 船 に 刺身を盛る

《表記》舟, 船, [槽]

どちらの区分の《表記》欄にも、「船」と「舟」を併記している。おおむね、大型の汽船などは「船」、手で漕ぐようなものは「舟」を、「ふな盛り」「ふな桶」は、「舟」を用いる方が一般的であるが、厳密な使い分けは存在しない。このような使い分けについては《備考》欄に記載するにとどめ、表記によって区分することは行なわなかった。

以上、区分の基準とそれを用いた例を紹介した。繰り返し述べるが、一つの見出し語を区分する場合には、どれか一つの基準だけで十分であるという場合は少ない。例えば、「サ変動詞用法の有無」で一つの区分を立て、その後残ったものから「結びつく述語の違い」で二つ目の区分を立て、さらに「連体修飾語の違い」で三つ目と四つ目を分けるといったようなことが普通である。また、「連体修飾語の違い」があれば、おのずと「結びつく述語の違い」も生じる、というように、これらの基準は相互に関係しあっている。

## 2. 区分ごとに記載される情報

1 節の方法により区分されたそれぞれの単位ごとに以下の項目が記載される。「連体用法」における被修飾語の違いで区分した場合には、「被連体用法 1」における連体修飾語はほとんど同じものが記載されるということも珍しくない。ただし、1 節で述べたように、たとえ「結びつく述語の違い」を基準にして二つに区分したとしても、それら二つの区分に記載される述語が全く別のものになるということはあまりなく、いくつかの述語（例えば「ある」「ない」など）は重複して記載されるのが普通である。

### [1] 意味情報

意味記述	簡単な語釈
関連語	同義語，類義語，対語
意味分類	意味分類コード，分類名
助数詞	見出し語を数える場合の助数詞

### [2] 統語情報

述語の項としての用法 ＜項の用法＞	見出し語が格助詞を介して述語と結びつく用法 格助詞，共起する述語，意味素性など
連体修飾語としての用法 ＜連体用法＞	見出し語がノやナを介して他の名詞句を修飾する用法 NP0 / ノ NP に該当する NP の例
連体被修飾語としての用法 1 ＜被連体 1＞	見出し語がノを介して他の名詞句に修飾される用法 NP / NP0 に該当する NP の例，その分類
連体被修飾語としての用法 2 ＜被連体 2＞	見出し語が外の関係の修飾を受ける用法 その可能性，例文など
サ変動詞としての用法 ＜サ変用法＞	見出し語がスルを伴って述語として働く用法 文型，名詞句の意味素性，例文など
述語としての用法 1 ＜述語用法 1＞	見出し語が程度副詞の修飾を受けてダを伴って として働く用法 文型，名詞句の意味素性，例文など
述語としての用法 2 ＜述語用法 2＞	見出し語が連体修飾を受けてダを伴って述語として 働く用法 文型，名詞句の意味素性，例文など

### [3] 形態情報

表記	平仮名、片仮名、漢字などの表記
異音同語	見出し語と音韻形態上の差異が見られる語 例：にほん にっぽん
参照語	見出し語と形態的に関係する動詞、形容詞 例：ながれ ながれる ひろさ ひろい
合成語	見出し語の合成語 例：朝 毎朝，朝日，朝焼け，朝刊

## 3. 区分とは別に見出し語ごとに記載される情報

本節では、以下、区分の対象とはせずに、見出し語ごとに記載するものについて述べる。

### 3.1 「慣用句」

「慣用句」は、<1>個々の語の意味の総和が当該句全体の意味にならない、<2>述語の活用形や使役化、否定化、丁寧化や、さらに修飾語の付加や省略の可能性などに制限が見られる、という特徴を持つ。例として(1)があげられる。

#### (1) 【鼻】が 高い

この表現が「得意になっている」という意味で用いられている時は、「鼻」と「高い」が本来持っている意味を総和したものであるとは言えない。また、「鼻が高ければ」のような仮定形では用いにくく、「鼻が一番高い」のように修飾語を付加することにも制限が見られる。このような場合を「慣用句」と呼ぶ。名詞辞書では、「慣用句」は区分を立てずに、一つの見出し語につき一つの《慣用表現》欄を設け、その欄にまとめて記載している。

一方、(2)の場合には「鼻」の意味として「動物の顔にあり、においを嗅ぐことや呼吸に用いられる器官」を、「赤い」の意味として「色が赤または赤に近い」をそれぞれ認めることができる。つまり、「動物の顔にある器官である鼻が赤色をしている」という句全体の意味を個々の語の意味へ還元することができる。また、文法的な振る舞いにも制限がない。

#### (2) 【鼻】が 赤い

このような場合には、見出し語の一般的な用法であると認め、区分の対象とした。(2)の用法は、(3)にあげるような「慣用句」でないと判断できるその他の用法とともに、前節で述べた区分の基準を用いて区分し、区分ごとに、各統語情報や意味情報、さらに合成語などの記述を行う。

- (3)a. 【鼻】が 大きい
- b. 【鼻】を こする
- c. 【鼻】を つまむ
- d. 【鼻】に 詰める
- e. 【鼻】を つく
- f. 【鼻】を ほじくる
- g. 【鼻】が いい
- h. 【鼻】が 利く
- i. 【鼻】を たらす
- j. 【鼻】を かむ

中には、「慣用句」とすべきなのか、見出し語の一つの用法として区分を立てて記述すべきなのか、判断に迷うものがある。その場合には、便宜的ではあるが、客観的な判断基準として、その見出し語と結びつく語の数を基準にした。

次にあげる見出し語「腕」の例は、判断に迷ったものの一つである。

#### (4) 【腕】が いい

身体部位としての「腕」を指してはいないので、「慣用句」としても良さそうである。けれども「腕」には他にも(5)に示すような結びつきがある。

- (5)a. 【腕】が 確かだ
- b. 【腕】が 上がる
- c. 【腕】が 鈍る

- d. 【腕】が 立つ
- e. 【腕】を 磨く
- f. 【腕】を 上げる
- g. 【腕】を 競う
- h. 【腕】を ふるう

(4)(5)に共通して、「腕」に「技量」という意味を認めることができそうである。このように、結びつく語が複数ある場合には、「慣用句」とせず、この区分を一つ設けた。

ただし、「腕」の例とは違い、結びつく語が三つより少ないものについては、「慣用句」として扱った。(6)の見出し語「虫」の例では、「第六感」という意味を認めることもできそうであるが、結びつく語の数が限られているため「慣用句」と判断し、区分は立てなかった。

- (6)a. 【虫】が 知らせる
- b. 【虫】の 知らせ

「慣用句」と同様に、1.3.1 節で触れた「比喩的表現」についても、結びつく語が多い場合に独立した意味を認め区分をたてている。同じ見出し語「虫」には、次のような結びつきもある。

- (7)a. このクラスに 本の【虫】が いる
- b. 彼は 学問の【虫】だ
- c. 彼は 仕事の【虫】に なった

(7)の場合は、連体修飾語の結びつきが三つ以上あるため、「虫」に「特定のことに熱中している人」という意味を認め、区分を一つ設けた。

### 3.2 合成語の要素でしか用いられないもの

その見出し語が、合成語の要素でしか用いられない場合には、区分の対象から外した。

例えば、次に現れる「手」は、(8)の例から「その動作をする人」、(9)の例から「傷」のような意味を認めることもできそうであるが、合成語の要素でしか用いられず、「項の用法」や、「連体用法」は、「被連体用法」などが無い。

- (8)a. 話し【手】
- b. 聞き【手】
- c. 歌い【手】
- d. 踊り【手】

- (9)a. 痛【手】
- b. 深【手】

このような場合には、区分の対象とはせず、「慣用句」と同様に、見出し語ごとに一つ用意した《他合成語1》や《他合成語2》という欄にまとめて記載した(参照：[第七章 形態情報 4.9 その他の合成語])。

なお、(10)は、「労働力」という意味を認めることができるが、このように見出し語単独で用いられる用法がある場合(かつ慣用句とは認められない場合)には、共通する意味が取り出せる合成語(11)は、区分内の「合成語」欄に記載してある。

- (10)a. 【手】が 不足する  
 b. 【手】が 足りない  
 c. 【手】を 貸す  
 d. 【手】を 借りる
- (11)a. 【人手】  
 b. 【男手】  
 c. 【女手】  
 d. 【手薄】

### 3.3 専門用語など

数学・法学などの学問の専門分野や、特定のスポーツなどの専門用語は、区分の対象から外した。

(12)の「対抗」は、競馬で、優勝候補（本命）と決勝を争う相手を指すが、このように特定のジャンルでしか用いられない用法は、区分の対象とせず、見出し語ごとの《備考》欄に注記した。

(12) その予想者は あの馬を 【対抗】に した。

以上、区分の対象となるものとならないものについてまとめた。

#### 注

1. 「下位区分」と呼んでいたものを「区分」と改めた。
2. 動詞辞書においては、見出し語が述語になる場合の文型や、そこに現れる名詞句間の意味の関係（「述語素」と呼んだ）の違いによって、見出し語を区分した。名詞辞書においては、述語としての用法が記述の中心とはならないため、別の基準を設ける必要が生じた。また、区分作業や各欄の記述は分担して数人で行われるため、できるだけ、表層表現上の違いとして観察可能なことがらを基準にする必要があった。このため、第一次区分作業を担当した木村朗子、斎藤初江と協力して、橋本・桑畑が最初に区分の基準をまとめた。その後、各欄の担当者全員が参加するWG委員会において、数度の議論を重ね、最終的に橋本が現在の形にまとめた。

#### 参考文献

- 桑畑和佳子・橋本三奈子・井口厚夫・猪塚元・村田賢一(1994) I P A L 名詞辞書におけるコロケーションの記述, 『第13回技術発表会論文集』情報処理振興事業協会, pp.73-76.
- 桑畑和佳子・橋本三奈子(1995)見出し語の下位区分と名詞辞書の記載情報, 『I P A L シンポジウム'95 論文集』情報処理振興事業協会, pp.21-30.
- 橋本三奈子・桑畑和佳子・村田賢一(1993) I P A L 名詞辞書の概要, 『I P A L シンポジウム'93 論文集』情報処理振興事業協会, pp.1-12.
- 橋本三奈子・桑畑和佳子・青山文啓・村田賢一(1994)名詞の比喩的表現とその統語的特徴, 『情報処理学会第49回全国大会論文集』, 3-139.
- 橋本三奈子(1994)名詞の意味素性と見出し語の下位区分, 『第13回技術発表会論文集』情報処理振興事業協会, pp.67-72.

## 第三章 意味素性

### 1. 名詞辞書の意味素性

#### 1.1 素性と役割

今回の名詞辞書で使用するの、形容詞辞書で採用した意味素性のシステムに拡張を加えたものである。形容詞辞書では当初、名詞句の素性について、次のような仮説を想定していた〔青山・小島・橋本 1990, pp.43-46; さらに：第二部 意味素性の詳細〕。

- [A] 見出し語である一つの名詞が、名詞句として二つ以上の構文の中で別々の性格を示す用言（動詞、形容詞、助動詞ダ）に従属して（つまり、結びついて）現れれば、同じ名詞句のそれぞれの構文における性格（意味素性）もまた別様のものと見なされる。

この仮説を出発点として、名詞辞書では、意味素性を与える場合に参照されるべき原則を細分化して記述に利用しているが、この内容については疑問に思う人が多いかもしれない。というのは、一般に「役割」も同様の仮説に従って決定されるので、「素性」と「役割」の違いが曖昧になると思われるからである。I P A Lでは、こうした「役割」の果たす領域は「述語素」の名称のもとに記述が進められてきたが、今回の名詞辞書では素性の体系が複雑になったため、次期プロジェクトの統合版I P A L（仮称）までこの種の情報の記載を見合わせることにした。したがって、ここでは「素性」と「役割」の間に見られる重要と思われる違いに限り、論証を略した形で指摘を試みる。

これまで提唱されてきた「役割」についての考え方を見る限り、役割はすべての文（命題に近似する範囲）に現れる、必須の構成要素である名詞句にはすべて振られる。一方で、時間や場所を指す名詞句は、構文の中で随機的な副詞句として現れる場合がある。その場合にも「時間」「場所」などの役割が振られるが、これら周辺的な役割に与えられた名称や定義を見る限り「素性」との間に明瞭な一線は引きがたい。このことは「役割」と「素性」の両方を並行して使うという視点が欠けているために、両者の棲み分けを問う必要が生じなかったことに原因があるのかもしれない。

また、「役割」という名称にこだわれば、「親」という役割が「子」という役割と対になって成立するように、それは本来的に関係概念として捉えられるはずだが、通常の「時間」や「場所」にはこのような概念は部分的にしか適用できない（例えば始点は終点の対概念であり、「三時から五時まで」や「東京から名古屋まで」にはここに述べたような類の関係性が見られる）。このような捉え方が正しいとすれば、役割は文の中で関係性の見つかる名詞句の間に限定して与えられるべき性格のものである。このように文の中で役割の与えられる名詞句が限定を受ける一方で、素性の方は少なくとも文の中に現れるすべての名詞句に振られると、ここでは考える。

役割と素性を区別する場合にもう一つ設けておいた方がよい前提がある。それは、名詞句の現れる文が動詞述語文であれ名詞述語文であれ、そこに複数の名詞句が現れるなら最低一対の役割が見つかることである。したがって、このような前提のもとでは、例えば二項述語文の場合に限っても、そのすべての「文型」には役割の対が見つかるはずである。ところが、役割の持つこのような遍在性とは逆に、素性の方は一組の述語を参照することによってしか名詞句に振ることはできない - 以下の本文で詳しく述べるように、このことは少なくとも名詞辞書での前提である。つまり、素性を振るのに参照されるべき一組の述語と、素性を振られるはずの名詞句が従属する述語との間の同一性あるいは類似度を考慮に入れることによって初めて、名詞句には素性を振ることが可能になる。

## 1.2 素性の必要性

次の節では、文型内の素性間に見られる隣接関係について、原則の形で多少詳しく触れる。その前に、素性の存在理由について簡単に述べておきたい。IPALでは、これまで頻度の高さを目安に、用言を見出し語として取りあげてきた。そのうち、(6)に例としてあげる動詞スルは、最も頻度の高い用言の一つである。このような高頻度の動詞の実相を捉えるには、その用言が文の中で述語として働く場合、その文型の述語に直接従属する名詞句（この場合はヲ格名詞句）の性格を記述することが前提になる [ 青山 1984 ]。

(1)をデータとして眺める限り、そこから抽出される文型は四例を通じて同一のものである。つまり、これら四例は「NPガ NPヲ スル」という一つの文型にまとめて、表示することができる [ 青山・小島・橋本 1990 ]。

- (1)a. 彼は英語の勉強をしている
- b. 彼は会社の社長をしている
- c. 彼はストライプのネクタイをしている
- d. 彼は大器晩成の顔をしている

しかし、実際は四例とも異なる振る舞いを示す。例えば、(2)にあげるような文型を別に持つのは、(1a)の場合だけである。

- (2)a. 彼は英語を勉強している
- b. \*彼は会社を社長している
- c. \*彼はストライプをネクタイしている
- d. \*彼は大器晩成を顔している

また、(3)にあげる文型を一方で持つのは、(1b)の場合だけである。

- (3)a. \*彼は英語で勉強をしている
- b. 彼は会社で社長をしている
- c. \*彼はストライプでネクタイをしている
- d. \*彼は大器晩成で顔をしている

さらに、(1a)(1b)(1c)は連体修飾句を省略することは(4a)(4b)(4c)のように可能だが、(4d)では不可能である。このことと連動して、スル/シテイルの両形が見られるのは、(5)にあげるように最初の三例に限られる [ 青山 1990 , pp.113-115 ]。

- (4)a. 彼は勉強をしている
- b. 彼は社長をしている
- c. 彼はネクタイをしている
- d. \*彼は顔をしている
- (5)a. 彼は英語の勉強をする
- b. 彼は会社の社長をする
- c. 彼はストライプのネクタイをする
- d. \*彼は大器晩成の顔をする

ここでは一例をあげたに過ぎないが、こうした文型間の相違に照らし合わせて、「勉強」「社長」「ネクタイ」「顔」にはそれぞれ別の意味素性が振られる（ただし、2.1でも触れるが、(2a)のように無格でスルに従属する場合、素性は振られない）。

ところで、名詞辞書で素性として取りあげるのには、こうした構文的な特徴が見られるものに限定されるが、この種の情報を名詞句に与えることには説明が必要かもしれない。そのために、ここでは助詞の省略／脱落を一つの例としてあげる[丸山 1996](1)と対比して、(6)で助詞の脱落が見られる部分を「 , 」で示す(文体上の調和からすれば、このような場合シテイルより短縮形のシテルの方がふさわしいので、以下でもそれに換える)。

- (6)a. 彼, 英語, 勉強, してる
- b. 彼, 会社の社長, してる
- c. 彼, ストライプのネクタイ, してる
- d. 彼, 大器晩成の顔, してる

辞書がこのようなデータまで考慮に入れなければならないとすれば、上に述べたような情報を名詞句に与える他はなくなるだろう。(格助詞ノの省略／脱落が、(6a)だけで許されることに注意。ただし、個体発生的にも系統発生的にも話しことばは書きことばに先行するので、上に例としてあげた現象を「助詞の省略／脱落」あるいは「短縮形」という用語で説明するのは、文法用語の大半が書きことば中心主義に由来するものであることを物語っている。)

### 1.3 名詞辞書における意味素性の記載欄

『I P A L名詞辞書』の「意味素性」は、名詞辞書の中で以下のつけた欄に記載されている。

- 区分一覧
- 意味情報
- 述語の項としての用法
- 連体修飾語としての用法
- 連体被修飾語としての用法 1
- 連体被修飾語としての用法 2
- サ変動詞としての用法
- 述語としての用法 1
- 述語としての用法 2
- 形態情報
- 慣用表現ほか

意味素性は、上に示したように名詞辞書の複数の情報欄に関係する。したがって、素性について説明する過程で、他の欄の記載事項に関連する問題に触れる場合がある。なお、見出し語と意味素性の認定をめぐる様々な方法論上の問題については、煩雑な問題を含むので「第二部」に掲載した(参照：第二部 意味素性の詳細)。そこには「付録 1」として素性一覧を掲載する。名詞辞書に記載される意味素性については、そちらから入る方がより簡潔な全体像が得られるはずである。

意味素性は上につけた用法欄に記載されるが、用法によって意味素性の与え方が異なる。これは以下の三つに分類できる(区分一覧、意味情報については：4.意味素性の記載例)。

- 名詞句に素性を与える場合   : 「サ変動詞としての用法」
- : 「述語としての用法 1」
- 見出し語の名詞に素性を与える場合   : 「述語の項としての用法」

連体修飾部の名詞に素性を与える場合 : 「連体被修飾語としての用法」  
「述語としての用法 2」

以下では、素性を与えるための原則について、この順に解説を加える（その他の問題については各欄を参照）。

## 2. 素性を与えるための原則

### 2.1 名詞句に素性を与える場合

名詞辞書に登録される見出し語はすべて名詞である。見出し語が、述語部分に現れ「見出し語 + スル」「見出し語 + ダ」という形で使われる場合、IPALではそれぞれ「サ変動詞としての用法」「述語としての用法 1」と呼ぶ（以下ではこれらを「サ変動詞用法」「述語用法」と略する）。名詞辞書における意味素性は、一つには、これらの述語に従属する名詞句に対して与えられる（述語部分に現れる見出し語には、素性は振られない）。これは、これまで公開してきた動詞辞書 / 形容詞辞書において、単文を基準とした「文型」の中で動詞や形容詞に従属する名詞句に意味素性が与えられることと同様の前提である。名詞辞書においては、「述語の項としての用法」における見出し語の意味素性が記載の中心となるが、その場合も「単文」に現れる名詞句に素性を与えることが前提となるため、まず「名詞句に素性を与える場合」の原則について解説する。

IPALの文型の記載については暗黙の了解事項がある。それは、ある述語の作りあがる一つの文型の中で、同じ格助詞を伴って異なる名詞句が現れる場合、その述語の性格に違いが見られなければ、それらの名詞句には同じ素性が振られる、という主旨のものである。しかし、このことは了解事項であり、以下では、ある文型に現れる同種とも思われる名詞句に対して、どのように異なる素性が振られるかを中心にして解説を進める。

最初に仮説としてあげたものは別々の用言に関するものだったが、多義的な一つの用言の場合にも同じことが成り立つ。これをまとめれば[B1]のような形になる。以下に、同様のものを五種類あげるが、これらを便宜上「作業原則」あるいは単に「原則」と呼ぶ。これらの原則は、名詞辞書におけるサ変動詞用法や述語用法に限定されるものではなく、一般に動詞や形容詞などの用言が述語として現れる場合、その述語に従属する名詞句に素性を与えるための原則である[青山 1996]。したがって、述語の例には和語動詞や形容詞も用いる。

[B1] ある一つの名詞句が二つ以上の文型の中で同一の（音形を持つ）述語に同じ格助詞を仲介して従属しても、その述語が多義的である場合は意味素性を別のものにする。

例えば、見出し語「学校」が同じ格助詞を伴って、次のように同じ述語「入る」に従属する場合にも見られる。この文には両義性が見られるが、それは(1a)(2a)の[ ]内にあげた同義語の違いからも分かる。

- (1)a. 彼は その学校に 入った [ 入学する ]  
<HUM> <ORG>
- b. ?彼は その学校の中に 入った [ 入学する ]  
<HUM> <ORG>
- (2)a. 彼は その学校に 入った [ 侵入する ; 入り込む ]  
<HUM> <INT>
- b. 彼は その学校の中に 入った [ 侵入する ; 入り込む ]  
<HUM> <INT>

このように、述語の性格の差は、それとの従属度が最も高い名詞句の内部構造に影響を及ぼす。(1a)(2a)の場合、述語「入った」に直接従属する名詞句は「その学校」だが、その内部構造に影響が及ぶことは(1a)の場合に限り「その学校の中」と置き換えが容易になることから明らかである。このように同義語の違いや「その学校の中」との置き換えの可否をもとに、「その学校」には組織<ORG>あるいは内部<INT>という素性をそれぞれ振る。

すでに関連して触れた反義語(対語)や同義語(あるいは類義語)については、以下のような主旨の原則にまとめることができる。(ただし、[B2]ならびに次の[B3]は使用頻度の高い述語に適用される。例えば、サ変動詞ではこの原則が適用されない場合が多く見られる。)

[B2] ある述語の作りあげる二つの別の文型に同じ名詞句が現れる場合でも、その述語の反義語や同義語に違いが見られるときは、それぞれの名詞句の素性も別のものになる。

例えば、(3a)と(3b)は格助詞の組み合わせが異なるだけでなく、[ ]内に同義語として示すように、解釈が異なる。

- (3)a. その町を バスが 走っている [ 走行している ]  
<LOC> <AUT>  
b. その町に バスが 走っている [ 運行している ]  
<LOC> <NET>

(3a)の「バス」は(一台の)乗物としての側面に焦点が合わせられている。この点を考慮して<AUT>という素性が振られるが、(3b)では交通網としての「バス」に焦点が合わせられているため別の<NET>という素性を振る。(3a)に現れる格助詞の組み合わせからは「バス」を<NET>とする解釈は不可能である。その傍証として、(3a)のガには「眼前描写」の場合がありうるのに対して、出来事の一回性を表現しない(3b)にはその可能性がないことがあげられる[尾上 1983]。

上にあげた原則の逆の事例として当然のことながら、次のような原則が必要になる。

[B3] ある述語の作りあげる二つの別の文型に同じ種類の名詞句が現れても、その述語の反義語や同義語に違いが見られない場合、両方の文型に現れるすべての名詞句には互いに同じ意味素性が振られる。

この点について(4a)(4b)を例として取りあげる。この場合、述語「感じる」には別々の文型が割りあてられるが、この二つの文型の間には類義語には差が見られないので、名詞句「哀れ」と「老人」はヲ格に立つ場合にも二格に立つ場合にも同じ素性が振られる(ただし、これと対照的な例については、以下の(15)を参照)。

- (4)a. 彼女は その老人を 哀れに 感じる  
<HUM> <HUM> <INC>  
b. 彼女は その老人に 哀れを 感じる  
<HUM> <HUM> <INC>

同様に、次の「酒」「グラス」および「その実験結果」「論文」にも、同じ意味素性を与える[同様の例文については：奥田 1960, pp.171-174]。

- (5)a. 彼女は 酒で グラスを 満たした  
 <HUM> <LIQ> <CON>  
 b. 彼女は 酒を グラスに 満たした  
 <HUM> <LIQ> <CON>
- (6)a. 彼女は その実験結果で 論文を 書いた  
 <HUM> <INF> <PRO>  
 b. 彼女は その実験結果を 論文に 書いた  
 <HUM> <INF> <PRO>

実際の素性の決定に利用されるのは同義語 / 反義語や格助詞の違いにとどまらない。素性を決定する場合に多用されたのは、述語を中心として構成要素間に見られる同一文型内の従属関係である。これは以下のような原則として提示することができる。

[C1] 文型中に名詞句が複数現れる場合、述語との従属度の高い名詞句の素性によって周辺の名詞句の素性が条件づけられる。

以下に例としてあげる(7a)(7b)は、名詞句、格助詞、述語のすべてにわたって同一のものである。しかし、[ ]内にあげるように、類義語の異なる可能性については否定できない。先にあげた原則に従えば、二つの名詞句「新聞」「手紙」にはそれぞれ異なる素性が振られる。このことは、(8a)(8b)のように「手紙」を「泥靴」「求人案内」に、置き換えることから傍証が得られる。(7a)の「のせる」については「具体物の上に具体物を置く」ことと考えてよいので、「新聞」「手紙」にはそれぞれ<CON>が振られる。これに対して、(7b)では「あるメディアに情報を掲載する」と同義的であり、「新聞」は抽象的な場所としての<SPA>が、「手紙」には内容としての<INF>がそれぞれ振られることになる。

- (7)a. 彼は 新聞に 手紙を のせた[置く]  
 <HUM> <CON> <CON>  
 b. 彼は 新聞に 手紙を のせた[掲載する]  
 <HUM> <SPA> <INF>
- (8)a. 彼は 新聞に 泥靴を のせた[置く]  
 <HUM> <CON> <CON>  
 b. 彼は 新聞に 求人案内を のせた[掲載する]  
 <HUM> <SPA> <INF>

[B1]では、述語の性格の差は、それとの従属度が最も高い名詞句およびその周辺の名詞句の内部構造に影響を及ぼすことを述べた。(9)に示すように、「新聞の上に」と置き換え可能なのは「置く」が類義語となる場合に限られることも、述語への従属度の高い名詞句の性格が、周辺の名詞句の内部構造に影響を及ぼす一例として考えられる。

- (8)a. 彼は 新聞の上に 手紙を のせた[置く]  
 <HUM> <CON> <CON>  
 b. 彼は 新聞の上に 泥靴を のせた[置く]  
 <HUM> <CON> <CON>

上に述べたように、「新聞」には<CON><SPA>という素性の与えられる可能性がある。同様に、「手紙」には<CON><INF>という素性の与えられる可能性がある。

大切なことは、従属度の高い名詞句の素性が周辺の名詞句の素性に影響を及ぼすため、実際には(10)のような組み合わせはあり得ず、上にあげた二通りの組み合わせしか見られない点である。

- (10)a. 彼が                    新聞に 手紙を のせる  
           <HUM>                    \* <CON> - <INF>  
       b. 彼が                    新聞に 手紙を のせる  
           <HUM>                    \* <SPA> - <CON>

したがって、素性の組み合わせについて平板な論じ方をするより、従属関係を視野に入れながら、素性の組み合わせの可能性とそれに対応する表現の可能性を考える必要がある。

原則[C1]は、(特に、多義的な述語の場合)それに直接従属する名詞句の素性から、他の名詞句の素性が判明することを述べたものだが、そのような名詞句の影響は述語によって仲介されて助動詞や副詞句にまで及ぶ場合が少なくない。次の原則はその点について述べたものである。

[C2] 述語との従属度の高い名詞句の素性は、アスペクト形式や、副詞句に分類される数量詞や頻度数詞あるいは時称詞の振る舞いからも判明する。ただし、文型表示は、この種の構成要素を省いた単文を基本にして与えられている。

次の例では、「ハワイ大学に行っていてここにはいない」という場所<LOC>の解釈(11a)と、「ハワイ大学の学生」という帰属機関<ORG>の解釈(11b)との間で両義的である。一方、(11c)にはそのような両義性はない。(この例を「うちの娘はトイレに行っている」と比較すれば違いは明確になる。「トイレ」に帰属機関の解釈は生まれないからである[青山 1984]。)しかし、(12a)のように「三回」という数量詞を加えると、「ハワイ大学」は(12c)の「ハワイ」同様、場所<LOC>としての側面だけに優先権が与えられ<ORG>の解釈の方は消えてしまう。

- (11)a. うちの娘は    ハワイ大学に    行っている [ 出掛けている ]  
           <HUM>                    <LOC>  
       b. うちの娘は    ハワイ大学に    行っている [ 通っている ; 所属している ]  
           <HUM>                    <ORG>  
       c. うちの娘は    ハワイに            行っている [ 出掛けている ]  
           <HUM>                    <LOC>  
       (12)a. うちの娘は    三回    ハワイ大学に    行っている  
               <HUM>                    <LOC>  
               b. うちの娘は    三回    ハワイ大学に    行っている  
                   <HUM>                    \* <ORG>  
               c. うちの娘は    三回    ハワイに            行っている  
                   <HUM>                    <LOC>

このように、文型内に現れるある名詞句の素性は、アスペクト形式や、副詞句に分類される頻度数詞や数量詞の振る舞いを参照することからも決定される。ただし、文型欄には、アスペクト形式や数量詞などの副詞句は表示されず、これらの構成要素を除いた単文について表示が与えられる。

文型内の名詞句に素性を表示する本来の要請からいえば、同一の素性が並ぶ可能性は最低限に抑えることが望ましい。いうまでもなく、一つの文型の中に同じ素性が隣接するほど、文型内の素性による判別率が下がってしまい、役に立たなくなるからである(参照:

3.2 意味素性の隣接と並立)。ところで、次にあげる二つの原則は条件が異なるのに、その帰結として行なわれる作業結果は同じである。より重要なことは、最初に述べた要請に反して、二つの原則に従った作業内容が同一素性を振る結果に終わる点である。この点について、簡単な説明を加えておきたい。最初の原則は、次のような内容のものである。

[D1] ある文型中に現れる二つの名詞句の指示対象が異なる場合、それぞれに同一の素性が振られる。

この原則に従って、(13)の「彼」「彼女」や、(14)の「社長」「その部長」は異なる指示対象を持つので、それぞれに同一の素性が振られる(この原則は、以下順に例をあげるように、「対称述語」「伝達動詞」「雇用動詞」「破壊動詞」などに適用される)。

- (13) 彼は 彼女と 結婚した  
<HUM> <HUM>
- (14) 社長は その部長に 転勤を 命令した  
<HUM> <HUM> <ACT>

ところが、次にあげる例では名詞句間の指示対象の決定に複雑な問題がからむ。(15a)では名詞句の数は三つだが、登場人物は二人だけだからである。二人の登場人物である「社長」と「息子」には同じ<HUM>が振られるが、この場合「秘書」は「息子」の役割を示すので<ROL>という素性が振られる[青山1990, p.113]。

- (15)a. 社長は 息子を 秘書に 雇った  
<HUM> <HUM> <ROL>
- b. 社長は 息子に 秘書を 雇った  
<HUM> <HUM> <HUM>

これに対して、三つの名詞句がそれぞれの指示対象を持つ(15b)では、登場人物は三人現れることになる(ちなみに、(15a)の場合に限り、格助詞二はトシテと置き換え可能である)。つまり、述語との従属度の高いある種の名詞句(この場合「秘書」はヒトと役割の両方を指す)では、どちらの素性を解釈として与るか格助詞によって区別されている。

次にあげる(16)の例に、二つの名詞句の指示対象が異なるという理由から、[D1]に従って同一の素性が振られることはすでに述べたとおりである。

- (16)a. そのクレーン車が 玄関のドアを つぶした  
<CON> <CON>
- b. そのクレーン車で 玄関のドアが つぶれた  
<CON> <CON>

しかし、(16)が「破壊」という二つの対象の間の因果関係を表示するのに対して、以下の(17)が全体/部分の関係を表わすということは、両者の素性表示からは明らかにならない。

- (17) そのクレーン車は ドアが つぶれている  
<CON> <CON>

というのも、(16)は原則[D1]に従って、(17)は次の原則[D2]に従ってそれぞれ素性が与えられるのに、両者とも素性に関して同一の表示に辿りついてしまうからである。

[D2] ただし、二つの名詞句の指示対象が重なっても、その二つの名詞句が全体／部分の関係にある場合には、それぞれに同一の素性を振る。

この点については 1.1 で触れたように、その違いは素性レベルの問題ではなく、役割の表示の中で明らかにされるという立場をここでは取る。

ところで、こうした問題が典型的に現れるのは、一文中にガ格が二つ現れる二重主格構文の場合である。二重主格構文は、「NPガ NPガ NPダ／形容詞／動詞」という形を持つ。また、以下では、この構文がこの語順を取った場合、述語に近い位置に現れるガ格名詞句を「内項」、述語から離れたガ格名詞句を「外項」と、それぞれ呼ぶことにする（参照：第二部 意味素性の詳細）。上にあげた(17)は、外項に「そのクレーン車」、内項に「ドア」が現れる二重主格構文の例であるが、この時、外項と内項の指示対象は重なる。つまり、「そのクレーン車」と「ドア」とは全体／部分の関係にある。この場合は、[D2]に従って同一の素性を振る。

同様に[D2]の原則に従い、(18)(19)についても、そこに現れる二つの名詞句にはそれぞれ同一の素性が振られる。

- (18) その車は エンジンが 故障している  
<AUT> <AUT>
- (19) そのシャツは ポケットが 黄色だ  
<CON> <CON>

しかし、二重主格構文の問題は、ここに例としてあげたように、明確な全体／部分の関係を結ぶ場合ばかりとはいえない点にある。二つの名詞句が典型的な全体／部分の関係から逸脱する場合は次の原則に従う。（素性<ABS>に類似する素性群をまとめて、領域／ABS／と呼ぶ。参照：3.1）

[D3] 二重主格構文において、「外項」と「内項」とが全体／部分の関係にある場合を除いて、三つの名詞句の素性はすべて別になるようにする。一般に「内項」の名詞句には、抽象／ABS／の下位素性が振られる。

この原則に従って、(20)に現れる三つの名詞句には、それぞれ別の素性が振られる。

- (20)a. その服は 値段が 8千円だ  
<CON> <PRI> <CUR>
- b. 東京タワーは 高さが 333メートルだ  
<CON> <MEA> <DIS>

また、「内項」の名詞句に振られる、価格<PRI>、尺度<MEA>は、それぞれ抽象／ABS／の下位素性である。同じ原則は(20)にあげたように述語の位置に「NPダ」が現れる場合だけでなく、(21)のように形容詞や、(22)のように文末では常にテイル形で現れる「第四種動詞」の現れる場合にも適用される[金田一 1950]。

- (20)a. その選手は 動きが 良い  
<CON> <MAN>
- b. その商品へのクレームは 件数が 去年より多い  
<ACT> <MEA>
- c. その小説は テーマが むずかしい  
<INF> <ABS>

- (22)a. あの人は 根性が 曲がっている  
 <HUN> <PER>  
 b. 彼女は 目鼻だちが 整っている  
 <HUN> <FOR>

この原則は構文中の位置によるので、(23b)(23c)の「日」のように、その名詞句の出現する位置により、同じ名詞句にも異なる素性を与える場合がある。

- (23)a. 5月1日は 結婚式だ  
 <PIT>  
 b. その日は 結婚式だ  
 <PIT>  
 c. 5月1日は 結婚式を挙げるのに 日が いい  
 <PIT> <FOR>

内項の名詞句のために用意した素性については、「第二部 意味素性の詳細」で詳しく述べる。

上にあげた二つの原則は、全体/部分の関係の中の典型例を[D2]で、そこからの逸脱例を[D3]でそれぞれ扱ったものだが、この関係は仮に「上下関係」とここで呼ぶ関係と混同されやすい。二つの名詞句が上下関係にある場合は、次の原則[D4]に従って素性が振られる。

[D4] ある文型中に現れる二つの名詞句のうち、一方が種類や役割などのクラスを表わし、他方がそのメンバーを表わす上下関係である場合、ある文型の中でそれら二つの名詞句が同一の対象に対して使用されているなら、それぞれに別の素性を振る。

この原則に特有の素性は、種類<KND>、役割<ROL>の二つである。以下にあげる二組の例のうち、(24a)(25a)以外は、原則[D4]に従った作業の結果どちらかの素性が振られている。

- (24)a. 公園の針葉樹が すべて 枯れた  
 <PLA>  
 b. この木は 針葉樹に 属する  
 <CON> <KND>  
 (25)a. この次は 議長が 挨拶を する  
 <HUM> <ACT>  
 b. この次は 彼が 議長を する  
 <HUM> <ROL>  
 c. 彼は 議長に ふさわしい  
 <HUM> <ROL>  
 d. 議長は 彼に ふさわしい  
 <ROL> <HUM>

(24a)で植物<PLA>が振られる「針葉樹」には、(24b)ではクラスを表わす素性として<KND>が振られることになる。同様に(25a)で<HUM>が振られる「議長」には、(25b)や(25c)(25d)では、役割を表わす素性として<ROL>が振られる。

先にあげた原則[C1]には、文型中に名詞句が複数現れる場合、述語との従属度の高い名詞句の素性によって周辺の名詞句の素性が条件づけられることを述べた。逆に、文型内に

名詞句が一つしか現れない場合には、素性を与える手掛かりも少ない。原則[D2][D3]で述べたように、素性を与える場合に二重主格構文を手掛かりにすることが多いが、このような場合にも同様の原則を適用する。

[D5] 文型内に名詞句が一つしか現れない場合、そしてその素性の候補が二つ以上ある場合には、「外項」あるいは「内項」の位置に問題の名詞句を用いた二重主格構文を想定して、可能な場合には、その構文内で与えられる素性と同じものを問題の名詞句に与える。不可能な場合には、その述語と共起する典型的な名詞句の素性と同じにする。

次の例は、文型中に名詞句が一つしか現れない場合の例である。このような場合には二重主格構文を想定する。以下、意味素性を与える対象となる名詞句を特定するため、該当する名詞句を【 】で括る。

- (26)a. 【この車】は 速く 走る  
<AUT>  
b. その中古車センターで 【この車】 を買った  
<CON>
- (27)a. 【この車】は 【値段】が 安い  
<CON> <PRI>  
b. 【この車の値段】は 安い  
<PRI>
- (28) 【この車】は 安い  
<CON>
- (28) 【その老人】は 野菜を 食べる  
<HUM>
- (30)a. 【その老人】は 【年齢】が 80歳だ  
<HUM> <MEA>  
b. 【その老人の年齢】は 80歳だ  
<MEA>
- (28) 【その老人】は 80歳だ  
<HUM>

(26)に示したように、「この車」という名詞句には、動くものとしての側面を表わす<AUT>や具体物としての側面を表わす<CON>という素性が振られる。(28)では「この車は安い」は「車」の具体物としての側面ではなく、値段という抽象的な側面を取りだしている。同様に、(31)では「その老人は80歳だ」が「老人」に対して年齢的な側面を取りだしている。ここで「車」「老人」に対して、「値段」や「年齢」に与える<PRI><MEA>という素性を振るべきか、あるいは<CON><AUT>や<HUM>という素性を振るべきか 素性の候補は複数あるのに、文型内に名詞句が一つしか現れなければ、候補の中から適切な素性を選ぶのに手掛かりはない。

このような場合、例えば「この車が安い」の「この車」と「安い」を用いて二重主格構文を作れば、(27a)のように、「この車が」と「安い」の間に「値段が」という項が現れる。そして、「この車」「値段」にはそれぞれ<CON><PRI>という素性が振られる。この場合の素性を重視し、(28)の「この車」に対しても<CON>を与える。同様に、(31)の「その老人」には<HUM>を与える。

ところで上に述べた事例とは逆に、文型内に名詞句が一つしか現れない例の中には、その名詞句を用いて二重主格構文を作ることができない場合がある。例えば、(32)の「結婚

式」に< E V E >という素性を振ることに問題はないが、(33)には名詞句が一つしか現れないので、それにどのような素性を振るかが問題になる。[D5]に従って「結婚式」と「近い」とを用いた二重主格構文を作ってみても、(34)に示すように、できあがるのは不安定な文である。

- (32) 来月 赤坂で 【結婚式】が ある  
<EVE>
- (33) 【結婚式】が 近い
- (34) ? 【結婚式】は 日が 近い
- (35)a. 【誕生日】が 近い  
<PIT>
- b. 【子供の日】が 近い  
<PIT>
- c. 【結婚式】が 近い  
<PIT>

このような場合には、「結婚式が近い」と同じ文型に現れる名詞句にどのようなものがあるかが重要になる。この場合、(35)のように「誕生日」「子供の日」など、< P I T >が振られる名詞句が現れるので、「結婚式」にも同じ素性< P I T >を与えてよいことが分かる。

## 2.2 見出し語の名詞に素性を与える場合

「述語の項としての用法」とは、見出し語が格助詞を介して述語に従属する用法である。名詞辞書には、さまざまな欄に意味素性が振られるが、中心となるのはこの用法欄に記載される素性である。前節で述べた「サ変動詞用法」「述語用法」あるいは「動詞辞書」

「形容詞辞書」と基本的には同じ原則で素性を与えるが、それらと異なる点は、述語に従属する名詞句に対して素性が与えられるのではなく、名詞句内の被修飾部に現れる見出し語に対して素性が与えられることである。しかし、ここでいう意味素性とは元来、名詞句が構文の中で述語に従属して現れた場合に、その名詞句の性格を表わすために与えられるラベルである。したがって、見出し語が連体修飾部を伴って述語の項として現れるときには、連体修飾部を分離して見出し語だけに素性を与えることは難しい。今回の名詞辞書では、この問題に対処するため、便宜的に二つの原則を設けた。

動詞辞書でも形容詞辞書でも、ある名詞句が内部に連体修飾部に従属させず単独で述語に従属する場合にも、あるいは内部に連体修飾部に従属させた上で同じ述語に従属する場合にも、次の例に示すように同じ素性が与えられる。

- (36)a. この車は 【値段】が 高い  
<MEA>
- b. 【この車の値段】は 高い  
<MEA>
- (37)a. いっぺんに 【名前】を 覚える  
<INF>
- b. いっぺんに 【学生の名前】を 覚える  
<INF>

これにならって次の原則を設ける。

[E1] 次の原則[E2]に該当する場合を除いて、述語に従属する名詞句全体に与える素性と、連体修飾部が従属する被修飾部（主要部）として現れる名詞（見出し語）に与える素性とを同じものにする。

この原則により(38a)と(38b)、(39a)と(39b)にはそれぞれ同じ素性が振られる

- (38)a. 【この車の値段】は 高い [形容詞辞書]  
<MEA>
- b. この車の【値段】は 高い [名詞辞書]  
<MEA>
- (39)a. 【学生の名前】を 暗記する [名詞辞書におけるサ変動詞用法]  
<INF>
- b. 学生の【名前】を 暗記する [名詞辞書]  
<INF>

同様の原則は、「この」「その」など（いわゆる連体詞）による限定を受ける場合にも適用される。名詞辞書では、名詞句全体に与える素性と、連体修飾部が従属する被修飾部に与える素性を同じくする。（ところで、「連体詞」という便宜的な品詞類を認めなければノは格助詞である。そして、その前に現れるコ、ソ、アは名詞の一種ということになり、そこには文脈指示のために用意した別の素性が与えられるはずである。現在の記載結果は上に述べたようになってきているが、この点については再考の余地があると考えられる。）

(40a)(41a)(42a)のように、総称的に「医者」「ダイヤモンド」「誕生日」が使われる場合には抽象/A B S /の下位素性が振られるが、「この」「その」などの連体詞による限定を受ける（あるいは、(42b)の「昨年」などの副詞句による限定を受ける）ことによって、より具体性の素性が振られることになる。このとき、被修飾部（主要部）に現れる見出し語には、名詞句全体に与えられる素性と同じものを振る。

- (40)a. 【医者】に あこがれる  
<KND>
- b. 【その医者】が 【その患者】を 診察する  
<HUM> <HUM>
- c. 【その医者】が その【患者】を 診察する  
<HUM> <HUM>
- (41)a. 【ダイヤモンド】は 固い  
<KND>
- b. 【そのダイヤモンド】を 手に取る  
<CON>
- c. その【ダイヤモンド】を 手に取る  
<CON>
- (42)a. 【桜】は 春に 咲く  
<KND>
- b. 昨年 【桜】が 枯れてしまった  
<PLA>
- c. 子供達が 【その桜】を 植えた  
<PLA>
- d. 子供達が その【桜】を 植えた  
<PLA>

同じことは、連体修飾部を伴わなければ成り立たない表現についても適用され、その主要部には名詞句全体と同じ素性が振られる。

- (43)a. 【台風】が 接近する  
<NAT>
- b. 【台風の目】が 接近する  
<NAT>
- c. 台風の【目】が 接近する  
<NAT>
- (44)a. 【医者】と 結婚する  
<HUM>
- b. 【医者のお卵】と 結婚する  
<HUM>
- c. 医者の【卵】と 結婚する  
<HUM>
- (45)a. 【世界の頭脳】が 集まる  
<GAT>
- b. 世界の【頭脳】が 集まる  
<GAT>
- (46)a. 【プロジェクトの柱】が 入院する  
<HUM>
- b. プロジェクトの【柱】が 入院する  
<HUM>
- (47)a. 【本の虫】と 付き合う  
<HUM>
- b. 本の【虫】と 付き合う  
<HUM>

上にあげた例では、連体修飾部を伴わなければ意図された解釈は得られない。このような場合にその被修飾部に名詞句全体と同じ素性を振る。

原則[E1]では、述語に従属する名詞句全体に与える素性と、連体修飾部が修飾する被修飾部（主要部）に与える素性とを同じものにするのと述べたが、これには例外がある。その例外のための原則が次の[E2]である。

- [E2] ある見出し語がある述語に従属する場合に連体修飾部を必要とする場合には、その見出し語に対しては名詞句全体に与える素性と異なる素性を与える。この場合には、その見出し語が単独で項として現れ、元の連体修飾部が述語の一部として現れるような構文が可能であれば、その場合に見出し語に振られる素性と同じものを与える。

(48a)に示すように、「染まる」という述語に従属する名詞句には、色を表わす名詞句が現われ、その名詞句には<VAL>という素性を振る。(48b)も同様に、「草の色」という名詞句全体に<VAL>という素性が振られる。見出し語が「色」の場合、この見出し語「色」は単独では「染まる」という述語に従属することはできず、「草」を連体修飾部として必要とする（ここでは、連体修飾部が意味的な主要部であると考えられる）。このような場合には、名詞句全体の素性(48b)と被修飾部の素性(48d)を一致させない。つまり、(48b)で連体修飾部として現れる同じ名詞が、述語の一部として現れる構文(48e)を参照し、そこで名詞句に与えられる素性と同じものを(48d)でも振る。

- (48)a. その布が 【緑】に 染まる  
<VAL>
- b. その布が 【草の色】に 染まる  
<VAL>
- c. ?その布が 【色】に 染まる
- d. その布が 草の【色】に 染まる  
<VAL>
- e. その布は 【色】が 草のようだ / 若草色だ / 緑だ  
<FOR>

(49)も同様で、「体重」という見出し語が「上回る」という述語に従属するには、数値や程度を表わす連体修飾部が必須要素として働く。この場合も名詞句全体と被修飾部とに異なる素性を与える。

- (49)a. 彼の体重は 【平均】を 上回る  
<STA>
- b. 彼は 【平均の体重】を 上回る  
<STA>
- c. ?彼は 【体重】を 上回る
- d. 彼は 【体重】が 平均値だ / 80キログラムだ / 重い  
<MEA>
- e. 彼は 平均の【体重】を 上回る  
<MEA>

上の例は名詞句内の主要部に見出し語が現れる場合だった。ところが(B)「述語の項としての用法」のない(あるいは、稀な)次のような見出し語の場合は、述語の性格に従ってその名詞句に素性を与えることはできない。

- (50)a. 【問題】の人物が 現れた
- b. これは 西アフリカ【原産】の鳥です
- c. サルトルは 高等師範学校の【出身】だ

(50a)(50b)は見出し語の用法として、連体用法だけを認めた例である。(50b)では、見出し語【原産】が「鳥」という名詞を連体修飾しているが、「西アフリカ」という修飾部が必須要素として働いている。厳密な意味では、この【原産】は複合語の後項要素としての用法しかないといってもよいかもしれない。ただし、例えば「鳥なら西アフリカの原産がいい」を適格な文と認めれば、述語の項としての用法は可能だが、この場合の「いい/よい」には選択肢から選びだす働きしかないので、選択肢として共起する名詞句には制約が見られない[青山 1990]。また、(50c)は連体修飾部を伴った述語用法だけを認めた例である。この場合、「出身」が主要部として形成する名詞句は「高等師範学校の」を欠いては成立しない。また、連体修飾部を伴っても述語の項としての用法は存在しない。次にあげる例はさらに微妙な問題を含む。

- (51)a. 部長は その新社員を とても 【評価】している
- b. その作家に対して 【評価】の声が高まっている
- (52)a. 部長が 新社員の【評価】を する
- b. 新社員への【評価】が 厳しい

(51)には程度を表わす副詞「とても」や動詞「高まる」が使われているが、この場合には(52)とは異なり、述語の項としての用法が存在せず、サ変動詞用法や連体修飾語としての用法、連体被修飾語としての用法でのみ用いられる。以上の場合に、名詞辞書の素性システムでは素性が振れないことを表示するために<NON>を振る(これは‘NON-FEATURED’の頭三文字を取った)。

### 2.3 連体修飾部の名詞に素性を与える場合

これまででも繰り返してきたように、名詞辞書の意味素性とは名詞句が構文の中で述語に従属して現れる場合に与えられるものである。そのため、名詞句の内部構造から連体修飾部だけを取りだし、それに意味素性を与えることには無理が生じる。また、名詞述語文の場合、ダに従属する見出し語の名詞そのものには素性が振られていないことも、すでに触れたとおりである(ただし、「第二部 意味素性の詳細」で述べるように、一部には見出し語が述語に立つことを条件として振られる素性もある)。

しかし、名詞辞書では「連体修飾語としての用法」「述語としての用法2」の一部で、作業の便宜のために連体修飾部に現れる名詞句に素性を与える場合がある。この場合にも、これまでの原則から逸脱しないよう次のような作業原則を設けた。

[F1] 構成要素内の修飾部に素性を与える場合には、連体修飾部と被修飾部とを用いた構文を作り、[A]から[E2]までの原則に従って、その構文で見出し語に与えられる素性を振る。

以下にあげる(53)は、見出し語の連体被修飾用法の例である。この場合、見出し語「車」にどのような性格の連体修飾部が従属するかを記述するために、連体修飾部には素性が記載される。この場合には、元の修飾語と被修飾語とを用いた構文が可能なら、そこで見出し語の名詞句に与えられるのと同様の素性を振る。このときに素性を振る原則は、これまで述べた[A]から[E2]の原則に従う。

- (53) 首相の 車  
<HUM>
- (54)a. 首相が 車 を 待つ  
<HUM> <CON>
- b. 首相が 車 を 運転する  
<HUM> <CON>
- c. 首相が 車 に 乗る  
<HUM> <CON>

(53)の例では、(54)のような構文を作る。これらの構文で「首相」には<HUM>が振られる。その素性と同様に、(53)の「首相」にも<HUM>を振る。

以上、素性を振るための仮説から出発して、六種類十三個の原則について述べた。

### 2.4 意味素性を決定する構文と決定しない構文

ここで素性を考える場合に参照した先行研究では、それぞれが包含関係にあるような述語(特に、一項述語に限って)の探索に主眼が置かれてきた[Keil1979, Ch.9; Givon1979, Ch.8; Bickerton1981, Ch.4]。名詞辞書ではそれを踏まえ、また補完することを目的として、作業上は述語間の包含関係に関する仮説についてはいったん棚上げすることにした。

つまり、ここで主眼を置いたのは、それぞれの領域に含まれる個々の素性を決定する一組の述語（一項述語以外のものも含めて）の探索の方である（参照：第二部 「付録1 素性一覧」）。

例えば、以下の(55a)(55b)に現れる述語「食事する」の文型には違いが見られず、異なるのはガ格の名詞句「父」「その学生」だけである（名詞辞書では「食事する」のような表現を、名詞「食事」と用言「する」とが複合した用言と見なすが、ここでは説明の便宜上、単一の見出し語と考える）。この場合二つの名詞句には同じ素性、ヒト< H U M >を振ることができる。

- (55)a. 父が ホテルで 食事する  
<HUM> <LOC>  
b. その学生が ホテルで 食事する  
<HUM> <LOC>

「食事する」のガ格には、ヒト以外の動物や組織、あるいは場所や時間を表わすような名詞句は現れないため、問題にする名詞句をXで表わせば、「Xが食事する」という文型は< H U M >という素性の決定に参照されるべき構文と見なすことが可能である（ここでは述語の形成する文型のうち、素性の決定に参照されるものを仮に「構文」と呼ぶ）。

また、(56a)(56b)に現れる述語「解散する」の文型にも違いは見られない。異なるのは、ガ格の「その政党」「そのサークル」だけである。この場合も、二つの名詞句には同じ素性、組織< O R G >が振られる。

- (56)a. その政党は 八月に 解散した  
<ORG> <PIT>  
b. そのサークルは 八月に 解散した  
<ORG> <PIT>

「解散する」のガ格には、特定のヒトや動物を表わす名詞句が現れることはできない。したがって、「Xが解散する」は< O R G >という素性の決定に参照されるべき構文と見てよい。

一方、素性を決定できない構文もある。文型欄の表示の中に、異なる素性が「/」で区切って現れる場合がそれである。この表示方法は先にあげた仮説[A]とも深く関連している。この点については、素性と役割の区別的一端にも触れるので、多少詳しく述べることにする。

例えば、(57a)(57b)に現れる述語「優勝する」にも文型上違いは見られず、ガ格の「その学生」と「そのサークル」が異なるだけである。ただし、ここでは二つの名詞句には異なる素性が振られ、(57c)に示したように同一の文型の中に「/」で区切って記載される。

- (57)a. 大会で その学生が 優勝した  
<EVE> <HUM>  
b. 大会で そのサークルが 優勝した  
<EVE> <ORG>  
c. N P デ N P 1 ガ 優勝する  
<EVE> <HUM/ORG>

「Xが優勝する」のXには、述語の語彙的な性格に基づいて、例えば「優勝者」（あるいは、それより一般性の高い「競技者」）としての側面を取りだすことが可能だが、こうした素性の設定方法は役割との区別を曖昧にするだけでなく、その数が爆発的に増えてしま

う。恐らく、記載結果からも均一性が失われる可能性がある [cf. Halliday 1985, Ch. 5]。名詞辞書では、「第二部 意味素性の詳細」で述べるような構文に名詞句を照らし合わせ、それぞれ適切な素性を与えた上で ‘ / ’ で区切って記載する方法を選んだ。このため、複数の素性が ‘ / ’ で区切られて併記された記載結果からは、少なくともその構文に現れる述語が素性を決定するのに使用されていないことが分かる。

一方、同じ文型の同じ位置に ‘ / ’ で区切って別種の名詞句の素性を並べるのは、その位置に現れる別種の名詞句に何らかの共通性を認めることに他ならない。上にあげた (57a) と (57b) で「その学生」「そのサークル」に共通するのは、例えば「受動者」(patient) という役割以外には考えられない。つまり、一つ一つの述語が作りあげる文型間の異同を表示するための情報は「役割」の側に負荷させる方針を立て、ある文型の同じ位置に現れる素性の異なる名詞句が同じ役割を担う限りは、それらの名詞句を ‘ / ’ で区切って表示することにした。

このように、素性はどのような文型からも決定できるわけではない。1.1 に触れたように、ある名詞句に素性を振る場合には、その名詞句が現れる文型と、素性を振るために参照されるべき構文との間の同一性あるいは類似度を考慮に入れることが必要である。

### 3. 意味素性の並立

#### 3.1 五つの領域

述語に従属する名詞句の性格を示すものが意味素性であるならば、ある名詞の意味素性は、それが名詞句として共起可能な(典型例から周辺的な例まで含めた)述語の数だけ存在する、といえるのかもしれない。しかし、名詞辞書ではそのような共起可能と思われる述語の記載範囲を典型的なものに限り、意味素性を与えるための目安としていくつかに類型化することを試みた。どの程度まで述語の類型化を進めるのが最適であるかは、この種の情報の用途にも依存する。ここでは、頻度の高い述語や名詞辞書で取りあげる名詞について、見出し語間およびその区分間に見られる性格の異同を明らかにすることを目標として、合計六七個の素性を設けた。これら一つ一つの素性は、その目安となる述語の性格が類似するもの同士集合して、意味素性の体系の中で以下に述べるような五つの領域を形成すると、ここでは考える。

( ) から (ε) の五つの領域と、それぞれの領域に属する素性は次のように位置づけられる。以下では、領域名を / / の中に、素性名を < > の中にそれぞれ入れて区別する。各領域の名称は、素性名の中から最も条件の緩いと思われるものを選んだ。通例、領域ごとに最後にあげられた素性がその領域名に相当する。

( ) 動物の領域	/ ANI / : <HUM> <AML> <ANI> ;
( ) 具体物の領域	/ CON / : <ACT> <EDI> <LIQ> <PAS> <SOL> <CON> ;
( ) 場所の領域	/ SPA / : <LOC> <INT> <ORG> <NET> <SPA> ;
( ) 出来事および動作 / 作用の領域	/ PRC / : <PHE> <NAT> <PLA> <GAS> <ELM> <POT> <ACT> <EVE> <APO> <PRO> <RES> <PRC> ;
( ) 抽象性の領域	/ ABS / : <PRI> <MEA> <SOC> <GRA> <ATT>

<R E C> <P E R> <M I N> <M A N> <F O R>  
 <E V A> <C U R> <D U R> <D I S> <I T M>  
 <R A T> <Q U A> <V A L> <S T A> <N O R>  
 <F L D> <I N F> <E N T> <R O L> <R E L>  
 <D I R> <P H A> <R E F> <I N C> <Q A L>  
 <P R P> <S T G> <A P P> <U N T> <P I T>  
 <T I M> <O R D> <N A M> <G A T> <K N D>  
 <A B S> .

( )から( )に属する各素性については、「第二部 意味素性の詳細」で詳しく説明する(この他に<NON>という素性が便宜的に設けられていることは、2.2で触れた)。

### 3.2 意味素性の隣接と並立

2節では、述語の性格によって、それに従属する名詞句の素性に違いが生じることを見てきた。この節では、名詞である一つの見出し語に着目し、そこに記載される意味素性が何を表わすかということについて簡単に解説する。

名詞辞書の「述語の項としての用法」において、見出し語に与えられる(複数の)意味素性は、典型的にそれと結びつく述語によって焦点が合わせられる側面とその範囲を捉えたものである。3.1節で、名詞辞書で扱う意味素性は五つの領域を形成すると述べた。ここでは領域という用語を「側面」という日常的な用語で置き換えて解説を進める。

例えば、(1)では「破る」に従属することによって「手紙」の物質的な側面が前面に出る。これに対して、(2)の場合に前面に出るのは「手紙」の持つ内容的な側面の方である。

- (1) 【手紙】を 破る
- (2) 【手紙】を 読む

「手紙」の場合、(1)では具体物としての側面( )に、(2)の場合には抽象物としての側面( )に、それぞれ焦点化が行なわれる。

別の例として「電車」という見出し語を取りあげる。「電車」と聞いてまず思いうかべる述語は(3a)(3b)のような例だが、このような述語のもとでは、視覚で捉えられる形を持った( )具体物の解釈が「電車」に優先して与えられる。一方で、「電車」には(4)(5)のような用例も見つかる。

- (3)a. 【電車】が 走る
- b. 【電車】を 連結する
- (4) 【電車】で 寝る
- (5) 深夜なので もう 【電車】が ない

(4)の「電車」は車両の内部つまり( )場所を表わしているのに対して、(5)では公共的な交通手段としての運行業務の有無を表わしている。これは( )に属するものである。以上が「電車」という見出し語の持つ主な用法だとすれば、この名詞句には、典型的に従属する述語から少なくとも( )( )( )の三つの側面を区別する必要があることが分かる。

ところで、(3a)と(3b)は同じ具体物に属するが、(3b)が単なる物体として捉えられるのに対し、(3a)ではそれに加えてその走行性に焦点が当てられている。このように見ると、( )から( )の五つの側面をそれぞれ基盤として、さらにいくつか下位の側面を取りだすことができる。3.1で紹介したように、名詞辞書では五つの領域とそれに属する合計六七個の意味素性を設定したが、この意味素性は見出し語の持つ側面とそれぞれ対応している

と考えることができる。

また、これまで述べてきたことから明らかなように、( )から( )までの五つの側面は背反するものではなく、一つの見出し語のもとに共存する。ある見出し語は通例、複数の素性の束として表示される。このことを「見出し語のもとに素性が並立する」と呼ぶ。これは、ある構文の中で別々の単語の素性が「隣接する」場合とは、区別する必要がある。

したがって、隣接関係が問題発見の端緒だとすれば、見出し語のもとに見られる素性の並立関係は素性を振る作業の結果得られるものである。別の表現をすれば、隣接関係はある単語の素性が一文内で他の単語の素性と結ぶシンタグマティックな関係と規定されるのに対して、並立関係はその単語の現れうる文型間に見られるパラディグマティックな関係と規定できる。しかし、実際には、ある程度まで素性を振る作業が蓄積されれば、ある単語の有する素性間の並立関係にも自ずと型が見えてくるようになり[橋本 1994]、区分を立てる場合、それを参照することもできる。次節では、こうした並立関係の型について簡単に紹介する。

### 3.3 並立しやすい素性

ここでは、ある見出し語が区分され、一つの区分内で並立しやすい素性を列挙する[参照：第一章 見出し語の区分]。ただし、以下にあげる並立素性の組み合わせは、<CON> <ACT> <HUM>を中心としたものである(領域/ABS/の中の並立素性については不明な部分が多い)。

[a1] 見出し語が食用とされる植物の場合<CON> <EDI> <PLA>が並立する。

- (1)a. 八百屋が 【みかん】を 一袋三百円で 売る <CON>
- b. 【みかん】を 食べる <EDI>
- c. あの木に 【みかん】が なっている <PLA>

[a2] 見出し語が飲物の場合<CON> <EDI> <LIQ> <PRO>が並立する。

- (2)a. 【牛乳】を 配達する <CON>
- b. 【牛乳】が おいしい <EDI>
- c. 【牛乳】を こぼす <LIQ>
- d. 【牛乳】を 製造する <PRO>

[a3] 見出し語が食生活を成立させる単位としての食事を表わす場合<CON> <EDI> <PRO> <APO> <PIT>が並立する。

- (3)a. 【朝食】を 残す <CON>
- b. 【朝食】を とる <EDI>
- c. 【朝食】を 作る <PRO>
- d. 【朝食】を 抜く <APO>
- e. 【朝食】に 間に合わない <PIT>

[b1] 見出し語が建物およびそれを構成する部分としての場所を表わす場合<CON> <INT> <LOC> <PRO>が並立する。

- (4)a. 【部屋】が 小さい <CON>
- b. 【部屋】に 入る <INT>

- c. 【部屋】に 置く <LOC>
- d. 【部屋】を 作る <PRO>

[b2] 見出し語が決定権を代表する組織を表わす場合<CON> <INT> <LOC> <PRO> <ORG>が並立する。

- (5)a. 【文部省】が 全焼する <CON>
- b. 【文部省】から 運び出す <INT>
- c. 【文部省】を 視察する <LOC>
- d. 【文部省】を 設置する <PRO>
- e. 【文部省】が 認可する <ORG>

[b3] 見出し語が公共的な活動を行なう組織を表わす場合<CON> <INT> <LOC> <PRO> <ORG> <APO>が並立する。

- (6)a. 【病院】を 建て直す <CON>
- b. 【病院】に 運び込まれる <INT>
- c. 【病院】へ 駆けつける <LOC>
- d. 【病院】を 開院する <PRO>
- e. 【病院】に 入院する <ORG>
- f. 【病院】が 休みだ <APO>

[b4] 見出し語が特定の交通網を持たない乗物の場合<CON> <INT> <PRO> <AUT>が並立する。

- (7)a. 飛行中の【気球】に 穴があく <CON>
- b. 【気球】に 乗り込む <INT>
- c. 自分の手で 【気球】を 作る <PRO>
- d. 【気球】が 飛んでいる <AUT>

[b5] 見出し語が交通網を持つ乗物の場合<CON> <INT> <PRO> <AUT> <NET> <APO> <PIT>が並立する。

- (8)a. 【飛行機】を 検査する <CON>
- b. 危険物を 【飛行機】に 積み込む <INT>
- c. 【飛行機】が 製造される <PRO>
- d. 【飛行機】が 離陸する <AUT>
- e. その都市に 【飛行機】が 乗り入れる <NET>
- f. 【飛行機】が なくなってしまうと 今日中に帰れない <APO>
- g. 【飛行機】に 間に合わない <PIT>

[c1] 見出し語が身体部位の場合<CON> <POT>が並立する。

- (9)a. 【胃】を 切る <CON>
- b. 【胃】が 悪い <POT>

[c2] 見出し語が自然現象 / 生理現象によって生じる具体的なモノの場合<CON> <PHE>が並立する。

- (10)a. 【霜】を 踏むと 小気味の良い音がする <CON>  
 b. 今朝は 【霜】が おりた <PHE>

[c3] 見出し語が自然現象 / 生理現象によって生じる液体の場合<CON> <PHE>  
 <LIQ>が並立する。

- (11)a. 【涙】には 塩分が 含まれている <CON>  
 b. 【涙】が こみあげてくる <PHE>  
 c. 【涙】が 頬を 流れる <LIQ>

[d] 見出し語が情報を持つモノの場合<CON> <SPA> <PRO> <INF>が並立  
 する。

- (12)a. 【手紙】が 届く <CON>  
 b. 【手紙】に お礼を 書く <SPA>  
 c. 【手紙】を 書く <PRO>  
 d. 【手紙】を 読む <INF>

[e1] サ変動詞用法を持ち<ACT>が振られる見出し語には場合により<MAN>が並立  
 する。

- (13)a. 【料理】を する <ACT>  
 b. 【料理】が うまい <MAN>

[e2] サ変動詞用法を持ち<ACT>が振られる見出し語には場合により<INF>が並立  
 する。

- (14)a. 【研究】を 続ける <ACT>  
 b. 【研究】を 発表する <INF>  
 (15)a. 【依頼】を する <ACT>  
 b. 【依頼】に 応える <INF>

[f1] 親族を表わす見出し語には<HUM> <REL>が並立する。

- (16)a. 私は 【姉】と よく けんかした <HUM>  
 b. 彼女は 山本さんの【姉】に あたる <REL>

[f2] 職業や組織内の役割を表わす見出し語には<HUM> <ROL>が並立する。

- (17)a. その【医者】に 診察してもらおう <HUM>  
 b. 僕は 将来 【医者】に なりたい <ROL>

[f3] モノを表わす見出し語が比喩的にヒトを表わす場合には<HUM> <KND>が並立  
 する。

- (18)a. 彼は 職場の【花】と 結婚した <HUM>  
 b. 職場の【花】に なりたいという女性もいる <KND>

[g] 場所を持つ方向を表わす見出し語には<LOC> <DIR>が並立する。

- (19)a. その学校の【東】に 畑が ある <LOC>
- b. その学校の【東】は 畑だ <DIR>

[h1] 内容間の順序関係を表わす見出し語には<PHA> <SPA>が並立する。

- (20)a. 参考文献は 謝辞の【後】だ <PHA>
- b. 謝辞の【後】に 参考文献を 載せる <SPA>

[h2] 一つの内容の部分を表わす見出し語には<PHA> <SPA>が並立する。

- (21)a. フィールドの【先頭】は 表記欄だ <PHA>
- b. フィールドの【先頭】に 印を つける <SPA>

[h3] 一つの出来事の部分を表わす見出し語には<PHA> <TIM>が並立する。

- (22)a. 挨拶は パーティの【最後】に 回す <PHA>
- b. パーティの【最後】に 挨拶する <TIM>

以上、これまで分かっている八種類二一の並立素性の型について述べた。

### 3.4 並立素性と区分

述語の項としての用法において、ある見出し語に振られる意味素性を見つける手順は、問題解決に用いられる手法に似ている。まず、ある文型に項（名詞句）として現れる見出し語が、先にあげた五つの領域（側面）のいずれに近いかを、その述語の性格から考える。次に、その領域中の構文から、該当する下位素性を候補として探しだす。最後に、その名詞句の持つ用法や、上に述べた並立素性の型などを参照しながら総合的に判断して、それに素性が振られる。

3.3 に述べた並立しやすい素性の組み合わせは、見出し語を区分する際の手がかりともなる。以下には「台所」という見出し語を例に、並立する意味素性から、それを手がかりとして区分を行なう手順について説明する。見出し語「台所」には次のような実例が見つかる。

- (1a) 【台所】から 出火する
- (1b) 【台所】で プロパンガスが 爆発する
- (1c) 【台所】で 家事を する
- (1d) 出刃包丁が 【台所】に ある
- (1e) 【台所】から 出刃包丁を 持ち出す
- (1f) 【台所】に 侵入する
- (1g) アパートに 【台所】が 付いている
- (1h) 木造平屋で 十畳の和室と 四畳半の【台所】がある
- (1i) 【台所】は 広めに 造ってある
- (1j) 【台所】を 手伝う
- (1k) 【台所】を 休む
- (1l) 【台所】に 立つ

まず「台所」で思いうかぶのは、( )場所としての側面であり、( )具体物としての側面である。(1a)(1b)(1c)(1d)は典型的にヒトが活動する場所を表わしている。これらには<LOC>が振られる。また(1e)(1f)に現れる述語には、内部空間を持つ場所の名詞句が従属する述語がする。この点に着目して<INT>が与えられる。さらに(1g)(1h)は建物を構成する部分に焦点が合わせられている。このため<CON>を与える。さらに(1i)では、建物の部分としての「台所」は行為の結果生じるものである。これには( )出来事および動作/作用の領域のうち<PRO>を与える。一方、(1j)(1k)には、「手伝う」「休む」という述語が現れる。これらの述語は、「仕事を手伝う」「掃除を手伝う」「絵を描くのを手伝う」「仕事を休む」「お稽古を休む」などのように意志的な行為を表わす名詞句をヲ格に取るものである。他に「台所を済ませる」のような例もありうる。この種の述語との従属関係に着目して、(1j)(1k)には<ACT>という素性を与える。また(1l)の「立つ」は<LOC>とも共起するが、この場合は単に立つことを表わすわけではなく、炊事に関連する行為を表わす。このため同じように<ACT>の素性を振る。

このような作業を経て、「台所」という見出し語のもとには五つの素性が並立されることになる。

- 素性1 <CON>  
アパートに台所が付いている  
台所が清潔だ
- 素性2 <INT>  
台所に運び込む
- 素性3 <LOC>  
台所に集まる  
台所で調理する
- 素性4 <PRO>  
台所を作る
- 素性5 <ACT>  
台所を手伝う  
台所を済ませる

なお、場所を表わす名詞句に「手伝う」「済ませる」などの述語が従属した場合には、その場所で行なわれるべき仕事を「手伝う」「済ませる」のである、と推論して解くべきであり、意味素性として<ACT>を与えるべきではない、という立場も考えられる。しかし、「?校庭を手伝う」「?駐車場を済ませる」のように<LOC>が振られるすべての名詞句が「手伝う」「済ませる」に従属するわけではない。場所を表わす名詞句のうち、どのような名詞句ならこの種の述語と共起可能であり、どのような名詞句なら不可能かを明らかにするために、IPALでは、この種の素性を可能な限り振ることにより、見出し語の用法を記述すべきであると考えられる。

ところで、「台所」には次のような用例も見つかる。

- (1m) 「主婦」は、家計をつかさどる存在、【台所】を 管理する存在だ
- (1n) 県の【台所】を 預かる
- (1o) 不況下で 【台所】が 苦しい
- (1p) 国や公企体の【台所】が 赤字だ

(1m)(1n)には「管理する」「預かる」という述語が現れる。これらの述語は、(1j)(1k)の「手伝う」「休む」とは異なり、意志的な行為を表わす名詞句をヲ格には取らない。典型

的には具体物や場所をヲ格に取るものである。しかし、この場合の「台所」は、具体物としての側面や場所としての側面が取りだされているわけではなく、金銭上のやりくりを表わす。このため( )出来事および動作/作用の領域の中から< P R C >を振る。また(1o)(1p)は、その金銭上のやりくりについての評価が下されているので、< E V A >が振られる。このようにして、「台所」の用法には次の二つの素性が加わる。

- 素性6 < P R C >  
台所を管理する  
台所を預かる
- 素性7 < E V A >  
台所が苦しい  
台所が赤字だ

ところで、素性1< C O N >から素性4< P R O >までは、3.3に示した並立素性[b1]組み合わせと同じである。このような並立素性の型に照らして、素性1から素性4を一つの区分のもとに収めることができる。これを区分1とする。

問題は、残りの素性5< A C T >、素性6< P R C >、素性7< E V A >の所属である。これらは、先にあげた並立素性の型として認められていないからである。このような場合、参考になるのが、見出し語「台所」の現れる文型や表現である。例えば、「彼の家」のような名詞句は、連体修飾「彼の家在台所に運び込む」や連用修飾「彼の家で台所を手伝う」として一つの文の中に共起する。同じことはもちろん「彼の家在台所を管理する」や「彼の家在台所は苦しい」のように、素性6や素性7の場合にもあてはまる。しかし、逆の事例はあてはまらない。つまり、「県の台所を管理する」や「国の台所は苦しい」のような表現は可能だが、「県の台所に運び込む」や「県の台所を手伝う」は比喩としてしか理解できないからである。このように考えれば、素性5で表される用法は区分1に含めてよいことが分かる。

このような手順を経て、「台所」には次のように二つの区分が認められる。上に述べた手順からも分かるように、以下にあげた「区分2」が純粹に比喩の領域であるのに対し、「区分1」の方は字義と比喩の混在する領域である。また、こうした「台所」の記載結果が正しいとすれば、この場合の並立素性が類似しているのは、先にあげた並立素性の型のうち[b2]の方である。

#### 「台所」

区分1 食事の用意や後始末をするための場所。また、そこで行なわれる水仕事。

- 素性1 < C O N > アパートに台所が付いている  
素性2 < I N T > 台所に運び込む  
素性3 < L O C > 台所に集まる  
素性4 < P R O > 台所を作る  
素性5 < A C T > 台所を手伝う

区分2 金銭上のやりくり。

- 素性6 < P R C > 台所を預かる  
素性7 < E V A > 台所が苦しい

ここにあげた例では、両方の区分に別々の素性が現れている。しかし、同じ素性が別の区分に現れる場合もある(次の節で触れるように、実際の記載では、素性の通し番号は区分ごとに振られる)。

ところで、I P A Lではメタファー、メトニミー、シネクドキーなどを区分間に成立する意味的關係と考え、記載作業を試みた。この種の情報は「慣用表現ほか」における備考

欄に記載されている(参照：第八章 . 見出し語についての備考)。一区分内の並立素性間の関係についても今後、同様の記載が必要だと思われる。

#### 4. 記載例

最後に、実際の名詞辞書の中にどのような意味素性が振られ、どのような述語が記載されるかということを示す。最初にも述べたとおり、「意味素性」は名詞辞書の中では以下の につけた欄に記載されている。

区分一覧  
意味情報  
述語の項としての用法  
連体修飾語としての用法  
連体被修飾語としての用法 1  
連体被修飾語としての用法 2  
サ変動詞としての用法  
述語としての用法 1  
述語としての用法 2  
形態情報  
慣用表現ほか

1.3 に述べたように、それぞれの欄によって意味素性の与え方や記載方法が異なる。ここでは以下の順に記載例を示す。

記載例(1)：「区分一覧」「述語の項としての用法」および「意味情報」  
記載例(2)：「サ変動詞としての用法」および「述語としての用法 1」  
記載例(3)：「連体被修飾語としての用法」および「述語としての用法 2」

##### 4.1 「区分一覧」「述語の項としての用法」および「意味情報」

区分一覧には、述語の項としての用法に現れる意味素性とその例文を記載する。それは、見出し語が持つ用法やその区分の概略を最初に提示するためのものである。例として「依頼」を取りあげることになれば、そこに記載された内容は以下に見るとおりである。「区分番号：01」は、この見出し語の最初の区分であることを示す。また「意味記述」はその語釈を表わす。さらに、その下の「素性数：3」から三つの意味素性の並立することが分かる。その並立する素性<ACT><PRC><INF>ごとに、用例が示される。

区分一覧  
例「依頼」

区分番号 : 01  
意味記述 : 人に何かをしてくれるように頼むこと。また、その内容。  
素性数 : 3  
意味素性 1 : ACT  
用例 1 : 探偵社に浮気調査の依頼をした。  
意味素性 2 : PRC  
用例 2 : 出版社から原稿執筆の依頼が来た。  
意味素性 3 : INF

用例 3 : 氏は美術品を公開してほしいという依頼を断った。

述語の項としての用法には、見出し語が連用修飾句（名詞句あるいは副詞句）として述語と結びつく場合、どのような格助詞を介して、どのような述語と典型的に共起するかが、意味素性ごとに記載される。一つの区分内に記載される、述語の項としての用法の種類は並立素性の数に対応する。例としてあげた「依頼」の場合、素性は<ACT><PRC><INF>の三つである。したがって、述語の項としての用法もこれに従って三種類に分かれる（表示の詳細については該当する部分で説明する）。

#### 述語の項としての用法

例「依頼」

素性 : ACT

素性番号 : 1

素性数 : 3

動詞 | ヲ : ガ, ニ + + いらい + + ヲ + する。

: ガ, カラ + ( ボランティアの / ... ) + いらい + + ヲ + 受ける。

動詞 | 他 : ガ, ヲ + ( 都の / ... ) + いらい + + デ + 調査する。

: ガ, ニ + ( 彼の / ... ) + いらい + + デ + 来る, 出席する。

素性 : PRC

素性番号 : 2

素性数 : 3

動詞 | ガ : ニ, カラ + + いらい + + ガ + ある, ない。

: ニ, カラ + テレビ出演の / ... + いらい + + ガ + 来る, 増える, 殺到する。

形容 | ガ : ニ + 仕事の / 業者からの / 講演についての / ... + いらい + + ガ + 少ない, 多い。

素性 : INF

素性番号 : 3

素性数 : 3

動詞 | ヲ : ガ + ( 親戚からの / 援助の / 代表で出席して下さいという / ... ) + いらい + + ヲ + 断る, 拒絶する, 引き受ける。

動詞 | ニ : ガ + ( 先輩からの / 捜査の / ボランティアで通訳してほしいという / ... ) + いらい + + ニ + 応じる。

意味情報には、意味素性によって分類した用例ごとに該当する関連語や助数詞を記載する。参照の便を考えて、述語の項としての用法に記載した意味素性を意味情報欄にも示す。

#### 意味情報

例「依頼」

素性 : ACT

素性番号 : 1

素性数 : 3

関連 | 類義 : 懇請, 要請

助数詞 : 件

素性 : PRC

素性番号 : 2

素性数 : 3

関連 | 類義 : 懇請, 要請

助数詞 : 件

素性 : INF

素性番号 : 3

素性数 : 3

関連 | 類義 : 頼み, 要請, 懇請

助数詞 :

#### 4.2 「サ変動詞としての用法」および「述語としての用法 1」

サ変動詞としての用法や述語としての用法 1 を持つ見出し語は、その述語部分に「見出し語 + スル」「見出し語 + ダ」として現れるが、この場合、意味素性は振られていない。サ変動詞としての用法、および述語としての用法では、述語「見出し語 + スル」「見出し語 + ダ」の取る文型が記載されると共に、その文型に項として現れる名詞句 (NP) については意味素性を記載する。以下で「格形式」と呼ばれるのは、動詞辞書以来使われてきた用語を踏襲したものであり「格助詞」と同じものを指す (NP に付属する数字の用法については、該当する部分で説明する)。以下の例「依頼スル」では、見出し語 (NP0) の他の項として名詞句が三つ現れる (これらの素性の組み合わせを本章では「意味素性の隣接」と呼んできた)。

##### サ変動詞としての用法

例 見出し語「依頼」

文型 : NP2 ガ NP二 NP1 ヲ NP0 スル  
格形式 1 : ガ  
意味素性 1 : HUM / ORG  
名詞句 1 : 彼, 私 / 警察, 大学, 市, 出版社  
格形式 2 : 二  
意味素性 2 : HUM / GAT / ORG  
名詞句 2 : 先輩, 町長, 弁護士, 小説家 / マスコミ, 業者 / 警察, 美術館  
格形式 3 : ヲ  
意味素性 3 : ACT / ROL  
名詞句 3 : 協力, 献金, 仕事, 応援, 調査, 研究, 推薦, 殺人, 工芸品の保存, 鑑定, 検討, 指導, 執筆, ポスターの製作, 「よろしく願いたい」旨, 講演, 連載小説, 伝言, 財産の管理 / 仲裁役, 弁護士, 案内係  
文例 : 彼は業者に仕事を依頼した。  
: 都は、貴重な書画・工芸品の保存を都美術館に依頼した。

##### 述語としての用法 1

例 見出し語「活発」

文型 : NP1 ガ NP0 ダ  
格形式 1 : ガ  
意味素性 1 : HUM / ACT  
名詞句 1 : あの女の子 / 少年の動き  
文例 : あの女の子は活発だ。

#### 4.3 「連体被修飾語としての用法」および「述語としての用法 2」

連体被修飾語としての用法、および述語としての用法 2 では、その見出し語を連体修飾する名詞句に対する素性が記載される。

##### 連体被修飾用法 1

例「収穫」

- ノ NP 0 : <量> 六百キログラムの - 。
- : <時間> [ P I T ] 今年の - , 秋の - 。
- : <場所> [ L O C ] 東北地方の - 。

述語としての用法 2 では、見出し語を NP 0 で、述語部分や連体修飾部に現れる可能性のある名詞句をそれぞれ NP x と NP y で表わす。

#### 述語としての用法 2

例「故郷」

- NP x 素性 : L O C
- NP x 名詞句 : 千葉, 北海道, 熊本
- NP y 素性 : H U M
- NP y 名詞句 : 私, 夫, 妻
- 文型 1 : NP x ガ NP y ノ NP 0 ダ
- 文例 1 : 千葉が私の故郷だ。
- 文型 2 : NP y ガ NP x ガ NP 0 ダ
- 文例 2 : 私は千葉が故郷だ。
- 文型 3 : NP y ノ NP 0 ガ NP x ダ
- 文例 3 : 私の故郷は千葉だ。
- 文型 4 : NP y ガ NP 0 ガ NP x ダ
- 文例 4 : 私は故郷が千葉だ。

#### 注

- \* ここに述べた意味素性の考え方については、最初に青山が発議し、橋本三奈子との討議の後に橋本のもとで記載作業が進められた。記載作業に主に従事したのは、山下智弥、鈴木高志ならびに橋本である。記載過程で生じた疑義に青山が橋本に答える形で、作業全体は進められた。したがって、ここに述べた意味素性のシステムについて、(その全体ではないにしても)部分的にでも語れるのはこの四人だけである。このようにして進められた作業結果をもとに、橋本によって例文に解説を付した草稿が作られ、それを青山が現在のような形にまとめた。上記の他に、四人のもとで記載作業に従事した木田敦子氏、佐藤幸子氏、ならびに村田賢一氏から草稿の段階でコメントをいただいた。記して感謝申しあげる。
- 1. 連体被修飾語としての用法欄には次に示すように、意味素性と共に、「首相」と「車」との意味関係が [所有者] [主体] [関与者] のように、説明用のラベルとして記載されている (第六章 連体被修飾語としての用法)。これは修飾部と被修飾部に現れる名詞を文構造に変換した場合、そこにどのような述語を予想できるかによって素性ならびに意味関係が記載される。そこで記載される意味関係とこの章で述べた役割との関係については今後の考察に待ちたい。

- a. 首相が 車 を 持つ : 首相の車 [所有者]  
<HUM> <CON>
- b. 首相が 車 を 運転する : 首相の車 [主体 (運転手)]  
<HUM> <AUT>
- c. 首相を 車 に 乗せる : 首相の車 [関与者 (同乗者)]  
<HUM> <AUT>

- 参考文献**（「第二部 意味素性の詳細」に関する文献もここに掲げる）
- 青山文啓(1984)表現型とアスペクト,『日本語と日本文学』4,pp.18-27.
- 青山文啓(1986)体言と用言の結ぶ二つの関係,『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究』7,pp.353-380.
- 青山文啓(1987)料理の文章における提題化の役割,『計量国語学と日本語処理 - 理論と応用 -』秋山書店,pp.285-303.
- 青山文啓(1990)二項関係についてのおぼえがき,『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究』10,pp.77-122.
- 青山文啓(1994)日本語の自他とスペイン語の再帰,『日本語と外国語との対照研究 : 日本語とスペイン語(1)』(国語研報告#108)くろしお出版,pp.105-119.
- 青山文啓(1995a)素性に基づく名詞記述のための枠組み,『I P A L シンポジウム'95 論文集』情報処理振興事業協会,pp.1-10.
- 青山文啓(1995b)ある複文の中の助動詞,『阪田雪子先生古稀記念論文集』三省堂,pp.147-162.
- 青山文啓・小島幸子・橋本三奈子(1990)統語情報1,『計算機用日本語基本形容詞辞書 I P A L (Basic Adjectives) - 解説編』pp.42-81.
- 青山文啓・橋本三奈子(1994)名詞の辞書記述,『情報処理学会研究報告』94-NL-104,pp.1-10.
- 奥田靖雄(1960)を格のかたちをとる名詞と動詞のくみあわせ,再録『日本語文法・連語論(資料編)』言語学研究会編,むぎ書房,1983,pp.151-279.
- 尾上圭介(1983)文核と結文の枠,『言語研究』63,pp.1-26.
- 金田一春彦(1950)国語動詞の一分類,再録『日本語動詞のアスペクト』金田一春彦 編,むぎ書房,1976,pp.5-26.
- 桑畑和佳子・橋本三奈子・井口厚夫・猪塚元・村田賢一(1994)I P A L 名詞辞書におけるコロケーションの記述,『第13回技術発表会論文集』情報処理振興事業協会,pp.73-76.
- クルマス, F. (1993)『ことばの経済学』大修館書店. (Die Wirtschaft mit der Sprache - Eine sprachsoziologische Studie. Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag,1992)
- 高橋太郎(1975)文中にあらわれる所属関係の種々相,『国語学』103,pp.1-17.
- ニードム, R. (1983)『象徴的分類』吉田禎吾・白川琢磨 訳,みすず書房. (Symbolic Classification. New York: McGraw-Hill,1979)
- 橋本三奈子(1993)I P A L - 新時代の日本語辞書データベース,『言語』22(5),pp.36-41.
- 橋本三奈子(1994)名詞の意味素性と見出し語の区分,『第13回技術発表会論文集』情報処理振興事業協会,pp.67-72.
- 橋本三奈子・青山文啓(1992)形容詞の三つの用法:終止,連体,連用.『計量国語学』18,pp.201-214.
- 橋本三奈子・桑畑和佳子・青山文啓・村田賢一(1994)名詞の比喩的表現とその統語的特徴,『情報処理学会第49回全国大会論文集』3/139.
- 林大 監修,宮島達夫・野村雅昭・江川清・中野洋・真田信治・佐竹秀雄 編(1982)『図説日本語』角川書店.
- 松下大三郎(1930)『改撰標準日本文法』中文館.(勉誠社,復刊1974)
- 丸山直子(1996)助詞の脱落現象,『言語』25(1),pp.74-80.
- 南不二男(1974)『現代日本語の構造』大修館書店.
- 宮島達夫(1972)『動詞の意味・用法の記述的研究』(国語研報告 #43)秀英出版
- 水谷静夫(1983)『朝倉日本語新講座2:語彙』朝倉書店.
- 山田孝雄(1931)『岩波講座日本学 27:日本文法要論』岩波書店.

- Bierwisch, M.(1967) Some semantic universals of German adjectivals. Foundations of Language 3, pp.1-36.
- Bickerton, D.(1981) Roots of Language. Michigan: Karoma. (『言語のルーツ』 笈壽雄・西光義弘・和井田紀子 訳, 大修館書店, 1985)
- Chao, Y.R.(1968) Language and Symbolic Systems. Cambridge: Cambridge University Press. (『言語学入門 - 言語と記号システム -』 橋本萬太郎 訳, 岩波書店, 1980)
- Cruse, D.A.(1986) Lexical Semantics. Cambridge: Cambridge University Press.
- Givón, T.(1979) On understanding Grammar. New York: Academic Press.
- Halliday, M.A.K.(1985) An Introduction to Function Grammar. London: Edward Arnold.
- Jackendoff, R.(1983) Semantic and Conceptual. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.
- Keil, F.(1979) Semantic and Conceptual Development. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.
- Lyons, J.(1968) Introduction to Theoretical Linguistics. Cambridge: Cambridge University Press. (『理論言語学』 国広哲弥 監訳, 大修館書店, 1973)

## 第四章 見出し情報および区分一覧

### 1. 記載項目

本章では、見出し情報および区分一覧について解説する。見出し情報とは、見出し語ごとの共通情報であり、『計算機用日本語基本名詞辞書 I P A L (Basic Nouns) - 辞書編 - 』で、ヘッダ情報として記載されている部分である。以下ではこれを〈見出し〉と呼ぶ。

区分一覧とは、各区分の概略を最初に提示するためのものである。以下ではこれを〈区分〉と呼ぶ。

#### 〈見出し〉（見出し語ごとの共通情報）

見出し	：見出し語（カタカナ表記が一般的な語は、カタカナで表記する）
表記	：見出し語の表記
コード 1	：見出し単位にふられている 4 桁の番号
ファイル	：見出し語がどの収録基準に基づいて選定された語であることを示す記号
版	：見出し語が名詞辞書の公開版の何版にあたるかを示す記号
区分数	：区分の総数

#### 〈区分〉（区分の一覧）

区分番号	：当該区分の通し番号（0 1 から順にふる）
表記	：当該区分の表記
意味記述	：当該区分の意味記述
素性数	：当該区分が持つ意味素性の総数（1 からふる）
意味素性 1	：素性番号 1 の意味素性
用例 1	：素性番号 1 の意味素性に該当する用例
意味素性 2	：（以下、意味素性の数分繰り返し）
用例 2	：
意味素性 3	：
用例 3	：
意味素性 4	：
用例 4	：
意味素性 5	：
用例 5	：
意味素性 6	：
用例 6	：
意味素性 7	：
用例 7	：
意味素性 8	：
用例 8	：
サ変文例	：「サ変動詞としての用法（サ変用法）」の文型番号 1 の《文例》と同じ文例
連体文例	：「連体修飾語としての用法（連体用法）」の《連体文例》と同じ文例
被連体文例	：「被連体修飾語としての用法 1（被連体 1）」の《被連体文例》と同じ文例
異音同語	：当該語と意味が同じで、語形の一部に音韻形態の差異が見られる語
参照語	：当該語と関連のある動詞、または形容詞
備考	：

## 2. 見出し情報

### 2.1 見出し

当該語を示す。では、原則として「ひらがな」で記載する

例： 《見出し》           《見出し》  
      あめ                 てがみ

ただし、外来語などのようにカタカナ書きが標準表記である語は、「カタカナ」で記載する。尚、カタカナ表記の長音符号の部分は、直前音節の母音によって排列している。部分的にカタカナが混じっている語は、その部分だけを「カタカナ」表記で示す。

例： 《見出し》           《見出し》  
      タクシー             ジェットキ

### 2.2 コード 1

見出し語単位にふられている 4 桁の番号。

I P A 内部でふった管理番号であるため、公開した見出し語は連番にはなっていない。

### 2.3 ファイル

見出し語は、第一章で述べた通り、いくつかの収録基準に基づき選定した。このファイル名は、当該見出し語がどの収録基準に基づいて選定された語であることを示す記号である（ただし、作業の便宜上用いた分類であり、名詞を体系的に分類するものではない）。

『I P A L 名詞辞書 - 辞書編 - 』に収録した見出し語を含むファイル名は、以下の通りである。

《ファイル》名	< 文法的特徴に基づくもの >
a 1 , a 2	サ変動詞用法のあるもの
b	形容詞転成名詞
c	形容動詞語幹といわれるもの
d 5 , d 7	関係性のあるもの（相対名詞といわれるものなど）
d 6	副詞用法のあるもの・自立性の低い名詞といわれるもの
e	「述語用法 2」のあるもの
f	「連体被修飾用法 2」のあるもの
g	動詞転成名詞
《ファイル》名	< 意味的分類に基づくもの >
h 2	植物
h 3	食べ物
h 4	身体
h 5	動物
h 6	場所
h 7	建物・家具
h 9	乗り物
h x	洋装品
i 1	仕事・役割
i 5	自然物
i 6	自然現象
i 7	組織・団体

## 2.4 版

見出し語が名詞辞書の公開版の何版にあたるかを示す記号。

\* \* \* = 第1版 ( 4 6 8 語 )  
\* \* = 第2版 ( 8 0 6 語 )  
\* = 第3版 ( 1 0 8 2 語 )

## 2.5 区分数

区分の総数。0 1 から順にふる。

## 2.6 表記

<見出し>の表記は、該当見出し語における全区分の見出し語表記を示す。「漢字 平仮名 片仮名 英字」の順に記載する。漢字表記が常用漢字表に掲げられていない音訓を使っていて、[ ] 中に示される場合もこの原則に従う（[第七章 形態情報 2.2<見出し>の《表記》]）。

例：見出し語「とくちょう」

《表記》 特徴，特長

## 3. 区分一覧

### 3.1 区分番号

当該区分の番号。0 1 から順にふる。

### 3.2 表記

<区分>の表記は、各区分の見出し語表記を示し、漢字表記には読みも示す。ここでは、漢字・平仮名・片仮名を問わず、一般的な使用頻度順に記載する（[第七章 形態情報 2.1<区分>の《表記》]）。

例：見出し語「とくちょう」

《区分番号》 0 1 《表記》 特（とく）徴（ちょう）  
《区分番号》 0 2 《表記》 特（とく）長（ちょう）

### 3.3 意味記述

当該区分の定義に近いもので、他の区分や他の見出し語との違いを示すものである（[第五章 意味情報 2.意味記述]を参照）。

### 3.4 素性数

当該区分内に並立する意味素性の総数。1 からふる。

### 3.5 意味素性と用例

その区分の、「述語の項としての用法」において与えられる意味素性を1から順に、用例と共に縦に並べて示す。用例は、「述語の項としての用法」の述語欄に記載される述語から一つを選び、その述語と見出し語とを用いた単文を作例して記載した。ただし、文のすわりや意味素性を考慮して、疑問文や複文なども用いている（[第三章 意味素性]および[第六章 述語の項としての用法]を参照）。

例：見出し語「くるま【車】」

区分番号 : 02

表記 : 車(くるま), クルマ, くるま

意味記述 : 原動機をとりつけた移動、運搬用の乗り物。乗用車、トラック、バスの類。

素性数 : 4

意味素性1 : A U T

用例1 : 車を運転できますか。

意味素性2 : C O N

用例2 : 彼は最近車を買って替えた。

意味素性3 : I N T

用例3 : 泊まるところがなかったので車で寝た。

意味素性4 : P R O

用例4 : 子供のころ、車をつくる仕事をしたいと思っていた。

### 3.6 サ変文例

「サ変動詞としての用法(サ変用法)」の《文型番号》「1」の《文例》欄に示されている最初の例文と同じものを表示する([第六章 V サ変動詞としての用法]を参照)。

### 3.7 連体文例

「連体修飾語としての用法(連体用法)」の《連体文例》欄に示されている最初の例文と同じものを表示する([第六章 連体修飾語としての用法]を参照)。

### 3.8 被連体文例

その区分内に、項としての用法も、サ変動詞としての用法も、連体修飾語としての用法もない場合には、「連体被修飾語としての用法1(被連体1)」の《連体文例》欄に示されている最初の例文と同じものを表示する。また、「連体被修飾語としての用法1」もない場合には、「連体被修飾語としての用法2(被連体2)」の《S文例》あるいは《ST文例》あるいは《副文例》に記載される例文と同じものを表示する。

### 3.9 異音同語

当該語と意味が同じで、語形の一部に音韻形態の差異が見られる語([第七章 形態情報 3.《異音同語》]を参照)。

### 3.10 参照語

当該語と関連のある動詞、または形容詞([第七章 形態情報 5.《参照語》]を参照)。

### 3.11 備考

統語情報、意味情報などに関して、特記すべき事項があれば、次のような略号とともに記入した。

< 表記 >	表記に関する事項
< 統 >	統語情報一般に関する事項
< サ変 >	サ変動詞用法に関する事項
< 意 >	意味情報に関する事項
< 音 >	音声や音韻に関する事項
< 参 >	参考事項

例：見出し語「ひげ【髭，鬚，髻】」

備考：< 表記 > 「髭」は口ひげ、「鬚」はあごひげ、「髻」は頬ひげを指す。また、総称的に「髭」を使う。

例：見出し語「しょくりょう【食料】」

備考：< 統 > 「食べる」「おいしい」などと共起しないため、意味素性< E D I > はたてていない。

例：見出し語「あくしつ【悪質】」

備考：< 統 > 連体用法で用いることが多い。

例：見出し語「つば【唾】」

備考：< サ変 > 「眉に唾して聞かねばならない」のようにも言うが、他に実例が見つからなかったため、サ変動詞用法はたてなかった。

例：見出し語「て【手】」

備考：< 意 > 動物の前あしを疑人的に指すこともある。

例：見出し語「さき【先】」

備考：< 音 > 区分 0 1 ~ 1 0 の場合平板型アクセント、この区分の場合頭高型アクセントを持つ。

例：見出し語「ひとまく【一幕】」

備考：< 参 > 歌舞伎では演目ごとに一幕という。

例：見出し語「ほね【骨】」

備考：< 参 > カルシウム分を含むものを「骨」、含まないものを「軟骨」と呼びわけることができる。

### 4. 記載例

以下に< 見出し > と< 区分 > の記載例を示す。

< 見出し >

見出し	: あめ
表記	: 雨
コード 1	: 0 0 9 4
ファイル	: i 5
版	: * *
区分数	: 0 2

< 区分 >

区分番号 : 0 1  
表記 : 雨 (あめ)  
意味記述 : 広域に空から降ってくる水の粒。それが降っている状態。  
素性数 : 4  
意味素性 1 : C O N  
用例 1 : 雨をよけながら駅まで走った。  
意味素性 2 : L I Q  
用例 2 : コートが雨で濡れてしまった。  
意味素性 3 : P H E  
用例 3 : 今朝から激しい雨が降っている。  
意味素性 4 : N A T  
用例 4 : もうすぐ雨が来そうだ。  
サ変文例 :  
連体文例 : さっきから雨の音がしている。  
被連体文例 :  
異音同語 :  
参照語 :  
備考 :

区分番号 : 0 2  
表記 : 雨 (あめ)  
意味記述 : 絶え間なくたくさん降り注ぐもの。  
素性数 : 1  
意味素性 1 : C O N  
用例 1 : 空から爆弾の雨が降ってきた。  
サ変文例 :  
連体文例 :  
被連体文例 :  
異音同語 :  
参照語 :  
備考 :

## 第五章 意味情報

### 1. 『I P A L 名詞辞書』の意味情報

#### 1.1 概説

『I P A L 名詞辞書』の意味に関する情報は、<区分>の《意味記述》の項目と、<意味情報>の《関連語》(《同義》、《類義》、《対1》 - 《対4》)と《助数詞》からなる。<区分>は各区分に対応し、<意味情報>は区分を更に意味素性ごとに細分化したものに对应する。これは、最初に《意味記述》で当該区分の意味的な定義(あるいはそれに近いもの)を示し、それから他の情報を、意味素性ごとに細分化した用例に基づいてより具体的に示す、という方針に基づくものである。

各項目の具体的な内容についてはここでは説明しないが、ここで、意味記述と意味素性の関係について述べておく。例えば、「飛行機」の意味記述は「翼を持ち、プロペラまたはジェット噴射などによる推進力で、空を飛ぶ乗り物。」となるが、この意味記述にあてはまる用例には以下のようなものがある。

意味素性1 : A U T 用例1 : もうすぐ飛行機が離陸します。  
意味素性2 : C O N 用例2 : 飛行機の安全検査が始まった。  
意味素性3 : I N T 用例3 : 危険物は飛行機に積み込めない。  
意味素性4 : A P O 用例4 : 飛行機がなくなってしまうと今日中に帰れない。  
意味素性5 : N E T 用例5 : その都市には飛行機は乗り入れていない。  
意味素性6 : P R O 用例6 : その会社は飛行機を製造している。  
意味素性7 : P I T 用例7 : 飛行機に間に合わなかったので、新幹線で行った。

これらはすべて、上記の基本的な意味の下に統括できるものの、そのそれぞれは意味的に、どことなく違うところがある。例えば、用例4の場合の「飛行機」は個体としての機体はその場に存在しないことをいうものではなく、用例1や用例2の「飛行機」とは趣を異にしている。

こういったことから「飛行機」という語がもつ意味の側面が多様であることがわかるが、通常、われわれはその多様な意味の側面を切り取り、その一つに焦点を当てて「飛行機」という語を使用すると考えられる。その焦点の当て方を具体的に記述したものが「意味素性」である。

「飛行機」の場合、

用例1は、機械< A U T >としての飛行機に注目して、  
用例2は、物体< C O N >としての飛行機に注目して、  
用例3は、その内部< I N T >に注目して、  
用例4は、ダイヤにのっとなって行われる業務< A P O >に注目して、  
用例5は、その交通網< N E T >に注目して、  
用例6は、製造物< P R O >としての飛行機に注目して  
用例7は、飛行機の出発する時間< P I T >に注目していう

というように分析される。

このように『I P A L 名詞辞書』での意味の捉え方は、《意味記述》にみられるような、概念的な、包括的・一般的な捉え方と、<意味情報>の各欄にみられるような、用法に基づく、より具体的な捉え方を併用するものであり、意味を多角的に捉えようとするものである。

なお、『I P A L 名詞辞書』と並行して、『I P A S T a X』と呼ぶハイパーテキスト化したソーラスを現在開発中であるが、このソーラスと名詞辞書の<意味情報>とは

同様の理念に基づいて記述されており、将来的には両者を何らかの形でリンクさせることを目指している。

## 1.2 記載項目

意味に関する情報は、〈区分〉の《意味記述》と、〈意味情報〉の各項目に記載される

〈区分〉

意味記述：（本章 2 節を参照）

〈意味情報〉

素性          ：該当する意味素性  
素性番号      ：その区分にある意味素性の通し番号  
素性数        ：その区分にある意味素性の総数  
関連 | 同義    ：関連語のうちの同義語（本章 3.2 節を参照）  
関連 | 類義    ：関連語のうちの類義語（本章 3.2 節を参照）  
関連 | 対 1    ：関連語のうちの対語 1（本章 3.3 節を参照）  
関連 | 対 2    ：関連語のうちの対語 2（本章 3.3 節を参照）  
関連 | 対 3    ：関連語のうちの対語 3（本章 3.3 節を参照）  
関連 | 対 4    ：関連語のうちの対語 4（本章 3.3 節を参照）  
助数詞        ：見出し語である名詞を数える場合の数え方（本章 4 節を参照）  
備考          ：注記事項（本章 5 節を参照）

## 2. 意味記述

### 2.1 意味記述の基本的な方針

意味記述は、各区分ごとに記述され、当該区分の定義に近いものであり、その区分にどのような用例が含まれるかを示すと同時に、当該区分と他の区分や他の見出し語との違いを示すものである。意味記述は従来の国語辞書などとさほど変わらない形で示されているが、こういった定義をことばによって示すことには限界があり、言い換えに過ぎない、という批判もあろうが、I P A L は特定の理論に偏らない、汎用辞書を目指しているため、例えばモデル理論などを用いて数学的な定義を施すことはできないし、また、言い換えることにより、見出し語の当該区分での意味や各区分間の関係や違いを理解するための手掛かりを付け加えることができると考える。そして、辞書記述の伝統の中から生まれてきた、以下のような理念を徹底させることを目指す。

- ・意味記述は外延的にではなく、内包的に示すべきである。
- ・意味記述文は全体で、記述の対象となる語と同義的であるべきである。

内包的な意味記述とは、その語によって指し示される対象に共通する特徴などについて一般的に示す方法で、例えば「鳥」であれば、「脊推動物の一種で、くちばしと羽根をもつ、恒温動物。」というように示すことである。これに対し、外延的な記述とは、同じく「鳥」を「スズメ・ハト・ダチョウなどの総称。」というように、その語によって指し示される対象を列挙する方法である。外延的な記述法の欠点は、その語の指示対象を全て列挙できない場合が多いために、記述文の中で挙げられていないものについての判断がユーザー任せになってしまうことや、新しい「鳥」が発見された場合などに、それがなぜ「鳥」と呼ばれるかについて、全く説明ができないことなどである。一方で、外延的な記述には、

具体的な理解がしやすい、という利点もあるので、必要と思われる場合には、あくまで内包的な記述を主としつつも、補足的に外延的な例示をも付け加えて示した。なお、典型的かつプロトタイプ的な「鳥」が「空を飛ぶ」と考えられることについては、《備考》欄で示した。

意味記述全体と記述の対象となる語の同義関係とは、意味記述文とそれによって記述される見出し語は、次のような定義文に入れて示すことができる関係にある、ということである。

- ・ [見出し語 a] とは [意味記述 b] である。
- ・ [見出し語 a] は、意味的に [意味記述 b] と等価である。

ことばの意味をことばによって記述することの限界はあるが、《関連語》の解説で示される、《同義語》のように、意味記述は、すべての文脈において、見出し語との言い換えが可能であるのが理想である。なお、上に示した関係は、内容語の意味記述の基本型であるが、機能語や代名詞の意味記述についてはこれとは異なる関係で示すべきと思われる。名詞は本来内容語に分類されるが、中には、実質的な内容が薄れて、機能語に近い側面を持つと考えるべきものがある。こういったものと代名詞については、意味概念を示すよりも、文中での機能を示した方が有効と思われる場合があり、この場合には例えば次のように記述した(【 】内には当該区分の代表的な漢字表記を示す)。

例 見出し語「わたし【私】」  
意味記述：話し手が自分を指して言うときに使う。  
用例：その仕事は私がやります。

例 見出し語「ほか【他】」  
意味記述：[連体修飾部で表わされる]あるものや事柄だけではなく、それに加えて何か別のものや事柄もあることを示す。  
用例：将来への不安の他に、何かモヤモヤとした感情があった。

こういった代名詞や機能語的なものの意味記述は、通常の名詞の意味記述文よりも、メタのレベルが上であると言える。

## 2.2 記載方法

意味記述の記載方法について注意すべき点をいくつか挙げる。

- ・ 当該区分の意味記述文で、同じ見出し語の他の区分について言及する必要性が生じた場合、例えば「さけ(酒)01」などのように書いて、見出し語の仮名表記(あいまい性が生じる場合には括弧内に漢字表記も)を示し、ついで区分番号を示して用いる。

例 見出し語「さけ【酒】」  
区分番号：01  
意味記述：アルコールを成分として含む飲料。また、それを飲むこと。  
用例：父は毎晩酒を飲む。

区分番号：02  
意味記述：「さけ(酒)01」のうち特に、米を原料とする、日本に古くから伝わるアルコール飲料。  
用例：酒を熱燗にする

- ・例示や補足説明など，その部分を省いて読んでも本質的な影響のない情報は（ ）で括弧して示す。

例 見出し語「してん【支店】」

意味記述：(事業拡大などの事由により)本店とは別に設けられた店舗や営業所。

用例：彼女はニューヨークの支店に配属された。

- ・文法的なことや、文中の他の要素に補足的に言及したりする場合には、[ ]に入れて示す。

例 見出し語「もの【者】」

意味記述：[連体修飾要素によって表わされる]ある特定の性質や属性を持つ、あるいは、ある特定の状況にある人。

用例：疲れた者は、休んでよい。

### 3. 関連語

#### 3.1 関連語欄について

『I P A L 名詞辞書』では当該語と同義・類義、対義関係にある語を《関連語》欄に記入した。《関連語》欄の項目は《同義語》・《類義語》・《対語1》 - 《対語4》の6つである。以下に《関連語》欄全体について注意すべき点を挙げる。

- ・《関連語》は意味素性ごとに記述を行なった。また、《関連語》欄に記入した語には『I P A L 名詞辞書』に記載されていない語も含まれているが、これらの語も含めて、《関連語》欄に記入した語は区分及び意味素性ごとの区分を仮定している（以下の説明では便宜上、「見出し語」という用語を「意味素性ごとに区分の済んだ見出し語」の意味で用いる。「関連語」及び、「同義語」、「類義語」、「対語1」 - 「対語4」などの用語についても同様の意味で用いる）。
  - ・意味素性ごとに記述を行うということは、語の意味をその用法に着目して捉える、ということであり、その結果、関連語認定の基準を比較的明確にすることが可能となった。また、結果として、『I P A L 名詞辞書』では、通常は関連語とは認められないであろう語のいくつかについても特定の用法について意味的な関連が認められれば関連語として認めた。例えば、「客」の語義の一つとして「ある人や家、組織を訪ねて来る人」があり、この場合、意味素性には< H U M >、< K N D >、< E V E >の三つがあるが、「来客」は< E V E >の場合にのみ類義語とした。以下の(1a-c)はそれぞれ< H U M >、< K N D >、< E V E >として用いられている例である。
- (1) a. 客が約束より一時間も早く訪ねて来た。  
 b. 私は佐々木家の客となった。  
 c. 今日の午後、家に客がある。
- ・「対語4」を除いて、《関連語》欄には意味素性が見出し語と一致すると思われるもののみを記入した。
  - ・『I P A L 名詞辞書』で定義する意味での名詞にあてはまらない語は《関連語》欄に記入していない。例えば、「綺麗(きれい)」などのいわゆる形容動詞語幹をも名詞の一種として捉えて記述を行なったが、「綺麗」の《関連語》欄には「美しい」などの形容詞は記入していない。見出し語が、いわゆるサ変動詞語や転成名詞の場合につ

いても同様である。

- ・ 合成語（注1）でも以下の節で述べる基準にあてはまれば該当すると思われる欄に記入した。ただし、3.2.2節で述べるように記入しなかった合成語もある。
- ・ 意味的にみて関連語のいずれかに該当しそうな要素でも、問題になっている意味で自立語として用いられないものは記入しない。例えば「髪（かみ）」が「頭部の毛」を表し、意味素性< CON >を持つとき、これとほぼ同様の概念を表す形態素として「髪（はつ）」があるが、自立語とは認められないので記入していない。
- ・ 漢字・平仮名・片仮名以外の文字や記号、あるいはそれらの連鎖である概念を表すものは記述の対象とはしない。例えば「USA」、「WC」、「」などは記入しない。また、漢字・平仮名・片仮名のいずれか、あるいはこれらの組み合わせによって表されているものでも、その文字（あるいはその組み合わせ）がある語を表している、というよりは、ある語を表す省略的な記号として用いられていると思われる場合には記述の対象とはしない。例えば、「アジア」を表すのに、新聞・雑誌の見出しなどで「亜」という漢字一字のみを用いる場合があるが、「アジア」の《関連語》欄に「亜」は記入していない。
- ・ 関連語の表記に、複数の可能性が考えられる場合、最も標準的と思われる表記一つのみを記入した。《関連語》欄の記入に用いた漢字に複数の訓があり、そのために関連語が他の語と混同される恐れがある場合には関連語の漢字の部分の直後に括弧書きで訓を示した。  
例えば「兄（あに）」が「年上の男きょうだい」を表し、意味素性< HUM >を持つ場合、その類義語として、「兄（にい）さん」を以下のように記入した。

例 見出し語「あに【兄】」  
意味素性：HUM  
類義語：兄（にい）さん，・・・  
用例：私の兄が車にひかれた。

また、関連語の訓が難訓と思われる場合についても、同様に括弧書きを用いて訓を示した。

例 見出し語「いぬ【戌】」  
意味素性：NON  
類義語：戌年（いぬどし）  
用例：私は戌の生まれです。

### 3.2 同義語・類義語

「同義語」及び「類義語」について、特に注意すべき点を挙げる。

- ・ 同義語、類義語という用語の用いられ方は研究者によってかなりばらつきがあるが（注2）、『IPAL名詞辞書』での同義語の定義は「ほとんどの文脈で文体や位相に関わる内容もあまり大きく変えずに、見出し語との置き換えができるもの」であり、類義語の定義は「同義語にはあてはまらないが、多くの文脈で見出し語との置き換えができるもの」であり、いずれも文脈における置き換えの可能性を基準にしている。
- ・ 見出し語が複合語や慣用的な表現の一部になっている場合や、格助詞「ヲ」を伴わず

にサ変動詞「スル」の直前に置かれている場合については置き換えが可能かどうかの判断基準とはしていない。その理由は、これらの表現は、外形が固定的になることが多く、置き換えが不可能なのが意味的な要因によるものではないと考えられるからである。以下の(2a)が適格なのに対し、(2b)は不適格であるが、この違いは考慮に入れなかった。

- (2) a. [ 警官 ] 隊  
b. \* [ 警察官 ] 隊

また、(3a)は慣用的に「ある人の性格が冷たい」ことをあらわすのにも用いられるのに対し、(3b)にはそのような用法はないが、このような違いは「血」の類義語として「血液」を認める際、考慮に入れていない。

- (3) a. あの人には [ 血 ] も涙もない。  
b. \*あの人には [ 血液 ] も涙もない。

- ・実際の用例の中で、見出し語の指示対象と同じものを指示するのに用いられることが多い語でも、概念的に類似性がほとんどないと思われる語については同義語とも類義語とも認めなかった。例えば、株式会社では社長が代表取締役を兼任している場合が多く、「社長」がその会社の最高の責任者を表し、意味素性< H U M >を持つ場合、(4a,b)のように「社長」を「代表取締役」で置き換えても、文の表す内容がほとんど変わらない文脈は少なくないが、「代表取締役」は「社長」の同義語とも類義語とも認めなかった。

- (4) a. 社長 / 代表取締役 が、会議中に倒れた。  
b. 今日はまだ 社長 / 代表取締役 は会社に来ていない。

### 3.2.1 同義語

見出し語とほとんどの文脈で文の意味を変えずに置き換えが可能な語で、見出し語と文体・位相などについて大きな違いがみられない語を同義語とした。以下の記入例を参照。

例 見出し語「ろんぎ【論議】」  
意味素性：P R C  
同義語：議論  
用例：クラスで、酸性雨による森林破壊に関して論議があった。

見出し語「けいかん【警官】」  
意味素性：R O L  
同義語：警察官  
用例：私は将来、警官になりたい。

見出し語「ルボ」  
意味素性：I N F  
同義語：ルポルタージュ  
用例：農薬汚染についてはそのルボが詳しい。

「議論」は、例えば(5a,b)のように、ほとんどの文脈で見出し語「論議」との置き換えが可能であり「議論」を「論議」の同義語とした。

- (5) a. その問題は、 論議 / 議論 を呼んでいる。  
 b. 対米外交の話題が 論議 / 議論 の中心になっている。

また、見出し語がある語の省略、あるいはその逆であると思われる場合でも、ほとんどの文脈で置き換えが可能であれば同義語とした。例えば「ルポ」が意味素性が< I N F >である場合、(6a,b)のように、ほとんどの文脈で、「ルポルタージュ」との置き換えが可能であり、同義語として「ルポルタージュ」を認めた。

- (6) a. この ルポ / ルポルタージュ は非常に面白い。  
 b. 僕は今、その ルポ / ルポルタージュ を読んでいる。

文体差や位相(注3)、語感が著しく異なると思われる場合には、たとえ外延がほぼ同じであると思われる語でも同義語には含めていない。例えば「父」が「(ある人の)男親」の意味を持ち、意味素性< H U M >として用いられる場合、男親の意味での「おやじ」は「父」と同じ外延を持つ、と考えられるが、「おやじ」は話し手がその指示対象に親しみあるいは軽蔑を感じている場合に用いられ表現であるが、「父」にはそのような評価がないので「おやじ」は「父」の同義語とではなく、類義語とした。

- 例 見出し語「ちち【父】」  
 意味素性：H U M  
 類義語：おやじ, 父さん, ……  
 用例：父はまだ帰宅していません。

### 3.2.2 類義語

この欄では同義語にはあてはまらないが、多くの文脈で、全体の意味を変えずに見出し語との置き換えが可能であるような、意味的に見出し語に類似し、外延にかなりの程度重なり合いがあると思われる語を記入した。先に述べたように、見出し語と文体的・位相的に大きな違いがあると思われる語は、たとえ外延がほぼ一致すると思われる場合でも同義語とはせず、類義語とした。

例えば、類義語として以下のような語を記入した。

- 例 見出し語「ていきょう【提供】」  
 意味素性：P R C  
 類義語：供出  
 用例：いくつかの企業から被災地に医薬品の提供があった。

- 見出し語「ち【血】」  
 意味素性：L I Q  
 類義語：血液  
 用例：額から血が流れる。

敬意・丁寧さを表す接頭辞の「お-」、「ご-」、「ぎょ-」、「み-」(いずれも漢字表記は「御」)が見出し語に付加してできた語については記入していない。例えば、「みかん」が果物の一種を表し、意味素性< E D I >を持つ場合、「おみかん」は記入していない。

また、類義語と認められる語と、その語にこれらの接頭辞が付加してできた語が両方とも自然に用いられると思われる場合、これらの接頭辞を伴った語は記入していない。例えば「兄」が「ある人の年上の男兄弟」を表し、意味素性< H U M >を持つ場合、類義語として「兄(にい)さん」は記入したが、「お兄(にい)さん」は記入していない。一方、

これらの接頭辞を伴って用いる方が自然であると思われる場合、これらの接頭辞を伴った形を類義語欄に記入した。例えば、「家(いえ)」が前に述べたのと同様の意味・意味素性を持つ場合、その類義語欄に「お宅」は記入したが、「宅」は記入していない。以下の例を参照(以下の例で、「×」は、その後ろに挙げた例は記入しないことを示す。以後の記入例についても同様)。

例 見出し語「あに【兄】」  
意味素性：H U M  
類義語 : 兄(にい)さん, . . . ×お兄さん  
用例 : 私の兄が車にひかれた。

見出し語「いえ【家】」  
意味素性：C O N  
類義語 : お宅, . . . ×宅  
用例 : あそこの家は新しい。

親族名称や職業・役職名など、呼称として用いることのできる名詞が見出し語の場合で、見出し語に「-さん」、「-ちゃん」、「-様」が付加してできた語は記述の対象とはしていない。例えば、「兄」の類義語として「兄(にい)さん」は記入したが、「弟」の類義語の項目に「弟さん」、「社長」の類義語の項目に「社長さん」は記入していない。但し、見出し語に「-さん」が付加した形で用いられる方が見出し語をそのままの形で用いるよりも自然だと思われる場合には「-さん」を付加した形式を類義語として記入した。

原則として、見出し語の上位語で見出し語よりも外延がかなり広いと思われる場合、あるいは逆に、見出し語の下位語で見出し語よりも外延がかなり狭いと思われる場合は類義語に含めない。ただし、見出し語と厳密には上位・下位関係にある語でも、外延の広さにそれほど極端な違いがないと思われる場合には類義語欄に記入した。例えば「車庫」は「自動車や電車を格納する場所」でを表すのに対し、「ガレージ」は自動車を格納する場所を表す場合にしか用いられず、厳密には「ガレージ」は「車庫」の下位語であると思われるが、多くの場合、「車庫」は自動車を格納する場所を表すと思われることから「ガレージ」を「車庫」の類義語に含めた。

例 見出し語「しゃこ【車庫】」  
意味素性：L O C  
類義語 : ガレージ  
用例 : 父は車庫に行って、ワックスを取ってきた。

見出し語と外延の全く重なり合わない語は類義語とは認めなかった。例えば、「みかん」の類義語として「オレンジ」は認めたが、「レモン」、「ゆず」、「グレープフルーツ」などは認めなかった

例 見出し語「みかん」  
意味素性：E D I  
類義語 : オレンジ × レモン, ゆず, グレープフルーツ  
用例 : 炬燵でみかんを食べる。

「オレンジ」には温州みかん、なつみかんなどを表す用法があり、「みかん」の類義語と認めたが、「レモン」などにはそのような用法がないので類義語とは認めない。

### 3.3 対語

反義語や反義関係と一般に認められるようなもの及び、反義とは言いにくいものの、ある種の対として捉えられるような語をも広く対語して記述した。また、2語以上で見出し語と組となるようなもののいくつかについても対語として記述した。

対語の中で特に以下に述べるような特徴を持つ語を《対語1》 - 《対語3》として区別し、これらに当てはまらないが対として捉えられるものを《対語4》として記述した(注4)。

ある一つの語が同時に《対語1》 - 《対語4》の複数に当てはまると思われる場合は、該当すると思われる全ての項目にその語を記入した。例えば、「上」に対して、「下」は《対語1》、《対語3》のどちらの基準も満たすので、以下のように記入した。

例 見出し語「うえ【上】」  
意味素性：D I R  
対語1 : 下  
対語3 : 下  
用例 : 上から瓦が落ちてきた。

また、《対語1》 - 《対語4》のいずれか一つに、複数の語が該当し、それらの語の間に同義・類義関係が成り立っていると思われる場合、見出し語と文体的・位相的な内容が最も類似している、と思われる語のみを記入した。例えば、「夫」が見出し語の場合、「妻(つま)」を《対語3》に記入したが、「女房」は記入していない。

例 見出し語「おっと【夫】」  
意味素性：R E L  
対語3 : 妻(つま) × 女房  
用例 : 私には夫がいます。

#### 3.3.1 対語1

見出し語と反対・逆の意味を持つ語で、見出し語とともに、ある種の段階性を持つ意味概念の軸の両極端として捉えられ、見出し語が表す概念とその語が表す概念の間にどちらの語が表す概念にも対応しない、連続的な中間段階があると考えられるものを《対語1》とした。例えば以下のような語を記入した(注5)。なお、意味概念の軸の両端が特定できるかどうかは考慮に入れていない。

例 見出し語「あつめ【厚め】」  
意味素性：S T A  
対語1 : 薄め  
用例 : この果物は果肉の部分が少ないので、皮を厚めにむいてください。

見出し語「きた【北】」  
意味素性：L O C  
対語1 : 南  
用例 : 三の丸は二の丸のさらに北に位置している。

例えば「厚め」と「薄め」の意味的な関係は次のような図で示すことができる。



ある語が《対語1》に該当するかどうかのテストとして、以下のA、Bの二つを行ない、原則として二つのテストのいずれにも合格したものを《対語1》として認定した。

- A 見出し語とともに「～でもないが～でもない」という表現の「～」の部分に入れることができるか。
- B 見出し語とその語が、ともに「xよりyの方が～だ。」の「～」の部分に入れられるか。

以下の(7a)はテストAの、(7b)はテストBの適用例である。

- (7) a. この本は [厚め] でもないが [薄め] でもない。
- b. 三の丸より二の丸の方が [北/南] だ。

見出し語が表す概念にも、その語が表す概念にも段階性が認められる場合でも、それらの語の表す概念が置かれる概念の軸上にどちらの語で表される概念に中間的な段階が認められない場合、《対語1》とは認めなかった。例えば、「安全」及び「危険」が表す概念には段階性が認められ、しかもこの二つの語が表す概念は同じ意味概念の軸上にあるが、どちらの語の表す概念にもあてはまらない、中間的な段階が認めにくく、テストAに合格するとは考えにくいので、「危険」は「安全」の《対語1》とは認められず、《対語2》となる。



- (8) \*この道は [安全] でも [危険] でもない。

また、見出し語が「終電」で意味素性が< APO >の場合、テストAだけを考えると、一見「始発」が対語1のようにみえるが、「終電」、「始発」とともに、その表す意味に段階性があるとは考えにくく、テストBに合格しないので《対語1》とは認めなかった。

- (9) a. この電車は [終電] でも [始発] でもない。
- b. \*今度の電車の方があの電車より [始発/終電] だ。

見出し語が「黄色」、「茶色」など、色彩を表す語の場合、色彩を表す語は上の基準を満たしていても《対語1》には含めなかった。これは、どんな二色間にも中間色があり、ある語についてどの色が《対語1》として捉えられているかを特定するのが多くの場合、困難だからである。「黒」に対して「白」など、いくつかの場合については、特に対立的に捉えられていると認められるが、こういった場合、《対語1》ではなく、《対語4》とみなす。

### 3.3.2 対語2

見出し語とともに、ある上位概念を2分割すると考えられるものを《対語2》として記述した。例えば以下に挙げるような語を《対語2》とした。

- 例 見出し語「おとこ【男】」
- 意味素性：HUM
- 対語2     ：女

用例 : あの男は、さっきからそこに立っている。

見出し語「おもて【表】」

意味素性：CON

対語2 : 裏

用例 : 葉書の表に名前を書く。

例えば、「男」と「女」の上位概念として「人間」を考えることができ、「男」・「女」という概念は「人間」という概念の下位の概念であり、かつ「人間」という概念を「性」という観点に着目して2分割していると捉えることができ、見出し語「男」に対し、「女」を《対語2》として記入した。



《対語2》のテストとしては次の二つが挙げられる。原則として二つのテストの両方に合格したものを《対語2》として記入した。

A 「xは～でも～でもない」という形式の文の「～」の部分にその語と見出し語を同時に入れた場合に奇異になるようなXがあるか。

B 「xは[見出し語]ではない。」という文が表す命題が、「xはyだ。」という形式の文によって表されるような命題を含意するときに、「y」の位置にその語を入れることができ、かつ、「y」をその語と置き換えた結果できた文が、逆に「xは[見出し語]ではない。」という文を含意するか。

以下の(10a)はテストAの、(10b)はテストBの適用例である。

(10)a. \*あいつは [男] でも [女] でもない。

b. この面は [表] ではない。 この面は [裏] だ。

先に述べたように、「危険」は「安全」の《対語1》ではないが、上の基準は満たすと思われるので《対語2》である。このように段階性のある語でも、《対語1》ではなく、《対語2》とすべきものもある。

### 3.3.3 対語3

見出し語が二つ以上のもの同士の間になり立つある種の間接関係を表すと考えられる場合に、その関係が成り立つときに同時に成り立ち、視点が逆であると思われるような関係を表す語を《対語3》とした。例えば次のような記述を行なった。

例 見出し語「うえ【上】」

意味素性：LOC

対語3 : 下

用例 : 網棚の上に新聞や雑誌を置かないでください。

見出し語「はいばく【敗北】」

意味素性：R E S

対語3：勝利

用例：その戦争は我々の敗北に終わった。

見出し語「おっと【夫】」

意味素性：R E L

対語3：妻（つま）

用例：私には夫がいます。

例えば、あるものxがあるものyの「上」に位置する、という関係が成り立つときには、同時に、yはxの「下」であるという関係が成り立つ。この関係は例えば次のような図で表せる。

・  
x・  
・  
y・  
・

上に挙げた例はいずれも二つのもの間に成り立つ関係を表す語についてであったが、次の例のように三つ以上のもの間に成り立つ関係を表す語についても、《対語3》として捉えられる語がある場合もある。例えば、「輸出」と「輸入」は次の(11a, b)のように同時に成り立ち、視点が逆の事象を表すことができる。

(11)a. アメリカの日本への自動車の輸出

b. アメリカからの日本の自動車の輸入

《対語3》の基準は次のように定式化できる。下の式においてRは見出し語によって表される関係を、Sは《対語3》によって表される関係である。なお、ここでx、yは個体を、 $\cdot$ 、 $\cdot$ 、 $\cdot$ は任意の長さの個体の列を表すものとする。

$R(\cdot, x, \cdot, y, \cdot)$        $S(\cdot, y, \cdot, x, \cdot)$

上の基準に照らしてみても、例えば、見出し語「子（こ）」が親族関係を表すのに用いられ、意味素性がR E Lの場合、「親」は《対語3》であるが、「父」や「母」は《対語3》ではない。また、見出し語が「父」の場合、「子」は《対語3》ではない。

例 見出し語「こ【子】」

意味素性：R E L

対語3：親      x父, 母

用例：私達夫婦にはなかなか子ができない。

### 3.3.4 対語4

接頭辞「非（ひ）・不（ふ）・無（む）・未（み）」が見出し語に付加してできた語については《対語1》 - 《対語3》の欄に該当するもののみを記入した（注6）。その他、

《対語1》 - 《対語3》の他になんらかの意味で対になると考えられる語があれば《対語4》に記載した。例えば、見出し語となんらかの意味で反義であると考えられる語、反義とは言いにくい、なんらかの意味で見出し語と対比的に捉えられる語、見出し語を含めて三語以上の組になる語である。

《対語1》 - 《対語3》についてはある程度厳しく判定したが、《対語4》には見出し語となんらかの意味で対になると思われる語を幅広く記述した。

見出し語となんらかの意味で反対・逆の意味を持つ語で《対語4》に記入したものには例えば以下のようなものがある。

例 見出し語「たて【縦】」  
意味素性：S T A  
対語4 : 横  
用例 : 本を縦に置く。

見出し語「あめ【雨】」  
意味素性：S T A  
対語4 : 晴れ  
用例 : 今日でもう二週間も雨が続けている。

見出し語と反義関係にあるとはいいいくいが、見出し語とある種の対として捉えられ、それが慣用的な表現や決り文句などに反映されていると思われる語で《対語4》としたものには次のようなものがある。

例 見出し語「やま【山】」  
意味素性：L O C  
対語4 : 海  
用例 : 険しい山に登る。

(12) あいつは海のものとも山のものともつかない。

見出し語を含めて三語以上で組になると思われ、その組の中に新しい語を付け加えることができない、という意味でその組が閉じている場合、《対語4》の記述の対象に含め、見出し語以外の語を、{ }でくくって《対語4》の欄に記入した。例えば次のような記述をした。

例 見出し語「きた【北】」  
意味素性：D I R  
対語4 : { 南, 西, 東 }  
用例 : この部屋の窓は北に面している。

例 見出し語「うし【丑】」  
意味素性：N O N  
対語4 : { 子, 寅, 卯, 辰, 巳, 午, 未, 申, 酉, 戌, 亥 }  
用例 : 今日土用の丑の日だ。

## 4. 助数詞

### 4.1 記載内容

見出し語の数や量を表そうとする際に、「数詞」と共に用いられるものを記載した。具

体的には以下の 1), 2), 3) のようなものである。

1) 見出し語自体を数えるもの(いわゆる狭義の「助数詞」)

例 魚：匹，尾，kg，t

その物の数え方が数量をあらわす場合と、種別をあらわす場合となどで違いがあるときには、その両方を記載してある。ただし、これらは見出し語の区分または意味素性が別となるため、一般に同時に記載されることはない。

例 新聞：紙 / 部  
花：本，株，束 / 輪

2) 小売されている形

通常目に触れる場(ここではその典型例として商品として売られている場合を想定している)では、箱や袋・ケース・パッケージなどの入れ物に依存しているものがある。その場合には、その「入れ物」、またはその入れ物の数え方を記載した。

例 砂糖：袋，箱  
酒：本，瓶  
りんご：つ，個，かご，ざる，山，袋，箱

3) 計量の単位

見出し語がはっきりとした外形や個別の形態を持たない(連続的な物質である)場合に、それを一定の割合で区切りその物の量の多少を計る目安や目盛りとして与えられている単位を記載した。

例 時間：時間，分，秒  
水：1，cc  
お茶：杯

見出し語が、はっきりとした外形や個別の形態を持つ場合であっても、扱いがこの 3) に当たる場合がある。「りんご」における「山」や、「魚」における「kg，t」などがそれである。一般に「助数詞」とは、名詞が指す物の外形や形状に従って用いられるものであるが、実際には、その物をとらえる人間の認識に大きく左右されるのである。

そこで本辞書の「助数詞」欄には、一般に「助数詞」と呼ばれている 1) の他に、上に示した 2)・3) のようなものも合わせて記載の対象とすることとした。

その際 1) に関しては網羅的に記載するようつとめたが、2)、3) に関しては使用の実際を検討し適宜判断するなどしてごく一般的なものを記載してある。

## 4.2 その他

1) その他の数量的な表現について

見出し語を数えているとは言えないが、表現としては(文学的な表現などで)助数詞のようなものが現れる場合、《備考》欄に「<助>例：～」として使用例を記載した。

例 雲：＜助＞例：雲一つない青空。  
腕：＜助＞例：腕の一本もへし折ってやる。女の細腕一本で育て上げた。

## 2) 「数詞＋見出し語」の取り扱い

「助数詞」と判断されるもの以外で、この形式を取るものは上記《備考》欄か、《他の合成語》の欄に記載しておいた。ただし、さらに後続する語ごと全体で形式が固定しているような場合には、《慣用表現》の欄に記載した場合もある。

例 一枚岩 《他の合成語》の欄に記載  
一声かける。一肌脱ぐ。一旗あげる。  
二目と見られぬ{顔/姿/...}。 これらは 《慣用表現》の欄に記載

### 4.3 記載しないもの

一般に数えることがない、また数えることがあまり普通でないものは記載していない。またその判断には実際の用例をよりどころとし、適宜判断した。

例 砂糖：砂糖の結晶のひと粒を顕微鏡でのぞく。 記載しない  
例 友情：彼は二つの友情の板ばさみになって苦しんだ。 記載しない

### 4.4 記載方法

1) 記載には助数詞をのみを「，」で区切って並べ記載した。

2) その他、以下の記号を用いて記載した。

読みを添える場合には、直後に( )でくくって示す。

例 たたみ：畳(じょう)

表記などで複数の候補がある場合には、/で区切って示す。

例 くるま：両/輛

見出し語のなかでも、特別なタイプのものだけを数える助数詞がある場合には注記をつける。注記は[ ]でくくって示す。

例 薬：錠[錠剤]，包[粉薬]，カプセル[カプセル剤]

一般的な内容を添える場合は備考欄に記載する。

例 たまご：＜助＞スーパー等で通常売られている形態は10個入りのパック。

### 4.5 記載例

助数詞の記載例を以下に示す。

例：見出し語「でんしゃ【電車】」

[区分01] 電気のでレールの上を走り、人や物を運ぶ車両。

素性：CON

助数詞：台，両/輛

用例：安全のため電車を再点検する。

素性 : A P O  
助数詞 : 本  
用例 : あまり残業をしていると電車がなくなるよ。

素性 : P R O  
助数詞 : 両 / 輛  
用例 : 電車を作っている工場を見学した。

## 5. 備考欄

意味情報について、補足すべき点があれば備考に注記した。その際、次のような記号を用いた。

- < 関 > 同義・類義・対 1 - 4 について注記する場合に用いた。
- < 助 > 助動詞について注記する場合に用いた。
- < 他 > 上記以外の点について注記する場合に用いた。

## 6. 記載例

見出し語「いしゃ【医者】」の区分番号 0 1 の記載例を示す。

例 : 見出し語「いしゃ【医者】」

< 区分 >

区分番号 : 0 1  
意味記述 : 傷病の診断や治療を職業とする人。  
意味素性 1 : H U M  
用例 1 : 花粉症がひどかったので医者に見てもらった。  
意味素性 2 : R O L  
用例 2 : 僕は将来医者になりたい。

< 意味情報 >

素性 : H U M  
素性番号 : 1  
素性数 : 2  
関連 | 同義 :  
関連 | 類義 : 医師 , ドクター  
関連 | 対 1 :  
関連 | 対 2 :  
関連 | 対 3 : 患者  
関連 | 対 4 :  
助動詞 : 人  
備考 :

素性 : R O L  
素性番号 : 2  
素性数 : 2

関連 | 同義 :  
関連 | 類義 : 医師 , ドクター  
関連 | 対 1 :  
関連 | 対 2 :  
関連 | 対 3 : 患者  
関連 | 対 4 :  
助動詞 : 人  
備考 :

## 注

1. 「合成語」についてはこの解説書の形態情報についての解説を参照されたい。
2. 「同義語」を "synonym"、つまり「(文体差や位相に関する内容を除いて) 文の意味を変えずに問題の語と置き換えのできる語」の訳語として用いている文献には国広(1982)や柴谷他(1982)、Ullmann(1962)の翻訳(池上訳(1969))などがあり、「問題の語と(文体的な内容・位相に関する内容も含めて) 全く同じ意味を表す語」という意味で用いている文献には柴田(1965)や長嶋(1982)などがある。また、国立国語研究所(1965)は「類義語」という用語を "synonym" とほぼ同じ意味で用い、「同義語」を柴田や長嶋と同じ意味で捉えている。  
I P A L 名詞辞書の「同義語」は、文体・位相に関する内容の違いもある程度、考慮に入れた、という点で "synonym" の基準よりはやや限定されているが、柴田や長嶋よりは広く捉えている。そして I P A L 名詞辞書の「類義語」は、"synonym" のうち、I P A L 名詞辞書でいう意味での同義語に該当しないもの、及び、一部の上位語・下位語を含めたものに相当する。"synonym" について詳しくは Lyons(1977)や、Cruse(1986)を参照されたい。
3. 語がどのような文体的・位相的特徴を持つか、という情報を記載した辞書に大野編(1981)がある。
4. 対語 1 - 3 はそれぞれ言語学でいう "antonym"、"complementary"、"converse" に対応する。これらの概念について詳しくは Lyons(1977)、Cruse(1986)、柴谷他(1982)を参照。なお、荻野・野口(1988)ではこの辞書で行なわれているよりも細かい対義反義関係の類が試みられている。
5. より形式的な定義については Lehrer & Lehrer(1982)を参照されたい。また、この文献には "antonym" を規定する上での様々な問題が挙げられている。
6. これらの接頭辞のうち、どれが見出し語に付加することができるか、ということに関しては、「第七章 形態情報 4.3 合成語」を参考にされたい。

## 参考文献

- 大野晋編(1981)『類語新辞典』角川書店。  
荻野綱男・野口美和子(1988)辞書における反対語記述の問題点, 情報処理振興事業協会編(1988), pp.120-71。  
加藤安彦(1993)日本語助数詞体系化の試み, 『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究』12, 情報処理振興事業協会, pp.95-108。  
国広哲弥(1982)『意味論の方法』大修館書店。  
宮島達夫(1965)『類義語の研究』(国立国語研究所報告)秀英出版。

- 柴田武(1965)言語における意味の体系と構造．『科学基礎論研究』26(再録：『語彙論の方法』三省堂，1988,pp.1-16.
- 柴谷方良・影山太郎・田守育啓(1982)『言語の構造—理論と分析—意味・統語篇』くろしお出版．
- 情報処理振興事業協会編(1988)『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究』9,情報処理振興事業協会．
- 情報処理振興事業協会編(1992)『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究』11,情報処理振興事業協会．
- 長嶋善郎(1982)類義語とは何か，『日本語学』1，pp.43-46.
- Cruse, D. (1986) *Lexical Semantics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lehrer, A. and Lehrer, K. (1982) *Antonymy*, *Linguistics and Philosophy* 5, pp.481-501.
- Lyons, J. (1977) *Semantics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ullmann, S. (1962) *Semantics: An Introduction to the Science of Meaning*. Oxford: Basil Blackwell. (『言語と意味』池上嘉彦訳，大修館書店，1969.)

## 第六章 統語情報

### 述語の項としての用法

#### 1. 「述語の項としての用法」について

語（語彙項目）は、他の幾つかの語彙項目と常に（あるいは高頻度で）相伴って現れる傾向がある。これはその語のもつ基本的特性であると考えられ、このような語の共起関係を「コロケーション」（collocation）とよぶ。「コロケーション」という用語は、そもそもロンドン学派と呼ばれる言語学者によって用いられはじめたものであった（注1）。最近では、「コロケーションを集めた辞書」として「新編英和活用大辞典 THE KENKYUSHA DICTIONARY OF ENGLISH COLLOCATIONS」（1995年，研究社）という辞書が出版されるなど、「コロケーション」への関心が高まっている。この辞書のまえがきで「コロケーション」を定義している部分を以下に引用する。

ある語と他の語の慣習的な結合が連語であると定義づけられているわけですが、ここで改めて連語について確認しておきたいと思います。たとえば「うちの猫が鼠をつかまえた」に相当する英語は‘Our cat caught a mouse.’であって‘Our cat secured [captured] a mouse.’ではありません。猫が鼠を「つかまえる」というとき用いられる語が慣習的に catch であって、secure あるいは capture ではないからです。この文で secure あるいは capture を用いることは文法上は可能であっても、ある特殊な効果をねらった表現の場合を除けば、まず慣習的にはありえません。すなわち、これは「偶発的な語と語の結合」（a contingent association of words）であって、「慣習的な語と語の結合」（a habitual association of words）つまり「連語，コロケーション」（collocation）ではありません。

名詞のコロケーションという場合には、その名詞が(a)どのような述語の格要素になるか、(b)どのような語を修飾するか、(c)どのような語に修飾されるか、という三つの視点が欠かせない[青山・橋本 1990，橋本他 1993]。例えば、こうした三つの観点からみた名詞「花」のコロケーションの例は以下の通りである。

- (a)花が咲く
- (b)花の命
- (c)きれいな花

「述語の項としての用法」<項の用法>では(a)についての記述が問題にされる(注2)。つまり、「述語の項としての用法」とは、見出し語が文中で格助詞を伴って用いられるとき、それがどのような格助詞と一緒に用いられるか、またそのとき、どのような述語と一緒に用いられる傾向があるかという情報を指す。これは、例えば「帽子」という語は「帽子をはく」より「帽子をかぶる」と用いられる確率が高か高いと示す。以下、このような見出し語と述語の密接な結びつきを「コロケーション」と呼ぶことにする。

#### 2. 記述語の選定方針

『I P A L 名詞辞書』に収録した述語は、主に新聞・教科書・論説文・小説類などおよそ43万文のコーパスを分析して抽出したものである。しかし、単純にコーパスから得られたものを記述するだけでは辞書のコロケーションの記述として不十分であることが多い。なぜなら、コーパスの中にはコロケーションとはいいいがたい結びつきが出現する場合もあれば、逆に共起すると考えられる述語がたまたま現れない場合もあるからである。そこで、

述語のタイプによって収録すべきものとししないものに分け、記述対象となる語を選定した[桑畑他 1994]。以下にその選定の方法を記す。

## 2.1 網羅的に記述した述語 1

次のような「見出し語に固有な述語」は、網羅的に記述した。

(A)見出し語に固有な述語との結びつきで、言い替え表現にはその見出し語が含まれるもの

- 【判定】 を 下す = 判定する、判定をする
- 【反対】 に あう = 反対される、反対を受ける
- 【成功】 を 収める = 成功する

(B)見出し語が持つ本来的な機能・性質に沿う述語

- 【ズボン】 を はく | を脱ぐ | が長い
- 【電気】 を つける | を消す | が暗い
- 【注意】 を 集める | をそらす | が届かない

(C)高頻度で局所的に固有な結びつきを形成する述語

- 【選挙】がある
- 【伝統】がない
- 【発表】をする
- 【逆さま】にする
- 【孤独】になる

(A)の結びつきは、実質的意味を持つ名詞を全体として一つの動詞のように機能させるものである。

(B)の結びつきは、物を表す名詞の本来的な機能や、事を表す名詞の性質に沿うものである。述語欄にはその名詞に固有のものだけを書けばよいので、例えば「ズボンをかぶる」「注意を笑う」のようにいうことがあったとしても、それはその名詞が持つ本来の機能・性質に沿うものではないと考え、ここではコロケーションとして記載することはしない([2.3節]参照)。

(C)に挙げた述語は、他の多くの名詞にも結びつくため固有な結びつきとはいえ、一般のコロケーションの枠から除外される可能性がある。しかし、これらの述語は、出来事の有無をいう「ある」「ない」、サ変動詞用法と関連のある「をする」、連用用法と関連のある「にする」「になる」については、見出し語ごとに共起の可否がはっきり決まりやすい。このように限定された意味では(C)もまた、見出し語に固有な結びつきであるといえる。

## 2.2 網羅的に記述した述語 2

『I P A L 名詞辞書』では、見出し語の用法を明らかにするため、前節で挙げた「見出し語に固有な述語」に加え、「見出し語の特徴抽出に欠かせない述語」というものについても、積極的に収録した。次に、コーパスに現れる名詞「食堂」の共起例を示す。

- 【食堂】が ある, 店開きする, 改装する, 全焼する
- 【食堂】を 設置する, 運営する, 回る, 兼ねる, 利用する
- 【食堂】から 出火する
- 【食堂】に いる, 行く, 勤める, 集まる, 来る, 貼り出す

【食堂】へ行く

【食堂】で食べる，コンパを開く，開かれる，行われる，昼食をとる，酒を飲む，用意する，下働きをする

「食堂」がもつ機能は食事をとることのできる場所としての働きである。したがって、「食堂で食べる」「食堂で昼食をとる」などが、その機能を端的に示すコロケーションであるといえる。他方、上に示したその他の述語は「食堂」に固有な述語とは言い難いが、これらもまた、「食堂」という見出し語の特徴を表す述語であると考えられるので、上記の共起述語は全てコロケーションとして収録した。ところで、コーパスが主に新聞記事によっているため、「出火する」「全焼する」という事件関連の述語は出現しているが、日常的に使われる「食堂が混む」「食堂に並ぶ」などの用例が出現していない。そこで、コーパスに出現していなくてもコロケーションが別の使用域で使用可能であると思われるそのような述語は、内省によって適宜加えた。以下に、コーパスからの抽出だけでは収録が不十分になりがちな「見出し語の特徴抽出に欠かせない述語」のタイプと、その収録方法について説明する。

#### (D)名詞のある側面を浮き彫りにさせることのできる述語

結びつくつかないかによって名詞のある側面を浮き彫りにさせることのできる述語は網羅的に収録すべきであるので、関連する見出し語全てについて共起の可否をチェックした。

例えば、「塩」「酒」「えさ」「くすり」「食料」など食べ物を表すいくつかの名詞は「切らす」という述語と結びつく可能性がある。ただし、同じ食べ物を表す名詞でも、「蕎麦を切らす」「焼き肉を切らす」などは言いにくい。食べ物以外の具体名詞では「紙」「花」「石鹸」などは「切らす」と結びつくが、「机」「鞆」「タンス」が「切らす」に結びつくとは考えにくい。以上のことから「切らす」という動詞と結びつくことが可能な名詞は「ストックするもの」であるといえそうである。「売る」「買う」といった述語も、具体物の見出し語全てについて共起の可否をチェックした。「売る」「買う」は<具体物>の側面がある名詞のうち、売買可能なものに限って結びつくからである（例えば「ポケットを売る／買う」とは言わない）。この他、「燃える」「全焼する」などは燃えることのできる具体物の見出し語、建物を壊す見出し語全てについて共起の可否をチェックした。

#### (E)見出し語がその<意味素性>をもつと判断できるような典型的な述語

「蕎麦を食べる」は、「蕎麦をすする」とは違って一般のコロケーションの概念としては結びつきがかなり緩いものではあるが、「スープを食べる」とはいわないといった場合もあり、網羅的な収録に価値があるといえる。したがって、「蕎麦」という見出し語を飲食物<EDI>と据える時の述語欄には、見出し語特有の「すする」に加えて「食べる」「味わう」などの述語も収録した。これらは、見出し語と共起することで<EDI>としての側面に焦点を当てる典型的な述語だからである。これらの述語は、<意味素性>ごとに共通に共起しやすいものとして、例えば以下のようにリストアップすることができる（「第二部 意味素性の詳細 付録1 意味素性一覧」内の構文1及び構文2参照）。

飲食物<EDI>食べる，味わう，飲む，おいしい，まずい  
液体 <LIQ>こおる，漏れる，こぼす，注ぐ，飲む，流れる  
場所 <LOC>戻る，行く，登る，歩く，広い，狭い  
動き <PRC>始まる，終わる，止まる，速い，遅い

これらのリストは見出し語がどの<意味素性>を持つかの判断に用いられると同時に同じ意味素性を持つ見出し語についてコーパスから抽出できないコロケーションのチェックをするのに役立つものである。

次の例は、コーパスで名詞「回転」「移動」がガ格を介して述語ごと共起する例である。

【回転】 が 早い, 遅い, 上がる, 下がる, 起こる, 安定する, 止まる, 停止する, 鈍る

【移動】 が ある, 可能だ, 困難だ, 多い, 少ない, 速い, 激しい

ここには<PRC>の述語リスト「始まる、終わる、止まる、早い、遅い」に合致する述語が現れることから、「回転」「移転」という見出し語には<PRC>という意味素性をつけられることがわかる。また、コーパスには出現していないが、リストにある「始まる、終わる」が両見出し語とともに共起可能であるので、この二語を加えて辞書には記載した。

ただし、例えば、動物、植物、具体物を表す名詞句はどれも種や類を総称的に表す<KND>という側面を持っているが、作業効率を考えて、それらの名詞句全てに<KND>の側面に焦点を当てる述語（「属する」「誕生する」など）を記載していない（くわしくは、「第二部 意味素性の詳細」を参照）。

### 2.3 網羅的に記述しなかった述語

一方、前説の態度とは反して、単に「結びつくことが可能である述語」については、網羅的に記述していない。コーパスに現れる名詞「皿」に共起例を次に示す。

【皿】が 回る

【皿】を 持参する, ひっくり返す, 持ってくる, 配る, 温める, 重ねる, つくる, 置く, プレゼントする

【皿】に あける, のせる, 盛る, 取る, 入れる, 注ぐ, 並べる, 敷く, 移す, 運ぶ, 広げる

【皿】へ 取る

【皿】で 殴る

「皿」がもつ基本機能は、料理を入れる容器としての働きである。したがって、「のせる, 盛る, 取る, 入れる」などの述語は「皿」のコロケーションとして認めてよい。しかし、たまたまコーパスに出現した「皿で殴る」という用例は、「皿」の本来的な機能によって結びつくものではないため、コロケーションとは認めない。

この「殴る」のような、単に「結びつくことが可能である述語」については網羅的に記述していない。網羅的に記述を試みれば、例えば、「蕎麦」という見出し語を<具体物>と据える時には「投げる」「捨てる」「上げる」「見る」「触る」「とる」などの述語も収録していくということになり、きりが無い。否定表現での結びつきも許すなら、さらに共起可能な述語が増えていくことになり、この作業には無理があることがわかる。したがって、「蕎麦」の場合には「投げる」「捨てる」などの述語は収録しないことにした。ただし、「見出し語の本来的な機能・性質に沿うもの」にあたるため、「ボールを投げる」「ゴミを捨てる」のような用例は記載した。

このようなタイプの述語としては他に「欲しい」がある。コーパスでは、「時間」「金」「仕事」「自動車」などの名詞は「欲しい」という形容詞と共起する。しかし、この他「庭」や「くつ」なども「欲しい」と結びつくことは可能であるがコーパスには現れていない。コーパスが大きくなればもっと共起出現する名詞が増えそうであるが、かといって「塩」「しょうゆ」「鍋」などの見出し語の述語欄にまで「欲しい」を収録するのは冗長

であると感じられる。『I P A L 形容詞辞書』には「ほしい」のとり名詞句は<具体物>でも<抽象物>でもよく、「その情報、あの本、水、おやつ、いいカメラ、このスカート、名誉、人材」などの名詞句例が挙がっている。したがって、コーパスに共起出現していた「時間」「金」「仕事」「自動車」などの見出し語の述語欄には「欲しい」は記載したが、出現していなかった見出し語に網羅的な記述をするということはしなかった。さらに、「考える」「思う」「想像する」といった述語についてもいちいち記載することをしなかった。

## 2.4 記載する際のその他のチェック項目

述語のタイプに関係なく、コーパスから抽出できないコロケーションをチェックする際に、以下の方法も有効であった。

(1) 記載した述語の対応語(自他・派生関連語)についてできるだけ記す。

例：見出し語「自信」に対して「つく」があれば「つける」も記述する。

ただし、その対応語が見出し語と用いられることが自然と思われない場合は記述しない。「腰が曲がる」「腰を曲げる」はどちらも表現としてあるものだが、「カーブを曲がる」に対する、「カーブを曲げる」は通常の文脈ではあり得ない表現である。

(2) 記載した述語と対をなす語をできるだけ記す

例：見出し語「ゴム」に対して「伸びる」を記述したら「縮む」も記述する。

見出し語「息」に対して「吐く」を記述したら、「吸う」も記述する。

ただし、その反義語が見出し語と用いられることが自然と思われない場合は記述しない。「ゴム」と違い、「鬚」は「伸びる」ものだが、「縮む」ものではない。「体重」は「増える」ことも「減る」こともあるが、「腹」や「かかと」は、「減る」ことはあっても、「増える」ことはない。「つばき」は「吐く」ことはあっても「つばき」を「吸う」ことはない。

この種の情報を徹底して記載していくと、名詞によって対をなす語には違いがあることがわかる。このような違いがあることは、述語の側からの共起関係の記述よりも、今回のような名詞の側からの記述によって気がつきやすいものだといえる。

## 3. 記載方法

『I P A L 名詞辞書』<項の用法>でそのようにコロケーションを記載しているかについて説明する。

### 3.1 コロケーションと意味素性

見出し語の意味的側面を明らかにするために、コロケーション例は見出し語に与えられる意味素性ごとにまとめて記載する。

例えば、「帽子」は「かぶる」ほかに「つくる」ことも可能である。

- (1) a. 花子が 帽子を かぶる。
- b. 太郎が フェルトで 帽子をつくる。

「帽子をかぶる」と「帽子をつくる」は、いずれも格助詞ヲを介して見出し語が動詞の項となる時の用例である。しかし、(1a)では具体物<CON>、(1b)では生産物<PRO>

として「帽子」捉えているという違いがある。よって、(1a)と(1b)とは区別して記載する。この他に見出し語「帽子」と結びつく述語も、<CON>と<PRO>とに区別して記載する。以下にその記載例を示す。

<CON>

帽子が ある, ない, 似合う, 合う, マッチする, 大きい, 小さい, ゆるい, きつい, 丸い, 四角い, 山高だ, 幅広だ。  
帽子を かぶる, 脱ぐ, 飛ばす, 取る, 投げる, 気に入る, 合わせる, 揃える, 組み合わせる, 置く, 掛ける, 買う, 売る。  
帽子に 飾りをつける。

<PRO>

帽子が できる。  
帽子を 作る, 仕立てる, あつらえる, 作製する, 生産する, 製造する, 製作する, 増産する, 減産する, 縫う, 編む。  
帽子に 編む。

次に、見出し語「胃」の用例を示す。

- (2) a. 父は 潰瘍ができたので胃を切った。  
b. 私は 胃が悪い。  
c. 兄は 五人前の料理を全て胃に 収めてしまった。

(2a)では具体物<CON>、(2b)では身体部分の機能<POT>、(2c)では内部空間<INT>として、それぞれ「胃」を捉えている。意味素性ごとにある述語欄には、それぞれ以下のような述語例を記載する。

<CON>

胃が ある, ない, 下がる, 小さい。  
胃を 切る。  
胃に ガンができる。

<POT>

胃が もたれる, 痛む, おかしい, 悪い, 弱い, 重い, 痛い, 丈夫だ。  
胃を こわす, 悪くする, 痛める。  
胃に いい, 良い, 悪い。

<INT>

胃が 空になる, 空だ, 空っぽだ。  
胃を 通る, 通過する, 洗浄する, からにする。  
胃に 入る, 入れる, 詰める。

ところで、必ずしも一つの述語は、同じ意味素性の述語欄だけに書かれるものではない。例えば、「いる」という動詞には「ある場所に生き物が存在する」という意味と、「所有状態で存在する」という意味とがあるため、「姉がいる」という場合、次のように、「姉」という名詞を別々の意味的側面で据えることになる。

- (3) a. 台所に 姉<HUM>が いる。  
b. 私に 姉<REL>が いる。

(3a)では特定の人<HUM>、(3b)では親族関係<REL>として「姉」を捉えている。このような場合は、「いる」という一つの述語を異なる意味素性の述語欄に同時に記載する。

また、「飲む」という動詞の場合は、意味に違いはないが、名詞句を飲食物<EDI>として捉える述語になると同時に、名詞句を液体<LIQ>として捉える述語にもなる。

- (4) a. 水 / 酒 / 牛乳 EDI を飲む。  
b. 水 / 酒 / 牛乳 LIQ を飲む。

よって、このような時にも一つの述語を異なる意味素性の述語欄に同時に記載する。

さらに、この「飲む」という述語は、いわゆる飲食物 <EDI>とは据えられない名詞句、例えば、「毒」や「薬」といった名詞句とも共起する。このような名詞句が見出し語の場合は、具体物 <CON> の述語欄に「飲む」を記載することになる。

- (5) a. 毒 / 薬 CON を飲む, 買う, 入れる。  
b. 水 / 酒 / 牛乳 CON を買う, 入れる。

飲食物として捉えられる「水」などの名詞句も「買う」や「入れる」などの述語と共起する場合は、その名詞句を具体物<CON>として捉えていることになるので、「毒」や「薬」と同様にそれらの述語を<CON>の述語欄に記載するが、「飲む」のような述語の場合は、一方は<EDI>と<LIQ>の述語欄に、他方は<CON>の述語欄にと、異なる意味素性の述語欄に記載する。

見出し語によって同じ述語を異なる意味素性の述語欄に記載する場合について、さらに「増築する」を例にとって説明する。

- (6) a. 本社 / 県庁 / 通産省 CON を増築する。  
b. 二階 / 部屋 PRO を増築する。  
c. 家 / 学校 / 別館 CON / PRO を増築する。

もと存在する建物を拡張するときは <CON>、そのような建物とは別に何かを建てるときは <PRO> として名詞句を捉えている。(6a)や(6b)のように、いずれかの解釈しか可能にならない場合は別として、その他の建物に関しては <CON> <PRO> いずれの意味素性の述語欄にも「増築する」を記述した。

また、「増築する」とよく似た述語に「改築する」があるが、建物を「改築する」場合、建物の一部を建て直す場合は <CON>、全部建て直す場合は <PRO> の素性を振る。

- (7) a. 本社 / 県庁 / 通産省 CON / PRO を改築する。  
b. 二階 CON / PRO を改築する。  
c. 家 / 学校 / 別館 CON / PRO を改築する。

「改築する」場合、<CON> <PRO> 両方の捉え方が可能であるため、いずれの素性の述語欄にも記載した(「部屋」と「改築する」は結びつきにくいいため、見出し語「部屋」の述語欄に「改築する」は記載されない)。なお、「新築する」場合は、明らかに建築物を無からつくることになり、名詞句には、<CON>ではなく <PRO> の素性を振る方が無難である。よって、「新築する」は <PRO> の述語欄にのみ記載した(この時、「二階」と「新築する」は結びつきにくいいため、見出し語「二階」の述語欄には「新築する」は記載しない)。

### 3.2 記載項目

共起する述語を、その述語の「品詞」と、見出し語とその述語を介する「助詞」の種類によって分類する。品詞は、動詞、形容詞、形容動詞、名詞に分類した。助詞は、「ガ」、「ヲ」、「ニ」、「他」（ガ、ヲ、ニ以外の助詞）、「副二」（連用修飾する際の助詞）とに分類した。それらの品詞と助詞の組み合わせごとに記載項目欄を設けた。

意味素性ごとに記載される記載項目は、以下の通りである。

素性 : 該当する意味素性  
素性番号 : その区分にある意味素性の通し番号  
素性数 : その区分にある意味素性の総数

動詞 | ガ : 格助詞ガを介して動詞の項となる時の用例  
動詞 | ヲ : 格助詞ヲを介して動詞の項となる時の用例  
動詞 | ニ : 格助詞ニを介して動詞の項となる時の用例  
動詞 | 他 : その他の格助詞を介して動詞の項となる時の用例  
動詞 | 副二 : ニを伴って動詞を連用修飾する時の用例  
形容 | ガ : 格助詞ガを介して形容詞の項となる時の用例  
形容 | ニ : 格助詞ニを介して形容詞の項となる時の用例  
形容 | 他 : その他の格助詞を介して形容詞の項となる時の用例  
形容 | 副二 : ニを伴って形容詞を連用修飾する時の用例  
名詞 | ガ : 格助詞ガを介して名詞 + ダの項となる時の用例  
名詞 | ニ : 格助詞ニを介して名詞 + ダの項となる時の用例  
名詞 | 他 : その他の格助詞を介して名詞 + ダの項となる時の用例

各項目の用例は、「+（プラス）」を区切り符号として用いて、「その他の格助詞 + 先行句 + 見出し + 後行句 + 格助詞 + 述語」の形式で記述する(注3)。例えば、見出し語が「ねこ【猫】」で、先行句や後行句を必要としない「飼う」という述語を記載する場合は、「ガ + +ねこ + +ヲ + 飼う」のように、間をつめて「+ +」と連ねる。また、同じ文型や先行句を用いる述語が複数ある場合には、述語欄に「,(コンマ)」で区切って列挙する。逆に、述語が同じでも異なる複数の文型で用いられる場合には、行を改めてその述語を繰り返して記載する。

述語欄に、見出し語以外の名詞句と格助詞を含む句を記載する場合は、その述語が句であることを明確にするため、格助詞の後ろに「|(たて棒)」を入れる。例えば、「+ +ねこ + +ガ + 毛を | 逆立てる」というように書く(「|(たて棒)」を用いて示す述語については、3.2.5で再び説明する)。

この他、特記すべき事柄があるときは備考欄に記載した。以下に、記述例を示す。

例：見出し語「ねこ【猫】」

[区分 01] 食肉目ネコ科の哺乳類の総称。

素性 : A M L  
素性番号 : 1  
素性数 : 1  
動詞 | ガ : + +ねこ + +ガ + 発情する, 丸くなる, 鳴く, ニャーと | 鳴く,  
木に | 登る, 毛を | 逆立てる, ネズミを | 捕まえる, のどを | 鳴らす,  
爪を | とぐ, のびを | する, しっぽを | 立てる。  
: ヲ + +ねこ + +ガ + 引っ掻く  
: ニ + +ねこ + +ガ + 擦り寄る, じゃれる。  
動詞 | ヲ : ガ + +ねこ + +ヲ + 飼う, 拾う, 捨てる, 抱く。

動詞 | 二 : ガ + + ねこ + + ニ + 鈴を | つける。  
 動詞 | 他 :  
 動詞 | 副二 :  
 形容 | ガ : + ( その / … ) + ねこ + + ガ + 大きい , 小さい。  
 形容 | 二 :  
 形容 | 他 :  
 形容 | 副二 :  
 名詞 | ガ : + ( うちの / … ) + ねこ + + ガ + 赤トラだ , 黒トラだ , 三毛だ , 雑種だ。  
 名詞 | 二 :  
 名詞 | 他 :  
 備考 :

続く各節で、「その他の格助詞 + 先行句 + 見出し + 格助詞 + 後行句 + 述語」の各項目欄についてくわしく述べる。

### 3.2.1 見出し欄

記載項目の「見出し」の欄に準じて、ひらがな、または、カタカナ表記で見出し語を記載する（参照：[第四章 2.1 見出し]）。

### 3.2.2 格助詞欄

見出し語と述語を介する格助詞を記載する欄である。「ガ」「ヲ」「ニ」の格助詞の場合は、その助詞名が記してある項目欄の格助詞欄に記載する。理由の「デ」「カラ」や、時間の「マデ」「カラ」「」、場所の「デ」「カラ」などの格助詞は、「ガ」「ヲ」「ニ」のいずれかと交替が可能な場合は、「ガ」「ヲ」「ニ」の各欄に「/」で区切って併記する。それ以外の場合は、「他」と記してある項目欄の格助詞欄に記載する。見出し語「うちゅう【宇宙】」の例を挙げる。

例：見出し語「うちゅう【宇宙】」

[区分 01] あらゆる天体を含んだ、ちきゅうの外に広がる空間。

動詞 | ヲ : ガ + + うちゅう + + ヲ + ただよう , 旅する。  
 動詞 | 二 : ガ + + うちゅう + + ニ + 存在する , 住む。  
           : ガ + + うちゅう + + ニ / ヘ + 旅立つ , 出発する。  
           : ガ + + うちゅう + + ニ / デ + ただよう。  
           : ガ , ヲ + + うちゅう + + ニ / ヘ + 打ち上げる。  
 動詞 | 他 : ガ + + うちゅう + + デ + 遊泳する。  
           : ガ + + うちゅう + + カラ + 帰還する。

見出し語が補足のデ格を伴う場合は、その見出し語に典型的と思われる用法がある場合に限って記載した（「電話」は殴るためのものではないので、「電話で殴る」は典型的とは言えない）。

記載例：

きのう<P I T> デ 終わる  
 台風の / ... 影響<R E S> デ 遅刻する。  
 若者の / ... 間<S P A> デ 評判だ。

除外例：

## 電話 デ 殴る

「ニ」を伴って述語を連用修飾する場合に、その二格が述語にとって必須要素ではなければ、必須要素である「ニ」とは区別して、「副ニ」という別項目欄の格助詞欄に表示する。よって、二格を要求する述語の場合は、格助詞「ニ」の項目欄に記載し、二格を要求しない述語の場合は、「副ニ」の欄に記載する。見出し語「こうふく【幸福】」の例を示す。

例：見出し語「こうふく【幸福】」

[ 区分 0 1 ] 現在の環境に十分満足できて、心が穏やかなこと。  
また、そのさま。

動詞 | ニ : ガ, ヲ ++ こうふく ++ ニ + する, 導く。  
: ガ ++ こうふく ++ ニ + なる。  
: ガ + (人類の / ...) + こうふく ++ ニ + つながる。  
: ガ ++ こうふく + (感) + ニ + ひたる。  
動詞 | 副ニ : ガ ++ こうふく ++ ニ + 暮らす, 過ごす, 生きる。

なお、デ格についても同様の区別は可能だが、その区別は非常に困難であるため、欄は分けていない。

見出し語が格助詞を伴わずに用いられる場合、格助詞欄には「 (ファイ) 」を記入する。見出し語「じかん【時間】」の例を示す。

例：見出し語「じかん【時間】」

[ 区分 0 5 ] 1 日を 2 4 等分したその一つひとつの長さ。

動詞 | ガ : (準備) ニ + ー / ニ / これだけの / ... + じかん ++ ガ + 必要に | なる。  
: カラ + ー / ニ / ... + じかん ++ ガ / + 経つ, 過ぎる, 経過する。  
動詞 | ヲ : ガ + ー / ニ / これだけの / ... + じかん ++ ヲ + 必要と | する。  
動詞 | ニ :  
動詞 | 他 : ニ + ー / ニ / ... + じかん ++ + かかる。

### 3.2.3 その他の格助詞欄

見出し語と述語を介する格助詞以外にも、その述語がとる格助詞がある場合、その格助詞を記載する欄である。例えば、「期待ヲかける」は、通例「～ガ～ニ期待ヲかける」のように使う。この時、その他の格助詞欄に「ガ」と「ニ」を記述する。（「期待ヲ」の「ヲ」葉格助詞欄に記述する）。

原則的には、格助詞だけを記載するが、名詞句例が特定される場合や、例示した方がわかりやすい場合は、その名詞句例を一例、格助詞とあわせて記載する。

その他の格助詞欄	先行句	見出し	後行句	格助	述語
ガ, ニ		きたい		ヲ	かける, 寄せる
ガ		きたい		ヲ	かける, 寄せる
(努力)ガ, (彼)ヲ		せいこう		ニ	導く
(その努力)ガ		せいこう		ニ	つながる
(その試合)ガ / ニ		しょうぶ		ガ	つく

トノニ | | ぼうし | | ガ | 合う, マッチする

上の例の「ガノニ」「トノニ」のように、格助詞が交替可能な場合は、「ノ」で区切って例示する。

「その他の格助詞」欄に格助詞だけを記載するのではなく、「述語」の部分に、その他の名詞句と格助詞を含めて句として記載した方がよい場合は、述語欄にその名詞句と助詞を述語との間に「| (たて棒)」を入れて記載し、その他の格助詞欄には、その格助詞を記載しない。述語欄に書く格助詞はひらがなで表記する。以下の例のように、「実ヲ努力ガ結ぶ」のように語順を変更してはいえないもの、「～ガ～ニいちごヲする」では意味が通じにくいものがこれに該当する。

他格助	先行句	見出し	後行句	格助	述語
ガ		どりょく いちご		ガ ヲ	実を   結ぶ ジャムに   する

### 3.2.4 先行句と後行句

見出し語によっては、見出し語に格助詞がついた形だけでは使われなかったり、使いにくい語がある。そのような語は、見出し語の前後にある種の語句を伴って使われる。

見出し語「代わり」の場合、「代わりをする」というだけでは舌足らずで、例えば「議長の代わりをする」というように、「～の」という先行句を伴った形で使われるのが通例である。また、見出し語「趣味」の場合は、「趣味の域を超える」の「の域」という後行句を伴って用いられる。

「遊ぶ」に対して「女遊びをする」「砂遊びをする」などの類は厳密に言えばむしろ合成語に属する範疇であるが、広く一般的に連語を記すという観点から、この類も場合にに応じて記述の対象とし、先行句に表示することにした。

#### (1) 先行句の記載例

他格助	先行句	見出し	後行句	格助	述語
ガ	課長のノ...	かわり		ヲ	する, 務める
ガ	母のノ...	かわり		ニ	なる
ガ	砂ノ女ノ...	あそび		ヲ	する
	(試合のノ出発のノ...)	えんき		ガ	決まる
ガ	(親のノ 明日出発せよというノ...)	さしず		ヲ	断る

- ・ 補足先行句が常に必要なものは( )をつけない。
- ・ 先行句があってもなくてもよいものには( )をつける。
- ・ 先行句がいくつかの候補から選べるものは「ノ」で数例示す。
- ・ 先行句がいろいろ予想できるときは「ノ」で数例示したあとに「ノ...」をつける。
- ・ 先行句に節がくる場合は、先行句欄にその具体例(ごく短いもの)を記述する。

(2) 後行句の記載例

他格助	先行句	見出し	後行句	助詞	述語
ガ		しゅみ	(の域)	ヲ	越える

・見出し語が「の」を介して他の名詞を修飾する用法は、被連体修飾用法の欄に詳しく記載したため、ここでは特徴的、かつ後行句がなくともコロケーションが成立するものがある場合、その一例を示す。

3.2.5 述語欄

動詞欄では、「ガある / ガない」が共起可能な場合、必ず記載する「ない」は動詞ではないが、「ある」と同列に扱うため、便宜的に動詞欄に記載する。

例えば、「(対象二)影響ガある」「(所有者二)子供ガない」などの場合は、その他の格助詞欄には「二」を記載しているが、その他の格助詞欄に「二」を記載するだけでは意味が通じにくい場合には、その他の格助詞欄に名詞句例も示した。

他の格助詞	先行句	見出し	後行句	格助	述語
		かど		ガ	ある, ない
二		えいきょう		ガ	ある, ない
二		こども		ガ	ある, ない
(話し)二		だっせん		ガ	ある, ない

また、「にする / になる」が共起する場合も必ず記載している。

他の格助詞	先行句	見出し	後行句	格助	述語
ガ, ヲ		かいじょ		二	する
ガ		かいじょ		二	なる

3.2 節でも述べた通り、「見出し + 助詞 + 述語」の、格助詞と述語の間に名詞句を示す方がよい場合は述語欄にその名詞句と助詞を述語との間に「| (たて棒)」を入れて記載する。このときの格助詞はひらがなで表記する。

他格助	先行句	見出し	後行句	格助	述語
		どりょく		ガ	実を   結ぶ
ガ		いちご		ヲ	ジャムに   する

述語は原則的に終止形を記載しているが、受動形・使役形・否定形・命令形・禁止形など、その形でしか用いられない場合にはそれをそのまま記載する。

例：自信 ガ 窺われる  
 : 自信 ヲ 覗かせる

「する」や「なる」が連用修飾を受けている場合、その全体を述語欄に記載する。

例：野菜 ガ 長持ちする  
 りんご ガ 赤くなる

次に、述語の表記の仕方に関して述べる。

原則的には、述語に漢字表記がある場合は、漢字表記を用いて記載する。ただし、漢字表記も可能であるが、通常は平仮名表記が用いられやすいというものも存在するので、その場合は、平仮名表記を優先して記載する。

例えば、何かを片付けることを「しまう」と言うが、この動詞は漢字を用いて「仕舞う」とも表記することができる。しかし、一般に用いられるのは平仮名表記の方である。また、「仕舞う」と表記される時に、特に結びつきが強くなる名詞句というものも実例を見るかぎり見受けられない。そこで、述語として記載するものは「しまう」という平仮名表記のみにする。

他格助	先行句	見出し	後行句	格助	述語
ガ,ニ		セーター		ヲ	しまう

前途の「ある」「ない」も、平仮名表記を用いる述語例にあたる。

特に読み仮名が必要と思われる漢字が用いられる述語は、以下のように( )を用いてその中に読み仮名を記入する。

他格助	先行句	見出し	後行句	格助	述語
		たいよう		ガ	量(かさ)をかぶる

このような漢字と思われるものに関しては、平仮名でのみ表記するののも一つの方法ではあるが、上の例のような場合、「太陽」という名詞句との結びつきの強さや、その他の同音異義語「傘」や「笠」との識別を考慮すれば、「量」という漢字表記を用いたものを記述すべきである。そこで、読みをつけて漢字表記を用いて記載する方法をとる。また、「生(な)る,生(む)す」のように、読みが複数あってまぎらわしい場合も読みを表示する。

以上述べたように、述語は、漢字表記あるいは平仮名表記のいずれかの表記で記載する。これは冗長性を避けるためである(注4)。ただし、両者に意味的差異が生じない述語でも、次のように漢字表記が異なるようなものについては、どちらの表記のものも記載する。

他格助	先行句	見出し	後行句	格助	述語
		かんけい		ヲ	断つ,絶つ

### 3.3 「述語の項としての用法」がない場合

まれに、「述語の項としての用法」がない場合がある。その場合、『計算機用日本語基本名詞辞書 I P A L (Basic Nouns) 辞書編』においては、<項の用法>そのものが印刷されず空欄となる。ただし、『計算機用日本語基本名詞辞書 I P A L (Basic Nouns) F T P 版』では、以下のようなレコードが作られる。

例：見出し語「こてい【固定】」

< 項の用法 >

区分番号 : 03  
素性 : NON 組成は「NON」  
素性番号 : 1 素性番号は「1」  
素性数 : 1 素性数は「1」  
動詞 ガ : 以下無記入  
動詞 ヲ :

・このときの「区分」辞書のレコードは、以下のようになっている。

< 区分 >

区分番号 : 03  
素性 : 固(こ)定(てい)  
意味記述 : そのものに定まっているさま。  
素性数 : 1 素性数は「1」  
意味素性1 : NON 素性は「NON」  
用例1 : 無記入

### 3.4 備考欄

統語的、意味的に特記すべき事柄があるときに記載した。また、同じ述語が、他の意味素性の述語欄または《慣用表現》欄に重複している場合は、その旨を注記した。

例：見出し語「あし【足，脚】」

< 区分 >

[区分01] 動物の胴に付属し、歩行や体を支える機能を果たす部分。  
[区分05] 椅子などの下部で、台の部分や上にある物を支える役割を果たす部分。

< 項の用法 >

区分番号 : 01  
素性 : CON  
素性番号 : 1  
素性数 : 2  
動詞 ガ : 二++あし++ガ+ある, ない。  
          : ++あし++ガ+しびれる, 折れる。  
動詞 ヲ : ガ++あし++ヲ+ひきずる, 折る, 組む, のばす, ひっこめる,  
          : 怪我する, 手術する, 投げ出す, 曲げる, 出す, 向ける, 入れる,  
          : 踏み出す, 上げる, そろえる, すべらす, 洗う。  
動詞 二 : ガ++あし++二+怪我を する。  
動詞 他 : ガ, (戸)ヲ++あし++デ+閉める。  
動詞 副二 :  
形容 ガ : ++あし++ガ+長い, 短い, 細い, 太い。  
形容 二 :

形容 他 :  
 形容 副二 :  
 名詞 ガ : ++ あし ++ ガ + きれいだ。  
 名詞 二 :  
 名詞 他 :  
 備考 : 「折れる, 折る, 長い, 短い, 細い, 太い」は 0 5 <CON>にも有り。  
 「足をのばす / とられる / 洗う」は、《慣用表現》にも有り。

区分番号 : 0 5  
 素性 : CON  
 素性番号 : 1  
 素性数 : 1  
 動詞 ガ : + ( 机の / ... ) + あし ++ ガ + 折れる, 壊れる。  
 動詞 ヲ : ガ + ( 机の / ... ) + あし ++ ヲ + 折る, つけかえる, 修理する。  
 動詞 他 :  
 動詞 副二 :  
 形容 ガ : ++ あし ++ ガ + 長い, 短い, 細い, 太い。  
 形容 二 :  
 形容 他 :  
 形容 副二 :  
 名詞 ガ :  
 名詞 二 :  
 名詞 他 :  
 備考 : 「折れる, 折る, 長い, 短い, 細い, 太い」は 0 1 <CON>にも有り。

#### 4. 記載例

最後に、見出し語「くるま【車】」の[区分 0 2]の記載例を示す。

例：見出し語「くるま【車】」

< 区分 >

- [区分 0 1] 円形で回転するもの。
- [区分 0 2] 原動機をとりつけた移動、運搬用の乗り物。乗用車、トラック、バスの類。
- [区分 0 3] 商売として人や物を運搬するもの。特に貸し切りで使うタクシー、ハイヤーの類。
- [区分 0 4] 車輪をとりつけた運搬具。リヤカー、台車、猫車の類。

< 項の用法 > ( [区分 0 2] )

素性 : AUT  
 素性番号 : 1  
 素性数 : 4  
 動詞 ガ : ヲ ++ くるま ++ ガ + 走る, 行く。  
 : ニ / ヘ ++ くるま ++ ガ + 走る, 着く。  
 : ニ ++ くるま ++ ガ + 止まる, 追突する, ぶつかる, 衝突する。  
 : ++ くるま ++ ガ + 故障する, 出る, 混む, スピードを 出す, スピード

を 落とす，人を はねる，人を 轢く，急発進する，急停車する。

動詞 ヲ : ガ + + くるま + + ヲ + 出す，運転する，飛ばす，ぶつける，止める，降りる，ストップさせる，バックさせる，乗り回す，乗り捨てる。

動詞 ニ : ガ + ( 電車をやめて / ... ) + くるま + + ニ + する  
: ガ + + くるま + + ニ + 乗る，同乗する，分乗する，はねられる，ひかれる，気をつける，追突する，ぶつかる。

動詞 他 : ガ + + くるま + + デ + 行く，帰る，送る。  
: ガ，カラ，ニ / ヘ，+ + くるま + + デ + 運ぶ。  
: ガ，ヲ + + くるま + + デ + ひく。  
: ガ + + くるま + + カラ + 降りる，出る。

動詞 副二 :

形容 ガ : + + くるま + ( の音 ) + ガ + うるさい。

形容 ニ :

形容 他 :

形容 副二 :

名詞 ガ :

名詞 ニ :

名詞 他 : マデ + + くるま + + デ + 20 分だ。

備考 : 「電車が混む，バスが混む」は電車の中、バスの中が人でいっぱいになることを表すのに対し、「車が混む」は「道が混む」ことと同義で、道路が車でいっぱいになることを表す。

素性 : C O N

素性番号 : 2

素性数 : 4

動詞 ガ : ニ + + くるま + + ガ + ある，ない。  
: + + くるま + + ガ + 壊れる。

動詞 ヲ : ガ + + くるま + + ヲ + 潰す，修理する，直す，壊す，洗う，磨く，利用する，使う，持つ。  
: ガ，カラ + + くるま + + ヲ + 買う，借りる。  
: ガ，ニ + + くるま + + ヲ + 売る，貸す。  
: ガ + + くるま + + ヲ + 買い替える。  
: ガ + + くるま + + ヲ + スクラップに する，車検に 出す。

動詞 ニ :

動詞 他 :

動詞 副二 :

形容 ガ : + + くるま + + ガ + 大きい，小さい，新しい，古い。

形容 ニ :

形容 他 :

形容 副二 :

名詞 ガ :

名詞 ニ :

名詞 他 :

備考 :

素性 : I N T

素性番号 : 3

素性数 : 4

動詞 ガ :

動詞 ヲ : ガ + + くるま + + ヲ / カラ + 降りる，出る。

動詞 二 : が + + くるま + + ニ + 入る, 乗り込む。  
           : ガ, ヲ + + くるま + + ニ + 乗せる, 積む, 積み込む, 入れる。  
 動詞 他 : ガ + + くるま + + デ + 寝る, 眠る。  
           : ガ, ヲ + + くるま + + カラ + 降ろす, 出す。  
 動詞 副二 :  
 形容 ガ : + + くるま + + ガ + 広い, 狭い。  
 形容 二 :  
 形容 他 :  
 形容 副二 :  
 名詞 ガ :  
 名詞 二 :  
 名詞 他 :  
 備考 :  
  
 素性 : P R O  
 素性番号 : 4  
 素性数 : 4  
 動詞 ガ : + + くるま + + ガ + できる。  
 動詞 ヲ : ガ + + くるま + + ヲ + 作る, 生産する, 製造する, 増産する, 減産する。  
  
 動詞 二 :  
 動詞 他 :  
 動詞 副二 :  
 形容 ガ :  
 形容 二 :  
 形容 他 :  
 形容 副二 :  
 名詞 ガ :  
 名詞 二 :  
 名詞 他 :  
 備考 :

## 注

1. 以下に、ファース(1975)が「コロケーション」に言及している箇所を二ヶ所引用する。

これに関連して、私は自分の著作の中に紹介しているコロケーション[collocation]という概念を提唱したいと思います。これは鍵語[key-word]、枢軸語[pivotal Words]、主要語[leading-words]を、それらが普通いっしょになる仲間と共に示すことによって、研究することです。すなわち、それらの語の意味の一つの要素が、それらといつも相伴って現れる[他の]語が示された場合に明らかにされるのであります。提示されるコロケーションは普通完全な文であるべきですが、それが会話であれば、コロケーションはそれに先だつ話し手やそれに続く話し手の発話にまで広げられるべきであります。また、ありふれた語がその中に現れるコロケーション的複合語およびコロケーション的な句に注目することも有益であります。(「記述言語学と英語の研究」p.134)

研究の対象である語がその中に現れる習慣的コロケーションは、ごく簡単に言えば、単なる語の同伴者[accompaniment]であって、問題の語が最も普通に、あるいは、最も特徴的に、その中にはめ込まれている、他の語素材なのである。cows[牝牛]と

いう語の「意味」の一部は They are milking the cows. [彼らは牝牛の乳をしぼっている。]とか Cows give milk. [牝牛は乳を与える。]というようなコロケーションによって示され得る、と述べてもまず差し支えなからう。 tigresses [牝虎]や lionesses [牝獅子]という語はそのようなコロケーションに現れず、コロケーションのレベルにおいてその意味が既に明瞭に区別されているのである。(「言語学理論(1930-55)の概要」p.219)

2. ただし、「しっぽを出す」「腕が鳴る」のように単語の連鎖全体が一つの意味をもつ「慣用句」はコロケーションから除外する。「慣用句」は<慣用句等>《慣用表現》の欄で取り上げている[第八章 1.「慣用表現」について]。また(b)については<連体用法>[第六章 連体修飾語としての用法]、(c)については<被連体1>[第六章 連体被修飾語としての用法1]で取り上げている。
3. 報告書版では、この区切り符号「+ (プラス)」は印刷せずに、「その他の格助詞」と「先行句」との間、「格助詞」と「述語」との間に「 」を入れて示す。また、見出しを「 」で示している。
4. 漢字と平仮名いずれによる表記も普通に用いられやすい述語や、送り仮名の仕方が複数あるような述語に関しては、網羅的なチェックを行っていないため、記述の仕方に揺れがある。

#### 参考文献

- 青山文啓・橋本三奈子(1990)見出し情報,『計算機用日本語基本形容詞辞書 I P A L (Basic Adjectives)辞書編』情報処理振興事業協会, pp.7-13.
- 猪塚元(1993)辞書におけるコロケーションの記述について,『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究』12, 情報処理振興事業協会, pp.137-153.
- 桑畑和佳子・橋本三奈子・井口厚夫・猪塚元・村田賢一(1994) I P A L 名詞辞書におけるコロケーションの記述,『第13回技術発表会論文集』情報処理振興事業協会, pp. 73-76.
- 城田俊(1991)『ことばの縁』リベルタ出版.
- 橋本三奈子・桑畑和佳子・村田賢一(1993)コーパスデータに基づく名詞コロケーションの辞書記述,『情報処理学会第47回全国大会論文集』 3-63.
- ファース,J.R. (1975)『ファース言語論集( )1952-59』ed.by F.R.Palmer,大東百合子訳 研究社.
- 宮島達夫(1972)『動詞の意味・用法の記述的研究』(国語研報告43)秀英出版.

## 連体修飾語としての用法

### 1. 連体修飾語としての用法について

I P A L 名詞辞書では、名詞の連体修飾語としての用法（以下、「連体用法」と呼ぶ）として、見出し語が「ノ」「ナ」を介して名詞または名詞に相当する語句を修飾する用法を扱う。

例 《見出し》 うちゅう【宇宙】

宇宙のかなた，宇宙の果て，宇宙の中心，宇宙の旅，宇宙の開発，  
宇宙の利用，宇宙の無重量状態，宇宙の姿，宇宙の見方，宇宙の神秘，  
宇宙の口マン，宇宙の営み，宇宙の真理。

《見出し》 か て い 【 家 庭 】

家庭のしつけ，家庭の機能，家庭の役割，家庭の平和，家庭の事情，  
家庭のゴタゴタ，家庭の崩壊，家庭の悩み，家庭の環境，家庭の経済，  
家庭支出，家庭の収支，家庭の主婦，家庭の食事，家庭の味，家庭の中，  
家庭の責任。

《見出し》 あきらか【明らか】

明らか間違い，明らか因果関係，明らか証拠，明らか事実，  
明らか故意，明らか兆し，明らか素人。

### 2. 記載項目

「連体修飾語としての用法」<連体用法>における記載項目は以下の通りである。

NPO ノ :  
NPO ナ :  
NPO ノ/ナ :  
連体文例 :  
連体備考 :

#### 2.1 《NPOノ》

《NPOノ》の欄には、「見出し語＋ノ＋名詞」の形をとって、見出し語が「ノ」を介して修飾する関係にある名詞の用例をあげる。

#### 2.2 《NPOナ》

《NPOナ》欄には、「見出し語＋ナ＋名詞」の形をとって、見出し語が「ナ」を介して修飾する関係にある名詞の用例をあげる。

#### 2.3 《NPOノ/ナ》

《NPOノ/ナ》の欄には、見出し語が「ノ」「ナ」のどちらもとりうる名詞の用例をあげる。

## 2.4 《連体文例》

《連体文例》欄には、「NP0ノ」の任意の一語を用いた例文をあげる。「NP0ナ」がある場合は「NP0ナ」のなかから任意の一語を用いた例文もあげる。

なお、特記すべき事柄があるときは《連体備考》欄に記載した。

## 3. 「形容動詞」あるいは「ナ形容詞」について

『IPAL名詞辞書』でとりあげた名詞のうち、「明らか」「悪質」「鮮やか」などの「ナ」を介して連体修飾をつくる名詞は一般に「形容動詞」とする考え方と「ナ形容詞」とする考え方とがある。

形容動詞と見る立場は、「明らかだ」「悪質だ」「鮮やかだ」などの「ダ」でおわる形を終止形とし、「明らか」「悪質」「鮮やか」を形容動詞語幹と据え、「明らかだ」「明らかに」などの「ナ」「ニ」を活用語尾とするものである。形容動詞はそれを品詞として認めるか否かで議論があり、形容動詞という品詞を認めない立場では、いわゆる形容動詞語幹を名詞として考え、その名詞に「ダ」「ナ」「ニ」などが接続しているものとする。また、日本語教育などではこれらの語を形容詞の一つとして考える立場をとっており、「イ」で終止するものを「イ形容詞」、「～ナ」の形の連体形があれば「ナ形容詞」としている。ここでは、品詞の議論にまで深くは立ち入らない。

### 3.1 形容動詞辞書と名詞辞書

IPALでは平成4年刊行の「ソフトウェア文書のための日本語処理の研究 - 11 - 計算機用レキシコンのために(3) - 」において「形容動詞辞書」として以下の30の見出し語を扱っている。

1. あきらか / 2. いろいろ / 3. おなじ / 4. かいてき / 5. かって / 6. きらい / 7. きれい / 8. けんこう / 9. こゆう / 10. さわやか / 11. しずか / 12. しんばい / 13. じょうず / 14. すき / 15. スムーズ / 16. たしか / 17. だめ / 18. とうぜん / 19. とくべつ / 20. ひじょうしき / 21. ひま / 22. ふかい / 23. ふけいざい / 24. へた / 25. へん / 26. まっくる / 27. むかんしん / 28. むりかい / 29. らんぼう / 30. りっぱ

これらは形容動詞としての枠組みで記載されたものである。IPALはこれらの語が形容動詞か名詞か、あるいは形容詞であるかという議論のどの立場にも立つものではないが、今回のIPAL名詞辞書では上記の30語のうち、「1. あきらか」から「10. さわやか」までの10語を名詞の枠組みで取り上げることによって、これらの語の名詞的側面を重視することにした。IPALでは現在のところ「動詞」「形容詞」「形容動詞」「名詞」などのように品詞別に辞書作りを行っている。将来的にはこれらの辞書の統合、拡張を目標としているが、現在のところは、それぞれの辞書の異なった枠組みで、あらゆる側面から見出し語を扱っている段階である。形容動詞辞書と名詞辞書でも、重複して扱った見出し語が含まれてはいるが、枠組みは異なっており、記載事項にも違いがある。

名詞辞書の枠組みで記載することで生じた具体的な差異は次のようなものである。

#### a. 区別の違い

形容動詞辞書に取り上げた語を名詞として扱うことによって以下の例のように区別に違いが生じた。

例1のように「勝手」は形容動詞辞書、名詞辞書ではそれぞれ以下のように区分される。

例1 《見出し》 かって【勝手】

## 形容動詞辞書

語義番号：0 1

意味記述：自分の都合だけを考えている。

語義番号：0 2

意味記述：他の人の同意や許可を得ていない。

## 名詞辞書

区分番号：0 1

意味記述：自分のしたいように振る舞うさま。

区分番号：0 2

意味記述：物事をうまく進めたり、その環境にうまく適応したりするのに適したやり方

区分番号：0 3

意味記述：生活を支える、経済的な状況。

区分番号：0 4

意味記述：（家の中で）炊事を行うために設けられた場所。台所。

例1「勝手」では名詞として扱うことによって、あらたに0 2、0 3、0 4の区分が生じている。0 2には「勝手がちがう」、0 3には「勝手が苦しい」、0 4には「お勝手」「勝手口」などの用法が含まれる。

例2 《見出し》 きらい【嫌い】

## 形容動詞辞書

語義番号：0 1

意味記述：（私は）何かに対していやな感じを持ったり、憎しみを感ずたりする。

語義番号：0 2

意味記述：何かに対していやな感じを持ち、遠ざけたいという気持ちが強い。

## 名詞辞書

区分番号：0 1

意味記述：自分の好みに合わず、嫌だと思ふこと。

区分番号：0 2

意味記述：（行動や考え方などの）あまり好ましくない傾向。

例2「嫌い」では、形容動詞辞書の語義番号0 1と0 2が、名詞辞書では区分番号0 1にまとめられ、あらたに0 2の「すぐに腹をたてるきらいがある」などの用法をふくむ区分がたてられている。

これらの例でみたように、形容動詞という枠組みでは現れてこない区分が名詞ではあらたに作られたり、形容動詞辞書でより詳しく区分されていたものが、名詞辞書ではまとめられるなどということがあった。形容動詞辞書では述語用法の文型の違いや、感情・感覚を表すか、あるいは属性を表すかの違いに注意して区分を行ったのに対し、名詞辞書では第二章に書かれている区分の基準を用いて区分したためである。特に形容動詞辞書の枠組

みでは有効であった感情・感覚を表すか、あるいは属性を表すかの違いは、名詞辞書の枠組みにおいては述語用法における文型の違いに過ぎず、区分するだけの情報の差がないことがわかった。

b. 「述語の項としての用法」の違い

形容動詞辞書には記載されない情報に「述語の項としての用法」がある。次の例1「健康」は形容動詞辞書では「健康ナ」「健康ダ」などのいわゆる形容動詞としての用法のみがあげられるが、名詞辞書には加えて「健康ガ」「健康ヲ」などの「述語の項としての用法」が記載されている。

例1 《見出し》 けんこう【健康】

[区分01] 異常があるか、ないかという面から見た心身の状態。

- 動詞 | ガ : ++けんこう++ガ+衰える, すぐれない。  
動詞 | ヲ : ガ+(親の/国民の/...) +けんこう++ヲ+調べる, 案じる, 気づかう, 心配する, ないがしろに|する。  
          : (悪性のウイルス)ガ++けんこう++ヲ+脅かす, むしばむ, 害する。  
動詞 | ニ : +(子供の/...) +けんこう++ニ+悪影響が|出る。  
          : ガ++けんこう++ニ+配慮する, 気をつける, 留意する, 不安を|持つ, 支障を|きたす。  
          : (放射線廃棄物)ガ+(人間の/...) +けんこう++ニ+影響を|及ぼす, 危険を|もたらす。  
動詞 | 他 :  
動詞 | 副二 :  
形容 | ガ : ガ+(高齢者の/...) +けんこう++ニ+良い, 悪い。  
形容 | ニ :  
形容 | 他 :  
形容 | 副二 :  
名詞 | ガ :  
名詞 | ヲ :  
名詞 | ニ : ガ+(人間の/...) +けんこう++ニ+有害だ, 無害だ。  
名詞 | 他 :

[区分02] どこにも悪いところがなくて、元気であること。また、そのさま。

- 動詞 | ガ :  
動詞 | ヲ : ガ++けんこう++ヲ+保つ, 維持する, 失う, 取り戻す。  
          : ガ+(家族の/...) +けんこう++ヲ+祈る, 祝す, 祝う。  
          : ガ+(人間の/...) +けんこう++ヲ+増強する, 増進する。  
          : ガ++けんこう++ニ+なる。  
          : ガ++けんこう++ニ+恵まれる。  
          : ガ, ヲ++けんこう++ニ+する, 育てる。  
動詞 | 他 :  
動詞 | 副二 : ガ++けんこう++ニ+育つ, 暮らす, 生きる, 過ごす。  
形容 | ガ :  
形容 | ニ :  
形容 | 他 :

形容 | 副二 :  
名詞 | ガ :  
名詞 | フ :  
名詞 | ニ :  
名詞 | 他 :

### c. 連体用法の情報の違い

連体用法に記載された情報は見出し語を修飾語としたときの、被修飾語である。形容動詞辞書では連体用法は「制限用法1」「制限用法2」に分けてそれぞれの情報が記載されている。以下に説明のため記載情報を簡略化して例を示す(詳しくは、次の報告書に収められている「連体用法」の項を参照:「計算機用日本語基本形容詞辞書 I P A L (Basic Adjectives) - 解説編 -」)。

例 《見出し》 むかんしん【無関心】

意味記述 : 何かに対して気を使ったり興味を持ったりしない。

制限用法1 : 人, 生徒, 国

制限用法2 : 国民性

《制限用法1》には、そこに示された被修飾語をガ格にたてて見出し語を述語とする文がつけられるものを記載しており、制限情報2にはそこに記載された被修飾語をガ格にたてて見出し語を記述とする文がつけられないものを記載している。このような見出し語を述語とする文をここでは「述語用法」と呼ぶ。

形容動詞辞書では述語用法の有無を制限用法1、2として区別して記載している。形容動詞辞書の制限用法1、制限情報2に記載されたものは見出し語とナを介して結びつく語の情報であるが、この中に「-ノ」の形が可能なものも含まれている。

例1 《見出し》 いろいろ【色々】

形容動詞辞書

[語義01] いくつかの異なった種類がある。

制限用法1 : 種類, 行事, 番組, 機械, 果物, 名前, 性格, 意味, 機能, 人生, レベル, 国籍, 分野, 趣味, 色, やり方, 方法

制限用法2 : /

名詞辞書

[区分01] さまざまな変化に富んでいるさま

N P O ノ :

N P O ナ :

N P O ノ / ナ : - の / な楽しみ, - の / な人生, - の / なできごと, - の / な方法, - の / なこと, - の / な考え。

連体文例 : 泣いたり笑ったりこの一年間いろいろなできごとがありました。

例2 《見出し》 こゆう【固有】

## 形容動詞辞書

[語義 0 1] 本来そなわっているものである。

制限用法 1 : 性質, 現象, 文化

制限用法 2 : /

## 名詞辞書

[区分 0 1] 本来備わっているさま。

N P 0 ノ : - の領土, - のもの, - の権利, - の欲求。

N P 0 ナ :

N P 0 ノ / ナ : - の / な性質。

連体文例 : 本州、四国、九州、北海道は日本に固有の領土だ。

[区分 0 2] そのものだけがもっているさま。

N P 0 ノ : - の文字, - の精神。

N P 0 ナ : - な性質

N P 0 ノ / ナ : - の / な文化。

連体文例 : ひらがなは日本固有の文字だ。

以上の例 1、例 2 でみるように、名詞辞書では形容動詞辞書にあったような《制限情報 1》、《制限情報 2》の区別、つまり用例にあげられた語が述語用法をとるかどうかについての情報は記載されないが、用例に記載された語がノをとるのか、ナをとるのか、あるいはノ、ナの両方をとり得るのかという区別を記載している。

以上述べたように、形容動詞語幹を名詞として扱うことにより、その見出し語が持つ用法を広く記載できる。『I P A L 名詞辞書』で形容動詞語幹を名刺として扱ったのは、この点を考慮したためである。

## 4. 記載方法

### (1) 用例について

連体用法の用例は I P A 所有のコーパスの実例の中から、区分された各区分の区分ごとに振り分けて記載する。例 1「公式」は[区分 0 1]「公に決められている方式。また、それにのっとって物事を行うさま。」[区分 0 2]「数学などで、変数を当てはめて解を導き出すための一般的な式。」の二つに区分されている。このとき「公式の行事」「公式の訪問」などは[区分 0 1]の用例とし、「公式の暗記」などは[区分 0 2]とする。例 2「穏やか」も同様の例である。

#### 例 1 《見出し》 こうしき【公式】

[区分 0 1] 公に決められている方式。また、物事の行いがそれにのっとっている様子。

N P 0 ノ :

N P 0 ナ :

N P 0 ノ / ナ : - の / な行事, - の / な訪問, - の / な式典, - の / な場,

- の / な報道 , - の / な会議 , - の / な論評 , - の / な表明 ,  
- の / なもの , - の / なこと。  
連体文例 : 公式の式典なので、正装してきてください。

[区分 0 2] 数学などで、変数を当てはめて解を導き出すための一般的な式。

N P 0 ノ : - の暗記 , - の理解 , - の証明。  
N P 0 ナ : x  
N P 0 ノ / ナ : x  
連体文例 : 数学の試験に備えて公式の暗記をした。

## 例 2 《見出し》 おだやか【穏やか】

[区分 0 1] 特別な変化がなく、静かで落ち着いているさま。

N P 0 ノ : x  
N P 0 ナ : - な海 , - な風 , - な流れ , - な天気 , - な時代 , - な表情 ,  
- な内需拡大 , - な声 , - な一日。  
N P 0 ノ / ナ : x  
連体文例 : 目の前に穏やかな海がひろがる。

[区分 0 2] 静かで角が立たないさま。

N P 0 ノ : x  
N P 0 ナ : - な考え方 , - な話し合い , - な態度 , - な口調 , - な状態 ,  
- な関係。  
N P 0 ノ / ナ : x  
連体文例 : それは穏やかな考えではありませんね。

## (2) 区分ごとの用例の差がないものについて

例 1 「せんしゅ」は[区分 0 1]、[区分 0 2]の二つに区分されている。[区分 0 1]は、「せんしゅ」といわれるもの一般をさしており、[区分 0 2]はとくに「プロの選手」をさしている。その選手が「プロ」であるか否かの区別は一般に我々が認識しているところではあるが、連体用法の実例を見るとときには、問題にならない区別となる。「選手の育成」という実例はあるが、この場合「選手」はプロでもアマチュアでもどちらでもかまわない。このような場合は、どちらの区分の場合にも用いることができる例として両方に同じものを記載している。

## 例 1 《見出し》 せんしゅ【選手】

[区分 0 1] 代表として選ばれた競技者。

N P 0 ノ : - の育成 , - の要請 , - の成長 , - の活躍 , - の顔ぶれ ,  
- の気持ち , - の苦しみ , - の健康 , - の健闘 , - の力 ,  
- の個性 , - の限界 , - の高齢化 , - の体力 , - の働き ,  
- の反発 , - の不出来 , - の判断。  
N P 0 ナ : x  
N P 0 ノ / ナ : x  
連体文例 : 監督は常に選手の育成に努めてきた。

[区分02] 職業としてスポーツをする人。

N P 0 ノ : - の育成 , - の要請 , - の成長 , - の活躍 , - の顔ぶれ ,  
- の気持ち , - の苦しみ , - の健康 , - の健闘 , - の力 ,  
- の個性 , - の限界 , - の高齢化 , - の体力 , - の働き ,  
- の反発 , - の不出来 , - の判断。

N P 0 ナ : x

N P 0 ノ / ナ : x

連体文例 : この種目は選手の高齢化が可能だ。

### (3) 区分ごとに用例を分類することが困難であるものについて

連体用法の情報は通常区分ごとに分類して記載される。ただし以下の例1との「-の」の振り分けが難しい。「-の政治、-の防衛力、-の施策、-の財政、-の最高指導者」などは「政府」が記述の前提となっている。国家そのものが、政府抜きにはあり得ないものであることから、このような問題が生じるのだと考えられる。

例1 《見出し》 く に【国】

[区分01] 特定の地域とその住民から成り、それらを統括する権限をもつ、最大の行政単位。

N P 0 ノ : - のシンボル , - の伝統 , - の文化 , - の存亡 , - の存立 ,  
- の平和 , - の重要文化財 , - の天然記念物 , - の産業 ,  
- の経済 , - の政治 , - の行政 , - の景気 , - の活力 ,  
- の代表 , - の国際的責任 , - の財政 , - の予算 , - の資金 ,  
- の内外 , - の記念行事 , - の研究機関 , - の力 ,  
- の防衛力 , - の最高指導者 , - の首相 , - の首長 ,  
- の総理大臣 , - の立て直し , - の情勢 , - の施設。

[区分02] (地方自治体や個人に対し) 中央政府。

N P 0 ノ : - の管轄 , - の機関 , - の出先機関 , - の援助 , - の補助 ,  
- の補助金 , - の助成金 , - のお墨付き , - の仕事 , - の指導 ,  
( を受ける ) , - の特許庁 , - の力 , - の施策。

### (4) 用例の記載方法について

見出し語はハイフン「-」で表す。用例ごとにコンマ「,」で区切り、用例の最後は句点「。」が示している。この欄に記載する用例については後の5節に詳しく述べる。

例 《見出し》 こどく【孤独】

N P 0 ノ : - の影 , - の淵 ,

N P 0 ナ : - な人 , - な青年 , - な生活 , - な闘い , - な死 , - な人柄 ,  
- な人生。

N P 0 ノ / ナ : - の / な生涯

連体文例 : 彼は孤独の生涯を終えた。

(5) xあるいは空白について

見出し語の「NP0ノ」「NP0ナ」とも用例がなく、見出し語の連体用法がないと判断されたものについてはxで示した。その見出し語の連体用法がないとは断定されないが、用例が見つからなかったもの、あるいは思いつく範囲の自然な言い方がないものについては空白とした。以下の例に挙げた見出し語「したく(支度)」は「NP0ナ」「NP0ノ/ナ」に相当する連体用法はないものと判断したためxが記されているが、「NP0ノ」あるいは「ノ」を介した「連体文例」については適当な用例が見つからなかったものの連体用法があり得ることを示すため「空白」としている。

例 《見出し》 したく【支度】

[区分01] ある目的を果たす過程において必要なこと。また、そのようなことをこなすこと。準備。

NP0ノ :  
NP0ナ : x  
NP0ノ/ナ : x  
連体文例 :

(6) 「( )」による表示について

a. 見出し語の前後に付加する語がある場合

例1、2、3、にみるように、連体用法で見出し語の前後に付加された情報を「( )」によって示すことがある。例1は「提供の番組」では成り立たない例であるが、その前に「A社」を付加することで、「A社提供の番組」といった一般に通用している形を示した。カッコ内の語は具体的な会社名なども可能であり、「A社」に代わる例はいくつもあるが、ここではその一つを便宜的に示したものである。[区分02]の連体用法は、特にこの形の他に実例がなく、これがもっとも広く通用している形であると判断し、このように示した。例2も同様である。例3は実例にあげた言い方の他に用例がなく(注1)、この情報が例3の区分にもっとも中心的なものとなるためここに示した。

このように見出し語単独では成り立たない実例のうち、その見出し語に特に関連が深く、有用な情報と判断されたものは例にあげたように「( )」で何らかの語を付加しての示した。この場合カッコ内に示すような連体修飾句は省略できない。

例1 《見出し》 ていきょう【提供】

[区分02] テレビ番組などの作成、放送のために資金を供すること。また、それを行う人や組織。

NP0ノ : (A社) - の番組。  
NP0ナ : x  
NP0ノ/ナ : x  
連体文例 : A社提供の番組はいつもヒットする。

例2 《見出し》 く【国】

[区分03] ある方位にあること、特定の自然環境をもつことなどによって特徴づけられる地域。地方。

N P 0 ノ : (北の) - の出身。

N P 0 ナ : x

N P 0 ノ / ナ : x

連体文例 : 彼は北の国の出身だ。

### 例3 《見出し》 ゆたか【豊か】

[区分05] 身長を表す語について、基準をこえて十分にあることを表す。

N P 0 ノ : (六尺) - の大男。

N P 0 ナ : x

N P 0 ノ / ナ : x

連体文例 : 彼は六尺豊かの大男だ。

#### b. 省略可能な語を示す場合

次の例1は見出し語に「お」を付加した場合である。この場合、「お」を付加した形が一般的であると思われる。しかし「お」の有無の判断には個人差があり、「お」は省略も可能であることを示すために「( )」に入れて表示した。

### 例1 《見出し》 ちゃ【茶】

[区分06] 「ちゃ02」をたてて飲む作法。

\* 「ちゃ02」: 「ちゃ01」の葉を乾燥・加工して作る加工品。  
また、それに類した嗜好品。

\* 「ちゃ01」: ツバキ科チャ節の常緑低木。

N P 0 ノ : - の湯, (お) - の会, (お) - の作法。

N P 0 ナ : x

N P 0 ノ / ナ : x

連体文例 : 茶の湯は室町中期にはじまる。

#### c. 漢字の読みを示す場合

例1の「証」、例2の「搏動」などのように読みにくい漢字には「( )」で読みを示した。

### 例1 《見出し》 しあわせ【幸せ】

[区分01] 十分に満足していられる状態。

N P 0 ノ : - の証(あかし), - の絶頂

### 例2 《見出し》 しんぞう【心臓】

[区分01] 生命を維持するために拍動により、体内に血液を循環させる臓器。

N P O ノ : - の鼓動 , - の搏動 ( はくどう ) , - の活動 , - の機能 ,  
- のはたらき , - のペースメーカー , - の筋肉 , - の欠陥 ,  
- の外側 , - の肥大。

d . 用例に述語を付加する場合

用例にあげたもののなかで意味が取りにくいものには「 ( ) 」でそれにつづく述語の例を示した。

例 1 《見出し》 まんぞく【満足】

[区分 0 1] 思い通りで気分のいい状態になること。

N P O ノ : - の意 ( を表明する ) , - の行く結果。

例 2 《見出し》 ひなん【非難】

[区分 0 1] 他人の言動や態度を、悪いと言って責めとがめること。

N P O ノ : - の火 , - のタネ , - の演説 , - の応酬 , - の結集 , - の大合唱 ,  
- の文章 , - の論陣 , - の声明 , - の声 , - の目 , - の眼つき ,  
- の的 , - の標的 , - の矢面 , - の余地 , - の意味 ( をこめる ) 。

例 3 《見出し》 ひはん【批判】

[区分 0 1] よしあしを評価し、欠陥を指摘すること。また、その内容、程度。

N P O ノ : - の的 ( になる ) , - の矢面 , - の矢 ( を放つ ) ,  
- の声 ( が沸き上がる ) , - の空気 , - の一票 , - の口火 ,  
- の集中砲火 ( を浴びる ) , - の口調 , - の精神 , - の姿勢 ,  
- の形 , - の材料 , - の理由 , - のテコ , - の矛先 , - の対象 ,  
- の強さ , - の高まり。

(7) 「 [ ] 」による表示について

例 1、例 2 のように「菊地」「伊藤」などの実例が人名であることを「 [ ] 」で示した。このように実例にあげられたもののうち、その語が表すものがわかりにくいような場合には「 [ ] 」に入れて説明してある。

例 1 《見出し》 ちゅうもく【注目】

N P O ノ : - の菊地 [ 人名 ]

例 2 《見出し》 はしら 【柱】

N P O ノ : - の伊藤 [ 人名 ]

(8) 連体文例について

連体文例には用例にあげたもののなかから任意の用例を選んでなるべく自然な一文を示

した。用例にあげたもののなかで特に意味のとりにくいものがあれば、それを選ぶよう努めた。

例1 《見出し》 かくじつ【确实】

[区分01] 変更や失敗がなく、物事の実況が確かなさま。

N P 0 ノ : x  
N P 0 ノ : - な噂, - な返事, - な待ち合わせ時間, - なようす,  
- な見通し, - な予測。  
N P 0 ノ / ナ : x  
連体文例 : 明日には確実な返事がもらえそうだ。

例2 《見出し》 かんせつ【間接】

[区分01] じかでなく、間に何かが挟まっている状態。

N P 0 ノ : - の付き合い, - の関係, - の友達。  
N P 0 ナ : x  
N P 0 ノ / ナ : x  
連体文例 : 彼とは直接ではなくて間接の友達なんです。

## 5. 記載する用例について

連体用法はIPAが独自に作成した新聞記事や文芸作品などのコーパスに現れる実例からできるだけ網羅的に記載した。上記の資料から用例がとれない場合は一般的に考えうる範囲の用例を記載した。以下の例1、例2、例3のように、連体用法の「NP0ノ」には見出し語とその所有部分という関係の結びつきが現れることがある。例1の「くるま」などの機械とその部品、例2、例3の動物とその身体部分などである。これらのすべての所有部分はどこまで微視的に分解していくか境界が決めがたく、網羅的にあげることが現状では不可能であった。基本的にはIPAのコーパスに出現したものからピックアップした。

例1 《見出し》 くるま【車】

[区分02] 原動機をとりつけた移動、運搬用の乗り物。乗用車、トラック、バスの類。

N P 0 ノ : - の前, - の後, - の中, - のかけ, - のそば, - のわき,  
- の下, - の渋滞, - の出入り, - の騒音, - の駐車,  
- のローン, - の量, - の往来, - の修理代, - のナンバー,  
- のカギ, - のキー, - のトランク, - のボディ, - の屋根,  
- のヘッドライト, - のアンテナ, - のエンジン,  
- のフロントガラス, - のガラス, - のタイヤ, - のシート,  
- のワイパー, - のドア, - のクラクション, - の助手席,  
- のスピーカー, - のスピード, - の製造, - の生産,  
- の販売, - の修理, - の免許, - の運転, - の性能,  
- の安全, - の下敷き, - の轍。  
N P 0 ナ : x  
N P 0 ノ / ナ : x  
連体文例 : 沼地に車の轍が長く続いていた。

例2 《見出し》 ねこ【猫】

[区分01] 食肉目ネコ科の哺乳類の総称。

N P 0 ノ : - の毛, - のえさ, - の目, - の首, - の額, - の子,  
- の赤ちゃん, - の足跡, - の人形, - の啼き声。

N P 0 ナ : x

N P 0 ノ / ナ : x

連体文例 : 猫の鳴き声で一晩中眠れなかった。

例3 《見出し》 いぬ【犬】

[区分01] 食肉目イヌ科に属し、古くから労役用や愛玩用として広く飼育されている哺乳動物。

N P 0 ノ : - の鎖, - の遠吠え, - のなき声, - の声, - の舌, - の毛,  
- の頭, - の背, - の体, - の名, - の名前, - の牙,  
- の骨, - の血, - の血液, - の散歩, - の顔, - の視線,  
- のフン, - の飼い主, - の飼い方, - の飼育, - の放し飼い,  
- のルーツ, - の態度, - の姿, - のコンテスト,  
- のぬいぐるみ, - の絵, - のポチ。

N P 0 ナ : x

N P 0 ノ / ナ : x

連体文例 : 突然犬の舌が足に触れてびっくりした。

6. 用例に記載しないもの

I P A 所有のコーパスに実例があっても次項にあげる基準に該当する用例は記載しない。

(1) 慣用表現や作品名などである場合

例1 《見出し》 かめん【仮面】

実例: 「仮面の告白」

例2 《見出し》 ひみつ【秘密】

実例: 「秘密の花園」

例1、例2は作品名の実例であるので、この場合「-の告白」「-の花園」は「N P 0 ノ」としてとらない。

例3 《見出し》 ねこ【猫】

実例: 猫の手もかりたい。

例3は慣用表現の実例であるので、この場合「-の手」は「N P 0 ノ」としてとらない。

(2) 見出し語単独では用いられず、見出し語を修飾する語を必要として成っているもので、

見出し語の属性に関わりの薄い例である場合

例 1 《見出し》 うまれ【生まれ】

実例：アラビア生まれのコーヒー，香港生まれの中国人，長野県生まれの詩人，  
戦後生まれの言葉，昨年生まれの二歳魚

例 1 の「生まれ」は必ず前に修飾語を必要として成る語のため、見出し語単独で連体修飾することがない。このように見出し語単独で成り立つ用例でないものは記載しない。例えば「アラビア生まれのコーヒー」をみると、見出し語「生まれ」と「コーヒー」の関係は希薄であり、むしろ「アラビア」と「コーヒー」の関係が強い。このようにその実例が見出し語と強く関わらないと判断した場合は「NP0ノ」としてとらない。

例 2 《見出し》 かんかく【感覚】

実例：「鋭い感覚の持ち主」

例 3 《見出し》 せいせき【成績】

実例：「輝かしい成績の持ち主」

例 2、例 3 のような例は「鋭い」「繊細な」あるいは「輝かしい」「すばらしい」などの語と結びつくことで成り立つ関係であるため、見出し語単独で「感覚の持ち主」「成績の持ち主」などの連体用法をつくることがない。「鋭い感覚の持ち主」をみると見出し語「感覚」の情報として有用と思われるのは、むしろ「鋭い」などの修飾を受けることになって、「鋭い」と「感覚」の関係に比べて、「感覚」と「持ち主」の関係は緊密ではないと判断した。この場合、「-の持ち主」は「NP0ノ」としてとらない。

例 4 《見出し》 ぐるうぶ【グループ】

実例：「暴走族グループの壊滅作戦」「不良グループの溜まり場」  
「若き助手グループの青春」「詐欺グループの摘発」

例 4 のような場合はグループを特定する語がついて成る例であり、かつ、文脈の助けを必要とするものであるので、グループの属性に関わりの薄い例と判断する。よって、「-の壊滅作戦」「-の溜まり場」「-の青春」「-の摘発」などは「NP0ノ」としてとらない。

ただし、「-の発足、-の解散、-のリーダー、-の一員」などのようにグループの属性と近いものはコーパスの実例に「グループ」とあっても記載している。

見出し語単独では用いられず、見出し語を修飾する語を必要とする場合でも、記述者が情報として必要な例と判断した場合は次の例 5 のように、かっこつきで修飾語を示したものもある（かっこについては、「4. 記載方法 (6)「( )」よる表示について」の項を参照)。

例 5 《見出し》 きかん【機関】

[区分 0 1] 国家や邦人、団体などが特定の事柄に対応するために設けた組織。

NP0ノ : (出先) - の設置、(交通) - の整備。

N P 0 ナ : ×  
N P 0 ノ / ナ : ×  
連体文例 : 早急な交通機関の整備が必要だ。

例 5 の「機関」は「諮問機関、行政機関、出先機関」などの合成語で用いられるのが普通であり、見出し語単独では「N P 0 ノ」の形をとりにくい。見出し語単独で連体用法をつくるときも、ある合成語の省略である場合が多い。

ただし「- の設置」「- の整備」などは見出し語の属性に関連が深い情報であると判断したため、合成語の形をかっこで示した。このように見出し語単独で用いられない用法も見出し語の属性に関わりが深いものについては例外を認めた。

(3) 見出し語単独では用いられず、文脈の助けを必要として成っている場合

例 1 《見出し》 かい【貝】

[区分 0 1] 硬い殻をもつ軟体動物の総称。

実例：貝の管理

この場合「- の管理」は「貝の養殖」などを想定するなどの文脈の助けが必要とされる。このような実例は記載しない。ここには、「- の殻、- の種類」などを記載した。

(4) 極めて個別的である場合、または修辭的である場合

例 1 《見出し》 ぐるうぶ【グループ】

実例：「演劇グループのキンダースペース」「松下グループの銘柄」

例 1 の場合は、見出し語が単独では用いられない例であり、加えて非常に個別的な例であるため、「- のキンダースペース」「- の銘柄」は「N P 0 ノ」としてとらない。

例 2 《見出し》 よくぼう【欲望】

実例：市場には日本が失ってしまった欲望のざわめきが聞こえる…。

例 2 は、極めて修辭的かつ個別的な例であるので、「- のざわめき」は「N P 0 ノ」としてとらない。

## 7. 《連体備考》欄について

《連体備考》欄には連体用法、連体被修飾語としての用法で、特記すべき事柄を記載している。連体用法に関する特記事項の例は以下のようなものである。

### 7.1 述語用法について

「N P 0 ナ」の情報を主語として見出し語を述語とする文を、ここでは見出し語の述語用法と呼ぶ。次の例 1 で、N P 0 ナ用例に現れる「気分」がガ格に立つ、見出し語「ゆううつ」の述語用法は「気分がゆううつだ」などとなる。一方、「時、天気」では「時がゆううつだ」などという述語用法をつくらない。このように述語用法をつくるかどうかについて《連体備考》欄で注記することがある。

同様に例2では、NP0ナ用例に現れる「間違い」がガ格に立つ、見出し語「あきらか」の述語用法は「間違いは明らかだ」あるのに対し、「証拠、事実、故意、兆し、素人」の用例は「証拠は明らかだ」「証拠が明らかだ」などという述語用法を作らないと判断して注記している。

例1 《見出し》 ゆうつ【憂鬱】

NP0ノ : -の発作。  
NP0ナ : -な気分、-な声、-な仕事、-な顔、-な時、-な天気、  
-な一日。  
NP0ノ/ナ : x  
連体備考 : 「時、天気、一日」には述語用法なし。

例2 《見出し》 あきらか【明らかな】

NP0ノ : x  
NP0ナ : -な間違い、-な因果関係、-な証拠、-な事実、-な故意、  
-な兆し、-な素人、-な嘘。  
NP0ノ/ナ : x  
連体備考 : 「証拠、事実、故意、兆し、嘘、素人」は述語用法にすると  
「それが証拠/事実/故意/兆し/嘘であることは明らかだ」  
「彼が素人であることは明らかだ」などのように言うのが普通。

また、述語用法がないと思われるものには例3のように注記した。

例3 《見出し》 かすか【微かな】

NP0ノ : x  
NP0ナ : -な記憶、-な臭い、-な痛み、-な傷あと、-な光、-な音、  
-な微笑み。  
NP0ノ/ナ : x  
連体備考 : 通常、述語用法では用いられない。

次の例4の場合は、述語用法の形があり得ないのではなく、「大人は立派だ」「先生は立派だ」などとすると[区分01]の意味になることを示した。

例4 《見出し》 りっぱ【立派な】

[区分03] 十分であること。

NP0ノ : x  
NP0ナ : -な大人、-な先生。  
NP0ノ/ナ : x  
連体備考 : 述語用法なし。(述語用法にすると区分番号01の意味  
になる。)  
c.f. [区分01] 非常に優れていること。

## 7.2 連体用法について

例1のように[区分01]には連体用法の形があり得ないのではなく、連体用法になると

[区分02]の意味に引かれてしまうことを示した。

例1 《見出し》 れいたん【冷淡】

[区分01] 関心や興味を示さず、熱心でないこと。

NP0ノ : x

NP0ナ :

NP0ノ/ナ :

連体備考 : [区分02]の意味に引かれて、連体用法で[区分01]の意味にはなりにくい。

c.f. [区分02] 人に対する接し方がそっけなくて、同情を示さないこと。

次の例2「同じ」の場合は「NP0ノ、NP0ナ、NP0ノ/ナ」には記載情報がないが、連体用法がないわけではなく、「ノ/ナ」を介さず連体修飾するものであることを注記した。

例2 《見出し》 おなじ【同じ】

[区分01] 唯一無二であるさま。

NP0ノ : x

NP0ナ : x

NP0ノ/ナ : x

連体備考 : 「の/な」を介さずに「同じ学校」「同じ専攻」などという。

例3「黄色」の「NP0ナ」には「黄色なレモン」という実例があったが、これは特殊な表現と判断してとらなかつた。「NP0ナ」はxとしているが、実際には実例があったことを示した。

例3 《見出し》 きいろ【黄色】

[区分01] 三原色の一つで、固ゆで卵の黄身やタンポポの花のような色。

NP0ノ : -のタンポポ, -のレモン。

NP0ナ : x

NP0ノ/ナ : x

連体備考 : 「黄色なレモン」という実例もあり。

### 7.3 表記について

例1のように連体用法にあげた実例のなかで表記の書き分けがある場合はそれを示した。

例1 《見出し》 あたたか【暖か, 温か】

[区分01] 温度や気温が適度に高いこと。

NP0ノ :

NP0ナ : -な空気, -な小春日和, -な晴天の日, -な日, -な陽光, -な所。

N P 0 ノ / ナ :  
連体文例 : 老後は暖かな所に住みたいです。  
連体備考 : 「空気」のときは「温」を用い、「小春日和, 晴天の日, 日, 陽光, 所」には「暖」を用いる。

#### 7.4 その他

《連体備考》欄には連体用法に關することがらで記述の際に気づいたことを記してある場合がある。

##### 例1 《見出し》 こどく【孤独】

[区分01] 頼りになる人や心の通いあう人がいなくて、ひとりぼっちであること。また、そのさま。

N P 0 ノ : - の影, - の淵。  
N P 0 ナ : - な人, - な青年, - な生活, - な闘い, - な死, - な人柄, - な人生。  
N P 0 ノ / ナ : - の / な生涯。  
連体文例 : 彼は孤独な生涯を終えた。  
連体備考 : 「- の / な生涯」は「孤独の生涯を終える」などのように用いるときに「- の」が許容される。

##### 例2 《見出し》 あんしん【安心】

[区分01] 不安や心配がなく、心安らかに、落ち着いた気分ですらわれること。

N P 0 ノ :  
N P 0 ナ :  
N P 0 ノ / ナ : - の / な様子, - の / な設計。  
連体文例 : 知らせを聞いて彼は安心の様子だった。  
連体備考 : 「安心な椅子」のように、設計が丈夫にできていて安心できるといった省略に近い表現もある。

##### 例3 《見出し》 すき【好き】

[区分01] 心がひきつけられること。また、心にかなっているさま。

N P 0 ノ :  
N P 0 ナ : - な言葉, - な人, - な食べ物, - な酒, - な歌。  
N P 0 ノ / ナ :  
連体文例 : 最近、本好きな子供が少なくなった。  
連体備考 : 「好きなNP」と言うとき、例えば「好きな食べ物」といった場合食べ物のうちで「好きな」物を言っていて「NP」は限定されていることが多いが、「好きな推理小説を読む暇がない」は、限定のない「推理小説一般」も指しえる。「好きな酒を飲む」なども両方に解釈できる。

## 8. 記載例

「連体修飾語としての用法」 <連体用法> における記載例を以下に示す。

見出し語：「けんこう【健康】」

[区分 0 2]

NPO ノ : - の秘訣, - の証(あかし)。

NPO ナ : - なおばあちゃん, - な人, - なからだ。

NPO ノ/ナ:

連体文例 : これまでたいした病気もなく、あの人は本当に健康なおばあちゃんですね。

連体備考 :

## 注

1. 例3「豊か」は実例にあげた言い方の他に例がないことは《連体備考》に「例のような言い方の他に用例なし。」のように注記されている。

## 参考文献

『計算機用日本語基本形容詞辞書 I P A L (Basic Adjectives) - 解説編 - 』, 情報処理振興

事業協会, 1990, pp.82-90.

『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究』11, 情報処理振興事業協会, 1992, pp.253-417.

## 連体修飾語としての用法 1

### 1. 「連体被修飾語としての用法1」について

「連体被修飾語としての用法」（以下、〈被連体1〉とも呼ぶ）には以下のような例が含まれる。

《見出し》： 連体被修飾語としての用法例

学校	：	新しい「学校」
印刷	：	明日までに仕上げる「印刷」
延期	：	予想された「延期」
成功	：	チェーン化による「成功」
争い	：	熾烈な「争い」
左側	：	むかって「左側」
特徴	：	ファックスの「特徴」
援助	：	外国からの「援助」
相性	：	彼との「相性」
報道	：	A代議士が賄賂を受け取っていたとの「報道」

ここでは、これらのうち「ファックスの特徴」や「外国からの援助」、「彼との相性」のような、主に見出し語（またはNP0）が、直前に連体格助詞の「の」（以下、「ノ」と表記する）を介して名詞又は名詞句（以下、「NP1」と表記する）によって修飾される形の用法について、「連体被修飾語としての用法1」として記載した。「A代議士が賄賂を受け取っていたとの報道」のように見出し語の直前に「ノ」があっても修飾しているのが筋であると考えられる場合にはここでは表記しなかった。ただしその例が見出し語にとって必要な情報である場合には、「ノ」を介さないその他のものも含めて別に記載した。また他の用法に関連して重複する情報などは記載しなかった。それぞれの項目については2節で述べる。なおこの用法は見出し語の区分ごとに記載した。

### 2. 記載項目

見出し語の「連体被修飾語としての用法1」〈被連体1〉の用例は多岐にわたり、また限りなく多くの表現が可能であるためその全てを列記することは事実上不可能である。したがってこの用法をここでは次のように項目別に記載した。

〈被連体1〉

ノNP0	：	見出し語が「ノ」のみを介して名詞句の修飾を受ける例 （以下、NP1ノNP0）
ノNP0補	：	サ変動詞用法の有無など
～ノNP0	：	見出し語が「からの／への／との／での」を介して名詞句の修飾を受ける例
他NP0	：	見出し語がその他の修飾を受ける例
被連体文例	：	文例
被連体備考	：	注記事項

各用例は区分ごとに上の項目に従って記載する。

## 2.1 <ノNP0>

### 2.1.1 「NP1のNP0」について

《ノNP0》欄に記載する「NP1ノNP0」については修飾部が担う機能やそこに現れ得る語の範疇ごとにまとめて表記し、3節で述べられている分類規定にしたがって機能名を振った。記載する用例の選択に当たっては、まず「記述者の内容」と「例文データベースから機械的に抽出」という二つの方法をとった。機械的に抽出する際にとった方法は見出し語の前にノがつくもの、見出し語の後ろにひらがな、かたかな、句読点が続くものという条件にあてはまるものを例文データベースから取り出した。この結果得られたよう例をさらに頻度、典型例・日常性、あるいは多重読みが可能な例を中心に選択した。なお、「多重読みが可能な例」としては次のようなものがあげられる。

花子の話                    <主体> 花子がする話  
                             <対象> 花子についての話

名人の手                    <主体> 名人が打った手  
                             <評価> 名人らしい手

待合室の奥                 <全体部分> 待合室の奥の部分  
                             <基準> 待合室を基準にしてそれより奥

これらについては、どの意味かがわかりにくい場合には《被連体文例》欄に例文を記載した。また、ほかにも「NP1ノNP0」だけでは意味がわかりにくいものについては必要に応じて例文を記載した。

### 2.1.2 《ノNP0》欄の記述の対象から外した語

見出し語の「サ変動詞用法」をもとにしていると考えられるものについては「サ変動詞用法」で検討されているので、《ノNP0補》欄に「サ変動詞用法参照」と記載するのみにした。このように記載対象からはずしたものがある。以下にその条件をあげる。

(a) 見出し語のサ変動詞用法をもとにしていると考えられるもの。

関係者の逮捕                (関係者ヲ逮捕スル)  
大統領の任命                (大統領ヲ任命スル)

「逮捕」「任命」などのようにサ変動詞用法のある見出し語の場合、「関係者の逮捕」「大統領の任命」などの用例が見つかるが、この場合、()内の「関係者ヲ逮捕スル」「大統領ヲ任命する」といったサ変動詞用法を基にしていると考えられる。

サ変動詞用法欄には文型や意味素性を記載しており、サ変動詞用法と「NP1のNP0」の共起関係の可能性についても同欄に記載してあるため、ここでは対象にせず、このような用例がある場合には《ノNP0補》欄に「サ変動詞用法参照」と記載する。

(b) 以下のように、非常に多くのNP0と共起しうるようなタイプのNP1の用例はいちいち記載しない。

~のための                    <目的>の規準・用例参照  
~という性質の                 <性質>等の規準・用例参照  
~が特徴の                     <特徴>の規準・用例参照  
二つの、三個の               <数>の規準・用例参照

- (c) 「NP1のNP0」全体の意味が、それぞれの名詞句の意味の総和(特にその下位区分の意味記述)からあまりにもずれていると考えられるもの(参照:[第八章 慣用表現ほか])。

例 旅の「空」  
火の「車」

## 2.2 《ノNP0補》

見出し語が「からの/への/との/での」を介して名詞句の修飾を受ける例については「からの/への/との/での」のうちのどれがつかを記載した。  
また、サ変動詞用法がある場合にはこの欄に「サ変動詞用法参照」と記載した。

## 2.3 《ノNP0》

見出し語が「からの/への/との/での」を介して名詞句の修飾を受ける例がある場合に記述者の内省にしたがって必要と思われるものを記載した。

## 2.4 《他NP0》

見出し語がそのほかの修飾を受ける例がある場合記述者の内容にしたがって必要と思われるものを記載した。

## 2.5 《被連体文例》

すでに述べたように複数の区分に対して同じ「NP1のNP0」がある場合や複数の分類規定に対して同じ「NP1のNP0」がある場合、さらに名詞句例だけではわかりづらい場合に例文を記載した。

## 3. 分類規定

### 3.1 分類の枠組

「NP1のNP0」の分類は、大枠としては、

- (1) 「NP0」の「NP1」に対する規制の仕方
- (2) 「NP1」の「NP0」に対する修飾の仕方

の2つの観点から分類される。両方に共通する概念として、「NP」の意味素性・範疇分類および「NP1」と「NP0」を両者の意味関係を損なうことなく文に組み込んで言い表した時に表れる関係がある、すなわち、多くの場合、「NP1のNP0」という表現に対し、「NP1はNP0のFという機能を果たしている」「NP1はNP0のFにあたる」等と言い換えることができる、以下の用例で、機能Fを<>内に示す。

太郎の時計 <所有者> 太郎が所有している時計  
「太郎」はその「時計」の「所有者」

砂糖のお菓子 <材料> 砂糖でできたお菓子  
「砂糖」はその「お菓子」の「材料」



に、NP1を項としてとる構文を作成し、その場合に与えられる素性を記載した。ただし、網羅的に意味素性を振っているわけではない。

また、いくつかの素性が該当する場合には、意味素性を「」で区切って表示したが、記載する用例の方は区切りを入れずに列挙した。

- (c) []や{}による制約が表示してある場合は、論理的には、その範疇に属する語は生起し得ることになるが、語の組み合わせには習慣的な相性の良し悪しがある。従って、用例には、習慣的に普通に使われている例と、今現在比較的頻繁かつ自然に使われている例を中心に選んでいる。
- (d) 「NP1」に生起し得る語が極めて少なかったり、[]や{}によって範囲を示さずとも<>と外延的に生起し得る語を列挙する事で十分な場合は[]や{}を示さないこともある。

### 3.3 「NPのNP」の機能の分類

「NPのNP0」（以下、必要に応じて「AのB」と略儀）の機能分類は、（1）Aの意味素性のタイプ（特に具像性・抽象性・個別性・空間性・一般性・動性・静性といった類別）、（2）どのような述語と文型によってAとBとの意味関係を損なうことなく言い換え可能か、（3）Bの意味素性のタイプ、などを基準にして行った。

まず、大枠としては、（1）時空間の規定・限定、（2）具体化・内容補充、（3）関係者・対象の規定・補充、（4）性状・価値の規定・修飾、の4種に分けられる。以下、それぞれの諸機能の細かい分類と、その分類基準を示す。

なお、この分類規準例を列記するに際し、X(Y)はYを省略する場合と省略しない場合のどちらも可能であることを、また{x/y(/z)}にxとy(とz)のどれかが選択できることをそれぞれ意味している（「分類規準例」としたのは、判定規準が一意的ではないからである）。

### 3.4 「NPのNP」の機能の解説

次ページに、機能名と判断規準例の一覧を示す。この表の機能名欄に示した各機能名間の左右の位置のずれは、階層性を表している。すなわち、左にいくほどより一般的な範疇であり、右にいくほどより特殊な、すなわち制約・条件が一層付け加わるような範疇である。従って、それぞれの用例に機能名を振るにあたっては、より特殊な範疇の判断基準から順に該当するかどうかをチェックしてゆき、該当すればその機能名を当て、該当しなければその用例がより一般的な範疇の判断規準に該当するかどうかをチェックする、という風にして、機能名を割り当てていった。

また、すべての語に対して、これらの諸機能のすべてについて該当例があるかどうかを完全にチェックすることは、語法が時代とともに変貌することから考えてみても不可能に近いので、2節でも述べたように、「頻度」「典型例」「日常性」を中心に精選した。その結果、「NP0」が形容名詞や相対名詞の大部分のように「NP1の」不可欠な例の場合には可能な用例を必ず記したことはいうまでもないが、必ずしも省略不可能でない場合でも「具体化・内容補充」や「関係者・対象の規定・補充」を中心に、物事を認識する上で日常、念頭に置かれるべき要素については可能な限り記した。一方、「時空間の規定・限定」や「性状・価値の規定・修飾」のように、理屈の上ではかなり多くの「NP0」を修飾できる範疇の場合は、日常使う頻度の高い語を中心に選んで広く用例を拾っており、より頻度の高くない類義語に対しては用例を拾い出さなかった場合もある。例えば具象物であれば、その大多数が<場所><時間>、あるいは<評価><価値>等の修飾・限定を受けることが理屈上可能であるが、いちいち用例を記さなかったものも多い。

機能名 「AのB」の判断規準例

### 1 時空間の規定・限定

環境 AはBが生成・変化・展開していく環境

状況 「A [ LOC / TIM / ... ] に { 存在する / ある / 住む / 生きる / できた / 育った / ... } B 」等と言い換え可能なものを含む  
「A [ PRC / EVE / ... ] ( の場 ) に 「ある / いる / 居合わせた / おける / 際しての / ... B 」等と言い換え可能

場所 「A [ LOC { ある / おける / ... / } B 」等と言い換え可能

方向 「Aの { 方・方向 } のB」等と言い換え可能

発生源 「Aから { 来た / 出て来た } B」等と言い換え可能

部位 「Aの部分 { の / にある / にできた } B」等と言い換え可能

時間 「A [ PIT / TIM / ... ] の { 頃 / 時点で / 時間帯 / ... } のB」  
「A [ PIT / ... ] におけるB」等と言い換え可能

### 2 具来夏・内容補充

具体化 「A [ 具体 ] というB [ 抽象 ]」「Bを具体的に言えばAだ」  
「～はB [ ABS / ... ] がB」等と言い換え可能なものを含む

形式名詞補充 Bが形式名詞

内容 「Aの」が内容節に言い換え可能

関係事象 Bは事象Aの補語ないし副詞的要素、「Aは」を関係節に、  
または事象Aを述語化しBをその補語ないし副詞的要素に、  
または「Aに伴うB」「～のBを伴うA」等に言い換え可能

原因 「A [ 無生物 ] が { 引き起こす / もたらした } B」等と言い換え可能

結果 「Aが引き起こすB」等と言い換え可能

目的 Bが [ ABS / PRC / ACT / ... ] で  
「A { のため / 用 } のB」「Aが目的のB」等と言い換え可能

役割 「A { という / の } { 役割を担う / 仕事をしている / } B」  
「( その ) BはAの { 役割 / 機能 / ... } を果たしている」  
「AがそのBの役割だ」「Aを務めているB」等と言い換え可能

### 3 関与者・対象の規定・補充

対象 意味素性が [ CON ] [ PRC ] 「ANI」またはその下位、  
あるいは個別性・具体性が問え、他の下位機能に該当しないもの  
「Aを { V / ～する } B」「Aに対するB」「AについてのB」  
「Aに関するB」「AがもつB」「A [ 無生物 ] にとってのB」  
「AはBが～」等と言い換え可能なものを含む

対象\_\_V Bが述語、Aがその項になるような述語文に直すことができ、  
「Aを { V ( B ) / Bする }」等と言い換え可能なもの  
または、「Aが { V ( B ) / Bする }」等と言い換え可能なもの  
ただし後者の場合 { V ( B ) / Bする } が行為の動詞の場合を除く

対象\_\_a Bが述語、Aがその項になるような述語文に直すことができ、  
「AがAdj ( B )」「AがBだ」と言い換え可能なもの  
ただし「～はAがBだ」でAが [ ABS ] の場合は < 範疇 >

基準 Bが相対名詞で、Aはその基準となる物・事象

範疇 A [ ABS / FOR / ... ] は上位の類概念  
「Aに { ついての / 冠する } B」「～はAがBだ」等と言い換え可

比喩的転用 関与者	能, またはAが「～ {上 / 面 / 方面 / 関係 / 関連}」の場合を含む 「Aの」が省かれると本来の区分と解釈されるもの Aが [ H U M / A N I / O R G / ... ] で,
主体	<主体> <所有者> <対象_a> といったの範疇に該当しない 「AにとってのB」「Aが関わっているB」等と言い換え可能 「A [ H U M / A N I / O R G / ... ] がB (を) する」 または「Aが{V / Bする}B」と言い換え可能
所有者	「A [ H U M / A N I / O R G / ... ] はB [ 物 / 性質... ] の所有者 「Aが{もつ / 所有し / 所持し}ている」「AはBが～」 「Aは(～)Bをもっている」等と言い換え可能
所属	「A [ O R G ] に所属するB [ H U M / ... ]」等と言い換え可能
全体部分 含有	「Aの『Bの部分』」等と言い換え可能
構成要素	AはBを含むもので, 「Aに含まれているB」等と言い換え可能 AはBの構成要素, 「Aは(その)Bの{構成要素 / 物 / 員}」 「(その)Bの構成{要素 / 物 / 員}はAだ」「AからなるB」 「(その)BはAでできている」等と言い換え可能
材料	「Aが(その)Bの材料だ」「Aを使(って作られ)たB」 「(その)BはAを使って作られた」等と言い換え可能
用途	Bが [ C O N / ... ] で, 「A {のため / 用} のB」「A {に / で} 使うB」等と言い換え可能, またAが「～用」の場合を含む
手段	Aが [ C O N ] 以外で, 「Aを使ったB」「AによるB」等と言い換え可能で, 一般に「Aで出来上がったB」と言い換え不可
道具	Aが [ C O N ] で, 「Aを使ったB」「AによるB」等と言い換え可能で, 一般に「Aで出来上がったB」と言い換え不可

#### 4 性状・価値の規定・修飾

性質	A「A B S / K N D / ...」は類概念, 境界の明確性は問わない。 「AのタイプのB」「AらしいB」等と言い換え可能なものを含む またAが「～ {型 / 風 / 式 / タイプ}」の場合を含む
種類	A [ A B S / K N D / ... ] 協会の明確な類概念 「Aに分類されるB」「BはAに分類される」と言い換え可能,
特徴	「A ( {が / を / ... } ) ~」が特徴のB」「(その)Bの特徴はA ( {が / を / ... } ) ~」だ」等と言い換え可能
様態	「Aの{形 / 格好 / 色 / 感じ / ...}のB」等と言い換え可能
比喩 状態	「(替えて言えば)AのようなB」と言い換え可能 AはBの(一時的な)状態, 「Aの状態のB」と言い換え可能, またAが「～中」の場合を含む
順序	Aが [ O R D / ... ]
程度	「A程度のB」と言い換え可能, またはAが程度の副詞になれる
規準	Aは単位を表す「A [ 単位 ] {に対する / 分の / 相当の / あたりの / 平均の / ...} B」等と言い換え可能
量	Aが量的な [ Q U A / D U R / ... ]
数	Aが個数的な [ Q U A / ... ]
規模	Aが [ D I S / ... ]
評価	「 [ H U M / O R G / ... ] がAと{判断 / 評価} {する / した} B」 「AとみなされているB」等と言い換え可能
価値	「 [ H U M / O R G / ... ] にとってAのB」等と言い換え可能

以下、各機能の判断規準・言い換え例・用例を詳記する。

判断規準に示した言い換え文型は、判断規準の核となるものであるが、例外も多々あるので絶対条件ではない。また、各機能の一番上位にある4つの範疇の場合は、下位範疇に該当しなかったものを広く含むものであり、そこに示した言い換え文例は、単なる十分条件である。

### 3.4.1 時空間の規定・限定

ここでの基本範疇は〈場所〉と〈時間〉であるが、〈場所〉と〈時間〉に細分できないような場合もあり、従って、最上位の範疇として〈環境〉を立て、それに時空間的な局所性という限定を加えたものを〈状況〉とし、そのうち場所、時間のどちらかにさらに絞り込み可能な場合、〈場所〉〈時間〉に割り振った。さらに、空間の中でも方向性に関する条件が加わったものとして〈方向〉〈発生源〉を設定し、また〈場所〉の中でも「何かの部分」であることをさらに条件に加えたものとして下位範疇〈部位〉を立てた。

〈環境〉

判断規準：AはBが生成・変化・展開していく環境

「A [ LOC / TIM / ... ] {に / で} {できた / 育つ / 育った / ...} B」

「A [ LOC / TIM / ... ] に{存在する / ある / 住む / 生きる / ...} B」等  
と  
言い換え可能なものを含む

言い換え例：都会の子供            都会で育った子供  
                 タイの米            タイでできた米  
                 湖畔の宿            湖畔にある宿  
                 熱帯の人間           熱帯に住む人間  
                 海の生き物           海に棲む生き物

例：都会の子供，湖畔の宿，谷あいの道，川沿いの家，熱帯の花，古代エジプトの風習，古代ギリシャの哲学，氷河期の人類，タイの米，岡山の桃，栃木のイチゴ，六甲の水草津の湯

〈状況〉

判断規準：「A [ PRC / EVE / ... ] (の場)にある{ある / いる / 居合わせた / ...} B  
「A [ PRC / EVE / ... ] に{おける / 際しての / ...} B」等  
と  
言い換え可能

言い換え例：舞台のサクラ            舞台(の場)に居合わせたサクラ  
                 学園祭の企画            学園祭における企画  
                 成人式の服装            成人式に際しての服装

例：学園祭の企画，舞台のサクラ，成人式の服装，知事選の敗北，不況下の銀行，嵐の中の船

〈場所〉

判断規準：「A [ LOC ] に{ある / おける / ...} B」等  
と  
言い換え可能

言い換え例：神戸の港            神戸にある港  
                 永田町の空気            永田町における空気

例：庭の柿，公園の鳩，神戸の港，東京の家，茶室の畳，利尻島の特産物，室内の温度，永田町の空気，回路内の抵抗

〈方向〉

判断規準：「Aの{方 / 方向} B」  
「向かってA {の / にある} B」等  
と  
言い換え可能

言い換え例：東の空            東の方の空  
                 右のビル            向かって右にあるビル

例：東の空，右のビル

注：「東の空」のように極めて頻度の高い日常不可欠な表現に絞って記載した

< 発生元 >

判断規準：「A から {来た / 出て来た} B」等と言い換え可能

言い換え例：北の風 北から来た風

例：北の風，冷房の風

< 部位 >

判断規準：「A の部分の B」「A の部分に {ある / できた} B」等と言い換え可能

言い換え例：指先の感覚 指先の部分の感覚

足の怪我 足の部分にできた怪我

例：足の怪我，手のまめ，耳の傷，指先の感覚，首回りの寸法

< 時間 >

判断規準：「A [ P I T / T I M / ... ] における B」「A [ P I T / T I M / ... ] の {頃 / 時点で / 時間帯 / ...} の B」等と言い換え可能

言い換え例：20世紀のアジア 20世紀におけるアジア

30年前の東京 30年前の時点での東京

室町時代の建物 室町時代の頃の建物

例：20世紀のアジア，30年前の東京，戦後の都市，縄文時代の日本，夜の港，春の風，朝の地下鉄

### 3.4.2 具体化・内容補充

ここに<具体化>およびその下位範疇としてまとめられたものは、単独では広すぎたり抽象的すぎたりするBに、具体的な物事を表す「Aの」(1 時空間、3 対象・関与者、4 性状、を除く)が加わることによって、具体的にどういうことを指すのかがより明確になるような、AとBの組み合わせの総体である。

<具体化>の下位範疇として、概略、Bがいわゆる形容名詞の場合として<形式名詞補充>、「Aの」が内容節に言い換え可能な場合として<内容>、「Aの」が関係節に言い換え可能な場合や具体的な事象でBを限定している場合として<関係事象>を立てた。さらに、<関係事象>のうち、追加条件に当てはまり、AがBの原因・結果・目的に該当すると認められるものとして、<原因><結果><目的>の3機能を設定した。一方、<具体化>のうちで、AがBの役割・機能を示すものであることを示す条件に適ったものを統括する機能概念として<役割>を立てた。

< 具体化 >

判断規準：「A [ 具体 ] という B [ 抽象 ]」「~ {は / の} [ A B S / ... ] が A だ」

「(その) B を具体的に言えば A だ」等と言い換え可能なものを含む

言い換え例：コーチの役 コーチという役

深紅の色 ~は色が深紅だ

老人ホームの施設 その施設を具体的に言えば老人ホームだ

例：深紅の色，一級建築士の資格，思いやりの気持ち，コーチの役，おねだりの仕事，愛人の関係，MS-DOSの形式，新宿の現場，老人ホームの施設

< 形式名詞補充 >

判断規準：Bがいわゆる形式名詞，すなわち「Aの」を補って初めて意味をなすもの

例：先手有利の筈，総論賛成の一方，実力の程，実際のところ，年の割，財政再建のため，食事のかたわら，仕事のついで，すったもんだの揚げ句

< 内容 >

判断規準：「Aの」が内容節に言い換え可能

言い換え例：代表団派遣の意向      代表団を派遣する意向  
                 ダム作りの習性      ダムを作る（という）習性

例：代表団派遣の意向，ダム作りの習性，汚職の噂，徹夜作業の覚悟，人心一新の方針，  
3月完成の計算，将来修正の含み，売上3万部の目標

< 関係事象 >

判断規準：Bは事象Aの補語ないし副詞的要素

Aを述語化しBをその補語ないし副詞的要素に，または「Aの」が関係節に，  
または「Aに伴うB」「～のBを伴うA」等と言い換え可能

言い換え例：値上げの根拠      ～の根拠で値上げをする  
                 滞納の額      ～の額を滞納する  
                 生死の境      生死を分ける境  
                 卒業の春      ～が卒業する春      その春に卒業する  
                 街作りの主役      ～が主役となってする街作り  
                 子育ての苦労      子育てに伴う苦労      ～の苦労を伴う子育て

例：街作りの主役，卒業の春，空海建立の寺，仕事の相手，滞納の額，散髪の値段，融解  
の温度，緊張の度合い，出発の時間，受付の時間，待ち合わせの場所，生活のリズム，  
活動の本拠地，産業振興の基盤，工学部志望の動機，躍進のきっかけ，生死の境，  
研究の成果，子育ての苦労

< 原因 >

判断規準：「A[無生物]が{引き起こす/もたらす}B」等と言い換え可能

言い換え例：地震の被害      地震がもたらした被害

例：地震の被害，事故の影響，4歳年上の余裕，ナイフの傷

< 結果 >

判断規準：「Aを{引き起こす/もたらす}B」等と言い換え可能

言い換え例：風邪を引き起こすウイルス

例：風邪のウイルス，気分転換の香り，災いのもと，事故の原因

< 目的 >

判断規準：AはB[A B S / P R C / A C T / ...]の目的

「A{のため/用}のB」「Aが目的のB」「A{に/で}{使うB / ...}」  
等と言い換え可能

言い換え例：研究発表の下ごしらえ      研究発表のための下ごしらえ  
                 登山の会      登山が目的の会

例：研究発表の下ごしらえ，引っ越しの支度，旅行の準備，登山の会，交渉の窓口，取引  
の条件

< 役割 >

判断規準：AはBの役割

「A{という/の}{役割を担う/仕事をしている/}B」「(その)BはA  
{役割/機能/...}を果たしている」「Aを務めているB」「AがそのBの  
役割だ」等と言い換え可能

言い換え例：手伝いの女      手伝いの仕事をしている女  
                 教員の母      教員を務めている母

意思決定の機関      その機関は意思決定の機能を果たしている

例：手伝いの女，教員の母，意思決定の機関，受け入れ先の国





A 銀行の利子            A 銀行が定めた利子

例：部下の運転，守衛の見回り，子供のいたずら，警察のパトロール，太郎の作品，知事の政策，私の学問，A社の製品，A銀行の利子

注：「部下の運転」のようにサ変用法があるものは～のNPO欄に「サ変動詞用法参照」とし記載しなかった。

<所有者>

判断規準：A [ H U M / A N I / O R G / ... ] は B [ 物 / 性質 / ... ] の所有者

「Aが{もつ／所有し／所持し}ているB」「AはBが～」「Aは(～)Bをもっている」等と言い換え可能

言い換え例：営林署の小屋            営林署が所有している小屋

牛の胃            牛は(～な)胃をもっている

教授の人柄            教授は人柄がよい

例：営林署の小屋，足立区の施設，自分の部屋，会社の車，デンマークの領土，牛の胃，教授の人柄，博士の頭，政治化の舌，その選手の運動神経

<所属>

判断規準：「A [ O R G ] に所属する [ H U M / ... ] 」等と言い換え可能

言い換え例：その大学の先生            その大学に所属している先生

例：その大学生の先生，A社の社員

<全体部分>

判断規準：BはAの一部

「Aの『Bの部分』」等と言い換え可能

言い換え例：椅子の脚            椅子の脚の部分

例：椅子の脚，富士山の麓，車のエンジン，アパートの二階，扇風機の羽，田中さんちの居間，人形の頭，餃子の皮

<含有>

判断規準：AはBを含むもの，BはAに含まれるもの

「Aに含まれ(てい)るB」等と言い換え可能

言い換え例：レモンの汁            レモンに含まれている汁

例：レモンの汁，フグの毒

<構成要素>

判断規準：AはBの構成要素

「(その)Bの構成{要素/物/員}はAだ」「Aは(その)Bの{構成要素/物/員}」「(その)BはAできている」「AからなるB」等と言い換え可能

言い換え例：花崗岩の山            花崗岩{からなる/できた}山

たばこの煙            その煙の構成要素はたばこだ

女子だけの学校            女子だけからなる学校

例：石炭の山，サンゴ礁の島，杉の並木，たばこの煙，硫化物のガス，女子だけの学校，交通遺児の組織，氷の柱

<材料>

判断規準：AはBを作る上で用いられる材料

「Aが(その)Bの材料だ」「(その)Bの素材はAだ」「Aを使っ(て作られ)たB」「Aから作られ{る/た}B」「(その)BはAを使って作られた」等と言い換え可能

言い換え例：ハマグリの汁           ハマグリがその汁の材料だ  
 木綿の布団           その布団の素材は木綿だ  
 大理石の柱           大理石を使った柱  
 御影石の墓           御影石を使って作られた墓  
 アロエのクリーム       そのクリームはアロエを使って作られた  
 例：シルクのコート，木綿の布団，大理石の柱，御影石の墓，赤レンガの家，石の階段，  
 ハマグリの汁，アロエのクリーム

<用途>

判断規準：AはB [ CON / ... ] の用途  
 「Aは{のため/用}のB」「A{に/で}{使う/用いる}B」等と言い換え可能，  
 またAが「～用」の場合を含む  
 言い換え例：熱さましの薬           熱さましに使う薬  
                   冬の下着           冬用の下着  
 例：熱さましの薬，日焼け止めのクリーム，天体観測用の小屋，食用の芋，非常用の階段，  
 洗濯の水，仏像の金，冬の下着，よそ行きのスーツ

<手段>

判断規準：AはB（を{する/作る/...}ため）の手段，ただしAは[ CON ] 以外  
 「Aを{使った/用いた/...}B」「AによるB」等と言い換え可能で，  
 一般に「Aで出来上がったB」と言い換え不可  
 言い換え例：因数分解の計算           因数分解を用いた計算  
                   手話の説明           手話による説明  
 例：因数分解の計算，手話の説明

<道具>

判断規準：A [ CON ] はB（を{する/作る/...}ため）の道具  
 「Aを{使った/用いた/...}B」「AによるB」等と言い換え可能で，  
 一般に「Aで出来上がったB」と言い換え不可  
 言い換え例：算盤の計算           算盤を使った計算  
                   テレビのニュース           テレビを通して流れたニュース  
 例：算盤の計算，OCRの説明，トランプの手品，テレビの報道

### 3.4.4 性状・価値の規定・修飾

ここではAがBの属性を表す諸ケースを扱う。従って、一般には、「BはAだ」と言える場合が多い（ただし「実の兄」のような例外もある）。その中で一番包括的な機能概念を表すものを<性質>とする。下位の機能に該当しないものを収容するので、結果として<性質>の判断規準に示した言い換え例に該当するものはここに来る。<性質>のうち、境界性が明確で、AがBの下位範疇である場合を<種類>とし、また「AはBの特徴」等と言い換え可能なものは<特徴>としたが、その中でも形・色・その他様態を表すものは<様態>に入れた。さらにその中でも一時的な状態を表すものは<状態>、「譬えて言えばAのようなB」と言い換え可能なものは<比喩>とした。他に順序、程度、数量などに該当する場合として<順序><程度><量>を立て、<程度>のうち規準のみ表されているものを<規準>、<量>のうち個数的なものを<数>、長さ・面積・体積等空間的な量を<規模>とした。また、<性質>のうち、評価判断を要するものを<評価>、さらにその中でも関与者の関心とともに変動するものを<価値>として<評価>の下に置いた。

<性質>

判断規準：A [ ABS / KND / ... ] は類概念，境界の明確性は問わない



例：5 回目の入賞，二度目の夫，末の弟，後続のトラック

< 程度 >

判断規準：「A 程度の B」等と言い換え可能，または A が程度の副詞になれるもの

言い換え例：年 6 % の伸び          年 6 % 程度の伸び  
                                一層の理解          理解は一層進んだ

例：年 6 % の伸び，3 対 2 の割合，5 日分の食料，1 0 回に 1 回の確率，時速 8 0 キロの  
                                スピード，一層の理解，一切の秘密

< 規準 >

判断規準：A は単位を表す

「A は [ 単位 ] { に対する / 分の / 相当の / あたりの / 平均の / ... } B」等と  
言い換え可能

言い換え例：一泊の料金          一泊あたりの料金  
                                一年分の費用          一年分相当の費用

例：一泊の料金，坪当たりの値段，一年分の費用，月平均の気温

< 量 >

判断規準：A が量的な [ Q U A / ... ]

例：月 5 万の支払い，多額の費用

< 数 >

判断規準：A が個数的な [ Q U A / ... ]

例：5 回の入賞，1 0 頭の牛

注：C フォーマットから分かる場合は記載せず

< 規準 >

判断規準：A が [ D I S / ... ]

例：海拔 3 キロメートルの標高，3 平方メートルの所，L L サイズの寸法，大粒の汗

< 評価 >

判断規準：「[ H U M / O R G / ... ] が A と { 判断 / 評価 } { する / した } B」

「A とみなされている B」等と言い換え可能

言い換え例：三つ星のホテル          調査官が三つ星と判断したホテル  
                                ベテランの選手          ベテランとみなされている選手

例：三つ星のホテル，ベテランの選手，頑固者の兄，名人の手，普通の人，流行のコート  
                                上質のスーツ，対等の関係，破格の待遇，手遅れの段階，先送りの気質，強気の見方，  
                                標準の体重，早熟の感性，牽強付会の理屈

< 価値 >

判断規準：「[ H U M / O R G / ... ] にとって A の B」等と言い換え可能

言い換え例：思い出の場所          彼女にとっての思い出の場所

例：思い出の場所，自慢の喉，目上の人，馴染みの客，お気に入りの店，第 1 希望の大学，  
                                ライバルのチーム，格好の舞台，お得意の台詞，予想外の展開，緊急の課題，共通の  
                                課題，目標の点数

< その他 >

例：一方の主演，鰻の客

#### 4. 記載例

2筋で述べたような方法で選び出した「NPノNP0」の用例は区分ごとに振り分け、さらに3節で説明した分類規定に従って振り分け、「ノNP0」欄に記載する。見出し語を「-（ハイフン）」で表し、一つひとつの例は「,（カンマ）」で区切り、分類ごとに「。（句点）」で区切り、改行する。

「連帯被修飾語としての用法1」<被連体1>における記載例を以下に示す。

見出し語：「たいど【態度】」

[区分01] 人の内面的なものの表れとみられるそぶり。

ノNP0 : <主体> [HUM] 相手の - , 子供の - 。  
: <状況> 日頃の - , 工作中的の - , 授業中の - 。  
: <性質> 傍若無人の - 。

ノNP0補 : ~への - , ~での

~ノNP0 : 親への - , 学校での - 。

他NP0 : ~に対する - , 客に対する - , 生意気な - , なげやりな - , 反社会的な - , 身勝手な - , 寛大な - 。

被連体文例：

被連体備考：

[区分02] 人・組織の、ある事態・情勢への対処の仕方。

ノNP0 : <主体> [HUM/ORG] 取引先の - , 検察の - , 政府の - , お見合い相手の - 。  
: <状況> 尋問の時の - , それまでの - 。  
: <内容> [ACT/...] 反省の - , 拒否の - , 反対の - , 硬軟両様の - , 謝罪の - , 中立の - , 警戒の - , 何らかの - , 保留の - , 反発の - , 拒絶の - 。  
: <範疇> 賛成か反対かの - 。  
: <価値> 前向きの - 。

ノNP0補 :

~ノNP0 :

他NP0 : 堂々たる - , 毅然とした - , 学問に対する - , あいまいな - , 落ち着いた - , かたくなな - , 強靱な - , 強い - , 無責任な - , 消極的な - 。

被連体文例：

被連体備考：

[区分03] (習慣的な)ものごとへの取り組み方。

ノNP0 : <範疇> [ACT/...] 生活の - , 学習の - 。

ノNP0補 :

~ノNP0 :

他NP0 :

被連体文例：

被連体備考：

サ変用法があるものについては《ノNP0補》欄に「サ変動詞用法参照」と記載する。

また、名詞句と「ノNP0」の間に格助詞が挿入されていることがある。ここに現れる格助詞は「から/へ/と/で」等であるがこれらについてはサ変用法に同じく《ノNP0補》欄に「~からの/~への/~との/~での」としてその有無を記載し、《~ノNP0》欄に用例を記載する。

見出し語：「ひょうか【評価】」

[区分01] あるものを優劣・よしあしの面から判断すること。また、その内容。

ノ NP0 : <内容>「優良」(と)の - 。  
          : <評価>前向きの - , プラスの - 。  
ノ NP0 補 : サ変動詞用法参照, ~からの, ~への, ~との, ~での  
~ノ NP0 : 教育的側面からの - , 女子学生パトロンへの - , 職場での - 。  
他 NP0 : その施策で十分かどうかの - が必要だ, 総合的な - , 高い - , 低い - ,  
          厳しい - , 正当な - , 不当な - , 正確な - , 肯定的な - , 否定的な - 。

被連体文例:

被連体備考:

[区分02] あるものが持つ優れた点や長所を見つけてほめること。

ノ NP0 :  
ノ NP0 補 : サ変動詞用法参照, ~への  
~ノ NP0 : その映画監督への - , 反対運動への - , 彼の実行力への - 。  
他 NP0 :  
被連体文例:  
被連体備考:

用例中の( )は、その形態要素がある場合も無い場合も用例となることを示す。( )内の形態要素の有無によって意味に微妙な差がある場合でも、NP1の意味・機能範疇が同じととれる場合はこの表記法を採用。

また2節でのべたように用例が「多重読みが可能な例」であるとき、複数の区分や分類規定に共通する用例が記載されている場合がある。このような場合には《被連体文例》欄にその例文を記載する。

例：見出し語「うえ【上】」

[区分01] ある基準となるところよりも、相対的に高いところ。

ノ NP0 : <基準> [CON] 机の - , 屋根の - , 目盛の - , 氷の - , 海の - ,  
          雲の - , 崖の - 。

ノ NP0 補 :

~ノ NP0 :

他 NP0 :

被連体文例 : 屋根の上に月が出ている。

          : 屋根の上に猫がいる。

          : 崖の上から海を見下ろす。

被連体備考:

[区分03] ある基準となるところからみて、相対的により表面に近いところ。

ノ NP0 : <全体部分> 壁の - , 鼻の - , 頬の - , 画布の - , キャンパスの - ,  
          スクリーンの - 。

          : <基準> [CON] シャツの - , セーターの - , 下着の - 。

ノ NP0 補 :

～ノ NP0 :  
他 NP0 :  
被連体文例：壁の上にポスターを貼る。  
                  : シャツの上にセーターを着る。  
被連体備考：

そのほか特に気がついた点について《被連体備考》欄に必要事項を記載する。

例：見出し語「びじゅつかん【美術館】」

[区分01] 美術作品を展示する公共施設。

ノ NP0 : <場所> {地域, 場所} イタリアの - , 日本の - , 渋谷の - 。  
          : <対象> 油絵の - 。

ノ NP0 補 :  
～ノ NP0 :  
他 NP0 :  
被連体文例 :  
被連体備考 : <被連体> 特定画家の美術館の場合、「{人名}美術館」と言い、「の」  
                  は介さないのが普通。

## 注

- \* 「連体被修飾語としての用法1」の分類基準を取り決めて解説書を執筆するにあたり、まずは塩谷が機能名の原案を作成し、斎藤初江氏・桑畑和佳子氏と協議をして集積したデータを整理しながら修正を加えていった。なお、この件に関しては別個に、当時東京大学言語情報学科大学院生の平見勇雄氏からも貴重な参考意見を頂いた。また、青山文啓氏を初めいろいろな方からいろいろな意見を頂いたことに対しここに謝意を表す。分類の最終的な責任は塩谷が負う。
- 解説書の原稿を執筆するにあたり、塩谷が2節の一部、3節、付録の原稿を、斎藤が1節、2節の一部、4節の原稿を作成し、意見を交換してまとめた。この件に関していろいろな意見を下さった方々に感謝する。文責は上のこのような分担となっている。

## 付録 先行研究との比喩・対応

名詞が名詞を修飾する場合に使われる「の」機能の分類が15以上にわたる先行研究完成果（論文および辞典）は、入手しやすいものでは、新しいものから順に列挙するならば、『学研現代新国語辞典』（1994）、島津明・内藤昭三・野村浩郷（1986）、鈴木康之（1978-1979）、国立国語研究所（1966）、の4点が見いだされた。

以下にこれらの文献との比喩・対応を示すが、例は各文献にあったものの代表的なものであり、『IPAL名詞辞書』の機能名との対応はその例に対して候補となるものを中心に挙げたものであり、必ずしも必要十分という訳ではない。

『学研現代新国語辞典』（1994）

辞書の分類：例	：IPAL名詞辞典の機能名
所有・所属：日本の領土	：<所有><所属>
所在・場所：大阪の叔父さん、国境のトンネル	：<場所><環境>
～における：二国間の交渉、健康上の理由	：<範疇><関与者>
基準となる空間的・時間的位置：国境の南、宴の後	：<基準>
時間：7時のニュース、夏休みの宿題	：<時間>
作者：漱石の小説	：<主体>
内容：動物の写真、愛の物語、ゴッホの肖像画	：<対象><内容>
材料：素材：ダイヤの指輪、リンゴのジュース	：<材料><構成要素>
属性：酒好きの男、生みの親、麗しの君、特別の処置	：<性質><評価><価値>
分類：野球の試合、モミの木	：<種類><関係事象>
全体と部分：カメラのレンズ、木の枝、梅の花	：<全体部分>
割合：比率：疑問の一つ、新入生の大部分	：<対象><基準>
範囲：大方の意見、創立以来の秀才	：<程度><基準>
数量・順序：七人の侍、五番目の成績	：<順序><量><数><規模>
～のための：正義の戦い、旅の支度	：<目的>
～に関する：調査の結果、来月号の予告	：<対象><範疇>
包含関係、～である：歌人の茂吉、嘘つきのお兄ちゃん	：<具体化><評価><役割>
同格、～という：ゴビの砂漠、大和の国	：<具体化>
等しい関係にある同格、～である：母の花子	：<具体化><役割>
形式名詞後続：～のため、故、様	：<形式名詞補充>
他：1時からの懇親会、行つての帰り、生まれながらの詩人、彼ならではの快挙	

### 動詞文、形容（動）詞文との対応

ア「が」 「の」	：<主体><対象__a><対象__v>
イ「を」 「の」/「を」 「への」	：<対象__v>「～ノNP0」欄
ウ「に」 「への」/「に」 「の」	：<対象__v>「～ノNP0」欄
エとの/への/からの/までの/での	：「～ノNP0」欄

島津明・内藤昭三・野村浩郷「助詞「の」が結ぶ名詞の意味関係の解析」（1986）

ケース1 Bが述語相当語を表し、AがBの格要素

意味関係	例	IPAL名詞辞典の機能名
対象関係群		
動作主	述語	：<主体><対象__v>

対象 - 述語	: 電話の設置、右脳の優位	: < 対象 > < 対象__v >
随伴対象 - 述語	: 左半球との神経接合	: 「 ~ / N P 0 」欄
与え手 - 述語	: 彼のプレゼント、A社の売り	: < 主体 >
受け手 - 述語	: 乙の受領、A社の買い	: < 主体 >
方法関係群		
手段 - 述語	: 電車の通学、テレビの講義	: < 手段 > < 道具 >
道具 - 述語	: 電子レンジの料理、旋盤の工作	: < 道具 >
材料 - 述語	: 魚の料理	: < 材料 > < 対象__v >
原因 - 述語	: 事故の爆発	: < 原因 >
時空関係群		
時 - 述語	: 明日のデート、明治の経済成長	: < 時間 >
場所 - 述語	: 公園のデート	: < 場所 >
方向関係群		
起点 - 述語	: 海外からの引き揚げ	: < 発生元 > < ~ / N P 0 >欄
着点 - 述語	: 彼女への電話、言語への変換	: 「 ~ / N P 0 」欄
目的 - 述語	: ~のための食事	: < 目的 >
状況関係群		
場所 - 述語	: ~場合のアクセス	: < 状況 >
内容 - 述語	: ~ ( について ) の意見	: < 対象 > < 範疇 > < 内容 >
役割 - 述語	: 主軸 ( として ) の働き	: < 役割 > < 具体化 >
様態関係群		
様態 - 術語	: 赤貧の生活、精神病性の行動	: < 性質 > < 様態 >
回数 - 述語	: 2つの刺激、1万回の実行	: < 数 >
割合 - 述語	: 3割の打率、3%の工場	: < 程度 > < 規準 >
程度 - 述語	: 最大の陳作、若干の移り変わり	: < 程度 > < 評価 >
数量 - 述語	: 2600カロリーの食事、800万もの出産	: < 量 > < 数 >

ケース2 BはAを基点として、後続の語に対し、場所、時等の格的な役割を表す

場所の指定	: ビルの前、凝視点の右側	: < 基準 >
時の指定	: 実験の後、計画中の段階	: < 基準 > < 具体化 >
範囲の指定	: 計画のうち、経済の面	: < 具体化 > < 形式名詞補充 >
方向の指定	: 道の方向、船の進路、情報の経過	: < 対象 >
目的の指定	: 彼のため、賃金のため	: < 具体化 > < 形式名詞補充 >
原因の指定	: 彼のため、事故の原因、欠如のため	: < 形式名詞補充 > < 結果 >
状況の指定	: 発射の場合	: < 具体化 > < 形式名詞補充 >
状態・様態の指定	: 子供のまま、子供の様子	: < 具体化 > < 形式名詞補充 >
結果の指定	: 実験の結果、抑圧の反動	: < 原因 > < 関係事象 >
対象の指定	: 彼の方、学校のこと、実験の結果	: < 形式名詞補充 > < 対象 > < 関係事象 >

ケース3 BがAの数量・性質等を表す

大きさの指定	: 箱の重さ、橋の長さ、土地の面積	: < 対象 >
色等の指定	: リンゴの色、花の香り、歯の固さ	: < 対象 >
温度等の指定	: 水の温度、空気の温度、部屋の明るさ	: < 対象 >
形・構造の指定	: パタンの形、装置の構造	: < 対象 >
性能・性能の指定	: 車の速さ、船の旋回性能	: < 対象 >
性質・属性の指定	: 日本人の国民性、ヒマラヤの魅力	: < 対象 >

名称の指定	: 子供の名前、命令の略号	: <対象> <所有者>
役割・目的の指定	: 装置の使い方、装置の役目	: <対象>
数量の指定 1	: 子供の年齢	: <対象>
数量の指定 2	: 国の人口、命令の種類、成績の平均	: <対象>
数量の指定 3	: 産業別就業者の割合、生産高の順位	: <対象> <範疇>

#### ケース 4 A が述語相当語で、B が A の格要素

##### 対象関係群

述語 - 動作主	: けんかのふたり、散歩の人	: <様態> <状態>
述語 - 対象	: 恋愛中のふたり、類似の経路	: <様態> <状態> <評価>
述語 - 随伴対象	: 放浪の相手	: <関係事象>

##### 方法関係群

述語 - 手段	: 通学の手段、転送の手段、仕事の戦略	: <目的>
述語 - 道具	: 実験の道具、発射の設備、結合の装置	: <用途> <関係事象>
述語 - 材料	: 料理の材料	: <用途> <関係事象>
述語 - 原因	: 結婚の理由、爆発の原因、成功の理由	: <関係事象>

##### 時空関係群

述語 - 場所	: 儀式の会場、出会いの場	: <関係事象> <用途>
述語 - 時	: 開始の時刻、終戦の昭和 20 年	: <関係事象>

##### 方向関係群

述語 - 起点	: 出発の空港、移動の起点	: <関係事象>
述語 - 着点	: 飛行の終点	: <関係事象>
述語 - 方向	: 運動の方向、潜行の向き	: <関係事象>
述語 - 目的	: 結婚の目的、治療のねらい	: <関係事象>

##### 様態関係群

述語 - 回数	: デートの 3 回、自己刺激の回数	: <関係事象>
述語 - 様態	: 実験 ( に際して ) の態度	: <関係事象>
述語 - 程度	: 実験の程度、誤りの多少、増加の勾配	: <関係事象> <範疇>
述語 - 割合	: 成功の割合、ペダル踏みの率	: <関係事象>
述語 - 数量	: 食事の量、儲けの量、読み書きの量	: <対象> <関係事象>

#### ケース 5 A が B の所有者、場所、個数等を表す

##### 所有関係群

所有者 - 所有物	: 彼女の鉛筆、米国の科学研究施設	: <所有者>
所属	: N T T の山田さん	: <所属>
人間関係	: 彼女の従兄弟、私の先生	: <関与者>
全体 - 部分	: 人間の頭、網膜の半分、組織の一部	: <全体部分>
部分 - 全体	: シャッター付きのプロジェクター	: <様態> <特徴>

##### 連辞関係群

数量による限定	: 2 人の女、8300 万の人口、一つの点	: <数> <量>
年齢による限定	: 23 才の青	: <順序>
順序による限定	: 第 2 の理由、第 5 の腰椎、3 番目の人	: <順序>
種類による限定	: 桜の木、2 次元の空間	: <種類> <範疇>
役割による限定	: 弁護士の中村さん	: <役割>
程度による限定	: 高次の機構、普通の人、一定の時間	: <評価> <程度>
性状による限定	: 網状の面、陽性の電位、~ 形の対象	: <性質> <様態>

方法関係群

- 材料による限定：紙の飛行機、石の船、鉄の壁 : <材料> <構成要素>  
 原因による限定：マラリアの熱、集中豪雨の洪水 : <原因>  
 作者による限定：A社の製品、B作家の作品 : <主体>  
 産物による限定：水爆の父、梅毒の病原体 : <結果> <対象>

時空関係群

- 場所による限定：公園の銅像、A大学のB教授、左の耳 : <場所> <部分>  
 時による限定：従来のプロセッサ、1964年の～大会 : <時間>

方向関係群

- 起点による限定：母(から)の手紙、水面上の高さ : <主体> <発生元> <基準>  
 着点による限定：ローマへの道、空港までの所要時間 : 「～ノNPO」欄  
 目的による限定：航空用のレーダー、～ための～の言語 : <目的>

状況関係群

- 状況による限定：～場合の製品 : <状況>  
 内容・対象で限定：化学の分野、科学の領域、数の単位 : <範疇> <対象>  
 指示による限定：それらの問題、次の情報保存機構 : <その他(特定)>  
 特定化による限定：ある種の処理、特定の領域 : <その他(特定)>

鈴木康之「ノ格の名詞と名詞の組み合わせ(1) - (4)」 『教育国語』55, 56, 58, 59  
 (1978-1979)

鈴木康之(1978-1979)の分類 例 IPAL名詞辞典の機能名

- |         |               |              |              |
|---------|---------------|--------------|--------------|
| 1-1-1   | 全体 - 部分(物)    | : 洋服のポケット    | <全体部分>       |
| 1-1-2   | 主体 - 部分       | : 先生の金縁めがね   | <所有者>        |
| 1-2-1   | 所有者 - 所持品     | : 妹の着物       | <所有者>        |
| 1-2-2   | 作者 - 作品(物・情報) | : ターナーの絵     | <主体>         |
| 1-2-3   | 所属者(関与者) - 団体 | : 息子の中学校     | <関与者>        |
| 1-3     | 人 - 人間関係語     | : 大下の先生      | <関与者>        |
| 1-4-1   | 主語・主体・動き      | : 労働者の支持     | <主体>         |
|         |               | : 波のうねり      | <対象__v>      |
|         |               | 性質・状態: 素顔の白さ | <対象__a>      |
| 1-4-2   | 人 - フォルム      | : 彼の表情       | <主体>         |
|         |               | : 脚のかっこう     | <対象>         |
| 1-5-a   | 対象 - 動作       | : 子供の世話      | <対象__v>      |
| 1-5-b   | 対象 - 動作主      | : 都電の利用者     | <対象>         |
| 2-1-1   | 場所 - 物・事      | : 馬込の大火      | <場所>         |
|         | 分野 - 物・事      | : 教育上の問題     | <範疇>         |
| 2-1-2   | 所属 - 人        | : 農林省の役人     | <所属>         |
| 2-2-1   | 移動場所 - 行為     | : 北海道の旅      | <場所> <対象__a> |
|         | 行為者           | : 四国の巡礼団     | <場所>         |
|         | 物             | : 東京の速達便     | <場所>         |
| 2-2-2-a | 場所 - 生まれ育ち    | : 北国の生まれ     | <環境>         |
| b       | 出身地 - 人       | : 沖縄の出身者     | <環境>         |
| c       | 組織 - 出        | : 東北大学の出     | <環境>         |
| d       | 出身組織 - 人      | : 鉄道省の出身者    | <環境>         |
| 2-2-3   | 場所 - 生産物      | : 越後の笹飴      | <環境>         |
| 2-3-1   | 時間 - 事・人・物    | : 2月の謝恩会     | <時間>         |

2-3-2	場面 - 事・人・物	: 結婚式の出席者	< 状況 >
2-4-1	目的 - 行為	: 帰省の荷造り	< 目的 >
2-4-2	目的・行為 - 方法	: 反抗の方法	< 関係事象 >
2-4-3	原因 - 出来事	: 維新の騒ぎ	< 原因 >
2-4-4	原因 - 心理・生理	: 勉強の疲れ	< 原因 >
3-1-1	性質・状態 - 物・人・事	: 色白の青年	< 性質 > < 様態 >
3-1-2	種・類 - 物・人	: 桜の花	< 種類 >
3-1-3	特徴 - 物・人	: 白い壁の部屋	< 特徴 > < 様態 >
3-1-4	特性 - 物・人・事	: 教えられた通りの挨拶	< 評価 >
3-2-1	使用者 - 製品	: おとなの飲み物	< 主体 > < 関与者 >
3-2-2	用途 - 物	: 風呂のまき	< 用途 >
3-2-3	道具類 - 部分	: 時計の針	< 全体部分 >
3-2-4	材料 - 生産物	: 金の時計	< 材料 > < 構成要素 >
3-2-5	道具・組織・場所 - 職	: 三味線の師匠	< 対象 > < 範疇 >
		: 病院の看護婦	< 所属 >
3-3-1	内容・主人公 - 話・情報	: 軍縮のレポート	< 対象 > < 範疇 >
		: 嫁取りの話	< 具体化 >
3-3-2	主題対象 - 表現作品	: 花瓶の絵	< 対象 >
3-3-3	内容・対象 - 夢	: 帰郷の夢	< 内容 >
3-3-4	抽象内容 - 思考形態	: 社会主義の教義	< 範疇 > < 対象 >
		: 老人重視の道徳	< 評価 >
3-3-5-a	目的 - 心理活動	: 退校の決心	< 内容 >
	b 行為 - 言語活動	: 自由化の勧告	< 対象__a >
	c 内容 - 意思	: 自治の精神	< 具体化 > < 内容 > < 種類 >
3-3-6	感情内容 - 感情・精神状態	: あこがれの気持ち	< 具体化 > < 内容 > < 種類 >
3-3-7	内容 - 言葉	: おわびの文言	< 具体化 > < 内容 > < 種類 >
3-4-1	性質・状態 - 同格抽象	: 小党分裂の傾向	< 内容 >
		: 青の色	< 具体化 > < 種類 >
3-4-2	精神状態 - マナー	: 負け惜しみの様子	< 具体化 > < 内容 >
3-5-a	身分 - 名前	: 書記の川村	< 役割 >
3-5-b	人間関係 - 名前	: 恩人の石田	< 価値 >

『現代語の助詞・助動詞 - 用法と実例 - 』 国立国語研究所 (1951)

1 体言について、後続の体言がその体言に所属するものであることを示す。

イ 所有主

ガン吉のバット、私の心、警察の機動性	< 所有者 >
自分の恋人	< 関与者 >
赤ちゃんの栄養状態、輝線の長さ	< 対象 >
日本女性の優しさ、輝線の長さ	< 対象__a >
ソ連の意図	< 主体 >
外套の襟、植物の葉、華南の心臓部	< 全体部分 >
薬の効き目、会議の任務、予算案の特徴、教育の内容	< 対象 >

ロ 行為者

死刑囚の遺書、裁判所の意見書、特派員の情報、彼の話、人々の足跡、蛙の声	< 主体 >
測候所の記録	< 場所 >
秒針の音	< 対象 > < 種類 >

- 八 所属の団体（～に属する）  
国会の委員会、名大の教授、委員会のスポークスマン、最高裁判所の裁判官、  
裁判所の精神科医、アパートの係、宿屋の番頭 <所属>
- 二 関係の基点となるもの  
膝の上、自動車の中、家と家との間、窓の外、湖水のすぐそば、31校の他  
布の厚さの二倍 <基準>  
学童の父兄、赤ちゃんの敵、己の主、お嬢様の相手 <関与者>  
犬の真似 <対象>
- ホ 存在の場所・位置  
揚子江河口の島、大井町の知人、海外の中国人、枕元のお盆、左側の店、  
山岳地帯の気象現象、北大西洋の不連続線、ワルシャワの会議 <場所>  
左腕の時計 <部位>
- へ 抽象的な場所（～における）  
論理上の欠点、学制上の形式 <範疇>  
国際間の問題 <関与者>  
陳將軍指揮下の部隊 <状態>
- ト 選択の範囲  
議題の一つ、在野法曹の一員、卒業生の大半 <基準>
- チ 存在の時刻・時間  
47年度のアカデミー賞、夏の下痢、現在の情勢、最近の手数料、従来の観測  
結果、今後の経過 <時間>
- 2 体言について、その体言が後続の体言の属性に当たることが示す。
- イ 性質・性格・状態 <性質> <特徴> <様態> <状態> <評価> 等  
一二、三才の青年、人工栄養の赤ちゃん、半熟の黄卵、未申請の学校、瀕死の  
重傷 <状態>  
二十ワットの電球 <程度>  
バラック建ての売店、灰色の雲、四年生の大学 <様態>  
髭の男、友禅模様の振り袖 <特徴>  
[～と/へ/から/まで/で etc. の] 「～のNPO」  
材料（～でできた）  
丸太棒の橋、卵だけの茶わん蒸し <材料>
- 八 数量・順序  
百名の勢力、一つの法則、一個の人間、二・三の場合、少数の会社 <数>  
十倍の水、どれほどの明暗 <程度> <量>  
第二の問題 <順序>
- 二 サ変動詞の語幹となる体言について、その体言が、後続の体言に関連する動作内容で  
あることを示す。  
意見対立の委員会、同島守備の軍、安本発表の経済白書、A社後援のレース、  
气象台現用のもの <関係事象>
- ホ 形容動詞の連体形語尾に準ずる用法  
悪質のもの、平等の立場 <具体化>  
かなりの数、わずかの例外、相当のページ、あまりの滑稽さ  
<程度> <評価>  
特定の学校、特定の科目、種々の観測、別の次元 <その他（特定）>
- へ 体言についてその体言が後続の体言の範囲・領域を示す場合  
一部の人々、大部分の店、全部の業種、一切の準備、母乳以外の食べ物、  
当分の間 <程度> <量>  
有史以来の問題 <時間>
- ト 目的の事物・関与物を示す。

( a ) 目的の事物 ( ~ のための )

客寄せの愛嬌、欧州復興の支柱、航空作戦の資料、協力の機会、行動の基準、  
外出の支度、新中国誕生の基礎 < 目的 >  
取引の具、攻撃の矢弾、薬の壺 < 用途 >

( b ) に関する

絵の講演、統一ドイツの問題、民主主義の教科書、仕事の手加減  
< 対象 > < 範疇 >  
調査の結論、汚職事件の責任、インフレの指標、離乳の心得 < 関係事象 >  
補給金の制度 < 具体化 > < 内容 >

チ 同格の関係で修飾する

( a ) 同じ内容を違った語で表現して結び付ける際のつなぎ

御主人のテイラーさん、監督のライス、梯子乗りの曲芸、判事の職 < 役割 >  
「当たらない天気予報」の悪評 < 内容 >  
補助金の形、小説家の名 ( 名目 ) < 具体化 >

( b ) 指示代名詞その他指示する語につく場合

これらの問題、それぞれの仕方、右の基準、以上の事柄、次のもの  
< その他 ( 限定 ) >

リ 形容名詞に接続する場合

国民全体のため、表Aの通り、目下のところ、世界平和の上、独裁の下  
< 形式名詞補充 >

3 連用格用法 「 N P の N P 」の範囲外

4 結び付けられる二つの体言のうち、後者が動詞の連用形またはサ変動詞の語幹となる体言の場合。

イ 動作の主語 < 主体 > < 対象 \_ v >

ロ 動作の客語 < 対象 \_ v >

### 参考文献

金田 - 春彦 編 (1994) 『学研現代新国語辞典』学習研究社 .

永野賢 (1951) 『現代語の助詞・助動詞 - 用法と実例』 ( 国語研報告 3 ) 秀英出版 .

島津明・内藤昭三・野村浩郷 (1986) 助詞「の」が結ぶ名詞の意味関係の解析 ,  
『計量国語学』15 , pp.247-266 .

鈴木康之 (1978) ノ格の名詞と名詞のくみあわせ (1) , 『教育国語』55 , pp.12-24 .

鈴木康之 (1979a) ノ格の名詞と名詞のくみあわせ (2) , 『教育国語』56 , pp.66-84 .

鈴木康之 (1979b) ノ格の名詞と名詞のくみあわせ (3) , 『教育国語』57 , pp.83-97 .

鈴木康之 (1979c) ノ格の名詞と名詞のくみあわせ (4) , 『教育国語』58 , pp.12-24 .

## 連体修飾語としての用法 2

### 1. 「連体被修飾としての用法 2」について

「連体被修飾語としての用法 2」<被連体 2>は、次のような、「外の関係」[参照：本章第 3 節および 4 節]の連体修飾および「という」による「外の関係」相当の連体修飾を受けることのできる名詞を取り上げて、その振舞いおよび用例を記述するものである。

- (1) a. 太郎がゼネコンから献金を受けた(という)事実
- b. 車が一台やっと通れるという狭さ
- c. 車が一台やっと通れる広さ
- d. 女房の幽霊が 3 年目にあらわれる(という)話
- e. 景気の回復は早くても 10 年後になるという議論
- f. 7 月になっても寒い日が続いた原因
- g. オホーツク海の高気圧がずっとはりだしていたという原因

### 2. 記載項目

「連体被修飾語としての用法 2」<被連体 2>における記載項目は以下の通りである。

- S 平叙 : 「外の関係」の連体修飾構造をする [ S ] が平叙の形であらわれる場合にその [ S ] の末尾を「る」、「た」で記載する。
- S 文例 : 「外の関係」の連体修飾構造の用例を記載する。
- S ト平叙 : 「という」を介在させて「外の関係」に相当する連体修飾構造を構成する S が平叙の形であらわれる場合に、その S の末尾を「る」、「た」で記載する。
- S ト疑問 : 「という」を介在させて連体修飾構造を構成する S が疑問形であらわれる場合に、その S の文末表現を「るか」、「たか」で記載する。
- S ト文例 : 「という」を介在させた、「外の関係」に相当する連体修飾構造の用例を記載する。
- 副平叙 : 「S (という)見出し語」が単独でまたは助詞等を伴って副詞句として機能している場合について、その S の末尾を「る」、「た」で記載する。
- 副文例 : 「S (という)見出し語(で)」が副助詞として機能している場合の用例を記載する。
- 備考 : 以上の記載項目に関し、当該見出し語の特徴と考えられる事項がある場合にそれを記載する。

なお、本章で、「S」は《S 平叙》《S 用例》においては「述語の連体形で終る連体修飾要素」の略であり、《S ト平叙》《S ト疑問》《S ト用例》においては「述の終止形で終る要素」の略である。なお、ここでいう「述語」とは動詞、形容詞、名詞+「だ」、およびそれらに助動詞・終助詞等がついたものを指す。

### 3. 背景

『I P A L 名詞辞書』で用いる「外の関係」という用語は寺村秀夫氏の一連の研究に負う[寺村 1975-1977 など]。この用語に関しては若干の説明が必要と考えられるので、以下にこの種の連体修飾についての研究史の一端を紹介する。

### 3.1 述語による連体修飾の二つのあり方：「内の関係」と「外の関係」

寺村(1975-1977)によれば、述語の連体形による連体修飾は、次の2種に分かれる。

- (2) a. これは、女房が近所の者から聞いた話である。
- b. これは、女房の幽霊が、3年目になってようやくあらわれる話である。

(2a)においては、修飾する動詞「聞く」と修飾される名詞「話」との間の意味関係は(3a)のような単純な格関係によって明示することができる。これに対して(2b)においては、修飾する動詞「あらわれる」と修飾される名詞「話」との関係は、(3b)に示されるように、単純な格関係によって明示することは出来ない(例文に付加したアステリスク(\*)は、「意図された解釈に関して容認不可能」の意。以下同様)。

- (3) a. 女房が、(その)話を近所の者から聞いた。
- b. \*その話が / を / に / で / ... 女房の幽霊が、3年目になってようやくあらわれる。

寺村は、前者のような連体修飾部(述語)と被修飾部(名詞)の関係を「内の関係」と呼び、後者のような連体修飾部と被修飾部との関係を「外の関係」と呼んだ。

### 3.2 「外の関係」の二つのあり方：内容補充と相対的補充

寺村は、「外の関係」を更に2種に分けた。

- (4) a. 女房の幽霊が3年目のあらわれる話
- b. 7月になっても寒い日が続いた原因

(4a)においては、連体修飾部「女房の幽霊が3年目にあらわれる」は被修飾部「話」の内容を表している。一方、(4b)においては、連体修飾部「7月になっても寒い日が続いた」は被修飾部「原因」それ自体の内容を表したのではない。この違いは、(5)のような形で明確化することができる。

- (5) a. その話は、女房の幽霊が3年目にあらわれるものだ。(=(4a))
- b. その原因は、7月になっても寒い日が続いたことだ。(=(4b))

「原因」の場合においてその内容を明示するには、下記に述べるように接続要素「という」を介在させるか、あるいは(6)のように内容を表わす部分を連体修飾部とは別個に表現しなければならない。

- (6) 7月になっても寒い日が続いた原因は、オホーツク海の高気圧がずっとはりだしていたことだ。

寺村はここに取り上げた「話」のような型の連体修飾を「内容補充」の連体修飾と呼び、「原因」のような型の連体修飾を「相対的補充」の連体修飾と呼んだ。

### 3.3 内容補充と「という」

内容補充の連体修飾の一部には、同一の事態を表すのに、連体修飾部と被修飾部との間に「という」を介在させる形式によることが可能なものがある。それを示す側が(7a)である。

- (7) a. 女房の幽霊が3年目にあらわれるという話

- b. \*7月になっても寒い日が続いたという原因

(4a)の「話」は、ほとんど同一の事態を(7a)のように「という」を介在させた形式で表現することができる。これに対して(4b)の「原因」に「という」を前接させた(7b)を、もとの(4b)と同一の事態を述べた表現と解釈することはできない。ただし連体修飾部「7月になっても寒い日が続いた」が被修飾部「原因」の内容を表すという解釈のもとにおいてであれば、述語と「原因」の間に「という」を介在させることが可能である。それを示す例が(8)である。

- (8) 「今年の冷害はなぜ起ったのだろう。」 「7月になっても寒い日が続いたという原因が考えられる。」

### 3.4 述語連体形による連体修飾に関する寺村説のまとめ

以上の寺村説をまとめると、以下のようになる。

- (9) a. 「という」を伴わない連体修飾  
・内の関係(付加的修飾)  
・外の関係(内容補充的修飾)  
内容補充  
相対的補充  
b. 「という」を伴う連体修飾  
・ほぼ内容補充に相当する関係を表す。

### 3.5 寺村以降の研究

#### 3.5.1 「内の関係」とも「外の関係」とも言いがたい例

述語連体形による連体修飾構造のすべてを「内の関係」と「外の関係」に振り分けることには、実際には困難がある。「内の関係」とも「外の関係」とも解釈しにくい連体修飾構造として、たとえば次のようなものを挙げることができる(『I P A L 名詞辞書』における以下のような例の取り扱いについては本章第4.1.1節を参照)。

- (10) a. 効果のあやしい援助(が問題になった。)  
b. 「だれに面倒みてもらえるのか」ということを出発点にした取り組み(が必要だ。)  
c. 扉を閉じた正面玄関(を背景に、大勢のテレビ記者が立っていた。)  
d. 原因がはっきりしている災害(は対策が立てやすい。)  
e. この近くを震源とする地震(があった。)  
f. 大きな被害が出た地震(が一九〇〇年からだけでも五回ある。)  
g. 電子によって進路がさえぎられていた光(がまっすぐ動けるようになる。)  
h. 勢いが強くなった火(がふる場に燃え移ったらしい。)
- (11) 保守派が中止要求を続けているプロジェクト(注1)
- (12) a. 太らないお菓子  
b. 元気が出る車  
c. だれとでも仲良くなれる性格  
d. トイレにいけないコマーシャル(注2)  
e. 心暖まる話題(注3)

- (13) a. 汗水たらして働いた金 / 本を売った金 / 英語を中学生に教えた金  
 b. 2つの小さな部屋の仕切りを取り払ったワンルーム  
 c. オードブルを平らげたカラの白い皿
- (14) a. 米子に泊まった朝  
 b. 徹夜をした朝 (注4)
- (15) 2人がSLを運転する窓

### 3.6 「という」、「との」、「とする」

「という」に関して、寺村以降の研究(例えば[大島 1991a, 1991b]など)によって、実際には、連体修飾部が被修飾名詞の内容を表していない場合にも、「という」が介在している場合があることが明らかにされている。

- (16) 車が一台やっと通れるという狭さ

また、「という」の例の中には、「という」を「との」、「とする」で置換えても同一の事態を表すことができるものと、できないものがある。

- (17) a. 来週にも丸罰社長に話をしたいという / との / \*とする意向  
 b. 景気の回復は早くても10年後になるという / との / \*とする議論  
 c. 車が一台やっと通れるというという / \*との / \*とする狭さ  
 d. オホーツク海の高気圧がずっとはりだしていたという / \*との / \*とする

## 4. 当フォーマットの記載内容

前節で見た述語による連体修飾の諸類型のうち、「外の関係」の連体修飾、および「という」(「との」、「とする」)による「外の関係」相当の連体修飾は、修飾を受ける名詞の意味的な特性に大きく依存して成立している。本フォーマットは、この、「外の関係」の連体修飾構造、および「という」による「外の関係」相当の連体修飾構造を構成することができる名詞を取り上げ、その振舞いおよび用例を記述するものである。

### 4.1 「S見出し語」

#### 4.1.1 『I P A L 名詞辞書』における「外の関係」の認定

『I P A L 名詞辞書』では、連体修飾部と被修飾名詞とがそれぞれ意味的に補部と主要部の関係をなすもの(注5)を「外の関係」の中心的な例とみる(注6)立場をとる。その上で、補部/主要部の関係が必ずしも明確に認められない場合であっても、連体修飾部と被修飾名詞とがそれぞれ意味的に主要部と補部の関係をなしておらず(「内の関係」にならなくても)、なおかつその連体修飾構造が被修飾名詞の意味的な特性に依存して成立したと認められる限りにおいて、「外の関係」と認定する(注7)。「外の関係」を判定するにあたっての形式的な基準としては、「当該見出し語とそれに先行する述語との意味的な関係がガラ二等の格助詞によって復元できるか否か」を採用し、復元不可能な場合を「外の関係」の候補と認定して記載するか否かの検討対象とした。

#### 4.1.2 「外の関係」の補助的な認定基準

「外の関係」を判定するにあたって、上記を補完するものとして以下の基準を採用した。

「外の関係」に含めなかったもの 以下のような事例は「外の関係」とは認定せず、従って『I P A L 名詞辞書』には記載しなかった。以下、「」「×」はそれぞれ「 S 用例 《S ト用例》欄に記載する表現」「《S 用例》《S ト用例》欄に記載しない表現」を表わす。

1. 当該見出し語とそれに先行する述語との意味的な関係がガヲ二等の格助詞によって復元できない場合であっても、次のように、当該連体修飾構造が見出し語の意味的な特性に依存する度合いが低いと考えられる場合

- ・ < 因果関係 > を表す連体修飾構文 ( 上掲 (12) )

例 × 「太らないお菓子」 × 「元気が出る車」  
× 「だれとでも仲よくなれる性格」 ( 注 8 )  
× 「トイレにいけないコマーシャル」  
× 「心暖まる話題」

- ・ 被修飾名詞が < 連体修飾の表す行為の結果生じる / 手に入るもの > を表す連体修飾構文 ( 上掲 (13) )

例 × 「汗水たらして働いた金」「本を売った金」「英語を中学生に教えた金」  
× 「2つの小さな部屋の仕切りを取り払ったワンルーム」  
× 「オードブルを平らげたカラの白い皿」

- ・ 連体修飾部と主名詞が時間的な連続関係にある場合 ( 上掲 (14) )

例 × 「米子に泊まった朝」「徹夜をした朝」

- ・ 連体修飾部と主名詞が空間的な隣接関係にある場合 ( 上掲 (15) )

例 × 「2人がS Lを運転する窓」

2. 見出し語が連体修飾部分に現われる名詞句と全体部分等の特別な意味関係によってつながっている場合

例 × 「カルシウムを強化した牛乳」  
( ここで「カルシウム」は「牛乳」の一成分になっている ) ( 注 9 )

3. ガガ構文に由来する連体修飾構造 ( 注 10 )

例 × 「往来が激しい道路」  
( 「この道路は往来が激しい」 )

× 「栄養のバランスがとれたおかず」  
( 「このおかずは栄養のバランスがとれている」 )

× 「木の実や葉の乏しい冬」

(「(この)冬は木の実や葉が乏しい」)

・デ格の取り扱い

見出し語と述語の意味関係がデによって復元可能な場合の取扱いは、以下によった。

1. 抽象的なものを表わす名詞は「外の関係」と認定する。具体物としての性格が強いものを表わす名詞は「内関係」とみなし、《S文例》欄の記述対象とはしなかった(注11)。

例 「素早く筋肉の痛みを取る方法を教えてください」  
×「水を飲むコップ」

2. 「ための」を介在させることができない場合(特に、主語および時制辞が現れた場合)は、「内関係」とみなして、《S文例》欄の記述対象とはしなかった。

例 ×「太郎が東京に行った方法」

3. 場所を表わすデ格は「内関係」とみなし、S文例欄の記述対象とはしなかった。

例 ×「ガス爆発が起きたアパート」  
(「このアパートでガス爆発が起きた」)

「現金輸送車が襲われた現場から不審な男が逃げていくのが目撃されている。」  
(「この現場で現金輸送車が襲われた」とは関係が違う。次例および下記参照。)

×「子供たちが遊んでいる(事件)現場」  
(「この(事件)現場で、子供たちが遊んでいる」)

・ガ格の取り扱い

述語との意味関係がガによって復元しうる語でも、その属する意味素性が『IPAL動詞辞書』、『IPALサ変動詞辞書』における当該述語の文型欄に記載されていない場合には、「外関係」とみなして、その用例を《S文例》欄の記述対象とした。

例 「我々は[議長の辞任を要求する]文書を議会に提出した。」  
(『IPALサ変動詞辞書』「要求する」のガ格には「文書」が該当すると思われる意味素性は挙げられていない。)

・「外関係」と認めた例

1. 連体修飾部と当該見出し語との意味的な関係がガヲ(場所を表す)デによって復元できる例であっても、次のような場合は「外関係」としての性格も併せ持つと認定して当辞書の記載対象とした。

例 ガ格：

「[最初の質問に「はい」と答えた]グループは別室に連れて行かれた。」  
(個人がその「グループ」に振り分けられるための要件を連体修飾部が規定している。)

「あの投手は[打たせて取る]タイプです。」  
(この「打たせて取る」はこの「タイプ」の定義的特徴を述べており、両者の関係は「このタイプは、打たせて取るのです。」の場合とは異なる。)

「あいつは[酒もたばこもやらない]堅物だ。」  
(ある人が「堅物」と判定される根拠を連体修飾部が規定している(注12)。

ヲ格：  
「[太郎が講演会で話した]内容を次郎が要約して紹介してくれた。」  
(「内容」の範囲を、ないしは何の「内容」であるかを、連体修飾部が規定している。)

「[太郎が横領した]総額は一億にも上るとみられている。」  
(「横領」に算入される金の範囲を連体修飾部が規定している。)

デ格：  
「[現金輸送車が襲われた]現場から不審な男が逃げていくのが目撃されている。」  
(ある場所が「現場」と認定されるためにはそこで何らかの事件が起こることが必要であり、連体修飾部がその事件に対応している。)

2. 程度概念を含む名詞が被修飾名詞となっていて、「ほどの」で言い換えられる連体修飾は、「外の関係」と認める。

例 「私の生まれ育ったところは、電気もつかない田舎です。」  
「車が一台やっと通れるという狭さ」

#### 4.1.3 「内容補充」と「相対的補充」

「内容補充」と「相対的補充」の区別に関しては、論者により見解が分れること、および寺村自身の判断にも時期によって揺れがあること(18)、両様に解釈できる例があること(19)等に鑑み、『I P A L 名詞辞書』では記述しない。

- (18) 論者、および時期により判定が揺れている例  
「父をなくした悲しみ」  
<内容> 内容補充(寺村1992: 197)  
<原因> \_\_ <結果> 相対的補充(大島(1991b: 12,12)、寺村(1981: 113))
- (19) 両様に解釈できる例  
「魚が焼ける匂い」  
<知覚対象> \_\_ <知覚> 内容補充(寺村1992)  
<原因> \_\_ <結果> 相対的補充(WG委員会席上での指摘)

#### 4.1.4 連体修飾部の末尾、および主語

既に述べたように、連体修飾部の末尾として、「る形が可」「た形が可」「いずれもが可」を《S平叙》欄に記述した。また、叙法表現（「ない」、「たい」等）が特徴的に現

れる語については、《備考》欄にその旨記述した。併せて、連体修飾部中に主語（ガ格名詞句）が現れないか、または現れにくい場合にも、《備考》欄にその旨注記した（注13）。

## 4.2 「Sという見出し語」

### 4.2.1 認定基準

本欄の記述対象の選定に当たっては、連体修飾部から「という」を除外した部分と被修飾名詞との意味的な関係が「外の関係」に相当すると考えられるものを記述対象とする。形式的な基準としては「という」に先行する述語と当該見出し語との意味関係がガマ二等の格助詞で復元できるか否か」を採用した。復元不可能な場合に、「という」に先行する部分を《Sト平叙》欄に記述し、用例を《Sト用例》欄に記載することを原則とした。補助的な基準として、以下を採用した。

<伝聞>の「という」

<伝聞>の「という」は除外した。

例 × 「ナポレオンが好んだという味」

<特徴記述>の「という」

「という」に<伝聞>の意味がない場合でも、次のように、「Sという」が全体として見出し語の指示する対象についての特徴を記述した表現として機能している場合も除外した（注14）。

例 × 「暮に熱中して、廊下を歩きながら暮の本を読み、教室でも机の下にかくして暮の問題に没頭するという男があらわれた。」（注15）

先行句、後行句を必要とする場合 名詞の文法的特徴を記述するという『IPAL名詞辞書』の性格上、当該見出し語が先行句、後行句を伴う場合にのみ可能になる「という」は記述対象から除外した。

例 × 「どんなに強い子でも泣いてしまうというこわい顔」  
（\*「どんなに強い子でも泣いてしまうという顔」）

× 「新年度予算に調査費を盛り込むという熱の入れよう」  
（\*「新年度予算に調査費を盛り込むという熱」）  
\*「新年度予算に調査費を盛り込むという入れよう」）

### 4.2.2 連体修飾部の末尾、および主語

連体修飾部の末尾として、「る形が可」「た形が可」「いずれもが可」を《Sト平叙》欄に記載した。また、叙法表現（「ない」「たい」「（よ）う」等）が特徴的に現れる語については、《備考》欄にその旨記述した。合わせて、連体修飾部中に主語（ガ格名詞句）が現れないか、または現れにくい場合にも、《備考》欄にその旨注意した。（注16）。

#### 4.2.3 「との」、「とする」

「という」を「との」、「とする」に置き換えても同一の事象を表すことができる場合、《備考》欄にその旨記述した。

#### 4.2.4 「かというと」、「かの」

「という」の前に、修辭的でない疑問を表わす助詞「か」が現れる場合、その文末表現を《Sト疑問》欄に記述し、用例を《Sト用例》欄に記載した。「かとの」は「との」に含めた。「かの」で置き換えられる場合には、《備考》欄に記述した。

### 4.3 副平叙・副用例

「S見出し語」、「Sという見出し語」が単独でまたは助詞等を伴って副助詞として機能している場合を記述する。記述内容は《S平叙》《Sト平叙》《Sト疑問》《Sト用例》に準ずる。本欄には当該名詞が名詞としての実質的な意味を保持している場合も含めて幅広く記載した。

## 5. 記載方法

### 5.1 S平叙

当該名詞に直接前接して「外の関係」の連体修飾構造を構成する。[S]が平叙の形であらわれる場合について、そのSの末尾を「る」、「た」で記載する。

記入例 見出し：ほしょう【保証】]

S平叙：～る

見出し：あと【後】]

S平叙：～た

見出し：れい【例】]

S平叙：～る、～た

### 5.2 S平叙

《S平叙》および《備考》欄に記述した、当該名詞に見られる文法上の振舞いを例示するための用例を記載する。[S]に相当する部分を[ ]で示した。なお、[S]の末尾として「る」、「た」がともに可能な場合には「/」を用いて一文中に併記し、並列する部分を{ }でくくることを原則としたが、「/」によってまとめず2文に分けて記載した場合もある。

記入例

見出し：ほしょう【保証】]

S文例：[このまま好景気が続く]保証はない。

：[大統領が強権を発動しない]保証はない。

：[経験が常によりガイドとなる]保証はどこにもない。

見出し：あと【後】]

S文例：[太郎が渡米した]後を追って花子も成田に向かった。

見出し：れい【例】]

S 文例：太郎は【犬】という単語が比喩的に{使われている / 使われた}  
例をいくつか挙げて、その意味をひとつひとつ説明していった。

### 5.3 Sト平叙

「という」を介在させて「外の関係」に相当する連帯修飾構造を構成するSが平叙の形であられる場合について、そのSの末尾を「る」、「た」で記載する。

記入例 見出し : ほしょう【保証】  
Sト平叙 : ~る

見出し : きろく【記録】  
Sト平叙 : ~た

見出し : ものがたり【物語】  
Sト平叙 : ~る、~た

### 5.4 Sト疑問

「という」を介在させて「外の関係」に相当する連帯修飾構造を構成するSが疑問形であられる場合に、そのSの末尾を「るか」、「たか」で記載する。「の」が介在して「るのか」、「たのか」となっているものもここに含める。

見出し : ぎもん【疑問】  
Sト平叙 : ~るか、~たか

### 5.5 Sト文例

《Sト平叙》、《Sト疑問》、および《備考》欄に記述した、当該名詞に見られる文法上の振舞いを例示するための用例を記載する。[Sという]に相当する部分を[ ]で示した。なお、[Sという]の末尾として複数の表現が可能な場合には[ / ]を用いて一文中に併記し、並列する部分を{ }でくくることを原則としたが、「 / 」によってまとめて2文以上に分けて記載した場合もある。

記入例 見出し : ほしょう【保証】  
Sト文例 : [この企画が絶対成功するという]保証はあるのですか。  
: [大統領が強権を発動しないという]保証はどこにもない。

見出し : きろく【記録】  
Sト文例 : [県内の沼地や川で間マガンが羽を休めたという]記録も残っている。  
: [文禄三年に検地が施行されたという]記録も残っている。

見出し : ものがたり【物語】  
Sト文例 : それは[王子様が働く貧しい人々のために命を{ささげる / ささげた}という]物語だ。

見出し : ぎもん【疑問】  
Sト文例 : [地震がなぜ発生するのかという]疑問に、この本は明快に答えてくれる。

： [嵐でもないのになぜ舟が沈没してしまったのかという] 疑問が残る。

## 5.6 副平叙

「S見出し語」および「Sという見出し語」が単独でまたは助詞等を伴って副詞句として機能している場合について、そのSの末尾を「る」、「た」で記載する。

記入例 見出し：やくそく【約束】  
副平叙：～る

記入例 見出し：あと【後】  
副平叙：～た

記入例 見出し：くせ  
副平叙：～る、～た

なお、本欄には「約束【約束】」のように当該名詞が名詞としての実質的な意味を保持している場合も含めて幅広く記載した。

## 5.7 副文例

《副平叙》および《備考》欄に記述した、当該名詞に見られる文法上の振舞いを例示する用の用例を記載する。[S]および[Sという]に相当する部分を[ ]で示した。なお、当該名詞に伴う助詞が必須でない場合、( )によって示すことを原則としたが、助詞が伴う場合と伴わない場合を2文以上に分けて記載した場合もある。また、[S]、[Sという]の末尾として複数の表現が可能な場合には「/」を用いて一文中に併記し、並列する部分を{ }でくくることを原則としたが、「/」によってまとめずに2文字以上に分けて記載した場合もある。

記入例 見出し：やくそく【約束】  
副文例：[ 2月までに返済する ] 約束でその金を借りてきた。  
： [ 2月までに返済するという ] 約束でその金を借りてきた。  
： [ 2日後に息子が返しに行くという ] 約束でその本を借りてきた。  
： [ 他の人に又貸ししない ] 約束でその本を借りてきた。  
： [ 他の人に又貸ししないという ] 約束でその本を借りてきた。

記入例 見出し：あと【後】  
副文例：[ 太郎が帰った ] 後(に)、会場でちょっとしたハプニングが起こった。  
： 太郎は [しばらく黙り込んだ] 後で、小さく頷いた。  
： [私のいない] 後も皆さんで一致団結してこの学校を盛りたてていってください。  
： [私のいなくなった] 後も皆さんで一致団結してこの学校を盛りたてていってください。  
： [丸罰先生亡き] 後私がしてきた仕事は、すべて先生のご遺志を継いだものです。

見出し：くせ

副文例： [何もわかっていない]くせに、偉そうなことを言うんじゃない。  
： お前は[普段遊んでばかりいる]くせに、試験の成績が悪いと人にあたるんだから。  
： 彼は[打算的な]くせに力だけは滅法強い。  
： [本当は声をかけてみたい]くせに。  
： あいつは[体は小さい]くせに力だけは滅法強い。  
： [さんざん世話になった]くせに、今さら何を言うか。

## 5.8 備考

[S]中および[Sという]中にあらわれる叙法表現、述語タイプ、主語の生起、および「という」と関連する「との」「t pする」「かの」の振舞いなどに関して、当該見出し語の特徴と考えられる事項がある場合にそれを記載する。(注17)

記入例 見出し：どりょく【努力】

備考： [S]中、[Sという]中に主語はあらわれない。[Sという]中には叙法表現(「(よ)う」、「ない」)があらわれることがある。「との」不可。「とする」可。

記入例 見出し：ろんぎ【論議】

備考： [Sという]中には叙法表現(「べき」)があらわれることがある。「との」可。「とする」可。「かの」可。(例：議場ではまだ[原油価格をどう取り扱うかの]論議が続いていた。)

記入例 見出し：くせ

備考： 「くせに」は「くせして」の形で用いられることがある。[S]中には名詞述語文、形容詞述語文があらわれることがある。[S]中には叙法表現(「ない」「たい」)があらわれることがある。「くせに」「くせして」で文が終ることがある。

## 6. 記載例

「連体修飾語としての用法2」<被連体2>における記載例を以下に示す。

例：見出し語「ほしょう【保証】」

[区分01] 何か間違いのないことを責任を持って請け合うこと。

< E 被連体2 >

S平叙：～る

S文例：[このまま好景気が続く]保証はない。  
：[大統領が強権を発動しない]保証はどこにもない。  
：[経験が常によいガイドとなる]保証はどこにもない。

Sト平叙：～る

Sト疑問：

Sト文例：[この企画が絶対成功するという]保証はあるのですか。  
：[大統領が強権を発動しないという]保証はどこにもない。

副平叙：

副文例 :

備考 : [ S ] 中、[ S という ] 中には叙法表現(「ない」)があらわれることが多い。「との」可。その場合「保証」は「言質」に近くなる。(例:[ 計画を必ず実行に移すとの ] 保証を社長から引き出すことが出来た。 ) 「とする」不可。

## 注

1. 寺村(1987)は(10)、(11)のような例を「広い意味での「内の関係」」としている。
2. 「大抵の場合コマーシャルは番組の途中の息抜きのようなもので、その間にトイレに行ったりするものなのだが、このコマーシャルはとても面白くできていて釘付けになってしまい、トイレに行くことができなくなってしまう」という状況についての表現。
3. (12)を寺村は「内の関係の短絡」と呼ぶ。これらについては、Matsumoto(1988)で議論されている。なお、この項に挙げた例の中には「このお菓子は太らない」のようにガガ構文によって文の形に直すことができるものもある。本章におけるガガ構文の取り扱いについては、第 4.1.1 節で述べる。
4. (13)、(14)は白川(1986)が取り上げている。
5. ここでの「主要部」、「補部」の概念は Langacker(1987.1991)のそれに基づく。すなわち、ある語Wと別の要素Xからなる文法構造において、Wが概念上自立性の低い要素であり、一方Xが概念上自立性が高い要素であって(換言すれば、Wが関係概念をその意味構造に含み、かつその関係を構成する一項がW単独では具体的な特定化を受けず、Xが存在することによって初めて特定されるということが生じており)、かつその文法構造全体がWの記述対象を継承する場合、XをWの「補部」という。
6. 具体的には寺村の言う「相対的補充」のすべて、「内容補充」の一部、および寺村が取り上げていない連体修飾構造が含まれる。
7. 具体的には寺村の言う「内容補充」の一部がここに含まれる。
8. ただし、「お年寄りが困っているのを黙ってみていられない性格」のような例は、「外の関係」と認める。
9. この他に、先に(10)、(11)に挙げた例がこの項に該当する。
10. この統語的な基準の効果は、前2項の意味的な基準の効果と重複する。
11. 寺村の「実質性」概念を参考にした。
12. 大島(1991b: 25)にいう「評価づけ」に近い。
13. [ S ] 中における主語の生起に着目するにあたっては、寺村の「帰属性」概念および大島(1991c)の特定性に関する議論を参考にした。
14. この2つの基準の効果は、格関係による基準とほぼ同じであると考えられる。
15. 「という」のこの種の用法については中島(1990)で取り上げられている。

16. [Sという]中における主語の生起に着目するにあたっては、寺村の「帰属性」概念および大島(1991c)の特定性に関する議論を参考にした。
17. 「外の関係」、「という」およびそれらに関連する事項に関しては、すでに言及した文献の他に以下のような研究がある：井上(1976),大島(1989),たかはし(1979),益岡(1994),松本(1993,1994),山梨(1995),Nomura(1993)。

#### 参考文献

- 井上和子(1976)『変形文法と日本語(上)』大修館書店。
- 大島資生(1989)「命題補充の連体修飾構造」について、『日本語研究』11,東京都立大学。pp.61-77.
- 大島資生(1991a)連体修飾構造に現われる「という」の機能について、『人文学報』225, pp.27-58.
- 大島資生(1991b)因果関係を表わす連体修飾構造—因果名詞と「感情名詞」—,『都大論究』28, pp.11-27.
- 大島資生(1991c)名詞の統語的・意味的分類の試み—いわゆる「同格連体名詞」について、『計量国語学』18, pp.9-25.
- 白川博之(1986)連体修飾節の状況提示機能,『言語学論叢』5,筑波大学, pp.1-15.
- たかはしたろう(1979)連体動詞句と名詞のかかわりあいについての序説,言語学研究会編,『言語の研究』, pp-75-172, むぎ書房。
- 寺村秀夫(1975-1977)連体修飾のシンタクスと意味I-IV,『日本語・日本文化』4-7, (再録：寺村1992)。
- 寺村秀夫(1981)『日本語の文法(下)』(日本語教育指導参考書5)国立国語研究所。
- 寺村秀夫(1987)連体修飾(1),『ケーススタディ日本文法』寺村秀夫・鈴木泰・野田尚史・矢澤真人編,桜楓社, pp-108-113.
- 寺村秀夫(1992)『寺村秀夫論文集I—日本語文法編一』くろしお出版。
- 中島孝幸(1990)「という」の機能について,『阪大日本語研究』2,大阪大学, pp.43-55.
- 益岡隆志(1994)名詞修飾節の接続形式—内容節を中心に—,『日本語の名詞修飾表現—言語学、日本語教育、機械翻訳の接点』田窪行則編,くろしお出版, pp.5-27.
- 松本善子(1993)日本語名詞句構造の語用論的考察,『日本語学』12, pp.101-114.
- 松本善子(1994)私の研究ファイルから〔9〕意味から見た連体修飾のいろいろ,『言語』23, pp.124-127.
- 山梨正明(1995)『認知文法論』ひつじ書房。
- Langacker, R. W. (1987, 1991) Foundations of Cognitive Grammar (2 volumes). Stanford: Stanford University Press.
- Matsumoto, Y. (1988) Semantics and Pragmatics of Noun-Modifying Constructions in Japanese, BLS 14, pp.166-175.
- Nomura, Masuhiro (1993) The Semantics of the Content Clause Construction in English, English Linguistics 10, pp.184-210.

## V サ変動詞としての用法

### 1. 「サ変動詞としての用法」について

名詞の中には、「する」が後ろに付いて述語として働くものがある。今回、『IPAL 名詞辞書』にこうしたサ変動詞としての用法（以下では「サ変動詞用法」と呼ぶ）についての記述を含めた。

なお、サ変動詞については、動詞辞書の枠組みですでに記述を試みている（詳しくは、次の報告書に収められた「サ変動詞辞書作成手引き」「サ変動詞の記述例」を参照：『計算機用日本語処理の研究』9）。

### 2. 記載項目

「サ変動詞としての用法」<サ変用法>の記載項目は以下の通りである。

文型番号	: その区分におけるその文型の通し番号
文型数	: その区分における文型の数
文型	: 見出し語がサ変動詞としての用法で用いられるときの文型の表示
格形式 n	: NP n の格形式（格助詞）
意味素性 n	: NP n の意味素性
名詞句 n	: NP n の名詞句の例
～ノ NP0 n	: 見出し語を主要部としNP n を修飾部とした名詞句化の可否と形式
文例	: その文型の具体例
NP0 フラスル	: NP0 フラスル形式への交替の可否と形式
備考	: その文型に関わる注記

### 3. 記述の対象

サ変動詞の範囲をどう定めるかは、それほど簡単ではない。一般には、ある語がサ変動詞か否かを判断する目安として、次のようなことが考えられる。

- (1) 活用の仕方
- (2) アクセント
- (3) 「を」の挿入の可否

(1)の「活用の仕方」というのは、たとえば、「愛する」「略する」は、いわゆるサ変動詞が「散歩しない」という形をとるのに対して、未然形が「愛さない」「略さない」という形をとり、五段活用することを指す。この場合、五段活用する「愛する」「略する」はサ変動詞に含めないことにする。

(2)の「アクセント」というのは、相澤(1993)に指摘されていることだが、たとえば、「会する」「産する」のように、「スル」が接続した場合のアクセントが、（高から低に変わるところに'を入れると）「カ'イスル」「サ'ンスル」ではなく「カイス'ル」「サンス'ル」となる場合には、一語化しているとしてサ変動詞と認めるということである。しかし、この目安は、一字漢語でかつ頭高型のアクセントを有する語にしか有効でなく、「旅する」「得する」「心する」のような語には使えない。

そこで、もっとも問題にされるのが、(3)の「を」の挿入の可否である。形態論の立場からは、「項となる名詞」と動詞「する」との間に「を」を挿入しない言い方が可能ならば、複合語として「サ変」と認めることになるだろう。しかし、助詞「を」を伴わない場合でもサ変動詞の語幹と「する」とが独立して生起することがある。影山(1993)があげる「出席したりしなかったりするの」は良くない。」という例のように、「出席する」は複合語と認め

られるにもかかわらず、語幹と「する」とが切り離される。影山は、これを「VNする」の形式が複合語にとどまらず句として働くこともある、と解釈する。また、一つひとつの語の使われ方をみてみると、活用形とその文の中での位置によって、サ変動詞と認められる場合、認めがたい場合とがある。たとえば、「無茶する」のように複合語としては認めがたいものでも、「無茶してけがをしてもつまらない。」と連用の形になると許容度が高くなるようだ。ということで、サ変動詞の範囲をどう定めるかについては、明確な基準は立てにくい。この辞書では、以下にあげる(1)をサ変動詞の記述の対象とし、(2)にあげるものは記述の対象から外した。

(1)記述の対象にしたもの

- 1 サ変動詞活用をするもの。
- 2 「ヲ」を挿入しない言い方が、話し言葉の場合に限らず、すなわち、スピーチレベルでの省略にとどまらず常に可能なもの。

(2)記述の対象にしなかったもの

- 1 サ変動詞活用しないもの。

例 「愛する」 「恋する」 「略する」 「訳する」

この点で、「涙する」 「汗する」はサ変動詞と認める。

- 2 スピーチレベルでの省略を別にすれば、基本的に「ヲ」を挿入した言い方しかないもの。

例 「あくびをする」 「くしゃみをする」 「せきをする」  
「なわとびをする」 「スキーをする」

- 3 謙譲語の「お～する」は扱わない。

例 「お届けする」 「お持ちする」

「お祝いする」 「お願いする」 「お慰めする」は、それぞれ「祝い」 「願い」 「慰め」という名詞があり、謙譲表現とは考えられないので本辞書で扱う。

- 4 「する」が付くことによって、着脱、身体部位、形態、役職・職業、数量を表す場合。すなわち、これらの「する」には、「する」が基本的に持つ「ある動作や行為を行う」という意味が認めがたい。

例 着脱 「ネクタイをする」 「ベルトをする」 「マフラーをする」  
身体部位 「(青い) 目をし(ている)」 「(長い) 髪をし(ている)」  
形態 「(四角い) 形をし(ている)」  
役職・職業 「社長をする」 「先生をする」 「医者をする」  
数量 「五万円する」 「三日する(と来る)」

## 4. 文型

### 4.1 文型の表示方法

《文型》欄には、見出し語がサ変動詞として用いられるとき、どのような格形式のパターンを取るかが記載してある。名詞句は、動詞に近い方から1、2とふった。この数字をふるのは、ガ格、ヲ格だけで、それ以外の名詞句には数字をふっていない。これは、ヲ格を持つ文型では、常にヲ格を「NP1」と表示することで、9節に述べる、ヲ格が見出し語を修飾する場合に、一貫して「NP1ノNP0ヲスル」と表示することを可能にするためである。格形式はカタカナで表記する。名詞句は、「NP1」、「NP2」、「NP」と書き、サ変動詞の語幹となる名詞（見出し語）には0をふった。この外の点は基本的に『I P A L 動詞辞書』に準じている。すなわち、文型内の「/」の表示は、/の左右の格形式の交替可能性を示す。ただし、これは、文型として交替が可能ということで、意味がまったく同じということではない。「/」の左右の順序は、『I P A L 動詞辞書』と同じで常に一定である。

ガ>ヲ>ニ>カラ>へ>ト>デ>φ

具体的には、交替の種類として8種類あった。次に、例文とともにあげる。

ガ/デ 両者は、多くの点ガ/デ共通する。  
ガ/ヲ あの部長は、社長のガ/ヲ約束されている。  
ヲ/ニ 会社は、若手のこれからの活躍ヲ/ニ期待している。  
ヲ/φ このホールは、五千人ヲ/φ収容できる。  
ニ/へ 事件が意外な方向ニ/へ展開した。  
ニ/ト 秋川が多摩川ニ/ト羽村で合流する。  
ニ/デ 彼は、論文を学会誌ニ/デ発表した。  
カラ/デ サングラスをかけた女性が、京都駅カラ/デ新幹線に乗車した。

また、名詞句の並び方は、できるだけ一般的とみなされる順序に従った。任意的な名詞句には（ ）をつけた。

- 例(1) 文例：警察は その男を 盗みの疑いで 逮捕した。  
文型：NP2ガ NP1ヲ NPデ NP0スル  
例(2) 文例：住民が 空港の建設に 反対する。  
文型：NP1ガ NPニ NP0スル

### 4.2 文型の種類

「NP1ガNP0スル」と「NP2ガNP1ヲNP0スル」が成立せず、もしくは、まれで、使役と受身の文型「NP2ガNP1ヲNP0サセル」「NP2ガNP1ニNP0サレル」の方が一般的な場合には、その文型を《文型》欄に記述した。また、「NP1ガNP0スル」が成立せず「NP1ガNP0デキル」の方が一般的な場合にも、その形式を《文型》欄に記述した。

- 例(1) 「NP2ガNP1ヲNP0サセル」  
彼女が資金を回転させる。  
?彼女が資金を回転する。

- (2) 「NP2ガNP1ニNP0サレル」

- 体が放射能に汚染される。  
?放射能が体を汚染する。
- (3) 「NP2ガ/ニNP1ガ/ヲNP0サレテイル」  
あの助教授は有望な将来が約束されている。  
?学長があこの助教授に有望な将来を約束する。  
?あの助教授は有望な将来を約束される。
- (4) 「NP1ガNPヲ/φNP0デキル」  
このホールは五千人収容できる。  
?このホールは五千人収容する。

使役、受身、可能以外に、使用形態に制限があるものについては、《備考》に注記した。

記載例 「脱落する」

文例：ある文章が本文から脱落している。

備考：「脱落している」の形が多い。

## 5. 名詞の意味素性

『動詞辞書』、『形容詞辞書』では、文型の各名詞句についてはその意味素性を四つを限度としてふったが、今回の『名詞辞書』では数に制限をつけなかった。意味素性自体については、「第二部 意味素性の詳細」を参照されたい。

記載例 「保護する」

- 区分番号 : 02  
文型 : NP2ガ NP1ヲ NPデ NP0スル  
格形式1 : ガ  
意味素性1 : HUM/AML/ORG  
名詞句1 : 我々、国王、親、救急隊員/ニワトリ/警察、政府  
地方自治体、民間団体  
格形式2 : ヲ  
意味素性2 : HUM/AML/CON/ORG/ABS  
名詞句2 : 付近の住民、子供、負傷者/野生動物、クジラ、鳥獣類  
/自分の卵、皮膚/農家、銀行、中小企業/自然、文化財、  
プライバシー、ソフト、新分野の産業  
格形式3 : デ  
意味素性3 : CON/MAN/NOR  
名詞句3 : 自分の体/新しいやり方/軍事力、その法律、輸入制限、  
著作権、パスワード

ここで、《格形式》、《意味素性》、《名詞句》、《ノNP0》の各項目名の後ろについている数字は、《文型》の名詞句に文頭から順にふったものである。《文型》欄で、ガ格、ヲ格の名詞句についている数字とは関係がない。

## 6. 文型に現われる名詞句

名詞句の格形式は、ガ、ヲ、ニ、カラ、へ、ト、デの七つである。動詞辞書では、この他に比較の「ヨリ」を記述したが、名詞辞書には「ヨリ」は現れなかった。

名詞句、意味素性の間の「/」は、それぞれ順に対応している。

## 6.1 ト格

ト格の前に文相当の表現が来る場合、文型では「S」と表示した。この時、動詞辞書に準じて「S」には意味素性として《ーー》を与える。「S」には、「要請する」の用例「その地域の住民が 市当局に ゴルフ場の建設を中止すように要請した。」における「ように」が付加した表現部分も含まれる。ただし、「ト」に述語が見つからない場合には文相当とは認めず「NPト」と記述した。

- 例(1) 文例 評論家は 彼が文壇のホープだと 注目している。  
文型 NP1ガ Sト NP0スル
- (2) 文例 評論家は 彼を 文壇のホープだと 注目している。  
文型 NP1ガ NP1ヲ Sト NP0スル
- (3) 文例 評論家は 彼を 文壇のホープと 注目している。  
文型 NP1ガ NP1ヲ NPト NP0スル

また、『動詞辞書』と同じく、並列の「ト」は格形式として扱わず、相手を表わす「ト」を文型に記述した。

- 例(1) イトヨーカドーがサントリーと提携する。  
?イトヨーカドーが提携する。  
(2) イトヨーカドーとサントリーが開店する。

例の(1)は文型に取り上げるが、(2)は扱わない。  
この相手を表す「ト」が、ガ格、ヲ格に含まれている場合には、次の例のようにそのバリエーションの文型が常に存在する。

- 例(1) 文例：柏市とトーランス市が 交流している。  
文型：NP1ガ NP0スル  
文例：柏市が トーランス市と 交流している。  
文型：NP1ガ NPト NP0スル
- (2) 文例：農林省が 去年と今年の生産高を 比較した。  
文型：NP2ガ NP1ヲ NP0スル  
文例：農林省が 今年の生産高を 今年の生産高と 比較した。  
文型：NP2ガ NP1ヲ NPト NP0スル

## 6.2 デ格

文型に取り上げる格形式は、動詞辞書では必要不可欠のものにかぎり、時に任意的な名詞句を( )でくくった。任意的な名詞句というのは、おもに副詞句相当の働きをするものだが、名詞辞書では、このうちデ格を伴うものは、デ格があることによって文がより自然になる限り、できるだけ文型に取り込むことにした。それは、次のような、「デ」格がないと不自然な文が実際に存在すること、また、一つには、ユーザーからの要望による。

- 例(1) 彼は 金で 苦勞した。  
(2) 彼は アルバイトで 生活している。

基本的に、上の七つの格形式以外に文型に取り上げたのは、デ格だけだが、単独の名詞句でも、その文型に必須と見なされるものは、名詞句として文型に取り込んだ。その名詞句は、『動詞辞書』と同様、「NPφ」と表示した。

例 「延期する」

記載例 文例：議長が 会議を 二時間 延期した。  
文型：NP 2 ガ NP 1 ヲ NP φ NP 0 スル

上記以外の格形式、格を伴わない副詞句や説は、《文例》に記述することはあっても、《文型》には記載していない。特に必要と思われる場合には、《備考》に注記した。

例 「定着する」

記載例 文例：対外受精が 不妊治療法として 定着する。  
文型：NP 1 ガ NP 0 スル  
備考：「NP トシテ」を伴って用いる。

「安心する」

記載例 文例：やっと目的地に着いて安心した。  
文型：(NP ガ) NP 0 スル  
備考：理由を表す節をとることが多い。

## 7. 文例

《文例》の欄には、各文型の用法を表す文を三つを限度として記載している。文型をそのまま踏襲した作例をあげることを基本にしたが、より自然な文にするため、時に名詞句を省略し、また、係助詞「は」を使用した。

## 8. 《ノNP0》

《ノNP0》の欄には、文型に現れるそれぞれの名詞句が、「NP0」を修飾して名詞句を作り得るかどうか、また可能な場合、そこに現れる格形式をひらがなで示した。名詞句表現が成立するかどうかの判断は、記述者の直感によっている。文脈の助けがあれば可能な場合が多いが、ここでは、新聞の見出しとして成り立つかどうか、すなわち、述語を伴わず名詞句単独で、サ変動詞の意味を引き継いで無理なく解釈できるかどうかを判断の目安にしている。具体的な記述内容は、「の、からの、への、での、との、による」の7種類、もしくは、無記入の空白である。以下に、それぞれの格形式の例をあげる。

- (1) 「の」という記述は、項になる名詞が、動詞的な意味「・・・スルコト」、たとえば、意味素性の〈ACT〉、〈PRC〉、〈PHE〉などを引き継いだまま、「NPノNP0」が言える場合を指す。

例 赤井選手がチャンピオンに挑戦した。 → 赤井選手の挑戦

記載例 区分番号 : 01  
文型 : NP 1 ガ NP ニ／ヘ NP 0 スル  
ノNP 0 1 : の

A社は大分湾にコンビナートを建設する。 → コンビナートの建設

記載例 文型 : NP 2 ガ NP 1 ヲ NP 0 スル  
ノNP 0 3 : の

- (2) 「からの」という記述は、上と同じ条件で「NPカラノNP0」が言える場合を指す。

例 日本はクウェートから石油を輸入している。 → クウェートからの輸入

記載例 文型 : NP 2 ガ NP カラ NP 1 ヲ NP 0 スル  
ノNP 0 3 : からの

市が企業に土地を安く提供した。 → 市からの提供

記載例 区分番号 : 01  
文型 : NP2ガ NP1ヲ NP0スル  
ノNP01:からの

生徒が函数を級数に展開する。 → 函数からの展開

記載例 文型 : NP2ガ NP1ヲ NPニ NP0スル  
ノNP02:からの

- (3) 「への」という記述は、上と同じ条件で「NPへノNP0」が言える場合を指す。

例 警察が書類を検察庁に／へ提出する。 → 検察庁への提出

記載例 区分番号 : 01  
文型 : NP2ガ NP1ヲ NPニ／へ NP0スル  
ノNP03:への

会社側は賃上げに抵抗している。 → 賃上げへの抵抗

記載例 区分番号 : 01  
文型 : NP2ガ NPニ NP0スル  
ノNP02:への

- (4) 「での」という記述は、上と同じ条件で「NPデノNP0」が言える場合を指す。  
デ格は必須でないことが多く、「デ格」を文型に含めたのは、例のようにそれがあつた方が明かに自然な文になる場合に限った。

例 人間は胃で食べ物を消化する。 → 胃での消化

記載例 文型 : NP2ガ NPデ NP1ヲ NP0スル  
ノNP03:での

彼は100メートル競走で五位に入賞した。 → 100メートル競争での入賞

記載例 文型 : NP1ガ NPデ NPニ NP0スル  
ノNP02:での

- (5) 「との」という記述は、上と同じ条件で「NPトノNP0」が言える場合を指す。

例 次郎が花子と結婚した。 → 花子との結婚

記載例 文型 : NP1ガ NPト NP0スル  
ノNP02:との

車輪とレールが摩擦して、火花が散った。 → 車輪とレールとの摩擦

記載例 区分番号 : 01  
文型 : NP1ガ NP0スル  
ノNP01:との

彼は放射線と放射能を混同している。 → 放射線と放射能との混同

記載例 区分番号 : 01  
文型番号 : 1  
文型 : NP2ガ NP1ヲ NP0スル  
ノNP02:との

- (6) 「による」という記述は、上と同じ条件で「NPニヨルNP0」が言える場合を指す。

- 例 婦人団体が暴力団を町から追放した。 → 婦人団体による追放  
 革命によって、市民は国王を国外に追放した。 → 市民による追放  
 記載例 文型 : NP2ガ NP1ヲ NPから NPニ NP0スル  
 ノNP01 : による  
 インテリアデザイナーが室内を明るい色調の壁紙で装飾した。  
 → 明るい色調の壁紙による装飾  
 記載例 文型 : NP2ガ NP1ヲ NPデ NP0スル  
 ノNP03 : による

- (7) 何も記述していない場合は、名詞句が成立しないことを意味する。この場合、名詞句がサ変動詞の動詞的な意味を引き継いでいない場合は、「NPノNP0」という表現が可能でも、何も記述しない。ただし、《備考》に「表現としては可能だが、その場合の意味はサ変動詞のときの意味とは異なる」旨を記載した。

- 例 「組織する」  
 記載例 文型 : NP2ガ NP1ヲ NPデ NP0スル  
 名詞句1 : 社員、労働者、公害に反する市民／市  
 ノNP01 :

この場合、「社員の組織」という名詞句は、「組織する」の有する動詞的な意味を持ちにくいと考えられるので記述欄には何も記入しない。

以上の記述において、項となる名詞が同じであってもそれに係る名詞によって上の(1)から(6)の格形式が複数用いられることがある。たとえば、項となる名詞が「援助」の場合、「国が自治体を援助する。」のガ格の「援助」への装飾の仕方には、「国の援助」「国による援助」「国からの援助」と複数ある。この場合、(1)から(6)の助詞の範囲で、可能なすべての形を併記した。

また、この際、名詞によって名詞句に現れる格形式に制限のあることがあるが、その制限については記述していない。たとえば、ヲ格の「援助」への装飾の仕方は、「入院費の未払いを援助する」の場合は、「入院費の未払いの援助」が成立するが、「自治体を援助する」の場合は、「自治体の援助」は、ガ格と解釈するのが一般的と考えられる。そこで、ヲ格であることを明確にする「自治体への援助」の「への」という形も併記した。しかし、名詞句欄には、一つひとつの名詞と格形式の対応は記述していない。

記載例 「援助する」

- 文例 : 国が自治体を援助する。  
 文型 : NP2ガ NP1ヲ NP0スル  
 格形式1 : ガ  
 名詞句1 : その大佐／国  
 ノNP01 : の、からの、による  
 格形式2 : ヲ  
 名詞句2 : 自治体、テロ集団／入院費の未払い  
 ノNP02 : の、への

9. 《NP0ヲスル》

サ変動詞「NP0スル」の中には、その意味を変えずに「NP0ヲスル」の形に交替し得るものがある。この変化の有無と、その際の格形式の交替の形を《NP0ヲスル》欄に記載した。この判断は、実際の用例にあることと担当者の直感によった。具体的な記述内

容は、次の三つのいずれかである。

- (1) N P 0ヲスル
- (2) N P 1ノN P 0ヲスル
- (3) ×

(1)の「N P 0ヲスル」というのは、「N P 0」がその文型のまま「N P 0ヲスル」と言えることを意味する。

例 花子が食事する。 → 花子が食事をする。  
彼らは敵陣に突撃した。 → 彼らは敵陣に突撃をした。  
私服警官が犯人と接触する。 → 私服警官が犯人と接触をする。

(2)の「N P 1ノN P 0ヲスル」というのは、上記(1)の「N P 0ヲスル」が言えない場合に、もとの文型の「N P 1ヲ」が「N P 1ノ」に交替すれば、「N P 1ノN P 0ヲスル」と言えることを意味する。

例 太郎がタイ語を勉強する。 → 太郎がタイ語の勉強をする。  
町は土偶を展示した。 → 町は土偶の展示をした。  
あの会社は50億円を投資した。 → あの会社は50億円の投資をした。

この(2)の「N P 1ノN P 0ヲスル」の記述は、(1)の「N P 0ヲスル」とは二者択一の関係にある。これは、一般に「ヲ格」が二つ並ぶことはないと考えられるためである。ただ、話し言葉では、二重ヲ格が現れることがある。たとえば、「注目する」のように「Sト」を取る文型では、ト格の部分に修飾句が長く係ると、実際には「ヲN P 0ヲスル」表現が違和感なく用いられる。しかし、ここではそうした例は記述の対象にしていない。

(1)(2)の外に、次のように他の格形式を伴って「N P 0ヲスル」が成立する場合もある。

例 生物は新しい環境に適応する。 → 生物は新しい環境への適応をする。

こうした場合にも、上記の(1)が成り立つことが前提である。そこで、(1)が成立し、しかも、ヲ格以外の格形式が文型に存在する場合には、この記述欄には具体的に記述はしていないが、そのヲ格以外の格形式を伴う「カラノN P 0ヲスル」や「ヘノN P 0ヲスル」といった文型が存在することになる。

(3)の「×」という記述は、どのように文型交替をしても「N P 0ヲスル」が言えないことを意味する。

例 キリストが誕生した。  
警察はその男を逮捕した。  
眼下に銀世界が展開する。

## 10. 記載例

サ変動詞としての用法<サ変用法>の記載例は以下の通りである。

見出し語 : 「いんさつ【印刷】」

[区分01] 版面にインクをつけて版面の文字で絵を紙などに刷り出すこと。また、刷り出されたもの

文型番号 : 1

文型数 : 2  
 文型 : NP2ガ NP1ヲ NP0スル  
 格形式1 : ガ  
 意味素性1 : HUM/OR G  
 名詞句1 : 彼/ 県教委, 6年1組  
 ノ NP01 : の, による  
 格形式2 : ヲ  
 意味素性2 : P R O  
 名詞句2 : 報告書, 論文集, 卒業文集  
 ノ NP02 : の  
 格形式3 :  
 意味素性3 :  
 名詞句3 :  
 ノ NP03 :  
 格形式4 :  
 意味素性4 :  
 名詞句4 :  
 ノ NP04 :  
 文例 : 県教委は、報告書を八百部印刷した。  
 NP0ヲスル : NP1ノNP0ヲスル  
 備考 :

文型番号 : 2  
 文型数 : 2  
 文型 : NP2ガ NP1ヲ NPニ NP0スル  
 格形式1 : ガ  
 意味素性1 : HUM/OR G  
 名詞句1 : 彼/ 印刷屋  
 ノ NP01 : の, による  
 格形式2 : ヲ  
 意味素性2 : A P P / I N F  
 名詞句2 : 文字, 絵, 自分の名前/ 憲法全文  
 ノ NP02 : の  
 格形式3 : ニ  
 意味素性3 : C O N  
 名詞句3 : 用紙, ガラス, Tシャツ  
 ノ NP03 : への  
 格形式4 :  
 意味素性4 :  
 名詞句4 :  
 ノ NP04 :  
 文例 : 彼はタイの文字を用紙に印刷した。  
 NP0ヲスル : NP1ノNP0ヲスル  
 備考 :

#### 参考文献

- 相澤正夫(1993)『日本語教育のための基本語彙調査』と複合サ変動詞,『研究報告集』14,  
 (国語研報告#105), 秀英出版.  
 井口厚夫(1993)「掃除する」と「掃除をする」—行為を表す名詞と漢語サ変動詞.『ソフ

- トウェア文書のための日本語処理の研究』12, 情報処理振興事業協会, pp.109-120.
- 影山太郎(1993)『文法と語形成』 ひつじ書房.
- 邱根成(1993)サ変動詞における漢語語幹 一字漢語を中心に,『専修国文』53, pp.57-73.
- 『ソフトウェア文書のための日本語 処理の研究』9, 情報処理振興事業協会, 1988.  
pp.173-191; pp.193-295.
- 田野村忠温(1988)「部屋を掃除する」と「部屋の掃除をする」,『日本語学』11,  
pp.70-80.
- 橋本三奈子・桑畑和佳子・村田賢一(1984) I P A L 名詞辞書の概要,『I P A L シンポジ  
ウム '93 論文集』 情報処理振興事業協会, pp.1-12.
- 平尾得子(1990)サ変動詞をめぐる,『待兼山論叢』24, pp.57-73.

## VI 述語としての用法 1

### 1. 「述語としての用法」について

「述語としての用法 1」<述語用法 1>では、見出し語が単独で助動詞ダを伴って述語になるもの（の一部）を記載した（注 1）。なお、名詞が述語になる場合、一つの名詞が単独ではなく、修飾語がついて用いられることがあるわけだが、（例 これは貴重な本だ、彼は本の虫だ、広島はカキ料理の本場だ）、そのようなものの一部は、「述語としての用法 2」として別に扱っている（参照：[第六章 VII 述語としての用法 2]）。

### 2. 記載項目

「述語としての用法 1」<述語用法 1>の記載項目は以下の通りである。

文型番号	: その区分におけるその文型の通し番号
文型数	: その区分における文型の数
文型	: 見出し語が述語用法「～ダ」で用いられるときの文型の表示
格形式 n	: NP n の格形式（格助詞）
意味素性 n	: NP n の意味素性
名詞句 n	: NP n の名詞句の例
～ノ NP0 n	: 見出し語を主要部とし NP n を修飾部とした名詞句化の可否と形式
文例	: その文型の具体例
副詞	: 共起する程度副詞
備考	: その文型に関わる注記

### 3. 記述の対象

見出し語が単独で助動詞ダを伴って述語になる場合を取り上げた。ただし、制限をもうけ、述語となることが語彙的に特徴となっている用法のみを記載してある。

記載した用法には次のようなものがある。

- (1) a. いわゆる「形容動詞語幹」となるもの  
例 いたずら： あの子はいたずらだ  
（いたずらな子）
- b. ガ格以外の名詞句と共起するもの  
例 毒： 喫煙は体に毒だ
- c. 程度副詞と共起するもの  
例 美人： 彼女は（とても）美人だ
- b. その他よく用いられるもの（比喩的な用法を含む）  
例 狼： 男は（みんな）狼だ  
首： 太郎は首だ

次のようなものはここでは記載していない。

- (2) a. 「AガBダ」の文型で、二つの名詞（句）とも具体物を指し、「イコール」であることを表すもの  
例 学生： 彼は学生だ
- b. サ変動詞用法とまったく同じ文型となるもの  
例 共通： 私は君と食べ物の好みが共通だ／する
- c. いわゆる「ウナギ文」  
例 鰻： ぼくは鰻だ（＝ぼくは鰻を食べる／注文する／……）

#### 4. 文型

ここで「文型」と呼ぶものでは、述語について次の二つのことが表示されている。なお、「格助詞」を動詞辞書・形容詞辞書での名称にならって「格形式」と呼ぶ。

- (1) a. その述語がいくつの名詞句（NP）をとるか  
b. それぞれの名詞句はどのような格形式（格助詞）をとるか

##### 4.1 格形式の範囲

ここで取り上げる格形式は次のものである（注2）。

- (2) ガ、ヲ、ニ、カラ、へ、ト、ヨリ、デ、φ

係助詞や副助詞については、文型としては記載せず、上の格形式に直している。

##### 4.2 格形式の交替

二つの文型の間に同じ名詞句のグループが現れる場合には、辞書の記載としては一つの文型における格形式の交替としている。文型における「/」はその左右の格形式が交替することを示している。(3)の「専門家に」と「専門家から」については(4)のように表示される。

- (3) a. その評論は 専門家には 評判が 低めだ  
b. その評論は 専門家からは 評判が 低めだ

- (4) NPニ/カラ

なお、検索等を行う際の便宜のため、一定の順番を定めて格形式を併記している。一般には次の順番となっている。

- (5) ガ>ヲ>ニ>カラ>へ>ト>ヨリ>デ>φ

##### 4.3 文型の表示方法

見出し語が助動詞ダを伴って述語になった場合に、名詞句をいくつとるか、それぞれの名詞句がどのような格形式を伴うかを表示したものが文型であり、《文型》欄に記述する。なお、ガ格の名詞句は一つの文型に2項まで現れることとし、述語に近い方から「NP1」「NP2」と番号を振り、1項の場合は「NP1」とした（注3）。また、見出し語を「NP0」として表示している。

文型での名詞句の配列については、自然な語順を示すようにした。

記入例

彼の当選は 確実だ → NP 1 ガ NP 0 ダ  
二人の仲は あの子に 秘密だ → NP 1 ガ NP ニ NP 0 ダ

文型に現れる格形式を左から（前から）順に《格形式 1》《格形式 2》・・・とする。それに伴い、《意味素性 n》《名詞句 n》《ノ NP0 n》の「n」に数字があてはめられる。

例 NP 2 ガ NP 1 ガ NP 0 ダ  
↓ ↓  
格形式 1 格形式 2

[参考] 人称制限

ここでの人称制限は形容詞の述語用法におけるものと同類のものである。以下に次の報告書に収められた「人称制限」についての解説を再録する。（参照：『計算機用日本語基本形容詞辞書 I P A L (Basic Adjectives) 一解説編一』）。

形容詞が感覚・感情を表す場合、終止用法（現在・断定・肯定）では話し手自身の感覚・感情を表すのが普通である。そのため、(1a)のように感覚・感情の主体が明示されないときには、それは話し手として解される。また、主体が明示されるときでも、名詞句は一人称に限られる、(1b)は自然な文であるが、(1c, d)はそうではない。

- (1) a 冷たい水がほしい。
- b 私はさびしい。
- c ?あの人はさびしい。
- d ?あなたはさびしい。

二、三人称について述べるためには、助動詞「-がる」を用いる。

- (2) あの子はさびしがっている。

また、話しての判断・推量を表す助動詞や過去時制の文、疑問文などでも、一人称以外に言及できる。従属節や連体修飾の場合も同様である。

- (3) a 太郎はさびしいのだ 太郎はさびしいらしい 太郎はさびしそうだ
- b 太郎はさびしかった
- c 何がほしいの
- (4) a 太郎はさびしくなると、母に電話をかける
- b 太郎がこわい犬

その他、小説の叙述などでは、終止用法においても二、三人称が現れることがある。一方、「-がる」「-そう」などは、主体の内的な状態について客観的に述べる表現であるので、(5a)のような一人称主語の文はおかしい。(5b)では、話し手が自分の状態を客観的にとらえている。このような場合ならば、一人称についても「-がる」を用いることができる。

- (5) a ?私はさびしがっている ?私はさびしそうだ
- b あんなことを面白がったのははずかしい

## 5. 名詞句の意味素性

《意味素性 n》欄には、各格形式に現れる名詞句の意味素性を記載している。複数あるものは「/」で併記している。「文型に現れる名詞句」の例として記載された名詞句に対して、該当する意味素性を記載したため、網羅的に記載されているわけではない。意味素性の詳細については「第二部 意味素性の詳細」を参照のこと。

## 6. 文型に現れる名詞句

《名詞句 n》欄には、各格形式に現れる名詞句の例をあげている。意味素性が複数ある場合はそれに対応して「/」を用いている。

記入例

見出し : こうふく【幸福】  
文型 : NP 1 ガ NP 0 ダ  
格形式 1 : ガ  
意味素性 1 : HUM / PRC  
名詞句 1 : 彼女, うちの祖母 / 彼の人生, 彼との結婚生活

## 7. 見出し語を主要部とする名詞句化

《ノ NP0 n》欄では、見出し語を主要部とし、NP n を修飾部とする名詞句を作ることが可能であるかを記述している。可能な場合はその際の格形式が記載されている。「サ変動詞としての用法」でも同様の記述が行われているので、詳細は「サ変動詞としての用法」の解説を参照されたい。ただし、ここで記載した助詞は「の」だけである。

記入例

見出し : こうふく【幸福】  
文型 : NP 1 ガ NP 0 ダ  
格形式 1 : ガ  
意味素性 1 : HUM / PRC  
名詞句 1 : 彼女, うちの祖母 / 彼の人生, 彼との結婚生活  
ノ NP0 1 : の

## 8. 文例

区分と文型を端的に示すような文例をあげた。ただし、なるべく自然な文になるようにした。したがって、例えば、文型に表示した格形式を、文例では助動詞や副助詞に直した場合もある。また、述語の形式も「～ダ」から変更しているものもある。

記入例

見出し : こうふく【幸福】  
文型 : NP 1 ガ NP 0 ダ  
格形式 1 : ガ  
意味素性 1 : HUM / PRC  
名詞句 1 : 彼女, うちの祖母 / 彼の人生, 彼との結婚生活  
文例 : 彼との結婚生活は幸福だった

## 9. 共起する副詞

程度副詞の「とても」または「ほとんど」と共起可能な場合、その副詞を《副詞》欄に記載している。

### 記入例

見出し : こうふく【幸福】  
文型 : NP1ガ NP0ダ  
格形式1 : ガ  
意味素性1 : HUM/PRC  
名詞句1 : 彼女, うちの祖母/彼の人生, 彼との結婚生活  
文例 : 彼との結婚生活は幸福だった  
副詞 : とても

なお、「とても・ほとんど」以外の程度副詞でもよく使われそうなものがある場合はそれも合わせて記載した。

## 10. 記載例

< 述語用法 1 > における記載例を以下に示す。

例：見出し語「ぎゃく【逆】」

文型番号 : 1  
文型数 : 2  
文型 : NP1ガ NP0ダ  
格形式1 : ガ  
意味素性1 : ORD/DIR/INF/ABS  
名詞句1 : 順序/電流の方向, 机の向き, 君の行く方向と僕の行く方向/考え方/  
彼の言うこととすること, 彼の考えと私の考え  
ノ NP01 :  
格形式2 :  
意味素性2 :  
名詞句2 :  
ノ NP02 :  
格形式3 :  
意味素性3 :  
名詞句3 :  
ノ NP03 :  
文例 : 順序が逆だ。  
: 磁石を近づける時と遠ざける時とでは電流の方向は逆である。  
: 二人は考え方がまるで逆だ。  
副詞 : ほとんど  
備考 :

文型番号 : 2  
文型数 : 2  
文型 : NP1ガ NPト NP0ダ  
格形式1 : ガ  
意味素性1 : RES/DIR/PIT/INF

名詞句 1 : 結果／コース, 君の行く方向／今年／彼の考え, 彼の言うこと, 事実  
 ノ NP0 1 :  
 格形式 2 : ト  
 意味素性 2 : HUM／RES／DIR／PIT／INF  
 名詞句 2 : 私／実際／そっち, そっちの方向／例年, いつも, これまで／私の考え  
 予想  
 ノ NP0 2 : の  
 格形式 3 :  
 意味素性 3 :  
 名詞句 3 :  
 ノ NP0 3 :  
 文例 : 結果が予想と逆だ。  
 副詞 : ほとんど  
 備考 :

## 注

1. 名詞の述語用法については高橋(1984)など数多くの論考がある。また、IPALでの述語用法の一般的なとらえ方については動詞辞書および形容詞辞書の関係項目も参照されたい。
2. φ格とは、次のようなもののことである。

会議が      三日間    延期だ  
 NP 1 ガ    NP φ    NP 0 ダ

3. 先に公開した『計算機用日本語基本形容詞辞書 IPAL (Basic Adjectives)』では「終止用法」において述語素を用いて、いわゆる二重主格構文(「象が鼻が長い」のような文型)も詳細に記述した。しかし、当名詞辞書では述語素を用いておらず、「述語としての用法」において二重主格構文の記述は大幅に省略してある。

## 参考文献

- 井上和子(1976)『変形文法と日本語(上)』大修館書店。  
『計算機用日本語基本形容詞辞書 IPAL (Basic Adjectives)一解説編一』, 情報処理振興事業協会, 1990, p. 23.
- 高橋太郎(1984) 名詞述語分における主語と述語の意味的な関係, 『日本語学』 3 (12), pp. 18-39.
- 寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版。
- 西尾寅弥(1972)『形容詞の意味・用法の記述的研究』(国語研報告#44), 秀英出版。

## VII 述語としての用法 2

### 1. 「述語としての用法 2」について

名詞が助動詞ダを伴って述語になる場合、前章の「述語としての用法 1」で記述したような単独の一語のみで用いられるとは限らない。それどころか中には、何らかの修飾語がついた用法でのみ用いられるものもある（注 1）。次の例はそのようなものである。

- (1) a. 虫： 太郎は本の虫だ  
\* 太郎は虫だ  
b. 本場： 広島はカキ料理の本場だ  
? 広島は本場だ  
c. 担当： その地域は彼の担当だ  
\* その地域は担当だ

このように（述語用法またはその他の用法で）名詞の自立性が低いことは語彙的な特徴ととらえることができる。ここでは上の例のように、Cを見出し語としたとき「AがBノCダ」の形式をとるものでBが必須であるものを記述する。

なお、このような文型をとるものの中には、同じ名詞句を用いた他の文型と対応関係が認められるものもある。例えば、(1c)は次のような文型も存在する。

- (2) a. その地域は 彼の 担当だ = (1c)  
b. 彼は その地域が 担当だ  
c. 彼の 担当は その地域だ  
d. 彼は 担当が その地域だ

上のような例にしたがい、次の 4 文型をたてる（「AがBノCダ」を「NP<sub>x</sub>ガNP<sub>y</sub>ノNP<sub>0</sub>ダ」と表示する）。

- (3) a. 文型 1： NP<sub>x</sub>ガ NP<sub>y</sub>ノ NP<sub>0</sub>ダ  
b. 文型 2： NP<sub>y</sub>ガ NP<sub>x</sub>ガ NP<sub>0</sub>ダ  
c. 文型 3： NP<sub>y</sub>ノ NP<sub>0</sub>ガ NP<sub>x</sub>ダ  
d. 文型 4： NP<sub>y</sub>ガ NP<sub>0</sub>ガ NP<sub>x</sub>ダ

ここでは文型 1 が存在する場合、その記述に加え、文型 2・文型 3・文型 4 が可能であるかどうかも記述することにした。なお、文型 1 に対して、文型 2～4 以外のものが存在する場合には、《備考》欄に注記している（注 2）。

### 2. 記載項目

「述語としての用法 2」<述語用法 2>の記載項目は以下の通りである。

- NP<sub>x</sub> 素性 : NP<sub>x</sub> の意味素性  
NP<sub>x</sub> 名詞句 : NP<sub>x</sub> の名詞句の例  
NP<sub>y</sub> 素性 : NP<sub>y</sub> の意味素性  
NP<sub>y</sub> 名詞句 : NP<sub>y</sub> の名詞句の例  
文型 n : 文型 n の可否（可能な場合はその文型も記載）  
文例 n : 文型 n が可能な場合、その具体例  
備考 : その他の文型の存在等の注記

### 3. 記載の方法

文型の可否は、可能を「○」、不可能を「×」で表示した。可能な場合はさらにその文型を記載した。

文例は、上の「述語としての用法」の場合と同様に、なるべく自然な分にするため格形式または述語の形式を変更していることがある。

#### 記入例

見出し : むし【虫】

[区分04] ある特定の事に尋常でないほど熱中している人。

文型1 : ○ NP<sub>x</sub>ガ NP<sub>y</sub>ノ NP0ダ

文例1 : 太郎は本の虫だ

文型2 : ×

文例2 :

文型3 : ○ NP<sub>y</sub>ノ NP0ガ NP<sub>x</sub>ダ

文例3 : 本の虫は太郎だ

文型4 : ×

文例4 :

見出し : たんとう【担当】

[区分01] ある仕事や役目を受け持つこと。また、ある仕事の受け持ちの人。

文型1 : ○ NP<sub>x</sub>ガ NP<sub>y</sub>ノ NP0ダ

文例1 : この地域は彼の担当だ

文型2 : ○ NP<sub>y</sub>ガ NP<sub>x</sub>ガ NP0ダ

文例2 : 彼はこの地域が担当だ

文型3 : ○ NP<sub>y</sub>ノ NP0ガ NP<sub>x</sub>ダ

文例3 : 彼の担当はこの地域だ

文型4 : ○ NP<sub>y</sub>ガ NP0ガ NP<sub>x</sub>ダ

文例4 : 彼は担当がこの地域だ

なお、可能とも不可能とも言い切れないものについては「△」で示し、文型を記載している。

### 4. 《NP<sub>x</sub>素性》と《NP<sub>y</sub>素性》

「第三章 意味素性 2.3 連体修飾部の名詞に素性を与える場合」に述べられているように、意味素性とは、名詞句が構文の中で述語に従属して現れた場合に、その名詞句の性格を表わすために与えられるラベルである。したがって、名詞句の内部構造を分析して、連体修飾部だけを分離し、それに意味素性を与えることは本来不可能なことである。また、述語部分に現われる見出し語に素性を与える方法も、現在では確立していない。この欄では、NP<sub>x</sub>とNP<sub>y</sub>に対し、意味素性を記載したが、取り上げた文型のうち、次の文型2だけが、NP<sub>x</sub>とNP<sub>y</sub>とに意味素性を与えることのできる構文である。NP<sub>x</sub>とNP<sub>y</sub>とが「NP0ダ」という述語に従属する名詞句としてふるまうからである。

文型2 NP<sub>y</sub>ガ NP<sub>x</sub>ガ NP0ダ

文型1では、述語の項となるNP<sub>x</sub>だけに素性を与えることができる。

文型1 NP<sub>x</sub>ガ NP<sub>y</sub>ノ NP0ダ

また、文型 4 では、述語の項になる NP<sub>y</sub> だけに素性を与えることができる。

文型 4      NP<sub>y</sub> ガ   NP<sub>0</sub> ガ   NP<sub>x</sub> ダ

文型 3 では、本来、NP<sub>x</sub> と NP<sub>y</sub> には、素性を与えることはできない。

文型 3      NP<sub>y</sub> ノ   NP<sub>0</sub> ガ   NP<sub>x</sub> ダ

しかし、この欄では、文型 2 が不可能な場合にも NP<sub>x</sub> や NP<sub>y</sub> を項とした構文を作成し、それに対応する素性を記載した。次の例では、文型 1 における NP<sub>x</sub> にしか、本来、意味素性を振ることはできない。

文型 1      NP<sub>x</sub> ガ   NP<sub>y</sub> ノ   NP<sub>0</sub> ダ  
             この人は   私の        姉だ

文型 2      ×

文型 3      NP<sub>y</sub> ノ   NP<sub>0</sub> ガ   NP<sub>x</sub> ダ  
             私の        姉は        この人だ

文型 4      ×

しかし、次のように文型 1 の意味とおおよそ同等な分(4)を作成し、これに対して、素性を与え、《NP<sub>y</sub> 素性》の欄に記載する。

- (4)a.   私は        この人の妹だ  
             <HUM>  
      b.   私には   姉が        います  
             <HUM>

このように、この欄では意味素性を与える方法が、述語の項としての用法やサ変動詞としての用法とは異なっているので、注意が必要である。

なお、NP<sub>x</sub> 名詞句欄および NP<sub>y</sub> 名詞句欄には、これらの文型に現れる典型的な名詞句だけを記載した。したがって、意味素性も網羅的に振ったわけではなく、記載された名詞句に該当する素性だけを記載するにとどめた。

## 5. 記載例

< 述語用法 2 > における記載例を以下に示す。

見出し語    : 「げんさんち【原産地】」

[区分 0 1]   動植物や鉱物が最初に産出した場所。または製品が最初に生まれたり出来たりした生産地。

NP<sub>x</sub> 素性    : LOC

NP<sub>x</sub> 名詞句   : 南米, インドネシア

NP<sub>y</sub> 素性    : PLA / AML

NP<sub>y</sub> 名詞句   : カカオ, コカイン / ブンチョウ

文型 1      : ○ NP<sub>x</sub> ガ   NP<sub>y</sub> ノ   NP<sub>0</sub> ダ

文例 1      : 中米はカカオの原産地だ。

文型 2      : ○ NP<sub>y</sub> が   NP<sub>x</sub> ガ   NP<sub>0</sub> ダ

文例 2      : カカオは中米が原産地だ。

文型 3      : ○ NP<sub>y</sub> ノ   NP<sub>0</sub> ガ   NP<sub>x</sub> ダ

文例 3      : カカオの原産地は中米だ。

文型 4      : ○ NP<sub>y</sub> ガ   NP<sub>0</sub> ガ   NP<sub>x</sub> ダ

文例 4      : カカオは原産地が中米だ。

備考        :

見出し語 : 「きた【北】」  
 [区分01] 方角・方位の一つで、太陽が出る方向を向いたときに左になる方向。また、その方向にある場所。  
 NP<sub>x</sub> 素性 : A 町, 川, 海, 山  
 NP<sub>x</sub> 名詞句 :  
 NP<sub>y</sub> 素性 : B 町  
 NP<sub>y</sub> 名詞句 :  
 文型 1 : ○ NP<sub>x</sub> ガ NP<sub>y</sub> ノ NP<sub>0</sub> ダ  
 文例 1 : A 町は B 町の北だ。  
 文型 2 : ×  
 文例 2 :  
 文型 3 : ○ NP<sub>y</sub> ノ NP<sub>0</sub> ガ NP<sub>x</sub> ダ  
 文例 3 : B 町の北は A 町だ。  
 文型 4 : ○ NP<sub>y</sub> ガ NP<sub>0</sub> ガ NP<sub>x</sub> ダ  
 文例 4 : B 町は北が A 町だ。  
 備考 : 特に文型 4 では《NP<sub>y</sub> 名詞句》に焦点があるため、「川, 海, 山」などの名詞句を《NP<sub>y</sub> 名詞句》に持ってくると不自然になる。

## 注

- ここでとりあげるものは自立性の低い名詞とされることがあり、そのようなものの述語用法については、野田尚史 (1981)、新屋 (1989)、菊池 (1990)、小島 (1991) を参考にした。
- (1c) には次の文も関係があるように見える。
  - 彼は その地域の 担当だ
  - (3) e. NP<sub>y</sub> ガ NP<sub>x</sub> ノ NP<sub>0</sub> ダ
 しかし、これは「担当」の意味が異なっている。すなわち (2a-d) は「担当分野」の意味であるのに対し、(2e) は「担当者」の意味である。したがって (2e) は (2a-d) とは別のものであるべきである。さらに、(2e) は次の文と関係があるものと思われる。
  - (2') a. 彼は その地域の 担当だ : 文型 1 = (2e)
  - b. その地域は 彼が 担当だ : 文型 2
  - c. その地域の 担当は 彼だ : 文型 3
  - d. その地域は 担当が 彼だ : 文型 4
 つまり、担当者の意味の「担当」が現れる文型と担当分野の意味の「担当」が現れる文型とが、「NP<sub>x</sub>」と「NP<sub>y</sub>」を入れ替えることによって成立しているのである。このようなことについては、《備考》欄に注記している。

## 参考文献

- 菊池康人 (1990) 『XのYがZ』に対応する『XはYがZ』文の成立条件 —あわせて、〈許容度〉の明確化—, 『文法と意味の間』くろしお出版, pp. 105-32.
- 小島幸子 (1991) 自立性が低い名詞と名詞述語文, 『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究』11, 情報処理振興事業協会, pp. 175-98.
- 新屋映子 (1989) “文末名詞” について, 『国語学』159, pp. 1-14.
- 野田尚史 (1981) 「カキ料理は広島が本場だ」構文について, 『待兼山論叢』15 大阪大学, pp. 45-66.

## 第七章 形態情報

### 1. 記載項目

形態情報は、見出し語の全区分に共通する「見出し情報（以下では〈見出し〉と呼ぶ）」の《表記》、各区分の概略を示す「区分一覧（〈区分〉と呼ぶ）」の《表記》《異音同語》《参照》の3項目（欄）、区分の対象外の用法を記載する「慣用表現ほか（〈慣用句等〉）」の《他合成語1》《他合成語2》の2項目（欄）、各区分に該当する合成語を記載する「形態情報（〈形態情報〉）」の全項目（欄）に記載されている。

#### <見出し>

表記 : 見出し語の表記（本章「2.2」参照）

#### <区分>

表記 : 該当区分の表記（本章「2.1」参照）

異音同語 : 見出し語と音韻形態上の差異が見られる語（本章「3」参照）

参照語 : 見出し語と形態的に関係する動詞／形容詞（本章「5」参照）

#### <慣用句等>

他合成語1 : 区分外の合成語1（本章「4.9.1」参照）

他合成語2 : 区分外の合成語2（本章「4.9.2」参照）

#### <形態情報>

合成語要素 : 当該合成語要素の読み（本章「4.1」参照）

要素表記 : 当該合成語要素の表記（本章「4.2」参照）

補足 : 見出し形・被覆形・連濁形・促音形とそれ以外との区別  
（本章「4.1」の(3)参照）

要素番号 : 当該合成語要素の通し番号（1から振る）  
（本章「4.1」の(3)参照）

要素数 : 合成語要素の総数（本章「4.1」の(3)参照）

合成 | 名前 : 合成名詞のうち、見出し語が前項要素となるもの  
（本章「4.4.1」参照）

合成 | 名後 : 合成名詞のうち、見出し語が後項要素となるもの  
（本章「4.4.2」参照）

合成 | 形 : 合形成容詞（本章「4.5」参照）

合成 | 動 : 合成動詞（本章「4.6」参照）

合成 | 副 : 合成副詞（本章「4.7」参照）

合成 | 他 : その他の品詞の合成語（本章「4.8」参照）

備考 : 注記事項

### 2. 表記

見出し語が現代日本語においてどのように表記されるか、そのありようについて示した。すなわち、見出し語が漢字表記、漢字仮名交じり表記、平仮名表記、片仮名表記、アルファベット表記などのうち、どの表記でなされるのかに関する情報を示した。

なお、ここにおける表記はなんらかの規範を反映させたものではなく、表記として可能性のあるものを広く記載する立場をとった。従って、この欄に記載されない表記を排除しようとするものではない。

『I P A L 名詞辞書』では表記に関する欄を〈区分〉の《表記》欄、〈見出し〉の《表記》欄、〈形態情報〉の《要素表記》欄の3箇所にした。以下では、〈区分〉及び〈見



例：見出し語「あし」

	《表記》	
<見出し>	足、脚	
	《区分番号》	《表記》
<区分>	0 1	足（あし）、脚（あし）
	0 2	足（あし）
	0 3	足（あし）、脚（あし）
	0 4	足（あし）
	0 5	足（あし）、脚（あし）

- (3) <見出し>には全ての区分に共通する情報を記載する。表記についても同様である。しかし、区分によって、表記が異なることや表記の使用頻度に違いがあることから、<見出し>の《表記》欄では、表記を複数有する場合の表記記載順序を、<区分>の《表記》欄や<形態情報>の《要素表記》欄のように、使用頻度順に並べることができない。そこで、<見出し>の《表記》欄においては、「漢字 → 平仮名 → 片仮名 → 英字」の順に表記を記載する。漢字表記が常用漢字表に掲げられていない音訓を使っていて、[ ] 中に示される場合もこの原則に従う（[4.2(3)]参照）。

例 <見出し> [煉瓦]、れんが、レンガ

ただし、漢字表記が複数ある場合、[ ] のついていない漢字を先に記載する。

例 <見出し> 傷、[疵、瑕]、きず、キズ

- (4) <形態情報>において、合成語要素ごとに [ ] 付きの漢字が異なる場合、<見出し>では、見出し語の読み（合成語要素1）の [ ] の基準に従う。

例：見出し語「いわ」[区分0 1]

	《表記》	
<見出し>	岩、[磐、巖]	
	《表記》	
<形態情報>	合成語要素1	岩（いわ）、[磐（いわ）、巖（いわ）]
	合成語要素2	磐（ばん）
	合成語要素3	岩（がん）、[巖（がん）]

- (5) <見出し>の表記方法は、基本的に<形態情報>の表記方法に準ずる（4.2参照）。

### 3. 《異音同語》

当該語と意味が同じで、語形の一部に音韻形態上の差異が見られる語を「異音同語」と呼ぶ。従って、語構成法の相違による語形の違いは「異音同語」とは認めない。

異音同語を構成するグループは、最も標準的であると思われる形態を見出し語に選立し、その他の語を異音同語の欄に平仮名で記載する。

	《見出し》	《表記》		《異音同語》
例	にっぽん	日本	→	にほん
	あいじゃく	愛着	→	あいじゃく
	ほお	頬	→	ほほ

ただし、以下の点に留意されたい。

- (1) 清音と濁音のゆれは、異音同語に含める。

	《見出し》	《表記》		《異音同語》
例	わるくち	悪口	→	わるぐち
	ふうきり	封切り	→	ふうぎり

- (2) いわゆる位相語（俚言・卑語・俗語・古語の類）は、異音同語とはしない。

	《見出し》		
例	けむり	←→	けぶ, けぶり

- (3) 外来語における「表記のゆれ」は、異音同語とはしない。これらは《表記》欄に記載する。([4.2(9)]参照)。

	《見出し》		
例	コンピューター	←→	コンピュータ
	ウィスキー	←→	ウイスキー

## 4. 合成語

### 4.1 《合成語要素》

「語」には、それ以上小さな要素に分析不可能な語と、さらに小さな要素に分析可能な語とがある。例えば、「昼（ひる）」が前者であり、「昼飯（ひるめし）」や「お昼」が後者である。前者を「単純語」、後者を「合成語」という（注1）。

このような語の構成に関する研究を「語構成論」「語形成論」と呼んでいる。これまでの語構成論では、「合成語」はさらに「複合語」と「派生語」とに下位分類されていた。先の例でいけば、「昼飯」は「昼」と「飯（めし）」というそれぞれ独立して単純語としても用いられる要素（自立形式）同士の結合による「複合語」、「お昼」は「お」というそれ自体では独立して用いられることのない要素（結合形式）と自立形式である「昼」とが結合した「派生語」とし両者の区別を行ってきた（注2）。

しかし、そのような考え方で、例えば「駅員」と「店員」という二つの語の語構成のあり方について考えてみると、「駅員」は「駅」という自立形式と「員」という結合形式とからなる「派生語」となるが、一方の「店員」は「店（てん）」も「員」も結合形式であることから、「店員」で一語であるとするか、それとも「熟語」である」というあつかいにせざるを得なくなり、「店員」は語構成論の枠外というあつかいになってしまう。その結果、両者における「員」という要素が「～で働く人」という意味を表し、それがそれぞれ「駅」と「店」に後接することにより「駅で働く人」「店で働く人」という意味をそれぞれ形成しているという語構成上の共通性をとらえることができなくなってしまう。

このようなことを回避するために、『IPAL名詞辞書』では、《見出し》にある当該語を漢字表記した場合、《見出し》にある読み以外の読みも合成語を構成する要素として認め合成語に関する情報を記載する方法をとることにした。例えば、《見出し》が「みせ」、

《表記》が「店」である場合、「みせ」以外に「てん」も合成語を構成する要素とした。この「みせ」「てん」を《見出し》「みせ」の「合成語要素」と呼び、漢字表記を手がかりとした語構成のありさまを記載しようとした。

また、「店員」のような合成語については、複合語か派生語かの区別が意味をなさないことや、接辞と結合形式の語基との区別が困難であることから、『I P A L 名詞辞書』では、複合語と派生語の区別を行わず「合成語」として一括した（注3）。

合成語要素は、以下の原則によって認定した。

- (1) 見出しを表記する漢字の読みに、見だし以外の読みがある時、その読みも合成語要素とする。

例 《見出し》  
いえ【家】

《合成語要素》	《合成語要素》	《合成語要素》	《合成語要素》
いえ	か	や	ち
↓	↓	↓	↓
《合成語》	《合成語》	《合成語》	《合成語》
一出	一屋	借一	x [人名] さん一

例 《見出し》  
あし【足】【脚】

《合成語要素》	《合成語要素》	《合成語要素》
あし	そく	きゃく
↓	↓	↓
《合成語》	《合成語》	《合成語》
一音	一跡	三一

- (2) 連濁形、被覆形、促音形は別の合成語要素とする。

例 《見出し》	《要素番号1》	《要素番号2》
かさ【傘】	かさ	がさ
	↓	↓
	《合成語》一立て	一傘（がさ）

例 《見出し》	《要素番号1》	《要素番号2》
あめ【雨】	あめ	あま
	↓	↓
	《合成語》一模様	一傘

例 《見出し》	《要素番号1》	《要素番号2》
きく【菊】	きく	きつ
	↓	↓
	《合成語》一人形	一花（か）

- (3) 合成語要素が複数ある場合の記載の順序は、見出し語の語形そのまま合成語要素となる場合を「要素番号1」とし、以下の順に「要素番号2」「要素番号3」……、と番号をつける。

見出し語形 → 連濁形 → 被覆形 → 促音形 → (漢字の) 別読み  
[要素番号1]

また、連濁形・被覆形・促音形以外の合成語要素については、《補足》欄に#をつける。

例：やま [区分01]

	《合成語要素》	《補足》
要素番号1	やま	
要素番号2	さん	#
要素番号3	ざん	#
要素番号4	せん	#

各要素番号は《要素番号》欄に示し、その区分における合成語要素全ての数を《要素数》欄に示す。

#### 4.2 《要素表記》

各区分の語義に一致し、かつ見出し語が有する合成語を構成するそれぞれの要素の表記を、<形態情報>の《要素表記》欄に記載する。

例：見出し語「あし」

見出し : あし  
区分数 : 05

区分番号 : 01  
合成語要素 : あし  
要素表記 : 足(あし), 脚(あし)  
補足 :  
要素番号 : 1  
要素数 : 3

-----  
区分番号 : 01  
合成語要素 : そく  
要素表記 : 足(そく)  
補足 : #  
要素番号 : 2  
要素数 : 3

-----  
区分番号 : 01  
合成語要素 : きゃく  
要素表記 : 脚(きゃく)  
補足 : #  
要素番号 : 3  
要素数 : 3

<形態情報>の《要素表記》欄における記載方法は以下の原則に従う。

(1) 漢字表記が複数ある場合には、一般的に使用頻度が高いと思われる表記から順に記

載する。漢字の読みは（ ）の中に平仮名で記載する。

《見出し》            《要素表記》  
例    うた            →    歌（うた），唄（うた）

(2) 二字以上の漢語の場合、漢字の読みは個々の漢字の後に（ ）の中に平仮名で記載する。

《見出し》            《要素表記》  
例    くろう            →    苦（く）労（ろう）

(3) 常用漢字表にはない漢字（表外字）、または、常用漢字表に掲げていない音訓（表外音訓）を使った表記は、[ ]に入れて記載する。

《見出し》            《要素表記》  
例    れんが            →    レンガ，れんが，[煉（れん）瓦（が）]  
      あご            →    顎（あご），[頤（あご）]  
      ぼたん          →    ボタン，[鉦（ぼたん）]  
      つゆ            →    つゆ，[汁（つゆ）]  
      [参考]    煉，瓦，顎，頤，鉦：表外字  
              汁：表内字・「しる」表内音訓・「つゆ」表外音訓

ただし、一般に広く用いられている漢字表記に関しては、[ ]に入れなくて記載する。

《見出し》            《要素表記》  
例    ふぞく            →    付（ふ）属（ぞく），附（ふ）属（ぞく）

また、見出し語が複数の漢字表記を有し、表記の使い分けがある場合は、《備考》欄に注記する。

《見出し》            《要素表記》            《備考》  
例    ひげ            →    ひげ，[髭（ひげ）]    「鬚」「髯」という漢字表記もあるが、「鬚」は「あごひげ」を、「髯」は「ほおひげ」を、表す。

(4) 「慣用表記」「当て字」の類はなるべく広く拾い記載する。

《見出し》            《要素表記》  
例    はやり            →    流行（はや）り，はやり，[流行（はやり）]  
      おとな            →    大人（おとな），おとな  
      りんご            →    りんご，リンゴ，林檎（りんご）

(5) いわゆる「熟字訓」（ある熟語において漢字1字ごとに読み仮名が対応しない読み方）の場合には、読み仮名を漢字表記の後の（ ）にまとめて記載する。

《見出し》            《要素表記》  
例    いなか            →    田舎（いなか），いなか  
      くだもの          →    果物（くだもの），くだもの  
      めがね            →    眼鏡（めがね），めがね，メガネ

- (6) 送りがなの付け方に何種類かある場合は、一般的だと思われる表記から順に記載する。

	《見出し》		《要素表記》
例	ふみきり	→	踏（ふみ）切（きり），踏（ふみ）切（き）り
	ふりこみ	→	振（ふ）り込（こ）み，振（ふり）込（こ）み 振（ふり）込（こ）み

- (7) 表記が、漢字表記・平仮名表記・片仮名表記の複数にまたがる場合は、より使用頻度が高いと思われるものから順に記載する。

	《見出し》		《要素表記》
例	しみ	→	染み，しみ，シミ
	たばこ	→	たばこ，タバコ，煙草（たばこ）
	ねこ	→	猫（ねこ），ネコ，ねこ

- (8) 当該合成語要素に漢字表記のない場合には、平仮名もしくは片仮名で記載する。

	《見出し》		《要素表記》
例	ごみ	→	ごみ，ゴミ
	ホテル	→	ホテル

- (9) いわゆる「外来語の表記のゆれ」に関するものは、この《表記》欄に併記する。

	《見出し》		《要素表記》
例	コンピューター	→	コンピューター，コンピュータ
	ウイスキー	→	ウイスキー，ウイスキー

- (10) 略語などでアルファベットで表記する場合、アルファベットにも漢字の場合と同様、表記の後に（ ）を用いて読みを記載する。

	《見出し》		《表記》
例	ピーアール	→	P R（ピーアール）

- (11) 略語に当該語以外の読みが存在する場合には《備考》欄に注記する。

	《見出し》		《表記》
例	コマーシャル	→	コマーシャル，CM（コマーシャル）
			《備考》 「CM」は「シーエム」ともいう。

### 4.3 合成語

「合成語」欄は、次の項目に分かれている。

合成 | 名前：  
 合成 | 名後：  
 合成 | 形：  
 合成 | 動：  
 合成 | 副：  
 合成 | 他：

これらの欄では、当該語が構成要素となってどのような合成語を形成しているのかを示し、合成された語は品詞ごとに分類して記載する。

	《見出し》	《合成語》
例	そら【空】	空-模様，空-色，…… 大-空，青-空，秋-空，梅雨-空，寒-空，……
	かさ【傘】	傘-屋，傘-立て，傘-入れ，傘-張り，…… 和-傘，洋-傘，雨-傘，日-傘，こうもり-傘……

また、記載は区分ごとに行い、当該合成語要素を伴って合成された語をそれぞれ品詞別に示す。合成名詞については、さらに当該合成語要素が全要素となる場合と後要素となる場合とに分けて示す。

合成   名前 :	合成名詞 (当該語合成語要素が前要素の場合)
合成   名後 :	合成名詞 (当該語合成語要素が後要素の場合)
合成   形 :	合成形容詞
合成   動 :	合成動詞
合成   副 :	合成副詞
合成   他 :	以上の品詞に属さない合成語

記載方法は、以下の原則に従う。

- (1) 合成語を示す場合、見出し語に当たる部分は、「— (全角ハイフン)」で示す。
- (2) 次のような場合は、合成語要素が結合の相手とする形式については、その漢字表記の読みを括弧の中に記載する。
  - (2)-1 当該合成語要素に接続する他の合成語要素が連濁等の音変化を起こしている場合。

《見出し》			
例	ひ【日】		
	《合成語要素》	《接続合成語要素》	《合成語》
	ひ	+ 傘	→ 一傘 (がさ)

《見出し》			
	ゆ【湯】		
	《接続合成語要素》	《合成語要素》	《合成語》
	熱	+ とう	→ 熱 (ねっ) —

- (2)-2 当該合成語要素に接続する他の合成語要素が被覆形である場合。

《見出し》			
例	くつ【靴】		
	《接続合成語要素》	《合成語要素》	《合成語》
	雨	+ ぐつ	→ 雨 (あま) —

《見出し》  
くすり【薬】

《接続合成語要素》 《合成語要素》 《合成語》  
上 + ぐすり → 上（うわ）ー

(2)-3 当該合成語要素に接続する他の合成語要素の漢字表記の読みが分かりにくいと思われる場合。

例 《見出し》 《合成語要素》 《合成語》  
さけ【酒】 しゅ ー客（かく）  
いね【稲】 いね 糯（もち）ー

ただし、難字と思われるものに関しても平仮名で表記することは避け、漢字に振り仮名をつける。

例 《見出し》 《合成語要素》 《合成語》  
くさ【草】 くさ ×ーむら  
○ー叢（むら）

(2)-4 「大ー」「小ー」などの接頭辞のように漢字表記に複数の読みがある場合は、（ ）の中に読みを記載する。

例 《見出し》 《合成語要素》 《合成語》  
あし【足】 あし 大（おお）ー  
ぜんてい【前提】 ぜんてい 大（だい）ー  
き【木】 ぼく 大（たい）ー  
うちゅう【宇宙】 うちゅう 小（しょう）ー  
いし【石】 いし 小（こ）ー  
かわ【川】 がわ 小（お）ー  
だんかい【段階】 だんかい 初（しょ）ー  
こおり【氷】 ごおり 初（はつ）ー  
まくら【枕】 まくら 初（うい）ー

(2)-5 合成語を構成する接頭辞に複数の読みあるばあいは、「／」を用いて併記する。

例 《見出し》 《合成語要素》 《合成語》  
じしん【地震】 じしん 大（おお／だい）ー  
まご【孫】 まご 初（うい／はつ）ー  
はこ【箱】 はこ 空（から／あき）ー

(3) 当該合成語に接続する他の合成語要素が固有名詞（国名、言語名、施設名、団体名、商標など）である場合、それらを総称して「x」を用い合成語を記載する。

例 《見出し》 《合成語》  
おく【奥】 ーx [地名]  
きた【北】 ーx （ーアメリカ，ーアルプス，ー関東，  
ー九州，ーイタリア，…）  
どうし【同士】 ーx [姓]（ー佐藤，ー鈴木，…）

いはん【違反】	x 法一（道交法一，公選法一，外為法一，出資法一，競馬法一，農地法一，銃刀法一，国際法一，…）
げしゃ【下車】	x 駅一（上野駅一，柏駅一，福井駅一，…）
こうげん【高原】	x 一（エチオピア一，イラン一，乗鞍一，清里一，妙高一，…）
そうだんやく【相談役】	x [人名]一， x [会社名]一， x 会社一（不動産会社一，映画会社一，保険会社一，…）
だいひょう【代表】	x [機関名]一 x [国名]一， x [学校名]一
しゅっしん【出身】	x [国名]一， x 市一（神戸市一，三鷹市一，札幌市一，…）， x 県一（岡山県一，北海道一，京都府一，大阪府一，東京都一，…） x 州一（ミシガン州一，カリフォルニア州一，…）

なお、〈形態情報〉では、「x」を上にしたような固有名詞のみでなく、数値、数量などの変数としても使用している。

例 《見出し》	《合成語》
そうがく【総額】	— x [数値]ドル， — x [数値]円
いか【以下】	x [数値]度一， x [数値]円一， x [数値]冊一， x [数値]%一， x [数値]枚一， x [数値]語一， x [数値]人一， x [数値]年一， — x [数値] —， x [グラム] — x [数値]倍一， x [数値]回一， x [数値]割一， x [数値]期一， x [数値]バイト一
きぼ【規模】	x [数値]円一， x [数値]人一，

(4) 同じ意味でありながら漢字表記が複数ある場合には、「/」を用いて併記する。

例 《見出し》	《合成語要素》	《合成語》
どく【毒】	どく	—見/一味
ね【根】	こん	—元/一原/一源

(5) 接続合成要素に送りかなを送る表記と送らない表記との両用がある場合には、どちらか一般的であると思われる方のみを記載する。

例 《見出し》	《合成語要素》	《接続合成要素》	《合成語》
かん【缶】	かん	詰/詰め	—詰（づめ）
あせ【汗】	あせ	冷や/冷	冷や—

(6) 接続合成語要素に接頭辞がつく場合とつかない場合との両用があるものについては、[ ] で接頭辞を記載する。

例 《見出し》	《合成語要素》	《接続合成要素》	《合成語》
かし【菓子】	かし	お茶/茶	[お] 茶—

(7) 二次結合以上の合成語は原則として記載しない。

例	《見出し》	《合成語要素》	《合成語》
	しろ【城】	じょう	×一下町

上の例は、「城」と「下町」の合成語ではなく、「城下」という合成語にさらに「町」が結合してできた合成語であるので、語例として不適當ということになる。

(8) 修飾語や述語などが前後につかないと合成語として成立しにくいものは、《備考》欄に注記を付す。

例	《見出し》	《合成語要素》	《合成語》
	いす【椅子】	いす	一狙い，一争い

《備考》  
「大臣の椅子狙い」「総理の椅子争い」のように言う。

例	《見出し》	《合成語要素》	《合成語》
	なみだ【涙】	るい	感一

《備考》  
「感涙にむせぶ」のように言う。

(9) 異音同語に該当しない発音上のゆれは記載しない。

例	《見出し》	《合成語要素》	《接続合成要素》	《合成語》
	いなか【田舎】	いなか	田舎っぺ／田舎っぺえ	一っぺ

#### 4.4 合成名詞

当該語を合成語要素とする合成名詞を記載する。

例 窓-ガラス，勉強-机，本-屋，自動-車

記載は、当該合成語要素が合成名詞の前項要素になる場合と後項要素になる場合を分けて行う。

##### 4.4.1 合成語要素が前項要素となる場合：＜形態情報＞の《合成 | 名前》

＜形態情報＞の《合成 | 名前》欄に、当該合成語要素を前項要素として構成されている合成語を記載する。

(1) 当該合成語要素に対して、下記の後接形式のうちで接続可能なものを選択し記載する。なお、「一手」「一家」などのように漢字表記に複数の読みがある場合については、( ) の中にその読みを記載する。

＜後接形式＞ 一さ，一み，一げ，一たち，一方（がた），一者（しゃ），一士  
一員，一夫（ふ），一屋（や），一店（てん），一家（か／け）  
一的，一人（じん／にん），一手（て／しゅ），一化  
一中（ちゅう）

例 自然-さ，真剣-み，不満-げ，子供-たち，先生-がた，訪問-者，操縦-士，  
鉄道-員，掃除-夫，本-屋，料理-店，音楽-家，将軍-家，日本-人，  
参考-人，話し-手，運転-手，幼児-化，工事-中

上記以外に接続する後接形式があれば、随時、その合成語を記載する。

例 一学：生物-学，一病：心臓-病，一船：貨物-船，一枚：姉妹-校

- (2) 次に、当該語を合成語要素として構成される合成名詞のうち、当該語が前項要素となるものを記載する。

	《見出し》	《合成語要素》	《合成   名前》
例	くるま【車】	くるま	一寄せ，一止め，一引き

#### 4.4.2 合成語要素が後項要素となる場合：＜形態情報＞の《合成 | 名後》

＜形態情報＞の《合成 | 名後》欄に、当該合成語要素を後項要素として構成されている合成語を記載している。

- (1) 当該合成語要素に対して、下記の接頭辞のうちで接続可能なものを選択し記載する。  
なお、「大一」「小一」などのように漢字表記に複数の読みがある場合については、  
( ) の中にその読みを記載する。

＜前接形式＞ 御（お／ご）一，大（おお／だい／たい）一，  
小（しょう／こ／お）一，新（しん／にい）一，  
初（しょ／はつ／うい）一，素（す／そ）一，  
真／真っ／真ん一，反一，再一，副一，不（ふ／ぶ）一，  
非一，未一，無（む／ぶ）一，

例 御（お）-手紙，御（ご）-心配，大（おお）-足，大（大）-前提，  
大（たい）-木，小（しょう）-宇宙，小（こ）-雨，小（お）-川，  
新（しん）-学期，新（にい）-妻，初（しょ）-対面，初（はつ）-売り，  
初（うい／はつ）-孫，再-試験，素（す）-顔，素（そ）-案，真（ま）-顔，  
真っ-正面，真ん-丸，反-体制，副-読本，不-満足，非-常識，未-成熟，  
無-関心

- 4.3 (2)-5 でも述べたように、下記の例のように前接形式の読みが複数ある場合は、  
「／」を用いて併記する。

例	《見出し》	＜前接形式＞
	じしん【地震】	大（おお／だい）一
	まご【孫】	初（うい／はつ）一

上記以外に接続する接頭辞があれば、随時、その合成語を記載する。

例 超：超-音波，重：重-労働，軽：軽-自動車，内：内-出血

- (2) 次に、当該語を合成語要素として構成されている合成名詞のうち、当該語が後項要素となるものを記載する。

	《見出し》	《合成語要素》	《合成   名後》
例	くるま【車】	ぐるま	乳母一，風（かざ）一，手押し一

#### 4.5 合成形容詞：＜形態情報＞の《合成 | 形》

＜形態情報＞の《合成 | 形》欄に、当該語を合成語要素として構成されている合成形容詞を記載する。

例 名-高（だか）い，心-強（づよ）い，縁-遠（どお）い，  
興味-深（ぶか）い，罪-深（ぶか）い

当該合成語要素に対して、下記の接尾辞のうちで接続可能なものを選択し記載する。

＜接尾＞ 一い，一っぽい，一らしい（注3），一くさい，一がましい

例 黄色-い，理屈-っぽい，子供-らしい，素人-くさい，未練-がましい

上記以外に接続する接尾辞があれば、随時、その合成語を記載する。  
次に、当該語を合成語要素として派生する合成形容詞があれば、記載する。

	《見出し》	《表記》	《合成形容詞》
例	けいさん	計算	一高（だか）い

#### 4.6 合成動詞：＜形態情報＞の《合成 | 動》

＜形態情報＞の《合成 | 動》欄に、当該語を合成語要素として構成されている合成動詞を記載する。

例 鞭-打つ，垢-抜ける，名-づける

当該合成語要素に対して、下記の後接形式・動詞性合成語要素のうちで接続可能なものを選択し記載する。

＜後接形式＞ 一ばむ，一がる，一ぶる，一ばる，一めく，一びる  
 ＜合成語要素＞ 一する，一つける／づける，一つく／づく，一たつ／だつ  
 一がかる，一じみる

例 気色-ばむ，いき-がる，利口-ぶる，儀式-ばる，春-めく，大人-びる，  
運動-する，関係-つける，元気-づく，殺気-だつ，芝居-がかる，  
所帯-じみる

次に、当該語を合成語要素として構成されている合成動詞があれば、記載する。

	《見出し語》	《合成語要素》	《合成   動》
例	むち【鞭】	むち	一打つ

#### 4.7 合成副詞：＜形態情報＞の《合成 | 副》

＜形態情報＞の《合成 | 副》欄に、当該語を合成語要素として構成されている合成副詞を記載する。合成副詞には、いわゆる「疊語」の類が多い。

例 次々[に]，段々[と]，道々，もともと，日々（び），  
粉々に，口々に，点々と

当該合成語要素に対して、下記の接尾辞・副詞性合成語要素のうちで接続可能なものを選択し記載する。

＜接尾辞＞ ーφ，ーに，ーと（注4）  
＜合成語要素＞ ー上，ー中（じゅう），ー後（ご），ー来（らい），ー以来  
ー通（どお）り

例 大体-φ，自然-に，漠然-と，理論-上，家（いえ）-中（じゅう），  
退職-後，昨年-来，入学-以来，指示-通（どお）り

上記以外に接続する接尾辞があれば、随時、その合成副詞を記載する。  
次に、当該語を合成語要素として構成されている合成副詞があれば、それらを記載する。

例 《見出し》 《合成語要素》 《合成 | 副》  
みち【みち】 みち ー道／一々

「疊語」でも、語尾に「ーに」や「ーと」などがつかないと副詞として用いられないものは、合成動詞としない。

例 ×彼らは口々叫んだ。  
彼らは口々に叫んだ。

#### 4.8 その他の品詞：＜形態情報＞の《合成語 | 他》

当該語を合成語要素として生産された合成語で、4.4 から 4.7 で示した品詞以外の品詞に属する合成語を＜形態情報＞の《合成語 | 他》欄に記載する。

次の例にあるような連体詞や、いわゆる形容動詞と結びついて形容動詞のような振る舞いをするが語幹は名詞として用いられない品詞等をここに含むことにする。

例 《見出し》 《合成語 | 他》  
こども【子供】 ー子供した  
みのり【実り】 ーある  
べつ【別】 ーとして  
ケース ーバイケース  
かんせい【完成】 ー身近な

#### 4.9 その他の合成語

当該語を合成語用語として生産された合成語であるが、全体として特殊な意味を持ち、その当該語である合成語要素が見出し語の区分として抽出できない、またはしなかった意味を持つ合成語は、＜形態情報＞の《合成語》欄ではなく、＜慣用句等＞の《他合成語1》《他合成語2》欄に記載した。

#### 4.9.1 <慣用句等>の《他合成語1》

上に示した合成語のうち、当該合成語が見だし語形または連濁形・被覆形・促音形のものとは<慣用句等>の《他合成語1》欄に記載した。

例	《見出し》	《他の合成語》
	て【手】	話一，痛一
	だいがく【大学】	一芋

「手」の本来の意味は身体部分であり、「話して」「語り手」のように動詞の連用形について「その動作をする人」を表す「手」は、本来の「手」の意味から全く離れている上、単独では用いられないので、見出し語の区分にはたてられない。従って、「話し手」「語り手」のような「手」を含む合成語は、《他の合成語》に記載した。同様に、「戦いで受けた傷、手きず」の意味である「手」も、単独では用いられず、「深手」「手負い」のように合成語となる場合にしか用いられない。よって、これらの合成語も《他の合成語》欄に記載した。

次に、「大学芋」（サツマイモを乱切りにしたものを油で揚げて甘いたれをからめ、黒ゴマをふりかけた食品）という合成語であるが、この合成語は「大学」の語義からは、合成語全体の意味が理解できない。また、この合成語の合成語要素である「大学」と同じ意味を持つ合成語はこれの他にはない。

<形態情報>の《合成語》欄では、該当見出し語の連濁形・被覆形・促音形・漢字の別読みも合成語要素としてあつかったが、この《他合成語1》欄では、連濁形・被覆形はあつかうが、別読みはあつかわない（[4.1 (2)]参照）。

#### 4.9.2 <慣用句等>の《他合成語2》

当該語を合成語要素として生産された合成語であるが、全体として特殊な意味を持ち、その当該語である合成語要素が見出し語の区分として抽出できない、またはしなかった意味を持つ合成語のうち、当該合成語が見出し語形または連濁形・被覆形等の音韻的变化によるものではない合成語要素であるものは<慣用句等>の《他合成語2》欄に記載した。

### 5. 《参照語》

ある品詞に属していた語が他の品詞に属するようになることを転成という。転成は、狭義においては、語形が変わらないで品詞が転ずることをいうが、広義においては、派生などのように他の要素と結びついたりすることによって品詞が変わる場合も含める。個々では転成を広義に捉え、派生などによって品詞を変えた場合も転成と認める。

名詞の中には転成してできた、いわゆる「転成名詞」がある。これまで『計算機用日本語基本動詞辞書 I P A L (Basic Verbs)』（以下、動詞辞書）、『計算機用日本語基本形容詞辞書 I P A L (Basic Adjectives)』（以下、形容詞辞書）において、形態情報のひとつとして《転成》欄を設け、転成名詞を次のように記載してきた。

例	《見出し》	《転成》
[動詞辞書]	ながれる【流れる】	流れ
	およぐ【泳ぐ】	泳ぎ
	あそぶ【遊ぶ】	遊び
[形容詞辞書]	とおい【遠い】	遠く
	あつい【厚い】	厚め

動詞辞書の場合、見出し語「流れる」に対し、《転成》欄に「流れ」を記載し、形容詞辞書の場合、見出し語「厚い」に対し、《転成》欄に「厚め」「厚さ」を記載してきた。

今回の名詞辞書では、動詞辞書及び形容詞辞書の《転成》欄に記載してきたものを見出し語として取り上げ、転成する前の語形を<区分>の《参照語》欄に示す。その際、表記を複数有する語もあるので平仮名表記を採用をした。

また、その区分の見出し語が動詞辞書及び形容詞辞書で、どの区分に対応するのか判別可能な限り、動詞辞書における動詞のサブエントリ番号、形容詞辞書における形容詞の語義番号を付記する。転成前の語を記した後に、( )を用いて判別番号を示し、続いてサブエントリ番号又は語義番号を記す。同音異義見出し語が存在する場合は、判別番号を参考にされたい。

この欄では、転成する以前の語を示すことによって、当該見出し語が転成名詞であることを示すと同時に、名詞辞書における当該語が動詞辞書及び形容詞辞書の関連語とどう関わっているかを示すことになる。

例	《見出し》	《区分番号》	《参照語》
	とりくみ【取り組み】	0 1	とりくむ (1) 0 3
	あつき【厚さ】	0 1	あつい (2) 0 1

I P A Lは共時論的な立場から作成されたものであるが、語の転成前の語形を記載するというこの作業上では通時論的な判断を行った。

「しみ」という語は、動詞「しむ」からの転成であり、「しみる」からの転成ではない。また、「しみ」から「しみる」もしくは「しむ」が転成しているのではない。しかし、「しみ」という名詞は、今日日本語に名詞として定着しており、動詞「しみる」からの転成名詞であるのか、動詞「しむ」からの転成名詞であるのか、または「しみ」その語自身から動詞「しみる」をつくっているのか、その通時的方向性は現代日本人の言語感覚のみでは判断しきれない。よって、通時的文献の力を借りたものもある。

例	《見出し》	→	《参照語》
	○ しみ	→	しむ
	× しみ	→	しみる

従って、I P A Lは現代日本語を対象にした計算機用辞書であるが、次の例のように、見出し語の転成前の語形が現代語ではない場合、古語形も認め、それを《参照語》欄に記載した。

例	客の【入り】がいい。		
例	《見出し》	→	《参照語》
	○ いり	→	いる【入る】
	× いり	→	はいる【入る】

## 5.1 動詞からの転成：《参照語》

当該見出し語である名詞が動詞からの転成である場合、その動詞を《参照語》欄に記載する。動詞から名詞への転成は、おおきく次のように分けられる。

### 5.1.1 語形無変化の転成

動詞にいかなる要素も付加せずに名詞となる場合がある。多くの場合、動詞連用形が名詞化されるもの、いわゆる居体言が見出し語となる。

例	《見出し》	《区分番号》	《参照語》
	あつまり【集まり】	0 1	あつまる (1) 0 1, 0 2, 0 6
	あらわれ【表れ】	0 1	あらわれる (1) 0 2
	こげ【焦げ】	0 1	こげる (1) 0 1
	むかい【向かい】	0 1	むかう (1) 0 1
	むき【向き】	0 1	むく (1) 0 1, 0 2
	われ【割れ】	0 1	われる (1) 0 1

### 5.1.2 合成語による転成

動詞に接尾辞もしくは単純語等の要素が付加し、合成語となることによって、名詞となる場合がある。名詞である当該見出し語がこのように既に合成語である場合、合成語を構成する要素である動詞を《参照語》欄に記載した。

例	《見出し》	《区分番号》	《参照語》
	わすれもの【忘れ物】	0 1	わすれる (1) 0 2

## 5.2 形容詞からの転成：《参照語》

当該見出し語である名詞が形容詞からの転成である場合、その形容詞を《参照語》欄に記載する。形容詞からの名詞への転成は、大きく次のように分けられる。

### 5.2.1 「語形無変化の転成」

形容詞にいかなる要素も付加せずに形容詞となる場合がある。これは、形容詞の連用形が次の例のように名詞となる場合である。

例	《見出し》	《区分番号》	《参照語》
	とおく【遠く】	0 1	とおい (1) 0 1

### 5.2.2 語幹共通の転成

形態的に名詞に「い」が接続して形容詞となる場合、名詞から形容詞に転成したものとするか、形容詞から名詞に転成したものか判断しかねる。該当見出し語が次のような語の場合、形容詞から名詞に転成したものをするよりむしろ、名詞から形容詞に転成したものとするべきかもしれない。しかし、このような場合『I P A L 名詞辞書』では、語幹が共通であるという意味で、関連後としてこの欄に形容詞を記載することにした。

例	《見出し》	《区分番号》	《参照語》
	あお【青】	0 1	あおい (1) 0 1
	きいろ【黄色】	0 1	きいろい (1) 0 1

### 5.2.3 「合成語による転成」

形容詞の場合、多くが、接尾語が付加することによって名詞となる。『I P A L 名詞辞書』の形態情報では、合成語を複合語と派生語に分類せずに、派生語も複合語と同様にあつかい、合成語とみなす。従って、形容詞に接辞がついて派生する場合も含み、他の要素と合成することによって品詞が変わった場合もここでは転成としてあつかう。

例	《見出し》	《区分番号》	《参照語》
	あつさ【厚さ】	0 1	あつい(2) 0 1
	かるめ【軽め】	0 1	かるい(1) 0 1

## 6. 《備考》

『I P A L 名詞辞書』では上記に述べたような方法で形態情報を記載してきたが、実際の作業ではこれらの枠に納まらないものが多くみられた。この枠内では記載しきれないが、落としてしまうには惜しい情報を<形態情報>の《備考》欄に残すことにした。従って、《備考》欄には雑多な情報が含まれている。

### 6.1 表記に関するもの

#### 6.1.1 当該合成語要素表記が前後に結合する要素によって異なる場合

例 《見出し》あし 《区分番号》0 1 《合成語要素》あし  
《備考》動物の場合には多く「脚」を用いる。

《見出し》いわ 《区分番号》0 1 《合成語要素》がん  
《備考》次の合成語は「巖」を用いることもある。一壁(べき), 一石, 一窟, 一頭, 一穴。

《見出し》かわ 《区分番号》0 2 《合成語要素》がわ  
《備考》「毛皮」は「毛革」と表記しない。

《見出し》ひ 《区分番号》0 1 《合成語要素》ひ  
《備考》合成語の表記は主に「日」を用いる。「ター」は「陽」でもよい。

#### 6.1.2 当該合成語の漢字表記が複数あり、漢字によって意味が異なる場合

《見出し》ふね 《区分番号》0 1 《合成語要素》ふね  
《備考》おおむね、大型の汽船等は「船」、手で漕ぐようなものは「舟」というような漢字の使い分けがある。

《見出し》ひげ 《区分番号》0 1 / 0 2 / 0 3 《合成語要素》ひげ  
《備考》「髭」は口ひげ、「髯」はほおひげ、「鬚」はあごひげを表す。

《見出し》こうたい 《区分番号》 《合成語要素》  
《備考》「交代」は役割等が一回限りでかわるとき、「交替」はかわって行くことが繰り返されるときに用いられる傾向がある。

### 6.2 当該合成語要素が合成語を生成する際の傾向

《見出し》べんとう 《区分番号》0 1 《合成語要素》べんとう  
《備考》「弁」で「弁当」の意味を表す造語成分がある。例:「駅弁」「のり弁」

《見出し》にもつ 《区分番号》0 2 《合成語要素》にもつ  
《備考》「お荷物」という言い方をすることが多い。

《見出し》まご 《区分番号》01 《合成語要素》まご  
《備考》「孫娘」とは言うが「孫息子」とは言わない。

《見出し》かなり 《区分番号》 《合成語要素》かなり  
《備考》「かなり上手くいった」などのように副詞用法が多い。

## 7. 記載例

形態情報についての記載例は以下の通りである。

### <見出し>

見出し : うし  
区分号 : 02  
コード1 : 0228  
ファイル : h5その1  
表記 : 牛, 丑, うし, ウシ

### <形態情報>

区分番号 : 01  
合成語要素 : うし  
要素表記 : 牛(うし), うし, ウシ  
要素番号 : 1  
要素数 : 2  
合成 | 名前 : 一たち, 一小屋(ごや), 一飼い, 一車(ぐるま)  
合成 | 名後 : 牡(お) — / 雄(お) —, 牝(め) — / 雌(め) —, 子 — / 仔 —, 種 —  
合成 | 形 :  
合成 | 動 :  
合成 | 副 :  
合成 | 他 :  
備考 : 「丑」とは書かない。『学研大』に「小馬」はあるが「小牛」はない(子 — はいずれもある)。

区分番号 : 01  
合成語要素 : ぎゅう  
要素表記 : 牛(ぎゅう)  
要素番号 : 2  
要素数 : 2  
合成 | 名前 : 一舎, 一車, 一肉, 一乳, 一井, 一皮, 一すき, 一刺し  
合成 | 名後 : 野 —, 和 —, 肉 —, 乳 —, 乳糜 —, 鬪 —, 水 —, 牧 —, 短角 —  
合成 | 形 :  
合成 | 動 :  
合成 | 副 :  
合成 | 他 :  
備考 :

区分番号 : 02  
 合成語要素 : うし  
 要素表記 : 丑 (ぎゅう), うし  
 要素番号 : 1  
 要素数 : 1  
 合成 | 名前 : 一年 (どし), 一三 (み) つ時 (どき)  
 合成 | 名後 :  
 合成 | 形 :  
 合成 | 動 :  
 合成 | 副 :  
 合成 | 他 :  
 備考 : 「牛」とは書かない。

**注**

- 分析の可否は現代共時的な判断に基づき、通時的な判断にはよらない。従って、「まぶた」を「マ」（「目」の被覆形）＋「フタ」（「蓋」）であるとしたり、「蛤（はまぐり）」＝「浜」＋「栗」であるとするような分析は行わない。  
 また、「業者-委託」「援助-再開」「早期-完成」などのような臨時一語的な結合形式についても記述の対象とした。
- このような場合、結合形式である「お昼」の「お」を「接辞」、自立形式である「お昼」の「昼」を「語基」と呼ぶことがある。語基の定義は、「実質的・語彙的な意味を表し、語の意味の中核的な部分をになう造語成分」[石井 1989]というものである。従って、語基であれば自立形式であるということにはならず、結合形式の語基も認められることになる。「新-大陸」の「新-」（しん）、「大波」の「大-」（おお）、「機械-力」の「力-」（りょく）などは、結合形式の語基とされる。結合形式の語基か接辞かの判断は迷うところが多い。  
 従来の考え方に従えば、次のように整理される場所であるが、『I P A L 名詞辞書』では、辞書記述の仕組みとして、接辞、語基、派生語、複合語などの区別をしないということである。



- 「らしい」については、助動詞の「らしい」と区別する。  
 例 犯人は、あの男らしい。
- 「一に、一と」については、助詞の用法は除く。  
 例 ここに置く。 京都に着く。 三時に着く。  
 太郎と話す。 太郎と行く。 太郎と花子。  
 ただし、国語辞書に副詞として載っているものは、記載してある。  
 例 すぐに、順に、わざと

## 参考文献

- 石井雅彦(1989) 語構成, 『講座日本語と日本語教育 6 日本語の語彙・意味(上)』  
明治書院, pp.167-193.
- 奥津敬一郎(1975) 複合名詞の生成方法, 『国語学』101, pp.19-34.
- 加藤久雄(1983) 複合名詞の意味と構文 『日本語学』7(5), pp.47-57.
- 斎賀秀夫(1957) 語構成の特質, 『講座現代国語学Ⅱことばの体系』, 岩淵悦太郎・林大・大石初太郎・柴田武 編, 筑摩書房, pp.217-248.
- 齊藤倫明(1991) 『現代日本語の語構成論的序説』ひつじ書房.
- 阪倉篤義(1957) 語合成序説, 『日本文法講座1 総論』, 明治書院, pp.246-272.
- 野村雅昭(1977) 造語法, 『岩波講座日本語9 語彙と意味』大野晋・柴田武 編, 岩波書店,  
pp.245-284.
- 宮地裕(1982) 現代語の語構成, 『講座日本語の語彙7 現代の語彙』明治書院, pp.67-90.
- 水谷静雄 編(1987) 『朝倉日本語講座1 文字・表記と語構成』, 朝倉書店.
- 森岡健二(1987) 『現代語研究シリーズ1 語彙の形成』明治書院.
- 山本清隆(1995) 「単純語・複合語・派生語」『日本語学』14(5), pp.38-45.
- 湯本昭南(1977) あわせ名詞の意味記述をめぐって, 『東京外国語大学論集』27,  
(再録:『日本語研究の方法』松本泰丈 編, 麦書房, pp.75-93) .
- 湯本昭南(1977) あわせ名詞の構造 n + n の和語名詞の場合, 『言語の研究』麦書房,  
pp.367-395. .

## 第八章 慣用表現ほか

### I 区別の対象外の表現

ここでは、区別の対象にしなかった表現について解説する。区別の対象にしなかった表現は、大きく「慣用表現」と「その他の合成語」に分かれ、〈慣用句等〉の欄に記載される。

#### 1. 「慣用表現」について

表現形式として固定して用いられる言い回しで、当該見出し語である名詞を含むものを広く採集し、今日の実際の使用状況に即して記載した。

##### 1.1 記載項目

「慣用表現」についての記載項目は以下の通りである。

- のような : 「NPO（見出し語）のようなNP」の用法
- のように : 「NPO（見出し語）のように～」の用法
- 慣用表現 : 慣用句，ことわざ，常套句等

##### 1.2 記載内容

この欄には、見出し語を含む形式的に固定したひとつづきの表現を記載した。

「慣用表現」と認定する、おおよその基準は以下の二つである。

- 1) 表現全体の形式が固定しており、統語的自由さや生産性を持たない。
- 2) 表現を構成する個々の語の意味の総和から表現全体の意味が得られない。

以上、「形式」と「意味」という二つの観点からその認定を行うが、1)を満たすものは全て「慣用表現」とした。

「慣用表現」は様々な形態をとるが、ここでは便宜上以下の三つに分けて解説を施しておく。（これらの境界は必ずしも分明ではない。）

- 1) 「慣用句」：上記の基準を二つとも満たすもの。代表的なものとして以下のようなものがある。

動詞慣用句：句全体として動詞の働きをする。

例 お茶を濁す。泡を食う。尾を引く。

形容詞慣用句：句全体として形容詞の働きをする。

例 虫がいい。顔が広い。風当たりが強い。

名詞的慣用句：句全体として名詞、または名詞のような働きをする。

例 奥の手。猫に小判。月とスッポン。花よりだんご。棚からぼたもち。

「絵の具、菜の花、天の川、柿の種」のように一語意識が強いものの中には「合成語」に準ずるものととらえて「他の合成語」の欄に記載したものがある。

- 2) 「ことわざ」: 文字通りの意味理解も可能だが、普通何らかの意味で人間や人生を投影して理解されているもの。

例 かえるの子はかえる。出る杭は打たれる。  
朱に交われば赤くなる。冬来たりなば春遠からじ。

故事成語、名言、金言、古典などの有名な一説などもこの「ことわざ」に含むが、「食べた後すぐ横になると牛になる。」のような、いわゆる「俗信・迷信」のたぐいは「慣用表現」とはしなかったものも多い。このようなものは、その意味内容が固定しているのであって、表現形式としては固定していないからである。

- 3) 「常套句」: 単純な固定表現、決まりきった言い回し。上記基準の 1)のみを満たすもの。そのほとんどが比喩表現である。

例 首を長くして待つ。  
草の根を分けても探し出す。  
根掘り葉掘り {尋ねる／聞き出す／穿鑿する／…}  
爪（の先）に火をともしような{生活／くらし／…}

### 1.3 同語の認定について

見出し語である名詞が合成語となった際の「被覆形」、「連濁」などの音の変化、また音の天下・脱落と考えられるものなどについては、それを「語形のゆれ」としてとらえて同語と認定し、《慣用表現》欄に記載することとした。

記載に際しては、「見出し」と読みが異なる場合には、直後に（ ）にひらがなで読みを記入した。

例 かぜ（風）: ~の風（かざ）上にも置けない{奴／男／…}。  
はな（花）: <人>と<人>が火花（ばな）を散らす。  
こな（粉）: 身を粉（こ）にして働く。

### 1.4 区分内で扱った「慣用句」について

当辞書では、形式という面から見て通常の表現とは異なるものを「慣用表現」とした。「慣用表現」とはその表現全体に対しての呼称であるから、それを構成する語に分けることには本来意味はない。しかし当辞書では、一般には「慣用句」とされているものでも、名詞（見出し語）の意味に何らの変化も特殊性も認められないものの中には、区分の中で扱ったものがある。

例 風邪: 風邪を引く。 ← 述語「引く」から見ると、「病気を引く・盲腸を引く」のように言わず生産性がないのだが、名詞「風邪」の意味は何の変哲もない。  
嘘: うそをつく。 ← 類例に「悪態をつく」「口をついて出る」があるが、これもやはり生産性は低いと言えよう。しかし「うそ」の意味には何の変哲もない。  
鼻: 鼻をかむ。 ← 述語「かむ」には生産性がないが、名詞「鼻」には「鼻水・鼻汁」の意味が認められる。

以上のようなものは、見出し語と共起する述語(動詞)の側から見ると、類する名詞をとる例がない(または少ない)ので「慣用句」として扱うことになるのだが、当名詞辞書では「慣用表現」とはしていない。

当辞書では「鉄は熱いうちに打て」のようなものを「ことわざ」、「頭が割れるように痛い」のようなものは「常套句」としている。これらは、名詞(見出し語)の意味はたとえそのまま生きていても、形式が全体として(三つ以上の文節が)固定している表現なので、これらは《慣用表現》の欄に記載した。

### 1.5 《一のような》《一のように》

この欄には見出し語である名詞が、「のような」「のように」をともなってどのような象徴として使われるかを知るため、直喩としてごく一般的に用いられるものを実際の用例にもとづいて記載した。ただし、この欄に記載したものは「見出し語のような体言」「見出し語のように用言」の形式に限った。

例： 高原のようなさわやかさ  
石のようにかたい。

「身を切られるようにつらい」「赤子の手をひねるようにたやすい」のように、さらなる固定部分を持つ場合には、この《一のような》《一のように》の欄ではなく、《慣用表現》の欄に記載した。

### 1.6 「慣用表現」の記載方法

「慣用表現」は、以下に示すような記号の組み合わせによって記載した。

- 1) 表示の際の語句の省略は、～を用いて示す。  
例：腕によりをかけて～する。
- 2) 省略の可能な部分は( )でくくって示す。  
例：(借金で)首が回らない。
- 3) 漢字の読みを添える場合には、直後に( )でくくって示す。  
例：身を粉(こ)にして働く。
- 4) 表現の意味を添える場合には、( )の中に＝で続けて示す。  
例：息をつく(＝休憩する)。
- 5) 表現の使用例を添える場合には、( )の中に例：で続けて示す。  
例：蜂の巣(例：マシンガンで全身を蜂の巣にされる。)
- 6) 語句に複数の候補がある場合には、{ }でくくり、/で区切って示す。  
例：攻撃は{最大/最良}の防御である。  
語句の候補が限定できにくい場合は、/…で表す。  
例：芋(の子)を洗うような{混雑/にぎわい/…}。
- 7) 名詞句を意味で表示する場合には、< >でくくって示す。  
例：<人>が<人>に口を利く(＝紹介する)。

8) 出典等の注記は、[ ]でくくって示す。書名は「 」にくくる。

例：道は近きにあり[「孟子」離妻上]。

その他の記載方法に関してはすべて形容詞辞書に準ずるので、可能であれば形容詞辞書解説編も参照していただきたい。

## 2. 「その他の合成語」について

### 2.1 記載項目

「その他の合成語」の記載例は以下の通りである。

他合成語 1：その他の合成語のうち、見出し語形または連濁形・被覆形のもの

他合成語 2：その他の合成語のうち、他合成語 1 以外のもの

### 2.2 その他の合成語

当該語を合成語要素として生産された合成語であるが、全体として特殊な意味を持ち、その当該語である合成語要素が見出し語の区分として抽出できない、またはしなかった意味を持つ合成語は、<形態情報>の《合成語》欄ではなく、<慣用句等>の《他合成語 1》《他合成語 2》欄に記載した。詳細は、[第七章 形態情報 4.9 その他の合成語]を参照いただきたい。

### 参考文献

高松正毅(1990) 慣用句論：認定の問題点と発生発達の経路について、『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究』10, 情報処理振興事業協会, pp.145-168.

## II 見出し語についての備考

### 1. 記載項目

「見出し語についての備考」の記載項目は以下の通りである。

備考 : 区分間の意味的關係や、見出し語に関しての特記すべき事項

### 2. 備考

見出し語の形態情報、統語情報、意味情報、並びに、《慣用表現》、《他合成語1》、《他合成語2》の項目に関して注記すべき事項があれば、次のような略号とともに記入した。

<表記>	→	表記に関する事項
<統>	→	統語情報一般に関する事項
<関>	→	区分間の意味的關係
<意>	→	意味的關係以外の、意味情報一般に関する事項
<他>	→	区分として取り上げなかった他の用法
<別>	→	区分として取り上げず、別見出しと判断した用法
<参>	→	参考事項
<慣>	→	《慣用表現》に関する事項
<合>	→	《他合成語1》または《他合成語2》に関する事項

例：見出し語「かげ【陰，蔭，影，[翳]】」

備考 : <表記>区分によって表記が異なる。

例：見出し語「きらい【嫌い】」

備考 : <統>「～きらいなく」の形で用いられる。例：男女のきらいなく（＝男女の差別／区別なく）。

例：見出し語「たまご【卵，玉子】」

備考 : <関> 0 1 ⊃ 0 2 … > 0 3。

（「区分の意味的關係」の記述例。くわしくは3節で解説する。）

例：見出し語「はな【花，華】」

備考 : <意>特に桜または梅のことを指すときがある。

例：見出し語「ベルト【ベルト】」

備考 : <他>帯状の広がりを持つ場所・地帯。例：この地域はベルト地帯である。

例：見出し語「かさ【傘，笠】」

備考 : <別> 暈 (かさ) 「太陽や月などを薄くおおう雲。」は別見出しとする。

例 : 見出し語「おやつ【御八つ】」

備考 : <参> 「おやつ」は「お八つ」、昔の八つ時、つまり現在の時刻で午後三時頃に間食を食べる習慣からきている。

例 : 見出し語「せんしゅ【選手】」

備考 : <慣> 「十年選手」 1. 年季を積んだ熟練した者をいう。例 : あのプレーは十年選手ならではだ。 2. 長年使い込んだ、少々ガタがきている物。例 : この洗濯機も十年選手だからね。

例 : 見出し語「ひと【人】」

備考 : <合> 仲人 (なこうど) などの「うど」は「ひと」が変化したもの。

### 3. 区分間の意味的關係

区分されたものがどのような用法や意味を分類したものであるかは、区分ごとに記述してある統語情報、意味情報、形態情報に関する辞書記述から理解することができるが、これまでの I P A L の辞書記述では、一般の国語辞書と同様に、単に区分を羅列的に示すだけであり、その間にある意味的關係については記述していなかった。

しかし、例えば自然言語処理において、実際のテキストに現れる名詞が、名詞辞書のどの区分の用法にあたるかを判定する時など、名詞辞書が実際に使用される場面を考えれば、どのような区分があるかだけでなく、区分間にどのような意味的關係があるかも重要な情報である。このような意味的關係については、「多義」や「類義」を問題にする中で論じられている [Ullmann(1962), Lakoff and Johnson(1980), 国広(1982), 山梨(1995)]。山梨(1995)は、これまで修辞学の領域に中で研究されてきた比喩が、単語の多義性、意味変化、転義などの現象を考察する際に有効であると述べている。

『I P A L 名詞辞書』では、メタファー、メトニミー、およびシネクドキーといった比喩に基づく意味の拡張關係に着目するという方法を主としてとり、区分間の意味的關係を明示的に記述することを試みる (注1)。

例えば、見出し語「たまご」は、以下のように三つに区分される。

例 : 見出し語「たまご【卵, 玉子】」

[区分01] 動物のメスが産む、殻や膜に包まれた胚。

例 : 池の金魚が卵を産んだ。

[区分02] 「たまご01」のうち、特に、鶏卵。

例 : 玉子 (卵) を1ダース買った。

[区分03] 専門性の高い仕事について、まだ十分に一人前になりきっていない人。

例 : 彼は医者のお卵である。

このとき、[区分02]には「玉子」という別表記があるが、「鶏卵」には[区分01]の「動物のメスが産む卵」に含まれるので、[区分02]は[区分01]に包摂されるという意味的關係がある。また、[区分02]の「鶏卵」と「鶏」の關係を人間の場合に譬えたとき

の用法が[区分03]であるという意味的關係があるので、以下のように《備考》欄に記述する。

備考 : <関> 01 ⊃ 02 … > 03。(この記述式については3.2節参照)

以下、本方法について説明し、本方法によって捉えることができる区分間の意味的關係を示す(注2)

### 3.1 比喩に基づく意味の拡張

ある対象が別のものごとと形状や性質、機能、状況などが似ていることに着目して、その似ているものごとを用いてその対象を表現することがある。例えば、「言葉は生き物だ」という表現は、「言葉」には実際には生命はないが、あたかも生命を持ち、生まれたり、死んだり、成長したりする点が「生き物」に似ていることから生じた比喩的表現である。このような類似性による比喩は、メタファー(隠喩)と呼ばれるものである。

もともと比喩は運用論上の概念であり、意外性や新奇性を出すために使われ、臨時的に用いられることが多い。しかし、そのうち用法が固定化して一般的に使われるようになっていたものもある。例えば、「彼は本の虫だ」「争いの種になる」「言葉の壁がある」といった表現である。それぞれ「秋の虫」や「植物の種」、「建物の壁」などからのメタファーに基づく比喩的表現であるが、見出し語のもつ一つの用法と判断して辞書に記載している。名詞辞書で扱った比喩的表現の統語的特徴については橋本・他(1994)で論じた。

ところで、橋本・他(1994)ではメタファーに基づく拡張表現しか取り上げなかったが、見出し語の用法として取り上げているものの中には、さらに、別のタイプの比喩に基づく拡張表現も観察される。例えば、「鍋がおいしい季節になった」「あのキャッチャーはいい肩をしている」という表現は、前者が[容器]からその[中身]へ、後者が[身体部位]からその[機能]へ、それぞれ隣接関係にある別のものへの指示に意味が拡張している。このような隣接性による比喩は、メトニミー(換喩)と呼ばれるものである。また、「玉子(玉子)を1ダース買った」という時の「たまご」は、「動物のメスが産む卵」のうち、特に「鶏卵」を指す、と冒頭で述べた。これは、「比喩」であるという意識はほとんど持てないような一般的な表現であるが、カテゴリ全体でその一部を、あるいは一部でカテゴリ全体を表現するといった包摂関係による意味拡張は、シネクドキー(提喩)と呼ばれる比喩のプロセスにおける拡張と捉えられる。

ここで注意すべきことは、シネクドキーの包摂関係と、メトニミーの隣接関係の一種であるいわゆる全体部分関係とを混同しないことである。例えば、見出し語「て【手】」には次の二つの区分の用法がある(それ以外の用法はここでは略する)。

例：見出し語「て【手】」

[区分01] 人間の四肢。

例：着物の袖に手を通す。

[区分02] 「て01」の一部で手首より先の部分。

例：手をたたいた。

上の[区分01]と[区分02]は、肩より先を指す[全体]と手首より先を指す[部分]との全体部分関係にあるが、本稿ではこれをシネクドキーとはいわない。先ほどの「たまご」の例と比べてみよう。「たまご」の場合は、「鶏卵」以外にも「たまご」と呼べるものが複数ある。例えば、「金魚の卵、あひるの卵、かえるの卵」などである。他方、「手」の場合は「て02」以外の部分、例えば「ひじ」などは「手」とは呼べない。つまり、「たまご」の場合はカテゴリ間の包摂関係であり、「手」の場合は物全体とその一部分と

の間に成り立つ全体部分関係であるといった違いがある。よって『I P A L 名詞辞書』では前者の関係をシネクドキーとし、後者の関係はメトニミーの隣接関係の一つとし、両者を区別する(注3)

以上述べたように、次の三タイプの「比喩に基づく意味の拡張」に着目する。

- メタファー(隠喩)  
類似性によって意味を拡張する
- メトニミー(換喩)  
密接な関係にあるものや属性などの隣接関係によって意味を拡張する
- シネクドキー(提喩)  
カテゴリ全体とその一部という包摂関係によって意味を拡張する

### 3.2 見出し語の用法に見られる比喩的拡張

見出し語の区分間の意味的關係を捉えるため、前節で述べた「メタファー」「メトニミー」「シネクドキー」の比喩に基づく拡張関係に着目し、見出し語の用法の間に見られる比喩的拡張関係を分析した。以下に、その具体例を示す。

#### A. メタファーに基づく拡張の例

メタファーと捉えられる用法の中には、明らかにメタファーであると意識されるものと、その用法がすっかり固定化しているためにメタファーであることがあまり意識されないものがある。例えば、見出し語「かた【肩】」には次のような用例がある。

- (1) a. 後ろから肩をたたかれた。
- b. 洋服の肩がほつれる。
- c. その山の肩に、有名な山小屋がある。
- d. 文字の肩に印をつける。

(1a)は身体部位の「肩」を示す本来の用法である。これに対して、(1b)、(1c)、(1d)は「肩」という身体部位の物理的位置との類似から拡張してできたメタファーであると考えられるが、(1b)は、(1c)、(1d)と比べるとメタファーであるという意識を持てにくい。このとき、(1b)は、「洋服の」という連体修飾語を除いて「肩がほつれる」といっても意味が通るが、(1c)や(1d)で同様に連体修飾語を除いて「肩に山小屋がある」、「肩に印をつける」といっては意味が通りにくくなるという統語的違いがある。

続いて、見出し語「かわ【皮】」の用例を挙げる。

- (2) a. 日焼けをして、顔と体の皮がむけた。
- b. りんごの皮をむく。
- c. まんじゅうの皮は薄い。
- d. 化けの皮がはがれる。

(2a)が人間や動物の皮膚を指す、本来の用法であるとするれば、(2b)、(2c)、(2d)は「皮」の形状の類似によるメタファーであると考えられる。このときも、連体修飾語を除くことができるものとできないものがある。(2b)と(2c)は、「ナイフで皮をむく」「このまんじゅうは皮が薄い」ともいえるが、(2d)は「化けの」という連体修飾語を除いては表現できない。

次に挙げる見出し語「こぶ」や「しわ」のように、どちらの用法も連体修飾語を除けるほど固定化の度合いが強い場合は、どちらが本来のものどどちらが派生したものなのか、

簡単には判断しかねる。以下に、その用例を見てみよう。

- (3) a. 眉間にしわを寄せた。  
b. ワイシャツにしわが寄る。
- (4) a. 額にこぶができた。  
b. ラクダにはこぶがある。  
c. 幹にこぶがでている。

ここでは、いずれも (a) が本来的な用法で、それ以外が (a) から派生した用法である  
と考えるが、実際のところはかなり微妙である。ただ、それぞれの用法の間には類似性  
によるつながりがあるのは確かであり、メタファーの関係であることには違いがない。

以上のことから、メタファーの中には固定化の度合いが強いものと弱いものがあり、強  
い場合には連体修飾語をを除くことができるということがわかる。よって、本稿では、固  
定化の度合いが強いものと低いものとを区別して扱う。両者の区別には、連体修飾語を除い  
ても用いることができるか否かという統語的特徴を手がかりに分類する。

それぞれ「A=>B」、「A…>B」という異なる記号を用いて、分類されるメタファ  
ーの例を以下にまとめて示そう。どちらも左側のAから右側のBへ拡張することを表す。

(1) メタファー：連体修飾語が省けるほど固定化しているもの

「A=>B」

肩：人の肩=>洋服の肩

皮：動物の皮=>みかんの皮，まんじゅうの皮

こぶ：頭のこぶ=>らくだのこぶ，幹のこぶ

しわ：顔のしわ=>服のしわ

クリーム：コーヒー用のクリーム=>化粧品のクリーム

(2) メタファー：上記以外

「A…>B」

肩：人の肩…>山の肩，文字の肩

皮：動物の皮…>化けの皮

卵：動物の卵…>医者卵

歯：赤ちゃんの歯…>くしの歯

角：鹿の角…>こんぺいとうのツノ

B. メトニミーに基づく拡張の例

メトニミーになる隣接関係には、いろいろなタイプがある。見出し語「ちゃ【茶】」は  
七つに区分されるが、それぞれがメトニミーの関係にある。どのような隣接関係によつて  
拡張するか、以下に見てみよう。

例：見出し語「ちゃ【茶】」

[区分01] 中国南部の山岳地方の原産で、葉から嗜好飲料の材料を作るためにアジ  
ア各地を中心に広く栽培される、ツバキ科チャ節の常緑低木。

例：茶を栽培する。

- [区分02] 「ちゃ01」の葉を乾燥したり蒸したりして加工したもの。  
例：茶を煎じる。
- [区分03] 「ちゃ02」に熱湯を注ぎ、こして入れたり、粉末状の「ちゃ02」に熱湯を注ぎ、攪拌してたてる嗜好飲料。  
例：茶を飲む。
- [区分04] 「ちゃ03」や、その他のアルコールを含まない嗜好的な飲み物を飲みながら休憩すること。  
例：お茶にする。
- [区分05] 様々な嗜好的食べ物や、アルコールを含まない飲み物を味わい、歓談する集まり。  
例：お茶に招く。
- [区分06] 「ちゃ02」をたててのむ作法。  
例：お茶を習う。
- [区分07] 黒味がかかった赤黄色。  
例：靴とバックを茶に揃える。

このとき、[区分01]から[区分02]へ、また、[区分02]から[区分03]へは、どちらも[材料]と[加工品]の関係で、[区分03]から[区分04]へは[手段]と[行為]の関係で、[区分04]から[区分05]へは[行為]と[イベント]の関係で、連続して拡張する。それから、[区分02]から[区分06]へは[手段]と[行為]の関係で、[区分02]から[区分07]へは[物]と[形状]の関係で拡張する。

その他、3.1節で見出し語「て【手】」を例にして述べた通り、具体物の[全体]と[部分]の関係も隣接関係の一つである。「手」は[全体]から[部分]へ拡張する例であったが、次に示す見出し語「はな【花】」の[区分01]と[区分02]は、逆に[部分]から[全体]へ拡張する例である。

例：見出し語「はな【花】」

- [区分01] 植物の茎や幹に生じる、繁殖をつかさどる器管。  
例：りんごの花は白い。
- [区分02] 「はな(花)01」を咲かせる植物。  
例：庭の花に水をやる。

このような全体部分関係による拡張は、特に見出し語の用法の中でも顕著に見られるため、それ以外の隣接関係と区別する。以下にその例を示す。

全体部分関係には「A >> B」という記号を用いる。これは「BがAの一部である」という意味である。全体から部分へ拡張する場合を「A >> B」で示し、逆に部分から全体へ拡張する場合を「A << B」で表す。その他の隣接関係には「A [X] -> [Y] B」という記号を用いる。メタファーと同様に、左側のAから右側のBへ拡張することを表す。どのような隣接関係に基づいているかを[X]、[Y]で示す。

### (3) メトニミー：全体部分関係

「A >> B」, 「A << B」

- 手：袖に手を通す >> 手 (hand) をたたく  
足：足が長い >> 足 (foot) が大きい  
貝：貝を掘りにいく >> 貝 (貝殻) でできた首飾り  
花：花が開いた << 花を10本買う

首：首（neck）が細い<<首（head）をとる

（４）メトニミー：上記以外の隣接関係

「A [X] → [Y] B」

鍋：鍋で煮る [容器] → [中身] 鍋を食べる

肩：肩がこる [身体部位] → [機能] いい肩をしている

リボン：リボンで結ぶ [物] → [形状] リボンに結ぶ

茶：茶を摘む [材料] → [加工品] 茶を煎じる

茶：茶を煎じる [材料] → [加工品] 茶を飲む

豚：豚を飼う [材料] → [加工品] 豚を 100 グラム買う

上記の [X] と [Y] は、A や B の用法そのものの意味を示すものではなく、あくまでも何の隣接関係によるメトニミーの拡張であるかを説明するためのものである。上に挙げた「豚を飼う [材料] → [加工品] 豚を 100 グラム買う」という例で説明すれば、これは、「豚を飼う」などと言う時の動物としての「豚」に「材料」を指す意味があるということを行っているわけではない。「豚を 100 グラム買う」と言うような、「豚」で「豚肉」を指す用法と見比べてみた場合には、動物としての「豚」の方をまず「材料」として捉え直すことができ、また、それをカットあるいはミンチした結果の「豚」の方を「加工品」として捉えることができるということを行っている。つまり、この時に両者の用法の間にあるメトニミーの拡張関係が、「[材料] → [加工品]」という種類の隣接関係によるものであることを示している。

C. シネクドキーに基づく拡張の例

シネクドキーの例を以下に示す。「A ⊃ B」という表示は、「B は A に包摂される」という意味である。カテゴリ全体で、その一部分を指す拡張の場合を「A ⊃ B」で示し、ある一部分でカテゴリ全体を指す拡張の場合を「A ⊂ B」で示す。見出し語には前者のタイプの方が顕著に見られた。

（５）シネクドキー

「A ⊃ B」, 「A ⊂ B」

卵：動物の卵 ⊃ 卵（鶏卵）を 1 ダース買う

毛：体がけでおおわれている毛 ⊃（頭髪）を染める

毛：体がけでおおわれている毛 ⊃（羊毛）100%のセーター

粉：チョークが砕けて粉になった ⊃ 粉（小麦粉）をこねる

天気：天気が変わりやすい ⊃ 今日（天気）だ

着物：着物（衣服）を揃える ⊃ 着物（和服）を着付ける

酒：熱燗の酒（日本酒） ⊂ 世界各国の酒（アルコール飲料）

白墨：白墨 ⊂ 赤い白墨（注 4）

上に挙げた例のほか、尺度や程度を表す見出し語の区分間にも、シネクドキーの拡張関係を捉えることができる。例えば、見出し語「けんこう【健康】」には、以下のように三つに区分される。

例：見出し語「けんこう【健康】」

[区分01] (異常があるか、ないかという面から見た) 心身の状態。

例：最近健康がすぐれません。

[区分02] どこにも悪いところがなくて、元気であること。また、そのさま。

例：毎日を健康に過ごす。

[区分03] (あるものが) 心身に悪影響を及ぼさないようなものであるさま。

例：この書物はきわめて健康な読み物だと言える。

[区分02]から[区分03]へは、[結果]と[原因]というメトニミーの関係で拡張していると捉えられるので、ここでは問題にしない。ここでは、[区分01]から[区分02]への関係に着目する。[区分01]は、心身の状態が良い場合も悪い場合も含むものであるのに対し、[区分02]は、心身の状態が良い場合だけに範囲を特定するものである。注目すべきことは、この時、「悪い場合」でなく、「良い場合」に範囲が特定されるという点である。もともと[区分01]は、良い状態に重点を置いて、良いか悪いかを問題にするものであり、[区分02]は、その重点が置かれている方へ範囲が特定されるものである。このように重点が置かれている方へ範囲が特定されるタイプもシネクドキーの一つだと考える(注5)。

次に、見出し語「重さ」の例をあげる。「重さ」という名詞は、形容詞「重い」の転成名詞であり、もともと重点は「重いこと」に置かれている。見出し語「けんこう【健康】」と同様に、その重点が置かれている方へ範囲が特定される関係があると同時に、逆にその重点がない方へ範囲を広げる関係もある。見出し語「おもさ【重さ】」は13に区分されるが、そのうちの01から03の区分と用例を以下に示す。

例：見出し語「おもさ【重さ】」

[区分01] ものの物の重量の大きさの度合い。

例：小包の重さを測る。

[区分02] あるものの大きい重量。

例：コンピュータの重さに耐えられるような頑丈な机を買った。

[区分03] 体に負担を感じるほどに重量が大きいと感じること。

例：肩に荷物の重さを感じた。

[区分02]は、「重いこと」である。その「重いこと」の度合をさらに強めたものに範囲を特定するものが、[区分03]である。また、逆に、その「重いこと」の度合を弱め、「重いか軽いか」という程度を指すまで範囲を広げるものが[区分01]である。

このように、重点がかかる度合を強める方に範囲を特定する関係や、逆に重点のかかる度合を弱めて範囲を広げる関係は、尺度や程度を表す見出し語の区分間に何例か見つかる。このようなタイプのシネクドキーを、(5)で示したシネクドキーと区別して「A $\supset$ +B」または、「A $+$  $\subset$ B」と表す。「A $\supset$ +B」で度合が強まって範囲が特定される関係を示し、「A $+$  $\subset$ B」で度合が弱まって範囲が広がる関係を示す。以下にその他の例をあげる。

(6) シネクドキー：尺度型

「A $\supset$ +B」, 「A $+$  $\subset$ B」

奥行き：押入れの奥行きを計る $\supset$ +奥行きがある

スピード：スピードが遅くなる $\supset$ +スピードがある

数：りんごの数を数える $\supset$ +数をこなす

女：救助の時は女が優先される $\supset$ +そのドレスは女を感じさせる

広さ：部屋の広さに圧倒された＋αグラウンドの広さをはかる

#### D. 融合的な拡張の例

中には、メタファー、メトニミー、シネクドキーのうちのどれか一つのタイプであると特定することが難しいと感じられる融合的な拡張例がある。山梨(1995)ではメタファー的な性質とメトニミー的な性質のいずれをもかね備えた融合的イディオムの例が挙げられている(例えば、「足を引っ張る」は、足が引っ張られれば体全体の動きも阻止されることにつながる点ではメトニミー的であり、この物理的な阻害が「邪魔される」という意味に拡張している点ではメタファー的であるといえる[山梨(1995)]。)

しかし、『I P A L 名詞辞書』では、いずれかのタイプにできるだけ特定して記述する。例えば、山梨(1995)が融合的イディオムの例としてあげている「手に入る」や「手を引く」については、前者はメトニミー、後者はメタファーと特定した。「手に入る」や「手に入れる」という時の「手」の用法は、「物を手に取る」という時の「手」の用法からの「保持」と「所有」という隣接関係によるメトニミーであると捉える。また、「手を引く」や「手を出す」という時の「手」の用法は、イベントへの関与を具体的なものとの関わりになぞらえたメタファーであると捉える(注6)。

### 3.3 意味的關係の辞書記述方法 1

意味的關係の辞書記述は、区分の番号と、前節の(1)～(6)の例で意味的關係ごとに設定した記号とを組み合わせた「意味的關係記述文」で行う。例えば、見出し語「のど」は、次のように四つに区分される。

例：見出し語「のど」

[区分01] 管の形をしている口の奥の部分。

例：のどに魚の骨がひっかかってしまった。

[区分02] 頭と肩をつなぐ身体部分の前面。

例：喉に湿布をする。

[区分03] 歌う声。

例：彼女の自慢の喉を聞かせてもらいましょう。

[区分04] 本の綴じ目の部分。

例：本ののどがこわれる。

この区分間の意味的關係は、[区分02]と[区分03]が、[区分01]のメトニミーであり、[区分04]が[区分02]のメタファーであるので、

備考 : <関> 01 [物] -> [側面] 02。  
01 [手段] -> [行為] 03。  
02...> 04。

という意味的關係記述文で表示する。文頭であげた見出し語「たまご」の場合は、[区分02]が[区分01]のシネクドキーであり、[区分03]がその[区分02]からのメタファーであったので、三者をまとめて次のように表示する。

備考 : <関> 01 ⊃ 02...> 03。

記号をはさんで左側から右側に拡張することを表すことは前節で述べた通りである。区

分する際には、本来的な用法を[区分01]にし、それに近いと思われる用法から早い区分番号をつけるため、句点で区切られる一つの記述文中に現れる区分番号は、左側の番号より右側の番号が大きい昇順になる。ただし、例外もある。それは、次の見出し語「さけ【酒】」の例のように、現代における本来的な用法と語源的な用法とが一致しない場合である。

例：見出し語「さけ【酒】」

[区分01] アルコールを成分として含む飲料。また、それを飲むこと。

例：あのスーパーではお酒も売っている。

[区分02] 「さけ(酒)01」のうち特に、米を原料とする、日本に古くから伝わるアルコール飲料

例：酒を熱燗にする。

備考 : <関>02<01。

見出し語「さけ」の場合は、現代の用法では[区分01]の方が本来的だと思われるが、[区分02]が語源的な用法といえよう。このとき、語源を考慮すると意味的關係の記述は「01<02」ではなく、上のように番号を入れ換えた「02<01」となる。

最後に見出し語「あし【足,脚】」の例を示そう。

例：見出し語「あし【足,脚】」

[区分01] 動物の胴に付属し、歩行や体を支える機能を果たす身体部分。

例：彼女は足が長い。

[区分02] 「あし01」の一部で、くるぶしより下の部分。

例：彼は足が大きい。

[区分03] 歩いたり、走ったりすること。

例：彼は足が速い。

[区分04] 移動の手段となるもの。

例：台風で市民の足が乱れる。

[区分05] 椅子などの下部で、台の部分や上にある物を支える役割を果たす部分。

例：机の脚が折れる。

備考 : <関>01>>02。

01 [身体部位] -> [機能] 03…>04。

01…>05。

[区分02]は[区分01]と全体部分關係のメトニミーである。[区分03]は[区分01]と[身体部位]と[機能]の關係のメトニミーであり、[区分04]は、その[区分03]からの機能の類似性によるメタファーである。また、[区分05]は[区分01]からの形態的な類似性によるメタファーである。

以上、比喩に基づく拡張關係を区分番号と記号を組み合わせて表示することで、いくつも区分されるような見出し語の場合も、それぞれの意味的關係を明示することができることを示した。

### 3.4 意味的關係の辞書記述方法2

区分されている結果同士を比べるだけでは、区分間にある關係が捉えにくい場合がある。

そのような場合、前節で示したような、区分番号だけを用いる記述では意味的關係を記述することができない。本節では、補足情報を加えて記述する場合の例と方法について述べる。

例えば、見出し語「ひな」は次のように二つに区分される。

例：見出し語「ひな」

[区分 0 1] 卵からかえって間もない鳥の子。

例：昨日ひなが5羽かえった。

[区分 0 2] ひな人形。

例：三月三日には雛を飾ります。

この時、[区分 0 1]と[区分 0 2]とを比べるだけでは、両者の間にある意味的關係が見えてこない。しかし、区分外の「雛形」や「雛菊」などの合成語を見ると、「ひな」には「小さなもの」を示す用法もあることがわかる。[区分 0 1]の「鳥の子」が小さいことから、「小さなもの」を指す用法が派生し、さらに「人形の小さなもの」を指す[区分 0 2]の用法が派生したと考えれば、両者の間にある意味的關係が見えてくる。このような場合、意味的關係の記述では、その区分外にある用法を { } を用いて表示する（合成語の例とその時の意味は《他合成語 1》欄に記述される）。

備考 : <関> 0 1 ⊂ {小さなもの} ⊃ 0 2。

他の合成語：[小さなもの] 一げし、一菊、一形

次の区分 0 1 と区分 0 2 の関係も似たような例である。

例：見出し語「とり【鳥，鶏，酉】」

[区分 0 1] 脊椎動物の一種で、くちばしと羽をもつ恒温動物。

例：鳥が大空をとぶ。

[区分 0 2] 「とり 0 1」のうち、食用とされる鶏肉。

例：鶏をからあげにして食べる。

[区分 0 3] 十二支の第十番目。

例：彼は酉の生まれだ。

生物の「鳥」[区分 0 1]と生物の「鶏」にはシネクドキーの關係があり、生物の「鶏」と食品の「鶏肉」[区分 0 2]には、[材料]と[加工品]というメトニミーの關係がある。しかし、見出し語「とり」には、生物としての「鶏」の用法がない。そこで、生物の「鳥」[区分 0 1]と食品の「鶏肉」[区分 0 2]の二つだけでその間にある關係を捉えようとする、シネクドキー、あるいはメトニミーのどちらか一方の關係だと特定できないため、うまく記述することができない。そこで「ひな」の例同様に、区分外にある用法を { } を用いて表示して次のように記述する（区分 0 3 については文章で説明する）。

備考 : <関> 0 1 ⊃ {生物としての鶏}[材料] → [加工品] 0 2。

0 3 は 0 1 を暦の上に位置づけたことに基づく。

また、意味的關係記述文だけではわかりにくいと思われるものについては、その後に続けて補足説明を ( ) にくくって示す。例えば、見出し語「こうたい【交替】」では、次のように補足説明を加えている。

例：見出し語「こうたい【交替】」

[区分01] 役割などを入れかえること。また、入れかわること。

例：ピッチャーの交代を告げる。

[区分02] 位置や場所を入れかえること。また、入れかわること。

例：目が悪くて黒板の文字が見えないので、席の交替を頼む。

備考 : <関> {ある物とある物が入れかわること} ⊃ 01、02。(01は人に、02は場所や位置に対象を特定。)

特に、一つの見出し語にいくつもメタファーが現れる場合や、メタファーが複雑なものである場合は意味的關係記述文だけではわかりにくいので、メタファーについての補足説明を上記のように( )でくくって表示する。場合によっては、メトニミーと同じように「A [X] => [Y] B」の形式で何から何によるメタファーであるかを表示する。その例を次に二例あげる。

例：見出し語「かいてん【回転】」

[区分01] 一転を中心にして回ること

例：車輪の回転が止まる。

[区分02] (速い・遅いでみた) 頭の働き。

例：その子供は頭の回転が速い。

[区分03] 資金の投資と回収の繰り返し。

例：あの会社は資金の回転が速い。

[区分04] 人や物の入れ代わり。

例：あの店は客の回転が速い。

備考 : <関> 01…> 02、03、04。(02は頭、03は資金、04は客や商品に対象を拡張。)

例：見出し語「もんだい【問題】」

[区分01] 知識や学力を試すためにつくられた問い。

例：期末テスト用の問題を一晚でつくった。

[区分02] 解決すべき重要な事柄。

例：大学が抱える経営上の問題を知る。

[区分03] 容易に解決できない厄介な事。

例：その生徒は何かと問題を起こす。

[区分04] 批判の対象になり、改善や撤回を要求されるような点。

例：彼の言動には大いに問題がある。

[区分05] 「もんだい04」に関わるものとして話題に取り上げられること。

例：問題の人物が不意に現れた。

備考 : <関> {検討し、解決すべき事柄} ⊃ 01、02、03、04。  
03 [検討の対象] => [議論の対象] 05。

その他、メタファー、メトニミー、シネクドキーでは説明できない拡張関係については、

以下の例のように文章で説明する。

例：見出し語「けっさく【傑作】」

[区分01] きわめてすぐれた作品。

例：彼は画家として後世にたくさんの傑作を残した。

[区分02] (思わず笑いたくなるほど) 言動などがひどく滑稽なこと。

例：あいつがまた傑作をしでかした。

備考 : <関>02は、01がアイロニーで使われたもの。

### 3.5 特例「さき【先】」

見出し語「さき【先】」の区分間の関係は複雑であり、《備考》欄に収めることは困難である。したがって、ここでやや詳しく説明したい。

この語は、以下の11の区分に分かれている。

[区分01] ある基準となる場所より、更に進んだところ。

例：ポストはこの先にある。／先を走る。／先に進む。

[区分02] ものの先端の部分。

例：棒の先をまるめる。

[区分03] ある物事が起きたり行われたりする前。

例：嬉しさよりも安心が先に立つ。／先に金を払う。

[区分04] ある人や組織の将来。

例：先が思いやられる。

[区分05] 現在時やその他の基準となる時間よりも更に進んだ時間。

例：我々の仕事は先が長い。／締切を先に伸ばす。

[区分06] 他のものが達している段階や自分のその時の段階よりも進んだ段階。

例：米国は、情報通信分野で他国より一歩先を行っている。

[区分07] (話や文などの) 一続きの内容を持つものの、ある基準となる部分より進んだところにある部分。

例：早く先を読みたい。

[区分08] ある物事を率先して行う立場。

例：彼女が先に立って仕事を進めた。

[区分09] 移動の目標となる場所。

例：父に、これから行く先を尋ねた。

[区分10] 取り引きや交渉などの相手方。

例：私の家内を先がよく知っている。

[区分11] 現在時より前の時間。

例：私の考えは先に述べた通りです。

この11の区分は、大きく空間に関わるものと、それ以外のものに分かれる。後者は前者からメタファー(および区分によってはメトニミーも関わる)によって拡張されたものである。

空間に関わるものは、[区分01]、[区分02]、[区分09]である。

[区分02]は、1次元的な側面が顕著に認識される物体(長く細いもの)の端点に適用される区分である。これに対して、[区分09]は、0次元的に捉えられる物体(点と見なされるもの)が描く1次元的な軌跡の終点に適用される区分である。ここでは<長く細いもの>と<点と見なされるもの>が描く軌道との間に拡張が起こっている。

これは次のような「本」の助数詞としての用法にも観察されることである。

- (5) a. 鉛筆を一本買った。  
b. ホームランを一本打った。

(5a)では鉛筆という<長く細いもの>に対して助数詞「本」が適用されているのに対して、(5b)ではホームランと言う<点と見なされるもの>に対して同じ助数詞が適用されている(注7)。

[区分01]は、[区分09]における経路(経路1)がさらに大きな経路(経路2)の一部をなす場合と考えることができる。この場合、経路1の端点は経路2上の点という制約を満たす限りにおいて任意に設定することが可能になる。

[区分03]、[区分04]、[区分05]、[区分06]、[区分07]、[区分08]、[区分10]、[区分11]は「先」の空間を表す用法からメタファー(および区分によってはメトニミー)によって拡張されたものである。

[区分10]は、[区分09]からのメタファー及びメトニミーによる派生である。まずメタファーにより[区分09]に関する<空間>の構造が(<情報、金、労働力等の移動>という形で)<二者関係>に投射される。そして<端点>から<そこに存在する人間集団>へと指示対象が移行する(メトニミー)。

[区分03]、[区分04]、[区分05]、[区分11]は<空間>から<時間>への<運動>概念の写像(メタファー)が関わる。これらについて述べる前に、空間から時間への運動概念の写像の構造について簡単に触れておかなければならない。

<運動>とは、二者間の相対的な位置関係の変化であると考えることができる。空間の中における運動の例として新幹線に乗っている人を取り上げると、通常は例えば次のような表現がなされる。

- (6) a. 彼らは京都に近づいていった。  
b. They were approaching Kyoto.

しかし、運動は相対的な概念であり、視座の取り方の変化によってその見え方は変化する。(6)に述べられた事態の場合、視座を新幹線に乗っている「彼ら」に合わせるならば、次のような表現形式を取ることも可能になる。

- (7) a. 京都が近づいてきた。  
b. Kyoto was approaching.

すなわち運動については二つの相違なる表現構造が可能であり、これは相対性という運動の性格に動機づけられているということになる[本多(1994ab), Honda(1994ab)]。ただし、上に述べた「先」の空間用法は全て(6)に例示される運動把握を踏まえており、(7)に例示された運動把握による表現ではない。

空間の運動についての表現に見られるこの二重性は、そのまま時間表現にも受け継がれている[岩田(1994)]。

- (8) a. 素晴らしい未来に向かって進んでいく [山梨(1995)p.115]  
b. As we go further into the 1980s ...

[Lakoff and Johnson (1980) (第9章)]

- (9) a. 〆切が近づいてきた。

- b. The deadline is approaching.
- c. 月曜日の後に火曜日がある。
- d. Tuesday follows Monday.

(8)においては人間が時間軸上を<過去>から<未来>へと移動していくと捉えられており、(9)においては<時点>が(しばしば列をなして)<未来>から自分のいる<現在>に向かって移動してきて、やがて<現在>を通過して<過去>へと遠ざかっていく、という捉え方がなされている。

一般に(8)のような時間了解は<人間が動くモデル (moving-ego model)>と呼ばれ、(9)のような了解の仕方は<時点が動くモデル (moving-time model)>と呼ばれる[Clark(1973), Fleischman(1982), Honda(1993)]。

「先」の時間を表す用法を考えるにあたっては、この二つの時間了解の区別を踏まえることが必要である。

[区分04]、[区分05]は<人間が動くモデル>によって立つ用法である。既に述べたことから明らかのように、これは「先」の空間用法の構造を時間に適用したものに当たる。[区分04]は<過去>から<未来>へと「移動」していく人間の「先[区分01]」にある状況(この「にある状況」はメトニミー)と考えることができる。[区分05]は空間から時間へのメタファーに伴って<時点>が<地点>に相当するものと捉えられたものである。

[区分03]、[区分11]は<時点が動くモデル>によって立つ用法であり、時点が列をなして<未来>の方向から<過去>の方向へと移動すると捉えられている。このモデルにおいては、たとえば月曜日は同じ週の火曜日の前を走っていることになる。すなわち火曜日を基準点として選んだ場合、月曜日はこの基準点(火曜日)から見て「先[区分01]」を走っていることになる。[区分03]はこの基準点が任意に選べる場合であり、[区分11]は基準点として<現在>が選ばれた場合である。

残りの[区分06]、[区分07]、[区分08]についてはもはや詳しい解説は不要であろう。[区分06]は段階を持つ事態が空間に見立てられ、事態を「進展」させる主体が移動物に見立てられている。[区分07]は話などのある種の空間と捉え、それを読んだり書いたりすることを移動に見立てている。[区分08]はプロジェクトなどのある種の空間と捉え、それに関与する人々を<空間の中を列をなして移動する人々>に見立てている。

以上、見出し語「さき【先】」の区分間の関係は複雑で、《備考》欄に収めることが困難なため、ここでやや詳しく説明した次第である。

### 3.6 区分間以外の意味的關係

意味的關係の記述は、区分した結果を対象として行うものであるが、区分として分けた用法以外にも検討すべき意味的關係がある。最後にそれらの例を示す。

例えば、「くさりやすい」という意味で「足がはやい」という《慣用表現》がある。また、「雨足」という《他の合成語》がある(注8)。これらは、3.3節で示した見出し語「あし【足, 脚】」のどの区分にもあてはまらない。『I P A L 名詞辞書』では、このような《慣用表現》や《他の合成語》は区分する用法とは別に、用例を例示するだけにとどめているが、これらはどちらもメタファーによる拡張例であると説明できるものである。「足がはやい」は、状態変化を空間移動になぞらえたメタファーであり、「雨足」は形態的な類似性によるメタファーである。

次に、見出し語「けいさつ【警察】」の例を示す。

- (10) a. 警察が事件について公表した。
- b. 警察に出向いて行って事件を届け出た。

(10a)は「警察という組織」を指し、(10b)は「警察という場所」を指している。これ

らは、『I P A L 名詞辞書』では意味が違うのではなく視点が違うのだと捉え、どちらも「01. 法的な権力を行使する機関」という同じ区分の中で、組織<ORG>と場所<LOC>という異なる意味素性(注9)の用例として記述する[桑畑・橋本(1995a)]。この時、両者の間に、[組織] から、それがあ る [場所] へというメトニミーに基づく拡張関係を捉えることができる。

このように、区分した用法と区分の対象外とした用法との間にも意味的關係を捉えることができ、また、一つの区分内にも意味的關係を捉えることができるのだが、現在はこれらの意味的關係について記述することは保留している。

#### 4. 記載例

「慣用表現ほか」<慣用句等>における記載例は以下の通りである。

##### <見出し>

見出し : ね  
表記 : 根  
コード1 : 2092  
ファイル : h2  
区分数 : 03

##### <慣用句等>

のような :  
のように :  
慣用表現 : 根に持つ  
: 草の根を分けても探し出す。  
: 根も葉もないうわさ。  
: 歯の根が合わぬ。  
: 根掘り葉掘り {聞く / 尋ねる / …}。  
: <場所>に根を生やす (=なかなか動こうとしない)。  
他合成語1 : 一回し  
他合成語2 : [根気] 一 (こん) 限り, 一 (こん) 性, 一 (こん) 比べ, 一 (こん) 負け  
備考 : <関> 01… > 02。01… > 03。

##### <見出し>

見出し : ほし  
表記 : 星, ホシ  
コード1 : 2499  
ファイル : i5  
区分数 : 04

##### <慣用句等>

のような : 星のような瞳。  
のように : 星のように輝く。  
慣用表現 : 希望の星。

- : 期待の星。
  - : 星の恵み。
  - : 幸運の星。
  - : 不幸な星の下に生まれる。
  - : 星を頂く。
  - : 星の数ほどある。
  - : 綺羅（きら）星の如く {連なる／ならぶ／…}。
- 他合成語 1 : 一占い, 一合い, 一回り, 一祭り; 白一 (ぼし), 黒一 (ぼし), 勝ち一 (ぼし), 負け一 (ぼし)
- 他合成語 2 :
- 備考 : <関> 0 1 ⊃ 0 2。0 3 は 0 2 を所記 (シニフィエ) とする記号。0 2 …> 0 4。(0 4 は、0 2 が航海の目標として用いられたことによるものか。)

## 注

1. この試みは現代の用法として『I P A L 名詞辞書』で取り上げて区分した結果について、その間にある意味的關係を現代の用例に基づき考察するものであり、厳密な国語学史的な裏付けにはよっていない。また、区分や意味素性の付与は、[第二章 見出し語の区分]や[第三章 意味素性]で述べている通り、意味的な特徴だけでなく、主に統語的な特徴を手がかりに行っているものである。本試みは、その分類した結果の關係を捉えるために用いる指標とするものであり、区分する基準とするものでも、意味素性を付与する基準とするものでもない。
2. 本節は、桑畑他(1995b), 桑畑・橋本(1995c)を基に新たに作成し直したものである。
3. 佐藤(1992)にも同様の区別が示してあるが、Ullmann(1962)、山梨(1995)らは、シネクドキーをメトニミーに含めて論じている。
4. 「白墨」は I P A L 名詞辞書の見出し語ではないが、例として挙げた。
5. 国広(1995)では、「体重のある人」は<普通より重い人>というプラス値を指す、といった例をあげて、「実力、人格、人物、距離、効率」などには「プラス値多義」という派生關係があると説明してあり、比喩的多義とは区別してある。
6. このように、融合的な拡張例だけを特別に扱うことはしていないが、こういったタイプのものをどう扱うべきか、検討を要する。
7. Lakoff(1987)ではここで言う<1次元的な側面が顕著に認識される物体(長く細いもの)>、<1次元的な奇跡>をともに「イメージスキーマ(イメージ図式)」の例としている。「イメージスキーマ」とは、世界における人間の経験に構造を与える前概念レベルの認知図式のこと、Lakoff(1987)(第17章)にはその例として<容器>、<部分/全体>、<連結>、<中心/周縁>、<起点/経路/目標>、<上/下>、<前/後>などが挙げられている。また、ここで提示した「本」に関する分析はLakoff(1987)(第6章)に負う。そこではここで述べた關係が、  
 <軌道のスキーマ> <—> <長く細いもののスキーマ>  
 として定式化され、「イメージスキーマ変換 (image-schema transformation)」と呼ばれている。

8. 見出し語「あし【足，脚】」で区分されている《合成語》の例は、「足跡」「足首」など。
9. 意味素性とは、結びつく述語によって焦点が当てられる名詞の側面をいう[第三章 意味素性]。

#### 参考文献

- 青山文啓(1995) 素性に基づく名詞記述のための枠組, 『I P A L シンポジウム'95 論文集』 情報処理振興事業協会, pp. 1-9.
- 岩田彩志(1994) メタファーと主題関係, *Helicon* 3, 岐阜大学, pp. 59-77.
- 国広哲弥(1982) 『意味論の方法』 大修館書店.
- 国広哲弥(1995) 語彙論と辞書学, 『言語』 24(6), pp. 38-45.
- 桑畑和佳子・橋本三奈子(1995a) 見出し語の下位区分と名詞辞書の記載情報, 『I P A L シンポジウム '95 論文集』 情報処理振興事業協会, pp. 21-30.
- 桑畑和佳子・橋本三奈子・村田賢一(1995b) I P A L 名詞辞書における下位区分間の関係記述の試み, 『第14回技術発表会論文集』 情報処理振興事業協会, pp. 336-341.
- 桑畑和佳子・橋本三奈子(1995c) 名詞の下位区分間に見られる意味的關係の辞書記述, 『情報処理学会研究報告』 95-NL-110-5, pp. 29-34.
- 佐藤信夫(1992) 『レトリック感覚』 講談社学術文庫版.
- 橋本三奈子・桑畑和佳子・青山文啓・村田賢一(1994) 名詞の比喩的表現とその統語的特徴, 『情報処理学会第49回全国大会論文集』 3-139.
- 本多啓(1994a) 見えない自分、言えない自分：言語にあらわれた自己知覚, 『現代思想』 22(13), pp. 168-177.
- 本多啓(1994b) 言語における二様の自己表現について, 日本英語学会第12回大会ワークショップ「認知言語学の現状とその再検討：多様性と共通性をめぐって」における口頭発表.
- 山梨正明(1995) 『認知文法論』 ひつじ書房.
- Clark, H.H. (1973) *Space, Time, Semantics, and the Child*, Moore, T.E. (ed.) *Cognitive Development and the Acquisition of Language* New York: Academic Press, pp. 27-63.
- Fleischman, S. (1982) *The Past and the Future: Are they Coming or Going?*, *BLS* 8, pp. 322-334.
- Honda, A. (1993) *The Go-Future in English*. Duisburg: Linguistic Agency, University of Duisburg (LAUD A-327).
- Honda, A. (1994a) *An Inquiry into the Semantics of Motion, Location, and Viewing*, *Linguistic Research* 12, Tokyo University English, Linguistics Association, pp. 23-67.
- Honda, A. (1994b) *Linguistic Manifestations of Spatial Perception*, Doctoral Dissertation, Department of English Language and Literature, University of Tokyo.
- Lakoff, G. (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*, Chicago: The University of Chicago Press, (『認知意味論』池上嘉彦他訳, 紀伊国屋書店, 1993.)
- Lakoff, G. and Johnson, M. (1980) *Metaphors We Live By*, The University of Chicago. (『レトリックと人生』渡部昇一他訳, 大修館書店, 1986.)
- Ullmann, S. (1962) *Semantics: An Introduction to the Science of Meaning*, Oxford: Basil Blackwell. (『言語と意味』池上嘉彦訳, 大修館書店, 1969)

# 第 二 部

## 意味素性の詳細

### 1. 五つの領域

本節以下では、第一部第三章で述べたことを前提として、どのような述語に基づいて素性が決定されるか用例をあげながら説明する。第三章（3.1 五つの領域）にあげた意味素性の五つの領域をもう一度ここに繰り返す。

(α)動物の領域	/ANI/ :
	<HUM> <AML> <ANI>;
(β)具体物の領域	/CON/ :
	<AUT> <EDI> <LIQ> <PAS> <SOL> <CON>;
(γ)場所の領域	/SPA/ :
	<LOC> <INT> <ORG> <NET> <SPA>;
(δ)出来事および動作 ／作用の領域	/PRC/ :
	<PHE> <NAT> <PLA> <GAS> <ELM> <POT> <ACT> <EVE> <APO> <PRO> <RES> <PRC>;
(ε)抽象性の領域	/ABS/ :
	<PRI> <MEA> <SOC> <GRA> <ATT> <REC> <PER> <MIN> <MAN> <FOR> <EVA> <CUR> <DUR> <DIS> <ITM> <RAT> <QUA> <VAL> <STA> <NOR> <FLD> <INF> <ENT> <ROL> <REL> <DIR> <PHA> <REF> <INC> <QAL> <PRP> <STG> <APP> <UNT> <PIT> <TIM> <ORD> <NAM> <GAT> <KND> <ABS> .

以下では、(α)から(ε)について各素性に説明を加えながら、五つの領域とそこに含まれる素性（下位素性）について述べる。

### 2. /ANI/の下位素性

日常使用される「動物」という単語には二つの用法がある。一つは、ヒトを含めて「動物」として一括し、植物などと対照させる場合である。もう一つは、ヒトと対照させて、ヒト以外の動物を「動物」と呼ぶ場合である。一般に、単語の日常的な使用には、こうした事例が多く見られるが、ここでは、前者の場合の「動物」を<ANI>、後者の場合の「動物」を<AML>と、それぞれ略記して両者を区別する。

上に述べたような見方に立てば、/ANI/の下位素性には<HUM> <AML> <ANI>が含まれる。したがって作業手順からいえば、動物としての側面を持つ見出し語は、さらに<HUM> <AML>のどちらかに該当する可能性があることになる。例えば、次にあげる(1)に現れる三種類の名詞句には、すべて<HUM>が振られる、また(2)では、ヒト以外の動物としての側面を表す<AML>を振る。

- |        |                    |       |
|--------|--------------------|-------|
| (1) a. | 【先生】が 考える          | <HUM> |
| b.     | あの【先生】には 英語の知識が ある | <HUM> |
| c.     | 【赤ちゃん】が ハイハイする     | <HUM> |
| d.     | 太郎の【母親】が PTAに 出席する | <HUM> |
| (2) a. | 【馬】が いなく           | <AML> |
| b.     | 【犬】が 吠える           | <AML> |

- c. 【動物】を 虐待する <AML>  
 d. 学校で 【生物を】 飼育する <AML>

ところが、次の(3a)(3b)の場合「動物」「生物」は、動物でもヒトでもかまわない。このような場合には、(2c)(2d)の「動物」「生物」とは区分自体を別のものにして、(3a)(3b)に対しては上位の<ANI>という素性だけを与える。なお、専門用語としての「生物」には動物から植物までが含まれるが、述語として「いる」「飼育する」等が共起することを重視して、それぞれ<AML><ANI>という素性を振る(さらに参照：注1)。

- (3)a. 【動物】は 必ず 死ぬ <ANI>  
 b. 地球には たくさんの【生物】が いる <ANI>

ところで、(4)(5)の場合も、「生まれる」「死ぬ」のガ格の名詞句には、ヒト<HUM>であることや、ヒト以外の動物<AML>であることが要求されるわけではない。

- (4) 【太郎】が 生まれる <HUM>  
 (5) 【馬】が 死ぬ <AML>

しかし、<HUM>であれば<ANI>であり、<AML>であれば<ANI>であることは明らかである。このような場合には、便宜的にその下位素性だけを記載した。

### 3. /CON/の下位素性

<CON>とその下位素性の関係は、<ANI>とその下位素性の関係と同様に包含関係が認められる。しかし、<ANI>は下位素性によって隙間なく二分されるのに対して、/CON/の下位素性間の関係は、はっきりしない場合が多い(下位素性間の関係がはっきりしない事例は、後で述べる/ABS/の場合には特に顕著である)。したがって、記載方法には、同じ包含関係といっても以下に述べるような違いがある。ここでは「車」という名詞句を例に説明する。

- (1)a. 【車】が 走る <AUT>  
 b. 【車】が 止まる <AUT>  
 (2)a. 【車】を 洗う <CON>  
 b. 【車】を 運ぶ <CON>

(1a)(1b)では、「車」は「走る」「止まる」という述語と結びつくことによって、その走行性に焦点があてられる。こうした走行性に代表される自立的な処理機能を<AUT>という意味素性で表わす。<AUT>は、上の例に示したように移動を目的に利用される乗物だけでなく、「コンピュータ」「電子レンジ」など自立処理を主な機能とする機器一般に振られる(これに対して、例えば「ハンマー」には<CON>が振られる)。しかし、(2a)(2b)に現われる「洗う」「運ぶ」という述語は、<AUT>という側面を持つ名詞句を要求してはいない。これらの述語は、単に物質としての側面に焦点化を行なう性格のものであって、(1a)(1b)の述語とは異なる。こうした述語と共起する場合には、素性<AUT>と並立させて素性<CON>を与えた。

以下にあげる三つの素性<LIQ><PAS><SOL>は、今後IPALで擬声語や擬態語を含む副詞句を取り上げる場合を予想して、用意したものである。これらの副詞句の特徴は、名詞句の性格を形態的な側面から分類する目安になることである。

素性<LIQ>は、次の例のように、液体であることを明らかにするような述語と共起する名詞句に与えられる。

- (3)a. 【ビール】を ガブガブ 飲む <LIQ>  
 b. 【墨汁】を ポタポタ こぼす <LIQ>

- c. 【雨】が 漏る <L I Q>  
 d. 【血】が 固まる <L I Q>

同様に、<P A S> は、その粘性が問題になるような場合に振られる。

- (4) a. 【ご飯粒】が ネバネバに なる <P A S>  
 b. 【クリーム】が ベタベタ する <P A S>

また、<S O L> は次の例のように、固体から液体や気体への状態変化を表わす述語と典型的に結びつく場合に振られる素性である。

- (5) a. 【固体】が 昇華する <S O L>  
 b. 【氷】が 水に なる <S O L>  
 c. 【雪】が 解ける <S O L>

ただし、この種の述語が典型的に共起すると思われない名詞句には、これら三つの素性は記載されていない。

ところで、各素性ごとにその見出し語と典型的に共起すると思われる述語の例が示されている。ここで、各素性とそこに示される述語の例との関係について触れておきたい。例えば、ある見出し語に<A U T> <E D I> <L I Q> <P A S> <S O L> と並列せずに<C O N> が記載されている場合、そこに例として示された述語はこれらの素性の表示する特徴にまで焦点化を行なうことはない。また逆に、ある見出し語のもとに<A U T> <E D I> <L I Q> <P A S> <S O L> という素性と並立して<C O N> が記載されている場合、<C O N> の欄に例示される述語は、<A U T> <E D I> <L I Q> <P A S> <S O L> それぞれの欄に示された述語と異なり、それら下位の側面にまで焦点化の及ばない述語であることを意味する（注1）。

I P A L では、すべての単語の共起関係は明示可能だ、という一面で楽観的な見方は取っていない。したがって、ここにあげた下位素性は典型例に限って表示されるものであり、<C O N> の性質を持つ指示対象をその形態から遺漏なく、液体、粉状、粘性、弾力性、可塑性、脆弱性（もろさ）等に分類する意図で設けたものではない。

次に取りあげる素性<E D I> は、ヒトが一般に食用とする名詞句について、食べたり調理したりする場合の述語と共起する場合に振られる。(7a)は典型例とは呼ぶことができないので名詞辞書には収められていないが、「ガラス」には飲食物の典型から逸脱するので<C O N> が振られる。また、(7b)のように、ヒト以外の動物にとって餌となるものには<E D I> を与えることはしない。

- (6) a. 太郎が 【焼肉】を 食べる <E D I>  
 b. 母が 【豚】を 焼いて しょうが焼きを作る <E D I>  
 (7) a. あの人は 【ガラス】を 食べることができる <C O N>  
 b. ライオンが 【馬】を 食べる <A N I>

#### 4. / S P A / の下位素性

/ S P A / の下位素性には、<L O C> <I N T> <O R G> <N E T> <S P A> が含まれる。以下、この順で解説を行なう。

<L O C> は、具体的な場所あるいは移動の始点／終点としての場所に振られる素性である。<L O C> の素性が振られる名詞句をXとすれば、「Xニ A <C O N> ガ ある」という構文に現れる（以下、構文を表わすときには、問題となる素性が振られる名詞句をXで表わし、その他の名詞句をA、B、C等で表わす）。

- (1) a. 【空】に 星が ある <L O C>  
 b. 【校庭】に 鉄棒が ある <L O C>

- c. 【屋根】に えんとつが ある <LOC>
- d. 【机の上】に 本が ある <LOC>
- e. 【鼻の下】に ほくろが ある <LOC>

また、この名詞句Xは、「Aガ Xニ／へ 行く」「Aガ Xヲ 歩く」「Aガ Xニ／へ 戻る」「Aガ Xニ／へ B <CON> ヲ 運ぶ」の構文にも現れる。

- (2) a. 太郎が 教授の【部屋】へ 行く <LOC>
- b. 先生が 【廊下】を 歩く <LOC>
- c. 生徒が 【席】に 戻る <LOC>
- d. 彼が 【学校】へ 荷物ヲ 運ぶ <LOC>
- e. 彼が 【窓の下】に 荷物を 運ぶ <LOC>

ただし、以下にあげるように「A <HUM> ガ Xニ／へ B <CON> ヲ 運ぶ」の構文で、「Xニ／へ」のXの内部構造が「Cノトコロ（上／下／中／…）」のようになっている場合、このCには<LOC>を振らない。

- (3) a. 彼が 【学校】に／へ 荷物を 運ぶ <LOC>
- b. \*彼が 【学校のところ】に／へ 荷物を 運ぶ
- (4) a. \*彼が 【窓】に／へ 荷物を 運ぶ
- b. 彼が 【窓のところ】に／へ 荷物を 運ぶ <LOC>
- c. 彼が 【窓】のところ／へ 荷物を 運ぶ <CON>
- (5) a. \*ウエイトレスが 【私】に／へ 食事を 運ぶ
- b. ウエイトレスが 【私のところ】に／へ 食事を 運ぶ <LOC>
- c. ウエイトレスが 【私】のところ／へ 食事を 運ぶ <HUM>

<INT> は、「Xニ入る」および「Xカラ出す」の構文に現れる名詞句Xが、「Xノ中ニ入る」「Xノ中カラ出す」にも同様に現れるとき、Xに振られる素性である。

- (6) a. 【部屋】に 入る <INT>
- b. 【部屋】の中に 入る <CON>
- (7) a. 【電車】で 寝る <INT>
- b. 【電車】の中で 寝る <CON>
- (8) a. 【箱】から 出す <INT>
- b. 【箱】の中から 出す <CON>

(8)「箱」のように<LOC>の記載を略した名詞句にも<INT>は振られる。「入る」「出す」と共起する名詞句には、四方あるいは三方が囲まれる対象であることを前提とするので、<INT>は移動を表わす動詞と共起可能な<CON>との類似性が高い。

また、「学校」「大学」「会社」「デパート」などのような名詞句は、結びつく述語によって組織としての側面に焦点化が行なわれる場合も、それが場所に行なわれる場合もある。このような場合には(9)(11)にあげたように<ORG>と<LOC>とをそれぞれに振る。

- (9) a. その【学校】は 校則を 廃止した <ORG>
- b. その【大学】に 彼が 入学した <ORG>
- c. その【会社】は 新製品を 発表した <ORG>
- d. その【デパート】は 不況で 苦しんでいる <ORG>
- (10) a. どこが 校則を 廃止したのか？
- b. どこに 彼が 入学したのか？
- c. どこが 新製品を 発表したのか？
- d. どこが 不況で 苦しんでいるのか？

- (11) a. その【学校】で フリーマーケットが 行なわれる <LOC>  
 b. その【大学】へ 荷物を 運ぶ <LOC>  
 c. 郵便屋さんが その【会社】に 手紙を 配達する <LOC>  
 d. 【デパート】に 寄って 帰る <LOC>

(10)に示したように、組織を表わす名詞句が「どこ」という不定語を用いて質問されることから、<ORG>は/S P A/の下位に位置づけられている。この点に関連して、(11)にあげたように、共起する述語から同じ名詞句には素性<LOC>が一方で振られる。しかし、(12)のように<LOC>の振られない同じ名詞句に、<ORG>の振られる場合がある。

- (12) a. 少年野球大会では、その【チーム】が 優勝した <ORG>  
 b. 【ボランティアグループ】が 被災地で 活動する <ORG>

したがって、<ORG>は、(9a)のように意志決定権を持つこと、(9b)のようにメンバーシップ性から成り立つこと、メンバーの活動や状態がその組織全体の、(9a)(12a)(12b)のような活動あるいは(9d)のように状態として捉えられることなどを、条件として満足するものである(「マスコミ」「有志」などはこの条件を満足しないので、<ORG>ではなく後で述べる<GAT>を与える)。

次にあげる<NET>は、(13)に示す交通網や公共エネルギーのようなネットワークとしての側面を持つ名詞句に振られる素性である。

- (13) a. その町に 【電車】が 通る <NET>  
 b. 【飛行機】が その国に 乗り入れる <NET>  
 c. その町に 【電気】が 通る <NET>  
 d. 【ガス】が 断絶する <NET>

さらに、(14)のようにメンバーシップが問題になる場合にも、同じく<NET>という素性を振る。しかし、<NET>はメンバーシップが問題になる場合でも<ORG>とは異なり、そのメンバーには何の役割も振られず活動母体とは認められない。

- (14) a. 【第二電電】に 加入する <NET>  
 b. 【保険】に 入る <NET>

なお、上に見たような<LOC> <INT> <ORG> <NET>の持つ特徴が見られないものには、以下に例をあげるように述語の性格が類似していれば素性<SPA>を与える。

- (15) a. その【小説】には 三人の女性が 登場する <SPA>  
 b. 彼の写真が 【新聞】に 載った。 <SPA>  
 c. その事実を 【胸】に 秘める <SPA>  
 d. 参考文献を 【下】に 挙げる <SPA>  
 (16) a. この小説の【舞台】は 京都である。 <SPA>  
 b. 自分の【城】に 閉じこもる <SPA>  
 c. 英語研究の【原点】に 立ち返る <SPA>

この素性には思考/想像上の空間(mental space)や論理的な空間(logical space)を表わすものから、(16)のように比喩的に場所を表わすものまでが含まれる。

## 5. / P R C / の下位素性

領域 / P R C / の下には、素性 < A C T > < E V E > < A P O > < R E S > < P H E > < N A T > < P L A > < G A S > < E L M > < P O T > < P R C > が含まれる。

大雑把に言えば、< P H E > < N A T > < P L A > < G A S > < E L M > < P O T > は自然現象 / 生理現象を表わす素性であり、< A C T > < E V E > < A P O > < P R O > < R E S > はヒトの行為 / 出来事やその結果もたらされる生産物や状態を表わす素性であり、それ以外の事象については < P R C > を振る。

まず、< P H E > < N A T > < P L A > < G A S > < E L M > < P O T > について説明する。< P H E > は、ある現象の出現 / 消滅および作用、またその現象の程度を表わす述語と共起する名詞句に与えられる素性である。例えば、次にあげる(1)の「雨」「霧」「涙」にはこの素性が振られる。

- (1) a. 【雨】が 降る < P H E >
- b. 【霧】が 晴れる < P H E >
- c. 【涙】が 出る < P H E >
- d. 【火】で 紙を 燃やす < P H E >
- (2) a. 【雨】が 激しい < P H E >
- b. 【光】が まぶしい < P H E >

< P H E > が出現 / 消滅を表わす述語と結びつく場合に与えられるのに対し、< N A T > は自然現象の移動 / 存在を表わす述語と結びつく場合に与えられる。

- (3) a. 【台風】が 日本に 接近している < N A T >
- b. 【月】が 東から 昇る < N A T >

また、< P L A > に含まれる名詞句の指示対象は植物がその大半をしめるが、この素性が / P R C / の下位に位置づけられるのは、次にあげる例のように出現 / 消滅を表わす点で述語の性格が類似すると考えられるからである。

- (4) a. 【花】が 咲く < P L A >
- b. 【枝】が 伸びる < P L A >
- c. 【草】が 枯れる < P L A >

また、気体 < G A S > は、以下のような述語に名詞句が従属する可能性がある場合に、与えられる素性である（形容詞辞書では < G A S > は / C O N / に属していたが、肉眼では見えず定形性を欠いた実体であるため、共起する述語の範囲は / C O N / とは異なる。この点を重視して、名詞辞書では / P R C / の下に位置づける）。

- (5) a. 【気体】が 蒸発する < G A S >
- b. 【ガス】が 充満する < G A S >
- c. 【息】を 吹きかける < G A S >

< E L M > は、五感では捉えられない性質が問題になる場合に与えられる素性である。ここには専門分野で使われる術語も含まれる。この素性を / C O N / の下位素性とはせず、/ P R C / の下位としたのは、そのためである。ただし、< E L M > が共起する術語の中には、先にあげた < G A S > とは違い、< C O N > と共起する述語に類似するものが多い（五感で捉えられないものは、このように隠喩として表現する他はない）。

- (6) a. この食品は 【蛋白質】を 含む < E L M >
- b. 血液中の【鉄】が 不足している < E L M >
- c. 歯の【神経】を 殺す < E L M >

次にあげる〈POT〉は身体部位に対し、その機能について述べる場合に与えられる素性である。(このような名詞句は「強い」「弱い」と共起できるものが多い。しかし、形容詞「弱い」に対応する動詞が「弱まる」ではなく「弱る」となるという点で特徴的である。ただし、「強い」に対応するのは「強くなる」という複合用言である)。

- (7) a. 彼は 【足】が 強い <POT>  
 b. その選手は 【肩】が 弱い <POT>  
 c. 彼は 【胃】が 強い <POT>  
 d. 歳を取ると、【足】が 弱る <POT>  
 e. 暴飲暴食で 【腹】が弱っている <POT>  
 f. あの人には 【肺】が 悪い <POT>  
 g. 彼は 【胸】を 悪くした <POT>

その他、自然／生理現象と考えられるもののうち、上に述べた〈NAT〉〈PLA〉〈GAS〉〈ELM〉〈POT〉の特徴がないものには〈PHE〉を振る。

なお、〈PHE〉〈NAT〉〈PLA〉〈GAS〉〈POT〉が振られる名詞句が、具体物としての側面に焦点をあてる述語と結びつく場合には、〈LIQ〉や〈CON〉などの素性が見出し語レベルでは並立して記載されている。

- (8) a. 【雨】が たまる <LIQ>  
 b. 【涙】を 拭く <LIQ>  
 a. 【枝】を 折る <CON>  
 b. 【花】を 買う <CON>

〈ACT〉は自然／生理現象とは異なり、ヒトの意思的な好意に対して与えられる素性である。ただし、以下に例をあげるように、生理現象の中でも名詞句によっては、「我慢する」「こらえる」と共起することで、意志的な行為を表わすものがある。この種の名詞句には〈ACT〉を振る。

- (9) a. その会社が 新しい製品の【発表】を行なう <ACT>  
 b. 政府は 自衛隊に 緊急出動の【要請】を する <ACT>  
 c. 自衛隊は 緊急出動せよという【要請】を 受けた <ACT>  
 (10) a. 【くしゃみ】を する <ACT>  
 b. 【くしゃみ】を こらえる <ACT>

(9)は、指示対象を異にする二者間に伝達行為が成立することを表わす。このような場合、(9b)のように要請する側が主語になることも、(9c)のように要請される側が主語になることもあるが、どちらの場合にも〈ACT〉が振られる。

ところで、立案されたヒトの行為のうちでも、「A〈PIT〉ニ B〈LOC〉デ Xガ ある」の構文に現れるXには、(11)に例をあげるように素性〈EVE〉を与える。(この場合、名詞句Aの性格によって、格助詞ニの出現は条件づけられている)。同じ名詞句Xは、その指示対象の参加者に一時的なメンバーシップが生じる。このため、名詞句Xは「A〈HAM〉ハ Xニ 参加する」という構文にも現れるものでなければならない。先にあげた(9)の名詞句は、(12)に示すように前者の構文には現れても、後者の構文には現れない。「ある／ない」という用言は、〈ACT〉の振られる名詞句が従属する動詞とは性格が異なる。このような場合には後で述べる〈PRC〉を振る。

- (11) a. 6月に 赤坂で 【パーティ】が ある <EVE>  
 b. 私は その【パーティ】に 参加する <EVE>  
 c. 明日 赤坂で 【結婚式】が ある <EVE>  
 d. 彼は その【結婚式】に 参加する／出席する <EVE>  
 e. 明日は 【授業】が ない <EVE>

- f. 学生が 【授業】に 参加する／出席する <EVE>  
 (12)a. 4月に そのホールで 新しい製品の【発表】が ある <PRC>  
 b. \*新製品の【発表】に 参加する／出席する  
 c. 昨日 市民団体から ダム建設中止の【要請】が あった <PRC>  
 d. \*ダム建設中止の【要請に】に 参加する／出席する

(11)にあげた例は時制の面から見れば未来を表わすが、「来年の四月一日に東京で地震がある」のように「立案性」のない名詞句が現れる場合、一種の「予言」を表わすようになる。この場合「地震」には<PHE>が振られる。

ところで、次にあげる(13)は(11)に類似した性格を示す。この場合の素性<APO>は「A<PIT>カラ Xガ 始まる」「A<PIT>ニ Xガ 終わる」という構文に出現する名詞句Xに対して振られるものである。(11)に現れる名詞句はこの(13)の構文にも現れる可能性はある(この場合、やはり<EVE>が振られる)。しかし、逆に(13)に例としてあげた名詞句が(11)の構文に現れることはない。例えば「9時に大手町で銀行がある」とはいわない。このようなものを<APO>とする。

- (13)a. 9時から 【銀行】が 始まる <APO>  
 b. 【病院】が 6時に 終わる <APO>  
 c. 【動物園】が 10時に 開く <APO>  
 d. 【デパート】が 7時で 閉まる <APO>  
 e. 4月から 【大学】が ある <APO>

(13)に現れる名詞句は営業活動ないしはサービス業務を表わす。これらの名詞句が同一構文中で時点<PIT>の名詞句とは隣接しても、場所<LOC>の名詞句とは隣接しないのも、同じ見出し語の素性に<ORG> <LOC>が並立することと無関係ではないはずである。このことから、(13e)についても<APO>を与える。

同様の問題は、(14)のダイヤに則って行なわれる運行業務についても指摘することできる(これらの見出し語には一方で<NET>が並立する)。また、(15)の「約束」「計画」「おやつ」も同様にスケジュールに基づいた活動を表わしている。

- (14)a. この時間なら まだ 【電車】が ある <APO>  
 b. 深夜なので もう【新幹線】が ない <APO>  
 c. 【飛行機】に 乗り遅れる <APO>  
 (15)a. 午後 六本木で 【約束】が ある <APO>  
 b. 【計画】を 実行する <APO>  
 c. 【おやつ】を 抜く <APO>

<APO>は、このように、予定に従って行なわれる行動をあらわす名詞句に与えられる。(13)にあげたもの以外、この素性のために特定の構文を与えられていないのは、<APO>が<EVE>に類似した名詞句のうち、<EVE>の典型例としては扱えないものを一括してまとめた素性だからである。

これまであげてきた名詞句は、始まりと終わりによって限界づけられた一つの過程の、全体あるいはその一部を名づけることで共通する性格を持っていた。これに対して、以下にあげる二つの<PRO> <RES>は、その過程の結果に焦点を合わせる素性である。

<PRO>は、伝統的に「結果の目的語」と呼ばれてきたものに相当する。

- (16)a. 子供が 壁に 【絵】を 掛ける <CON>  
 b. トースターで 【パン】を 焼く <EDI>  
 (17)a. 子供が 壁に 【絵】を 書く <PRO>  
 b. パン屋さんが 粉を練って 【パン】を 焼く <PRO>

(16)の行為は、「絵」「パン」の指示対象が前もって存在しない限り、行なうことはで

きない。しかし、(17)において、同じ名詞句の指示対象はその行為の結果生じるものである [e.g. Lyons1968, 9.5]。名詞句によっては、(18)のように「A <HUM/ORG> ガ Xヲ 作る」という構文以外に特異な述語が用いられることがある。

- (18) a. その建設会社が 【ビル】を 建てる <PRO>  
 b. 母が 【ごはん】を 炊く <PRO>  
 c. 父が お【湯】を 沸かす <PRO>  
 d. 姉が 【スカート】を 縫う <PRO>  
 e. 姉が 糸で 【セーター】を 編む <PRO>  
 f. 弟が 【小説】を 書く <PRO>  
 g. 夏目漱石が 【「こころ」】を 書く <PRO>  
 h. 姉が 折り紙で 【鶴】を 折る <PRO>

このような述語と結びつく場合、ヲ格にくる名詞句には素性 <PRO> を与える。また、この種の用言に次のような格助詞の交替が見られることは、第三章（2. 素性を与えるための原則）に触れたとおりである。

- (19) a. 彼は その実験結果で 論文を 書く  
 b. 彼は その実験結果を 論文に 書く  
 (20) a. 妹は 折り紙で 鶴を 折った  
 b. 妹は 折り紙を 鶴に 折った

<PRO> は、(21)のような「A <HUM/ORG> ガ Bヲ Xニする」などの構文に現れるXにも振られる。

- (21) a. この布地を 【スカート】に する <PRO>  
 b. 研究成果を 【報告書】に まとめる <PRO>  
 c. 彼は その実験結果を 論文に 書く <PRO>  
 d. 妹が 折り紙を 【鶴】に 折る <PRO>

なお、(22)にあげるような自動詞と共起する場合は <PRO> としたが、<PRO> を与えたのは(22)のように人為的に作られるものだけであり、(23)のような自然／生理現象について <PRO> とはしない。

- (22) a. 【ビル】が 建つ <PRO>  
 b. お【湯】が 沸く <PRO>  
 c. 【スカート】が できる <PRO>  
 (23) a. 【氷】が 張る <PHE>  
 b. 【こぶ】が できる <PHE>  
 c. 【こぶ】を つくる <PHE>

また、もともと存在するものに手を加えることを表わす、以下のような述語と共起する場合についても <PRO> を与えることはない。

- (24) a. 【ビル】を 改築する <CON>  
 b. 【家】を 増築する <CON>  
 c. 【畳】を 張り替える <CON>

<PRO> は述語の表わす生産行為の結果、それに直接従属する名詞句の指示対象が生じる場合に与えられる素性であるが、これ以外にある行為や出来事の結果に対して与えられる評価には <RES> を振る。

- (25) a. 大相撲夏場所の【優勝】が 決定する <RES>
- b. 交差点で 【事故】が 起きる <RES>
- (26) a. 1000メートル走で 【記録】を 出す <RES>
- b. 会議で 【収穫】を 得る <RES>

(25a)の相撲のトーナメントや(25b)の運転、あるいは(26a)の「1000メートル走」や(26b)の「会議」などの出来事／行為は、始まりと終わりによって限界づけられた、一つ（トーナメントの場合は、一連）のプロセスとして捉えられるが、それぞれの例に現れる「優勝」「事故」および「記録」「収穫」は、個々のプロセスの結果部分に着目して下された評価をもとに名づけられたものである（ただし、トーナメントの最後に誰かが「優勝」することは明らかでも、すべての運転が「事故」に終わったり、レースで「記録」を出したり、会議で「収穫」が得られるとは限らないので、この点でさらに区別が可能かもしれない）。

なお、先に<PRC>の下位の素性が、自然／生理現象などの過程を表わす素性と、ヒトの行為あるいは出来事、およびその結果生じるモノや状態、さらにその評価を表わす素性とに分かれることを述べた。<PRO> <RES>は後者の仲間であるが、(27)のように<RES>には自然現象にも該当する場合がある。

- (27) a. 【災害】が 起きる <RES>
- b. 【被害】から 免れる <RES>

以上述べた<PHE> <NAT> <PLA> <GAS> <ELM> <POT> <ACT> <EVE> <APO> <PRO> <RES>以外の例には、(28)(29)のような例が含まれる。これらには一括して<PRC>が振られる。

- (28) a. 政治の【改革】が 進む <PRC>
- b. 車輪の【回転】が 止まる <PRC>
- c. 内需の【拡大】を 図る <PRC>
- d. 地下の【降下】を 阻止する <PRC>
- (29) a. 新製品の【発表】が ある <PRC>
- b. 自衛隊出動の【要請】が なかった <PRC>
- (30) a. 【手】を 休める <PRC>
- b. 【足】を 止める <PRC>

さらに、(30)のように慣用句と考えられる場合、それが「～すること」と解釈できるものに限って、便宜的に<PRC>を与える。

以上、(α)から(δ)まで四つの領域ごとに、そこに含まれる意味素性について解説してきた。五つ目の領域(ε)については、含まれる素性の数が多いので、ページを改めて解説する。

## 6. /ABS/の下位素性

領域/ABS/には <PRI> <MEA> <SOC> <GRA> <ATT> <REC> <PER> <MIN> <MAN> <FOR> <EVA> <CUR> <DUR> <DIS> <ITM> <RAT> <QUA> <VAL> <STA> <NOR> <FLD> <INF> <ROL> <REL> <DIR> <PHA> <REF> <INC> <QAL> <PRP> <STG> <APP> <UNT> <PIT> <TIM> <ORD> <NAM> <ENT> <GAT> <KND> <ABS> 以上、四一の素性がある。

これらを、(a)二重主格構文の回帰を制止する名詞句の素性、(b)二重主格構文の述語の位置に現れる名詞句の素性、(c)「相対名詞」の素性、(d)その他の抽象名詞の素性、以上の四つに分類して解説する。

### 6.1 二重主格構文の回帰を制止する名詞句の素性

/ABS/の下位素性の細分化や名詞句の素性の決定には、二重主格構文を用いることについては、第三章(2.素性を与えるための原則)で述べた。ここでいう「二重主格構文」とは、以下のような形を持つ構文を一括して呼ぶものである。

NPガ/ノ NPガ NPダ/形容詞/動詞

ここでは、二重主格構文に現れる三つのNPのうち、末尾に現れる「NPダ/形容詞/動詞」の部分に「述語」と呼ぶ。残りの二つのNPのうち、述語に近い方の「NPガ」の位置に現れるNPを「内項」と呼び、述語から離れた「NPガ/ノ」の位置に現れるNPを「外項」と呼ぶ。/ABS/が振られる名詞句は、(1)に示すように「内項」の位置に多く現れる(「状態動詞」と「第四種動詞」をまとめて「状態製の動詞」と呼べば、述語の位置には形容詞と助動詞以外に、(1c)に示すようにこの種の動詞も現れる)。

- (1) a. その服は 【色】が あざやかだ
- b. その服は 【値段】が 高い
- c. その服は 【形】が 変わっている
- d. イルカは 【知能】が 高い
- e. その道路は 【幅】が 広い
- f. 彼は 【性格】は 温和だ
- g. その選手は 【動き】が 良い

ただし、二重主格構文に出現する場合でも、(2a)(2b)や(2c)のような場合は/ABS/の素性とは別の素性が振られる。

- (2) a. その服は 【袖】が 青い
- b. その道路は 【歩道】が 広い
- c. その都市は 【道路】が 広い
- d. その学校は 【校則】が 厳しい

それぞれの名詞句の間には、「服には袖がある」「道路には歩道がある」「都市には道路がある」「学校には校則がある」などの知識表現に使われることから分かるように、広い意味での所有関係が見られる。このうち、(2a)は全体/部分の関係にあると考えられる。一つ傍証をあげれば、「袖」に触れることは、同時に「その服」に触れることを意味する。しかし、(2b)では「歩道」に触れることは「その道路」に触れることを意味するだろうか。同様に、(2c)では「道路」に触れることは「その都市」に触れることを意味するといっただろうか。いずれにしても、この問題は決め手を欠いて判然としない。しかし、(2d)の「校則」に手で触れることは不可能であり、上の判然としない場合とは区別しなければならない。ここで扱う/ABS/の素性は、この(2d)のタイプに属するものである。

ここで最初に取りあげる名詞句は、冒頭の(1)にあげたものである。これらは/ABS/

の素性が振られる名詞句のうち、二重主格構文において特異な振る舞いを示す。例えば、(3a)のような二重主格構文があるとすれば、そこからさらに(3b)のような二重主格構文が導かれる。

- (3) a. その服は 袖が 青い  
b. その服の袖は 色が 青い  
c. その服の袖の色は 青い

しかし、このようなことが、どこまでも回帰的に行なわれるわけではない。(1)にあげた「色」のような名詞句が、ひとたび(3b)のように内項の位置に現れれば、そこで二重主格構文の回帰には制しがかけられてしまうからである。つまり、(3c)からさらに同種の構文を導くことはできなくなる。[青山 1990, pp. 115-116]。

このような性格を持った見出し語 X が「A ノ／ガ X ガ B ダ／形容詞／動詞」という構文に現れる場合、X には <PRI> <MEA> <SOC> <GRA> <ATT> <REC> <PER> <MIN> <MAN> <FOR> <EVA> 以上の十一の素性が振られる可能性があるが、これらの素性は、見出し語 X が内項として従属する述語の性格から、以下のように三分できる。

- <A> 数量を表示する名詞句がその一部として現れる述語。および、その名詞句から無理のない推論の範囲内にある、程度や評価を表わす状態述語。あるいは、それらの名詞句や状態述語が見出し語 X を連体あるいは連用修飾することが可能な場合、その X が従属する非状態述語。  
<B> 程度を表わす状態述語。および、その名詞句から無理のない推論の範囲内にある、評価を表わす状態述語。あるいは、それらの名詞句や状態述語が見出し語 X を連体あるいは連用修飾することが可能な場合、その X が従属する非状態述語。  
<C> 評価を表わす状態述語。あるいは、それらの名詞句や状態述語が見出し語 X を連体あるいは連用修飾することが可能な場合、その X が従属する非状態述語。

以下では、この順に節を改めて説明を加える。

### 6.1.1 <A> 数量を表示する名詞句が述語として現れる場合などに振られる素性

数量を表示する名詞句が述語として現れる場合、それに内項として従属する名詞句には、素性 <PRI> <MEA> が振られる。このうち <PRI> は、お金を表わす名詞句に振られ、「A ノ／ガ X ガ B ダ」の B の位置に、「～円」「～ドル」などの金額を表わす名詞句が述語として現れる場合、その X に与えられる素性である。また、(4d)(4e)に例をあげるように、金額を表わす名詞句から無理のない推論の範囲内にある、程度や評価を表わす状態述語に従属する場合にも、同じ素性が振られる。例えば「彼の収入は二十万円だ」に対して推論を及ぼし、「彼の収入は多い」「彼の収入は少ない」いずれの評価を与える場合にも、見出し語「収入」には同じ素性 <PRI> が振られる。

- (4) a. 彼の【収入】は 二十万円だ <PRI>  
b. その会社の【ボーナス】は 五十万円だ <PRI>  
c. この本の【価格】は 三千元だ <PRI>  
d. その預金の【利息】は 高い <PRI>  
e. 団体旅行の【代金】は 安い <PRI>

しかし、その金額が B であるという場合でも、<PRI> の典型的に従属する述語とはその名詞句 X が別種のものである場合は、(5)に示すように別の素性が振られる。

- (5) a. この小説の【著作権】は 二千万円だ <NOR>  
b. この店にある商品の【全部】が 100円だ <REF>

<P R I> の名詞句は(6)のような動詞にも従属する。この場合、(4)に述語の一部として現れる名詞句は、「五十万円のボーナスが出る」のように連体修飾としても、「ボーナスが五十万円出る」のように連用修飾としても現れる [青山 1990, pp. 83-92; 橋本/青山 1992]。

- (6) a. 特別に 【ボーナス】 が 出る <P R I>  
 b. 【給料】 を もらう <P R I>  
 c. 【寄付】 を 集める <P R I>  
 d. 大家さんに 【家賃】 を 払う <P R I>

<M E A> は、<P R I> と同じ構文の述語の位置に「～キロメートル、～グラム、～度、～リットル、～時間」などの金額以外の数値が現れる場合、その X に振られる素性である。

- (7) a. その 2 地点の 【距離】 は 10 キロメートルだ <M E A>  
 b. 彼の 【体重】 は 50 キログラムだ <M E A>  
 c. 彼の 【握力】 は 20 キログラムだ <M E A>  
 (8) a.そこは 【面積】 が 広い <M E A>  
 b. 彼は 【握力】 が 強い <M E A>

なお、形容詞辞書では「強い」に従属するものは数量表現が述語に現れる場合でも <G R A> が振られていたが、名詞辞書では数量を表わす名詞句にはすべて <M E A> が振られる(このことはつまり、この素性の目安として数量表現が新しく選ばれ、それまでの目安より上位に位置づけられたことを意味する)。

<M E A> は、同じ名詞句が(9)のような計測にかかわる動詞に従属する場合にも与えられる。また、(9e)(9f)のように連体修飾部の位置に数値や程度が現れるような場合にも <M E A> を振る。この場合には、計測にかかわる動詞に従属しないが、数値や程度を表わす連体修飾部が必須要素であることに注目して同じ素性を振ることにした。「その重りは重量がある」は、以下の(11)に例示するように別の意味を持つ。(ところで、動詞辞書では、(9e)の場合には動詞「ある」に従属する名詞句「30グラムの重量」全体に素性が降られる。この場合には、名指示書のように <M E A> 出はなく、動詞辞書では <Q U A> が振られる。(9g)の場合には動詞「超える」に従属する名詞句「規定の重量」に素性を与えるので、動詞辞書なら <S T A> が振られるはずである。名詞辞書において、名詞の見出し語に与えられる素性とはこの点で違いがある。

- (9) a. 2 地点の 【距離】 を 測る <M E A>  
 b. そのビルの 【高さ】 を 計る <M E A>  
 c. 【距離】 が 伸びる <M E A>  
 d. 【体重】 が 増える <M E A>  
 e. その重りは 30グラムの 【重量】 が ある <M E A>  
 f. この公園には 十分な 【広さ】 が ない <M E A>  
 g. 規定の 【重量】 を超える <M E A>  
 h. 平均の 【身長】 を下回る <M E A>

ただし、(10)にあげる例のように、その文の返答またはその文で表わされる行為の結果が、情報として捉えられるような場合は <I N F> を振る(この素性については 6.4 で述べる)。

- (10) a. 彼に 【身長】 を 尋ねる <I N F>  
 b. 荷物の 【重量】 を 記入する <I N F>

ところで、この <M E A> の振られる名詞句の中には、「Aガ Xガ ある」という構

文で、値が標準を上まわることを表わすものがある [Biwewisch1967]。

- (11) a. その重りは 【重量】が ある <QAL>  
b. その納屋は 【面積】が ある <QAL>

上の(11)では「大きい重量、大きい面積」を表わすのに対して、下の(12)では中立の尺度として「重量、面積」が用いられている。このような場合には、別々の素性を与えるだけでなく、それぞれの用法を別の区分のもとに収めた。(11)には <QAL> が、(12)には <MEA> が、それぞれあたえられる (<QAL> については後の 6.4 で詳しく述べる)。

- (12) a. その重りの【重量】を 測る <MEA>  
b. その納戸は 【面積】が 狭い <MEA>

また、(13a)と(13b)とは、接続詞「したがって」で繋ぐことができる。また(13b)と(13c)も同じ接続詞で繋ぐことが可能である。つまり、これらは無理のない推論の範囲内にあるといえる。後節で述べるように、「Aノ／ガ Xガ 高い／低い」はXに <GRA> を与えるための構文であり、「Aノ／ガ Xガ 良い／悪い」はXに <FOR> を与えるための構文である。ただし、(13)のように、同じ名詞句Xに対して、数量を表示する名詞句が述語として現れる文から、無理のない推論によって導かれる場合には、<MEA> が与えられる。

- (13) a. その仮名漢字変換システムは【精度】が 99%だ <MEA>  
b. その仮名漢字変換システムは【精度】が 高い <MEA>  
c. その仮名漢字変換システムは【精度】が 良い <MEA>

ただし、(14a)と(14b)の場合のように、前者の主語を外項としてその内項に別の名詞句が現れて二重主格構文になる可能性があれば、<MEA> を与えることはない(6.1の説明を参照)。

- (14) a. 時報の【音】は 880hzだ <PHE>  
b. 時報の【音】は 周波数が 880hzだ <PHE>

### 6.1.2 <B> 程度を表わす述語と共起するもの

ここで取りあげる名詞句は、数量を表わす名詞句をその述語として取ることはない。しかし、その代わりに「高い、大きい、広い、強い、多い、長い、重い、深い、濃い、速い、はなはだしい」のような程度を表わす述語に、その内項としてこれらの名詞句を従属させることはできる。このような名詞句には、<SOC> <GRA> <ATT> の三つが素性として振られる可能性がある。

<SOC> は、二者関係を表わす概念に振られる。「Aノ／ガ Xガ 強い／弱い、多い／少ない、大きい／小さい、深い／浅い、濃い／薄い」という構文に現われ、さらにAの名詞句が複数の指示対象を持ち、その指示対象間の関係について「Aニ Xガ ある／ない」といえる場合、Xにはこの素性が与えられる。この名詞句Xは、二者関係の認定や成立や消滅に関する述語にも従属する。

- (15) a. 3年前の事件と今回の事件には 【関係】が ある <SOC>  
b. 二つの品物には 【差】が ない <SOC>  
c. 両者の言い分には 【食い違い】が 多い <SOC>  
d. 男女間の【格差】が 大きい <SOC>  
e. 新たに その会社と 【関係】を 結ぶ <SOC>

上に述べた <SOC> 以外で、「Aノ／ガ Xガ 高い／低い、広い／狭い、重い／軽

い、強い／弱い、多い／少ない、大きい／小さい、深い／浅い、濃い／薄い」の構文に現れるXには〈GRA〉の素性を与える。Xは数値で計ることはできないが、その程度について言及可能な名詞句である。

- (16) a. 彼らは 【生活水準】が 高い <GRA>  
 b. このプロジェクトは 【規模】が 大きい <GRA>  
 c. 彼は 【趣味】が 広い <GRA>  
 d. この薬品は 【毒】が 強い <GRA>  
 e. 彼は その仕事の【経験】が 浅い <GRA>  
 f. 母親から長男への【期待】が 大きい <GRA>  
 g. 彼は 政治への【関心】が 深い <GRA>  
 h. 背景の【色】が 濃い <GRA>  
 i. 煮物の【味】が 薄い <GRA>

しかし、「多い／少ない」と共起する名詞句でも、それが「個数、枚数、本数、回数、件数」など特定の数を表わす場合は、〈GRA〉を振ることはない。〈GRA〉は(17)のような漠然とした不定量を表わす場合にだけ振られる。

- (17) a. 今回の旅行は【収穫】が 多かった <GRA>  
 b. 君も 【苦勞】が 多いね <GRA>

また、(18)のように、程度を表す動詞に従属する場合にも〈GRA〉を与える。さらに(18h)(18i)のように、連体修飾語の位置に程度を表わす名詞句が現れる場合にも同じ素性を与える。この場合、程度を表わす動詞には従属しないが、連体修飾語が必須要素であることが特徴的である。(18h)は動詞辞書では、動詞「なる」に従属する名詞句「過去最低の規模」全体に素性を与えるので、〈GRA〉ではなく〈STA〉が振られる。

- (18) a. 経済への【影響】が 強まる <GRA>  
 b. ピアノの【音】を 強くする <GRA>  
 c. 土地の【価値】が 落ちる <GRA>  
 d. 経営の【規模】を 拡大する <GRA>  
 e. サービスの【質】が 向上する <GRA>  
 f. 小説の【奥行き】を増す <GRA>  
 g. 秋の【色】が 深まる <GRA>  
 h. 過去最低の【規模】に なる <GRA>  
 i. 一億円の【値打ち】が ある <GRA>

ところで、次にあげる(19a)は(19b)と、(20a)は(20b)と、それぞれ「したがって」という接続詞で繋ぐことができる。

- (19) a. 【身分】が 高い <GRA>  
 b. 【身分】が 良い <GRA>  
 (20) a. 【評価】が 低い <GRA>  
 b. 【評価】が 悪い <GRA>

「Aノ／ガ Xガ 良い／悪い」はXに〈FOR〉を与える構文であるが、こうした程度の高低が、「良い／悪い」という評価へ、無理のない推論によって導かれる場合には、わざわざ別の素性を振って両者を区別することはしなかった。

しかし、次にあげる(21)(22)のように、程度を表わす述語に従属する場合と、評価を表わす述語に従属する場合とが同義関係にない場合には、素性を区別する。前に(16h)(16i)としてあげたものを、(21a)(21b)として繰り返す。

- (21) a. 背景の【色】が 濃い <GRA>  
 b. 煮物の【味】が 薄い <GRA>

- (22) a. 背景の【色】が 良い <FOR>  
 b. 煮物の【味】が 悪い <FOR>

上にあげた <SOC> <GRA> 以外のもので、「Aノ／ガ Xガ Bダ／形容詞／動詞」の構文に現われ、次のような程度を表わす述語に従属する名詞句には <ATT> が振られる。

- (23) a. 【非常識】も はなはだしい <ATT>  
 b. このみそ汁は 【塩】が 辛い <ATT>  
 c. 彼は 【語気】を 荒くした <ATT>  
 d. 青森から東京までの【道】は 長い <ATT>  
 e. 屋根の【傾斜】が 鋭い <ATT>  
 f. 企業間の【競争】が 激しい <ATT>  
 g. 技術の【進歩】が 著しい <ATT>  
 h. 祖母の【物忘れ】が ひどい <ATT>

### 6.1.3 <C> 評価を表わす述語と共起するもの

評価を表わす述語「良い／悪い、美しい／汚い、上手い／下手だ、明るい／暗い、鋭い」と共起する名詞句には、素性 <REC> <PER> <MIN> <MAN> <FOR> <EVA> が振られる。これらの素性が振られる名詞句は、すべて「Aノ／ガ Xガ Bダ／形容詞／動詞」のXの位置に現われる。

<REC> は、二者関係を表わす名詞句に振られ、構文中のAが複数の指示対象を持つ名詞句の場合、その対象間の関係に対して評価を下すものに与えられる。先に述べた <SOC> の名詞句は「ある／ない」という述語に従属するが、<REC> の名詞句は「ある／ない」には従属しないという点で、大きな違いがある。また、この名詞句は、(25)のように、二者関係の成立／消滅に関する動詞にも従属する。

- (24) a. 太郎と花子は 【仲】が 良い <REC>  
 b. 二人は 【相性】が 悪い <REC>  
 (25) a. 両者の 【間】を 取り持つ <REC>  
 b. 二人の 【間】を 裂く <REC>

<PER> は、(26)にあげる「性格」や「性質」を表わす名詞句に与えられる素性である。この種の名詞句が(27)のような動詞に従属する場合にも、同じ素性を振る。

- (26) a. 彼は 【意地】が 悪い <PER>  
 b. 彼女は 【根】が 明るい <PER>  
 c. 彼は 【性格】が 良い <PER>  
 d. 彼女は 【人】が 良い <PER>  
 (27) a. 外見で 【人】を 判断する <PER>  
 b. 彼は 【人間】が できている <PER>

<MIN> は、(28)のように、動物の感性や知能を表わす名詞句Xに振られる。同じ名詞句が動詞に従属する場合には(29)のような例がある。

- (28) a. あの人には 【勘】が 良い <MIN>  
 b. 彼女は 【直観】が 鋭い <MIN>

- c. あの人は 【頭】 が 鈍い <M I N>
- d. あの人は 【神経】 が 鋭敏だ <M I N>
- e. 彼は 【感性】 が 豊かだ <M I N>
- (29) a. 【勘】 が 働く <M I N>
- b. 【直観】 を 働かせる <M I N>
- c. 【神経】 を 使う <M I N>

<MAN> は、(30)に例をあげるように、ヒトなどの能力や傾向を表わす名詞句 X に与えられる素性である。同じ名詞句が従属する動詞の例を(31)にあげる。

- (30) a. その選手は 【動き】 が 良い <MAN>
- b. 彼は 【料理】 が 上手い <MAN>
- c. 彼は 【発表】 が 下手だ <MAN>
- d. 彼女は 【詰め】 が 甘い <MAN>
- e. 彼は 【人使い】 が 荒い <MAN>
- (31) a. 彼は 車の【運転】 が できる <MAN>
- b. 【色使い】 を 工夫する <MAN>

しかし、「方法」「やり方」という名詞句が(32)のような述語に従属する場合、そこで叙述されるのは評価ではない。この場合は従属する述語の典型性を考慮して、<MAN>ではなく<NOR>を与える。

- (32) a. その【方法】に 従う <NOR>
- b. 金儲けの【方法】を 教える <NOR>
- c. プリントアウトする【方法】が わかる <NOR>
- d. その【やり方】を 取り入れる <NOR>
- e. 自分の【やり方】で 行なう <NOR>

ところで、「料理」「発表」などには、<ACT> が振られる場合もある。(33)では料理という一回性の作業そのものに焦点があてられるのに対して、(34)では料理に関する能力が評価の対象とされている[青山/小島/橋本 1990, p. 50]。両者に与えられる素性の差は、この違いに着目した結果の反映である。

- (33) 彼女は 【料理】 を する/始める/終える <ACT>
- (34) 彼女は 【料理】 が 上手い/下手だ <MAN>

<FOR> は、上にあげた <REC> <PER> <MIN> <MAN> 以外の名詞句で、構文「Aノ/ガ Xガ 良い/悪い」に現れる X に振られる。

- (35) a. そのケーキの【形】は 良い <FOR>
- b. その服の【色】が 悪い <FOR>
- c. あの店のラーメンは 【味】が 悪い <FOR>
- d. この香水は 【香り】が 良い <FOR>
- e. この包丁は 【切れ味】が 良い <FOR>
- f. 今日の彼は 【機嫌】が 良い <FOR>
- g. エンジンの 【具合】が おかしい <FOR>
- h. 彼の 【立場】は 危うい <FOR>
- a. あの女優は 【表情】が 良い <FOR>
- b. 彼は 【目つき】が きつい <FOR>
- c. あの人は 【雰囲気】が 明るい <FOR>

なお、この <FOR>の中には、「Aノ/ガ Xガ Bダ/形容詞」の B の部分に、評価

以外に属性が現れるものがある。このBに現れる名詞句には〈VAL〉あるいは〈STA〉という素性を与える(6.1参照)。

- (36) a. そのケーキの形は 【四角】だ／丸い／良い <VAL>  
 b. その服の色は 【赤】だ／赤い／良い <VAL>  
 (37) a. あの店のラーメンは 味が 【辛め】だ／辛い／良い <STA>  
 b. この香水の香りは 【甘め】だ／甘い／良い <STA>  
 (38) a. この包丁は 切れ味が 良い／\*スパツとしている  
 b. 今日の彼は 機嫌が 悪い／\*ぐずぐずしている

「切れ味」「機嫌」のように、「良い／悪い」という評価を表わす述語しか現れない名詞句と、「形」「色」「味」「香り」のように、「四角だ／丸い／赤だ／赤い」などの具体的な属性が現れる名詞句に対し、今回は別々の素性を立てることはしなかったが、この違いを重視すれば今後〈FOR〉の細分化が必要になるかもしれない。

〈FOR〉は次のような評価に関する動詞に従属する名詞句にも振られる。また(39g-j)のように、連体修飾部の位置に評価や属性を表わす名詞句が現れる場合にも同じ素性を振る。この場合には評価を表わす動詞には従属しないが、評価や属性を表わす連体修飾部が必須要素であることが特徴である(動詞辞書では、(39g)の動詞「染まる」に従属する名詞句「血の色」に素性を与えるので、〈FOR〉ではなく〈VAL〉が振られる。すでに述べたように、〈MEA〉〈GRA〉〈FOR〉には同様の現象が起こる。これは、これらの素性を振られる名詞句がいわゆる「側面語」であることによる)。

- (39) a. 味の【含み】を 良くする <FOR>  
 b. 【印刷】が ぼやける <FOR>  
 c. 祖父の【体調】が 回復する <FOR>  
 d. 先方の【都合】が 悪くなる <FOR>  
 e. 【味】を 整える <FOR>  
 f. 爪の【形】を 揃える <FOR>  
 g. 血の【色】に 染まる <FOR>  
 h. 明るい【顔】を する <FOR>  
 i. すべすべした【手触り】を 持つ <FOR>  
 j. 規定通りの【形状】に 仕上がる <FOR>

なお、〈FOR〉が振られる名詞句の打ち、「Aニ Xガ ある」という構文に現れて知識表現として使われる場合は、これらの名詞句に〈FOR〉は振らず(40)(41)に示すように別の素性を与える。

- (40) 具体物には 【形】が ある <ABS>  
 (41) a. この気体には 【色】が ある <PHE>  
 b. この液体には 【味】が ある <PHE>  
 c. この消しゴムには 【匂い】が ある <PHE>

以上述べた〈REC〉〈PER〉〈MIN〉〈MAN〉〈FOR〉以外で、「Aノ／ガ Xガ Bダ／形容詞／動詞」の構文に現われ、評価を表わす述語に従属する名詞句Xには〈EVA〉を与える。この構文の述語には、(42d)(42e)のように状態性の動詞が現れる。

- (42) a. わが家の 【台所】は 苦しい <EVA>  
 b. この市の【財政】が 厳しい <EVA>  
 c. 経済の【不均衡】が ひどい <EVA>  
 d. この辺は 【土地】が やせている <EVA>  
 e. あの人は 【舌】が 肥えている <EVA>

## 6.2 二重主格構文の述語の位置に現れる名詞句の素性

以上、「NPガ NPガ NPダ／形容詞／動詞」という二重主格構文の「内項」に現れる名詞句に与える素性について解説した。この節で解説を加えるのは、同じ構文の述語の位置に現れる名詞句、つまり「Aノ／ガ Bガ Xダ」の構文で、上に述べた数量の場合とは別種のXに対して与えられる素性である。この種の素性には、〈CUR〉〈DUR〉〈DIS〉〈ITM〉〈RAT〉〈QUA〉〈VAL〉〈STA〉がある。

〈CUR〉は「100円、3億円、10ドル」のように金額を表わす名詞句に振られる。この名詞句Xは、「A〈CON〉ガ Xする」「～するのニ Xかかる」という構文に現れる。また、「Aノ／ガBガ Xダ」の構文では、Bに〈PRI〉「金額、価格」などの名詞句が現れる。

- (43) a. この洋服は 【8千円】 する 〈CUR〉  
 b. 大分へ行くのに 【3万円】 かかる 〈CUR〉  
 c. その服を 【8千円】 で 買った 〈CUR〉  
 e. 銀行に 【100万円】 預ける 〈CUR〉  
 e. この洋服の価格は 【8千円】 だ 〈CUR〉  
 f. このアパートの家賃は 【10万円】 だ 〈CUR〉  
 g. 今月のわが家の電話代は 【5千円】 だった 〈CUR〉

〈DUR〉は、「3時間、5か月、21歳」のように時間に関係する名詞句である場合に与えられる。「～するマデ Xある」「～してカラ Xニなる」「来年 Xニなる」という構文に現れる。「Aノ／ガBガ Xダ」の構文では、Bに〈MEA〉「時間、期間、年齢」のような名詞句が現れる。

- (44) a. プロジェクト終了まで 【3年】 ある 〈DUR〉  
 b. お習字を習い始めてから 【2年】 に なる 〈DUR〉  
 c. 来年、 【28歳】 に なる 〈DUR〉  
 e. 彼は 会議に 【1時間】 遅れた 〈DUR〉  
 f. この時計は 【5分】 進んでいる 〈DUR〉  
 g. このプロジェクトの期間は 【3年】 だ 〈DUR〉  
 h. 休憩の時間は 【30分】 だ 〈DUR〉  
 i. 彼女の年齢は 【21歳】 だ 〈DUR〉

〈DIS〉は、「3センチメートル、10キロメートル」のような距離を表わす名詞句の場合に与えられる。「C〈CON／LOC〉カラ D〈CON／LOC〉マデ Xある」という構文に現れる。「Aノ／ガBガ Xダ」の構文では、Bに〈MEA〉「距離、長さ」のような名詞句が現れる。

- (45) a. その机から窓まで 【2メートル】 ある 〈DIS〉  
 b. 学校から駅まで 【3キロメートル】 ある 〈DIS〉  
 c. 東京から 北へ 【30キロメートル】 進む 〈DIS〉  
 d. 机と机とを 【50センチメートル】 離す 〈DIS〉  
 e. この鉛筆の長さは 【10センチ】 だ 〈DIS〉  
 f. ここから学校までの距離は 【1キロメートル】 だ 〈DIS〉

〈ITM〉は、「三つ、1個、三百人、10枚、二百本」のような個体数を表わす名詞句の場合に振られる。「C〈LOC〉ニ A〈ANI〉ガ Xいる」「C〈LOC〉ニ A〈CON〉ガ Xある」という構文にも現れる。「Aノ／ガBガ Xダ」の構文では、Bに〈MEA〉「数、個数、人数、枚数、本数」のような名詞句が現れる。

- (46) a. 教室に 生徒が 【10人】 いる <I T M>  
 b. かごの中に みかんが 【3つ】 ある <I T M>  
 c. このホールは 【千人】 収容できる <I T M>  
 d. 折り紙を 【5枚】 渡す <I T M>  
 e. 機内に持ち込める荷物の数は 【1個】 だ <I T M>  
 f. このホールの収容人数は 【千人】 だ <I T M>

<R A T> は、「5%、3割、2分の1、120 km/h」のような割合を表わす名詞句の場合に振られる素性である。「Aノ／ガBガ Xダ」の構文では、Bに<M E A>「割合、密度、原価率、速度」のような名詞句が現れる。

- (47) a. この車の最高時速は 【180 km/h】 だ <R A T>  
 b. 以前、輸入ビールの国内消費に占める割合は 【2%】 だった <R A T>  
 c. 視聴率が 【5%】 上昇する <R A T>  
 d. その国は 60歳以上の成人が 人口の【3割】を 占める <R A T>

<Q U A> は、「5回、千件、60キログラム、80平方メートル、1リットル」のように、頻度数、体積、容積を表わす名詞句の場合に与えられる。「Aノ／ガBガ Xダ」の構文では、Bに<M E A>「回数、件数、体重、面積、容積」などが現れる。<C U R> <D U R> <D I S> <I T M> <R A T> 以外の数値にはすべて、この<Q U A> が振られる。

- (48) a. その商品に対する苦情電話の件数は 【千件】 だ <Q U A>  
 b. 彼の体重は 【60キログラム】 だ <Q U A>  
 c. その部屋の面積は 【80平方メートル】 だ <Q U A>  
 d. その商品への苦情電話は 【千件】 に 達する <Q U A>  
 e. この荷物は 【2キロ】 ある <Q U A>  
 f. この瓶は 【1リットル】 入る <Q U A>  
 g. なべに 醤油を 【10cc】 加える <Q U A>

ところで、「Aガ Bガ Xダ」の「Bガ」は省略可能であり、実際には以下にあげるように「Aガ Xダ」という形で使用される場合も多い。

- (49) 彼は 【60キログラム】 だ <Q U A>  
 (50) 駅から家までは 【1キロメートル】 だ <D I S>  
 (51) このプロジェクトは 【3年】 だ <D U R>  
 (52) a. カゴのみかんは 【5つ】 だ <I T M>  
 b. 参加者は 【50人】 だ <I T M>

このような省略が起こるのは、一つの考え方として、省略される「重さ」「長さ」「期間」「個数」「人数」などの名詞句Bが、名詞句Xの素性から復元可能だからである。この考え方に従えば、素性全体の数を抑えるためにも、省略される名詞句の素性を細分するより、Xの位置に現れる素性を細分することから、より多くの利点を得られるはずである。Bの位置に<M E A> が現れる構文で、Xを<D U R> <D I S> <I T M> <R A T> <Q U A> に細かく分けるのはこのような理由による。

<V A L> は、「茶、赤、三角、長方形」のような段階性が見られない属性に振られる。「AノBヲ Xニ スル」「AノBガ Xニ ナル」の構文に現れる。また、「Aノ／ガBガ Xダ」の構文では、Bに<F O R> 「色、形」のような名詞句が現れる。

- (53) a. かばんの色を 【茶】 に する <V A L>  
 b. 目印の形が 【三角】 に なる <V A L>  
 c. 折り紙を 【長方形】 に 折る <V A L>

- d. 折り紙を 【星】 に 切る <VAL>
- e. 爪を 【真っ赤】 に 染める <VAL>
- f. その筆箱の形は 【長方形】 だ <VAL>
- g. 彼の服の色は 【赤】 だ <VAL>

<STA> は、これまであげた <CUR> <DUR> <DIS> <ITM> <RAT> <QUA> <VAL> の特徴を持たない名詞句に、一括して与えられる素性である。

- (54) a. このスープの味は 【淡白】 だ <STA>
- b. 彼の聴覚は 【鋭敏】 だ <STA>
- c. この香水の香りは 【甘め】 だ <STA>
- d. この布の手触りは 【なめらか】 だ <STA>
- e. 彼の性格は 【温厚】 だ <STA>
- f. うちの猫の性質は 【臆病】 だ <STA>
- g. その服の色は とても 【きれい】 だ <STA>

この場合も「Aガ Bガ Xダ」の「B」は言及されず、「Aガ Xダ」の形で現れる。

- (55) a. 彼の服は 【高価】 だ <STA>
- b. 飛行機での旅は 【割高】 だ <STA>
- c. その接着剤は 【強力】 だ <STA>
- d. この板は ちょっと 【厚め】 だ <STA>

名詞辞書では、形容動詞語幹を名詞の一類と考え見出し語として取りあげたが、「窮屈」「確実」「頑固」「きれい」など形容動詞語幹のほとんどには素性 <STA> が振られている。また、これらが従属する用言には助動詞ダの他に、(67)にあげる「Xニなる」「Xニする」の構文が共通して現れる（このニの品詞論的な位置づけについてはここでは考えない）。

- (56) a. 部屋が 【窮屈】 に なる <STA>
- b. 彼の当選は 【確実】 に なった <STA>
- c. その事件以来 おやじは 【頑固】 に なった <STA>
- d. 部屋を 【きれい】 に する <STA>

なお、次のように、変化の度合いを計る目安になる場合がある。このような場合も <STA> に含めて考える。

- (57) a. 申込みが 【定員】 を 超える <STA>
- b. 株価が 【天井】 まで 達する <STA>
- c. 彼の身長は 【平均】 を 下回る <STA>

ただし、「超える」「上回る／下回る」などの動詞と共起しても、連体修飾句を必要とする場合には、<STA> を振らず <MEA> を振って区別する（動詞辞書では、(58)はそれぞれ「規定の重量」「平均の身長」に素性を与えるので、<STA> を振る）。

- (58) a. 規定の 【重量】 を 超える <MEA>
- b. 平均の 【身長】 を 下回る <MEA>

### 6.3 二者間の関係を表わす素性

前節では、「Aノ／ガ Xガ Bダ／形容詞」「Aノ／ガ Bガ Xダ／形容詞」という二重主格構文を基にして素性を分類した。この節では、別種の構文に基づいて素性を分類する。

以下にあげる素性はこれまでとは異なり、「Aノ Xガ Bダ」と「Bガ Aノ Xダ」との二つが同義的な関係にある場合に限って、名詞句Xに振られる。このような制約のもとで両方の構文のXの位置に現れる名詞句は、組織内での役職や、親族関係、人間関係、相対的な位置関係を表わす[松下 1930, pp. 229-231; 青山 1986, pp. 367-370, pp. 379-380]。この主の名詞句Xには、素性 <ROL> <REL> <DIR> <PHA> <REF> が振られる。

<ROL> は、社会的な役割を表わす名詞句に振られる。構文「A <ORG> ノ Xガ B <HUM> ダ」「B <HUM> ガ A <ORG> ノ Xダ」で、Aの位置に組織が、Bの位置にヒトを表わす名詞句がそれぞれ現れる場合、そのXに与えられる素性である。

- (59) a. 山田さんは その病院の 【医者】だ <ROL>  
 b. 古野先生は 娘の学校の 【先生】だ <ROL>  
 c. その会社の 【社長】は 田中さんだ <ROL>  
 d. その部の 【部長】は 田中さんだ <ROL>

同様に、構文「A <ORG> デ Xヲ している」「Xニ/トシテ 雇う」に現れる名詞句についても <ROL> を振る [cf. 青山 1990, pp. 113-115]。

- (60) a. 彼女は その病院で 【看護婦】を している <ROL>  
 b. その会社は 彼女を 【秘書】に 雇う <ROL>  
 c. 彼女は 【秘書】に 向いている <ROL>  
 d. 委員長が 彼を 【議長】に 任命した <ROL>

しかし、次の例のように、名詞句が特定の指示対象を持つ場合には <HUM> を振る。

- (61) a. その会社の【社長】が 会議に 参加する <HUM>  
 b. その【医者】が 患者を 診察する <HUM>  
 c. 【先生】が 【生徒】に 数学を 教える <HUM>

<REL> は、親族や交友関係を表わす名詞句に振られ、「A <HUM/ANI> ノ Xガ B <HUM/ANI> ダ」「B <HUM/ANI> ガ A <HUM/ANI> ノ Xダ」の構文で、AとBの位置にヒトや動物が現れる。

- (62) a. 次郎の【父親】は 太郎だ <REL>  
 b. 次郎は 太郎の【息子】だ <REL>  
 c. 健児は 次郎の【友達】だ <REL>  
 d. 健児の【友達】は 次郎だ <REL>

また、この構文には現れない名詞句でも、「A <複数のHUM/ANI>ガ Xダ」の構文に現れる場合は、同じ素性 <REL> を振る。(64)は同じ名詞句が動詞に従属する例である。

- (63) a. 次郎と健児は 【友達】だ <REL>  
 b. 次郎と良子は 【夫婦】だ <REL>  
 (64) a. 彼には 【息子】が 二人 いる <REL>  
 b. あ的那个人は 私の【叔母】に 当たる <REL>  
 c. 彼が 【親】に なった <REL>  
 d. 結婚して、【姉】が できた <REL>  
 e. ずっと 【友達】で ありつづける <REL>

しかし、次のように名詞句が特定の指示対象を持つ場合は、<HUM>あるいは<ANI>が振られる。

- (65) a. 太郎の【息子】が その大学に 受かった <HUM>  
 b. 次郎の【父親】が 社長に なった <HUM>  
 c. その子犬の【母親】が 死んでしまった <ANI>

<DIR> は、方向を表わす名詞句に振られ、「A <CON/LOC> ノ Xガ B <CON/LOC> ダ」「B <CON/LOC> ガ A <CON/LOC> ノ Xダ」という構文では、AとBの位置にモノや場所が現れる。

- (66) a. その学校の【東】は 畑だ <DIR>  
 b. ボールは その車の【後ろ】だ <DIR>

この素性が振られる名詞句は次のような動詞にも従属する。

- (67) a. 【東】を向く <DIR>  
 b. 【北】に向ける <DIR>  
 c. 椅子を 【後方】に 倒す <DIR>  
 d. ボールが 【左側】に 傾く <DIR>

「東」「後ろ」などのように <DIR> が振られる名詞句を項として取る動詞は(67)以外にもあり、これは(68)に示すように存在、出現、消滅を表わす動詞である。この場合には、素性 <LOC> を振る。

- (68) a. その学校の【東】に 畑が ある <LOC>  
 b. 子供が その車の【後ろ】に いる <LOC>  
 c. 子供が 母親の【左側】に 隠れる <LOC>

<PHA> は、次のような名詞句に与える。「Aノ Xガ Bダ」または「Bガ Aノ Xダ」あるいは「AXガ Bダ」「Bガ AXダ」の文型で、Aの位置に、ある一つのまとまりを構成している要素が現れるのがある。(69a)(69b)(69c)(69d)(69e)のように全体の中での順序関係や、(69f)(69g)のように前後関係などである。このようなAについて、Xの位置に、その時間的あるいは位置的な順序／前後関係に着目した名詞句が現れる場合、そのXには素性 <PHA> を与える。

- (69) a. 参考文献は 論文の【末尾】だ <PHA>  
 b. 列の【先頭】は 山田さんだ <PHA>  
 c. フィールドの【3番目】は 表記欄だ <PHA>  
 d. 健児は 男兄弟の【2番目】だ <PHA>  
 e. 挨拶は パーティの【最後】だ <PHA>  
 f. 面接の【最後】は 花子だ <PHA>  
 (70) a. その日は 憲法記念日の【前】だ <PHA>  
 b. 乾杯の【次】が 挨拶だ <PHA>  
 c. 太郎の【後】は 私だ <PHA>  
 d. 私の面接の順序は 太郎と花子の【間】だ <PHA>

このような違いはあるが、(69)(70)の両者ともに <PHA> を与える。この素性が振られる名詞句は次のような動詞と共に共起する。Aの素性に依じて共起する動詞の性格が変わるという点で、次の <REF> と似ている。

- (71) a. 講演を 【最初】から 聞く <PHA>  
 b. 挨拶が パーティの 【最後】に 残った <PHA>  
 c. 曲の 【頭】を 出す <PHA>

- d. 話の【先】を聞く <P H A>  
 e. ゲームの【最初】が盛り上がる <P H A>  
 f. この映画の【最後】が面白い <P H A>

なお、<P H A>を取る名詞句は種々の動詞と共起するが、(72)のように位置が問題にされる場合には<S P A>を、(73)のように時間が問題にされる場合には<T I M>を振る。

- (72) a. その問題については 本論の【後】で 述べる <S P A>  
 b. 「A」の【後ろ】に 「B」を 書く <S P A>  
 (73) a. パーティの【最後】に 挨拶する <T I M>  
 b. 連休の【谷間】に ディズニーランドに 行く <T I M>

<P H A>は、「Aノ Xガ Bダ」「Bガ Aノ Xダ」あるいは「A Xガ Bダ」「Bガ A Xダ」の文型で、Aの素性に於いて、Xの素性や共起する動詞の性格が変わるような名詞句Xに、素性ごとに区別せずに一括して与える素性である。

- (74) a. このクラスの【ほとんど】は 男子だ <R E F>  
 b. 私の荷物の【ほとんど】は 本だ <R E F>  
 c. 地球の【ほとんど】は 海だ <R E F>  
 d. 事務作業が その仕事の【ほとんど】だ <R E F>  
 e. 7月の【ほとんど】は 休みだ <R E F>  
 f. 応用題が テスト問題の【ほとんど】だ <R E F>

これらは次のように種々の動詞と共起し、本来はその動詞に基づき、<H U M>や<O R G><C O N><L O C>などの異なる素性が与えられるものである。<R E F>で一括するのは、見出し語そのものがそれぞれの素性を持っているとは考えにくいからであり、これらに別々の素性を与えることはしない。

- (75) a. このクラスの【ほとんど】が その案に 反対した <R E F>  
 b. 1年生のクラスの【ほとんど】が 文化祭で 模擬店を出す <R E F>  
 c. 荷物の【ほとんど】を 運び終わった <R E F>  
 d. 地球の【ほとんど】は 海に 覆われている <R E F>  
 e. 仕事の【ほとんど】を 済ませた <R E F>  
 f. 7月の【ほとんど】を 休んだ <R E F>  
 g. 問題の【ほとんど】が 解けなかった <R E F>  
 (76) a. 私は 彼の【逆】を 行こう <R E F>  
 b. 妹は いつも 私の【逆】を する <R E F>  
 c. 敵の【逆】を 突く <R E F>  
 d. 本心の【逆】を 言う <R E F>

#### 6.4 その他の素性

これまでに述べた文型では特定の位置に現れにくい名詞句については、それぞれ動詞を中心とした個別の構文に基づいて素性を作成した。このような素性には、<N O R><F L D><I N F><I N C><Q A L><P R P><S T G><A P P><U N T><P I T><T I M><O R D><N A M><E N T><G A T><K N D>、そして<A B S>がある。

<N O R>は、「Xヲ 決める」「Xニ 従う」「Xニ よれば」「Xニ 基づいて」「(～のための新しい方法として) Xヲ 採用する」「Xヲ 守る」などの構文に出現する名詞句に振られ、規則基準や、制度方法などを表わすものである。

- (77) a. 【法律】を 遵守する <N O R>

- b. 【規則】を 改正する <NOR>
- c. 【校則】を 破る <NOR>
- d. プリントアウトする【方法】が 見つかる <NOR>
- e. その【方法】に 従う <NOR>
- f. 【週休二日制】を 採用する <NOR>
- g. 自分の【やり方】で 行なう <NOR>
- h. その学科の【定員】を 決める <NOR>
- i. ランナーが【コース】を 守る <NOR>

この素性が振られる名詞句の中には、「Xノ／ガ Aガ Bダ／形容詞」という二重主格構文の「外項」の位置にも現れるものもある。

- (78)a. その【法律】は 効果が 薄い <NOR>
- b. 【メートル法】は 評価が 高い <NOR>

<FLD> は、「A <HUM> ガ B <HUM> ニ Xヲ 教える／A <HUM> ガ B <HUM> カラ Xヲ 習う」「Xデ 賞ヲ 取る」「Xデ ～する」という構文に出現する名詞句であり、学術・スポーツ・芸術などの一分野や、ある一つの方法を表わす。

- (79)a. 叔母は 【花】を 教えている <FLD>
- b. 彼女は 【お茶】を 習っている <FLD>
- c. 彼は 大学で 【科学】を 専攻している <FLD>
- d. 【油絵】で 入賞する <FLD>
- e. 【100メートル競争】で 優勝する <FLD>
- f. 友達から 【スキー】を 習う <FLD>
- g. 彼は 【生物】で 100点を 取った <FLD>
- h. 彼は 【数学】に 明るい <FLD>
- i. 【手品】を 覚える <FLD>

この素性が振られる名詞句の中にも、「Xノ／ガ Aガ Bダ／形容詞」のXの位置に現れるものがある。

- (80)a. 【数学】の平均点が 低い <FLD>
- b. 【相撲】は 流儀が うるさい <FLD>
- c. 【お茶】は 作法が 細かい <FLD>

<INF> は、「Xヲ 述べる」「Xヲ 鑑賞する」「Xガ 面白い」「Xニ 満足する」などの構文に現れ、情報の持つ内容について焦点があわせられる場合のXに振られる。

- (81)a. 彼女が 【手紙】を 読む <INF>
- b. 【感想】を 述べる <INF>
- c. その【小説】を 鑑賞する <INF>
- d. 彼の【意見】に 反対する <INF>
- e. 彼の 【返事】に 驚く <INF>
- f. 彼の【依頼】に 応じる <INF>
- g. 彼の【批判】に 対処する <INF>
- h. その【芝居】は 面白い <INF>

「Xノ／ガ Aガ Bダ／形容詞」のXの位置に現れる名詞句もある。

- (82)a. その【小説】のテーマは 難解だ <INF>
- b. その【報告書】は 記述が 細かい <INF>

- c. その【映画】は 内容が くだらない < I N F >

「Xヲ 尋ねる」「Xヲ 教える」「Xヲ 暗記する」「Xヲ 記入する」「Xヲ 間違える」などの構文に現れるXにも < I N F > を振る。

- (83) a. 泉鏡花の【出身地】を 尋ねる < I N F >  
 b. 自分の【体重】を 教える < I N F >  
 c. 台本の【台詞】を 暗記する < I N F >  
 d. 自分の【住所】を 記入する < I N F >  
 e. 友達の【誕生日】を 覚える < I N F >  
 f. 【道】を 間違える < I N F >

(83d)を < L O C >、(83e)を < P I T >としなかったのは、(84)(86)のように文脈内で指示対象を持ちうる場所や時間と区別するためである。それとは対照的に(85)(87)で問題にされているのは、その情報の持つ音型や文字列だと考えられる。

- (84) a. 夏休みに 泉鏡花の【出身地】を たず(訪)ねる < L O C >  
 b. 遺品が残されていないかと 泉鏡花の【出身地】を 調べる < L O C >  
 (85) a. 先生に 泉鏡花の【出身地】を たず(尋)ねる < I N F >  
 b. 百科事典で 泉鏡花の【出身地】を 調べる < I N F >  
 (86) 友達の【誕生日】に その事件を 知る < P I T >  
 (87) 友達の【誕生日】を 知る < I N F >

ただし、「Xヲ 尋ねる」などの構文に現れても、(88)のように連体修飾を受ける名詞句には < I N F > を振らない。この場合は、文脈内で特定の指示対象を持つからである。

- (88) a. 彼氏と初めて出会った【日】を 尋ねる < P I T >  
 b. 旬の野菜を安く売っている【八百屋】を 尋ねる < L O C >

< I N C > の名詞句は、ヒトがある対象に対して持つ心理的傾向を表わし、「A < H U M > ガ Bニ Xヲ 感じる/持つ/抱く/覚える」「A < H U M > ガ Bヲ Xニ 感じる/思う」「A < H U M > ガ Bニ Xガ ある」などの構文に現れる。

- (89) a. 僕は 彼女に 【優越感】を 感じる < I N C >  
 b. 彼は あの娘に 【興味】を 持っている < I N C >  
 c. 現代人は 将来に 【不安】を 持っている < I N C >  
 d. 僕は その事件を 【意外】に 思った < I N C >  
 e. 私は あの犬を 【哀れ】に 感じる < I N C >  
 f. 私は 今の生活に 【幸せ】を 感じる < I N C >

(89e)(89f)は次のような格助詞の交替を起こす。第三章(1.1 素性と役割)で述べたように、二つの構文の違いは意味素性によってではなく、役割の違いとして記述する方がふさわしいと、ここでは考える。この場合も、両者の「犬」「哀れ」には、ヲ格に立つ場合にもニ格に立つ場合にも < I N C > を与える。

- (90) a. 私は あの犬を 【哀れ】に 感じる < I N C >  
 b. 私は あの犬に 【哀れ】を 感じる < I N C >  
 (91) a. 私は 今の生活を 【幸せ】に 感じる < I N C >  
 b. 私は 今の生活に 【幸せ】を 感じる < I N C >

<QAL> は、尺度を表わす名詞句のうち、構文「Aガ Xガ ある」において、基準を超えた値を表わす場合に振られる。

- (92) a. 彼は 【体重】が ある <QAL>  
 b. その選手は 【身長】が ある <QAL>  
 c. そのビルは 【高さ】が ある <QAL>  
 d. その板は 【厚み】が 足りない <QAL>  
 e. 【数】をこなせば 上達するだろう <QAL>

<PRP> は、「A <HUM> ガ Xニ 驚く」「A <HUM> ガ Xヲ 指摘する」「A <HUM> ガ Xニ 気づく」「A <HUM> ガ Xヲ 知る」のような構文に出現し、程度の大小を表わし、「～ということ」「～であること」と解釈できるものに与える。

例えば、(93)の「厚さ」は基準値を上まわることを表している。この場合は上に述べた素性 <QAL> を与えることはできるが、(94)の「薄さ」では「Aガ 薄さガ アル」とはいえない。このため <QAL> を与えることはできない。

- (93) この板は【厚さ】がある <QAL>  
 (94) \*この電子手帳は【薄さ】がある  
 (95) 最近の電子手帳の薄さに 驚く <PRP>

しかし、(95)のような例は可能である。このようなものは <PRP> とする。この点で、名詞句Xが共起する動詞は、<INF> と共起する述語に類似している。

- (96) a. 関心の【薄さ】を 指摘する <PRP>  
 b. ことの【重さ】に 気づく <PRP>  
 c. 任務の【重み】を 知る <PRP>  
 d. 事件の【重大さ】を 感じる <PRP>

<STG> は、ある一時的な状態を表わすもので、先に述べた <STA> <RES> の特徴を持たない名詞句に与えられる素性である。例えば、次の(97)の見出し語では、「Aノ／ガ Bガ Xダ／形容詞」の構文中のXの位置には現れないので、<STA> を与えることはできない。また、「良い／悪い」とも共起しないので、<FOR> を与えることもできない。さらに「緩む」「くずす」「正す」「整える」「乱れる」が、ある行為の結果に着目する述語であるとも考えにくい。このように、ある一時的な状態についての出現／消滅に関連する述語と共起する名詞句には、一括して <STG> を振る。

- (97) a. 【緊張】が ゆるむ <STG>  
 b. 【足】を くずす <STG>  
 c. 【膝】を 正す <STG>  
 d. 【髪】を 整える <STG>  
 e. 【頭】が 乱れる <STG>

<APP> の振られる名詞句Xに焦点があてられるのは、視覚チャンネルから主として得られる外的な印象である。「この素性はXガ 目立つ」「Xガ 目につく」「Xガ 目に入る」「Xガ 思い浮かぶ」「Xヲ 思い浮かべる」などの構文に現れるXに振られる。

- (98) a. 祖母の【顔】を 覚えている <APP>  
 b. 顔の【輪郭】に 丸みがつく <APP>  
 c. 水玉の【柄】が 付いている <APP>  
 d. 厳しい【態度】が 目につく <APP>  
 e. 驚きの【色】が 見える <APP>  
 f. 苦悩の【陰】を 浮かべる <APP>

<UNT> は、「円、ドル、ドイツマルク、リラ、元」などの通貨単位や「時間、分、メートル、グラム」など様々な単位を表わす素性である。通貨単位は、<PRI> <MEA> や <GRA> と同様、「強い、弱い、高い、安い」と共起する。しかし、<MEA> や <GRA> とは異なり、構文「NPノ／ガ NPガ NPダ／形容詞」において、外項が現われることはない。

- (99) a. 【ドイツマルク】が 強い <UNT>  
 b. 【円】が 高くなる <UNT>  
 c. 【ドル】で 取引する <UNT>  
 d. 90分を 【時間】に 換算する <UNT>  
 e. 【坪】を 【平方メートル】に 直す <UNT>

<PIT> は、不定語「いつ」で質問された場合に、時刻／時間を特定して答えることができる名詞句に与える。

- (100) a. 今度の【誕生日】に プレゼントを もらう <PIT>  
 b. 彼の次女は この【春】に 一年生に なる <PIT>  
 c. 毎年、父の【命日】には お墓参りに 行く <PIT>  
 d. 【大晦日】が 近い <PIT>

(101)のように、<PIT> の振られる名詞句は「近い」「近づく」「間に合う」と共起する。この共起関係を重視し、構文「Xガ 近い」「Xガ 近づく」「Xニ 間に合う」に現れるXには <PIT> を振る。

- (101) a. 【大晦日】が 近い <PIT>  
 b. 【誕生日】が 近づく <PIT>  
 (102) a. 【運動会】が 近い <PIT>  
 b. 【結婚式】が 近づく <PIT>  
 c. 【終電】に 間に合う <PIT>

<TIM> は、時間の概念を表わす名詞句のうち、<PIT> の特徴がないものに振られる。また、(104)のように、出来事の間順序関係を表わす名詞句や、(105)のように時間的な幅を指す名詞句のうち、<MEA> の振られない名詞句に <TIM> を与える。

- (103) a. 【春】が 来る <TIM>  
 b. 【梅雨】が 始まる <TIM>  
 (104) a. 考えた【末】に 決断する <TIM>  
 b. 仕事の【前】に 一服する <TIM>  
 c. パーティの【最後】に 挨拶する <TIM>  
 (105) a. 次の授業まで 【間】が ある <TIM>  
 b. 【定年】が のびる <TIM>  
 c. 返事を考え直す【余裕】を 与える <TIM>  
 d. 一定の【期間】が 経つ <TIM>  
 e. 患者の【命】を 縮める <TIM>

<ORD> は、時間的な順序関係や空間的な位置関係を表わす名詞句に振られる。

- (106) a. 面接の【順番】を 変更する <ORD>  
 b. 【順序】が 逆だ <ORD>  
 c. 【スケジュール】を 調整する <ORD>  
 d. 車が 【方向】を 変える <ORD>  
 e. 彼が 【方角】を 間違える <ORD>

<NAM> は、構文「Aヲ Xト 名づける」「Aヲ Xト 呼ぶ」でXの位置に現れる名詞句に対して振られる。

- (107) a. 彼は 娘を 【花子】と 名付けた <NAM>  
 b. この辺を 【辺AB】と 呼ぶ <NAM>

<ENT> は、<CON> や <INF> の条件から外れる、抽象的な対象を表わす名詞句に振られる。この素性が振られる名詞句の一つには、「Xノ／ガ Aガ Bダ／形容詞」「Xノ／ガAガ Bダ」のXの位置に現れる。この場合大切なことは内項Aに現れる名詞句が、Xを発音した場合の音形としての側面や、それが書かれた場合の形としての側面をメタ言語的に表わすことである。

- (108) a. その【単語】は 音節が 多い <ENT>  
 b. 彼女の【名前】は ひびきが かわいい <ENT>  
 c. その【単語】は 発音が 厳しい <ENT>  
 (109) a. 「女」という【漢字】は 画数が 3だ <ENT>  
 b. その【字】は ポイント数が 大きい <ENT>  
 c. その【字】は 大きい <ENT>  
 d. その【字】は 薄い <ENT>  
 e. その【数字】は 形が 小さい <ENT>  
 f. その【辺】は 長さが 4センチメートルだ <ENT>  
 g. 【辺AB】は 短い <ENT>  
 h. 【辺AB】は 【辺BC】と 等しい <ENT>  
 i. その【三角形】は 面積が 5平方センチメートルだ <ENT>

さらに、数学的な対象を表わす名詞句にも <ENT> を振る。

- (110) a. その【集合】は 要素数が 3だ <ENT>  
 b. 【変数a】は 値が 150だ <ENT>  
 c. その【数字】は 値が 小さい <ENT>  
 d. その【数字】は 若い <ENT>

<GAT> は、「Xヲ 集める」「Xガ 集まる」「Xガ 多い／少ない」という構文のXに現れる名詞句に振られる。これらの述語は主にその名詞句のクラスとしての側面ではなく、メンバーとしての数に焦点をあてるものである。

- (111) a. 【学生】を 体育館に 集める <GAT>  
 b. 【鼠】が えさの回りに 集まる <GAT>  
 c. 【お皿】が 多い <GAT>  
 d. 【髪】が 少ない <GAT>

「集める」「集まる」「多い」「少ない」などの述語は、(それが他動詞の場合はヲ格に立つ名詞句、それ以外の場合はガ格に立つ名詞句の) 指示対象が複数であることを要求する。原則として、<ANI> <AML> <HUM> <CON> については、それぞれの見出し語のもとに <GAT> が並立して表示される可能性があるが、述語については典型例に限って例を示す。このような述語が現れない文では、名詞句の指示対象の数については文脈情報に依存する形でしか解釈できない。したがって、このような場合に <GAT> を乱発することは避けた。

また、(112)のように <ORG> が振られる名詞句には、そこに属する複数のメンバーを指す解釈もありうるが、このような解釈だけに基づいて <GAT> を振ることはしない。

- (112) その【デパート】で 有名になる <ORG>

名詞辞書の中で〈GAT〉が記載される名詞句には、(113)のように典型的に「多い」「集まる」などと共起するもの、(114)のように漠然と〈HUM〉や〈ORG〉を指すもの、(115)のように〈HUM〉や〈ORG〉の条件に合致しないもの、(117)のように状態副詞として機能するものなどがある。このうち、(116)は別の区分で〈LOC〉が振られるものだが、「女性と付き合う」「研究者に知れ渡る」などが〈HUM〉と共起することを重視してここでは類似の素性〈GAT〉を振る。

- |          |                       |       |
|----------|-----------------------|-------|
| (113) a. | 東京は 【人】が 多い           | 〈GAT〉 |
| b.       | 日本の【頭脳】が 集まる          | 〈GAT〉 |
| (114) a. | 指示を 【上】から 受ける         | 〈GAT〉 |
| b.       | あの人は 【下】に 好かれる        | 〈GAT〉 |
| c.       | その件については 助役【以下】が 対処する | 〈GAT〉 |
| (115) a. | 【マスコミ】は その事件に 注目している  | 〈GAT〉 |
| b.       | 【野党】が 一致する            | 〈GAT〉 |
| c.       | 【世間】を 驚かせる            | 〈GAT〉 |
| d.       | 教師の【社会】で 通用する         | 〈GAT〉 |
| (116) a. | 【近所】と 付き合う            | 〈GAT〉 |
| b.       | 【海外】に 知れ渡る            | 〈GAT〉 |
| (117) a. | 【家族】で 旅行する            | 〈GAT〉 |
| b.       | 【グループ】で 参加する          | 〈GAT〉 |
| c.       | 【委員】で 話し合う            | 〈GAT〉 |

述語の性格の違いによりクラスを指す場合には、次に説明する〈KND〉が、複数のメンバーを指す場合には〈GAT〉が振られる。

〈KND〉は本来、種や類（クラス）を表わす総称性や、〈REL〉〈ROL〉以外の役割を表す素性である。動物や植物などの種を表す場合は、次のような例に見られる。

- |          |                 |       |
|----------|-----------------|-------|
| (118) a. | この木は 【針葉樹】に 属する | 〈KND〉 |
| b.       | 【恐竜】は 絶滅した      | 〈KND〉 |
| c.       | 【人類】が 誕生する      | 〈KND〉 |
| d.       | 【霊長類】が 進化した     | 〈KND〉 |

つまり、動物、植物、具体物を表す名詞句には、以下に例をあげるようにどれも〈KND〉の側面が併存している。

- |          |               |       |
|----------|---------------|-------|
| (119) a. | 【牛】は 哺乳類に 属する | 〈KND〉 |
| b.       | 【医者】は 大変だ     | 〈KND〉 |
| c.       | 【子供】は 【親】に 似る | 〈KND〉 |
| d.       | 【コップ】は 食器である  | 〈KND〉 |
| e.       | 【桜】は 美しい      | 〈KND〉 |

そのため煩雑になるので動物、植物、具体物を表す名詞句には〈KND〉という素性を振ることはしなかった。また、「牛」と「哺乳類」あるいは「コップ」と「食器」のように類同士の所属関係を表わす場合、述語の例は辞書の記載から略した。さらに、「生物」「動物」「植物」「針葉樹」など専門分野で使用される普通名詞は、「この」「その」を始めとした連体修飾句によって限定を受けない限り総称的に類を表示するが、これらについても上と同様の扱いをして〈KND〉を振ることはない。

上に例をあげた以外に名詞辞書で〈KND〉が振られる名詞句は、親族〈REL〉役職〈ROL〉が振られるものを除いて、「Aガ Xニ なる」「Aガ Bヲ Xニ する」「Aガ Xニ ふさわしい」という構文において、Xの位置に出現可能なものである。

- (120) a. 東京から 【首都】 を 移す <KND>  
 b. 自民党が 【野党】 に 下る <KND>  
 c. 彼は プロジェクトの【柱】に なった <KND>  
 d. カゼインを 【主成分】にして 新しい物質を 作る <KND>  
 e. 豆腐は 酒の【肴】に ふさわしい <KND>

一般に、これらの名詞句は <REL> <ROL> の場合とは異なり、(「野党」を除けば) 対概念が成立しにくい。ただし、(120c)にあげた「プロジェクトの柱」は、<ROL> との区別が難しいものの一例である。一般に、ヒト <HUM> を表す名詞句では同様の問題が発生しやすいが、<REL> <ROL> 以外のものには原則として <KND> を振る。同様の例を(121)にあげる。

- (121) a. その劇の【主役】を決める <KND>  
 b. 【男】に生まれる <KND>  
 c. 一人前の【大人】に 育つ <KND>  
 d. 法律の【専門家】を めざす <KND>  
 e. 看護婦の【卵】を 養成する <KND>  
 f. 職場の【花】に なる <KND>

なお(122)のように、本来は <KND> が与えられる名詞句が、特定の指示対象を持つヒトを指すことも可能になる場合に限って、(121)の <KND> と並立させて <HUM> を与える。

- (122) a. 周囲の【大人】が その子を ほめる <HUM>  
 b. 医者【卵】と 付き合う <HUM>  
 c. 職場の【花】と 結婚する <HUM>

以上、領域/ABS/の下位素性について解説してきた。これまで解説を加えてきた下位素性の特徴に合致しない名詞句にはすべて <ABS> の素性が与えられる。素性 <ABS> が与えられるものは大きく三つに分類できる。

第一に、共起する述語が様々な名詞句と共起するので、下位素性に特定できない場合に振られる。(123)に示すように、「ある、ない、無くす、持つ、異なる」などの高い頻度をほこる用言は、具体物から抽象物まで様々な名詞句と共起する。この節で取りあげてきた述語によってどの下位素性にも特定することができないので、<ABS> を振る。同一の区分に <ABS> とその下位素性とが並立して記載される場合、<ABS> の欄にはここにあげたような述語が例として示されている。

- (123) a. この辞書には 多くの【特徴】が ある <ABS>  
 b. 彼には 【欠点】が ない <ABS>  
 c. 彼は 【立場】を 無くしてしまった <ABS>  
 d. 【価値】を 持つ <ABS>  
 e. 音楽的な【背景】が 異なる <ABS>  
 f. 【生きがい】を 見つける <ABS>  
 g. 自分にあった【職業】を さがす <ABS>  
 h. 教育の【原点】を 探る <ABS>  
 i. 【理想】を 追求する <ABS>  
 j. 【建前】に こだわる <ABS>  
 k. 【能力】に 応じて クラスを分ける <ABS>  
 l. 生活の【基盤】が できる <ABS>

第二に、上にあげた理由とはまったく逆の場合、つまり(124)と(125)に例をあげるように、共起する述語があまりにも限定される場合、<ABS> を振って処理せざるをえな

かった。

- (124) a. 【愛】を 貫く < A B S >  
b. 【正義】が 勝つ < A B S >  
c. 【心】が 休まる < A B S >  
d. 【使命】を 帯びる < A B S >  
e. 【能力】を 発揮する < A B S >  
f. 【問題】が こじれる < A B S >  
g. 【自分】を いつわる < A B S >  
h. 部下がやった仕事に 【けち】を つける < A B S >  
i. 【疑問】が 解ける < A B S >

次にあげる(125)は、(124)に比較して「慣用句」としての度合いは高い。

- (125) a. 【顔】に 泥を 塗る < A B S >  
b. 【血】が 騒ぐ < A B S >  
c. 【気】が 散る < A B S >  
d. その仕事に 【腰】を 据えて 取り組む < A B S >  
e. その子は 私の【手】に 余る < A B S >  
f. 喜びで 【胸】が 踊る < A B S >  
g. 【男】を 磨く < A B S >

第三に、(126)のような比喩的な意味を表わす名詞句に振られる。このような名詞句には、その見出し語が本来的な意味で用いられる場合に共起するのと同様の述語が共起しやすい [橋本／青山他 1994]。

- (126) a. 他人の【目】から 見る < A B S >  
b. 言葉の【壁】を 乗り越える < A B S >  
c. 景気に 【底】が 見える < A B S >  
d. バクチの【味】を 覚える < A B S >  
e. 偽善の【仮面】を かぶる < A B S >  
f. 春の【便り】を 待つ < A B S >  
g. 争いの【種】を 蒔く < A B S >  
h. 悪習の【根】を 断ち切る < A B S >  
i. 犯罪の【芽】を 摘み取る < A B S >  
j. 会社の【顔】に なる < A B S >

以上、< A B S > が記載される三つの場合について触れた。

## 7. その他の素性

その他、「第三章 意味素性 (2.2)」で触れたように、「述語の項としての用法」が存在しない場合には、< N O N > を振る。

また、「サ変動詞用法」あるいは「述語としての用法1」において、項の位置に文相当の表現が現れる場合には、便宜的に < — — > を振る。さらに、項としてどのような素性を持つ名詞句がきてもかまわない場合には、すべての素性を列挙する代わりに、< C O N / A B S > を振る。

注

1. 次の「馬」「先生」「赤ちゃん」は〈AML〉〈HUM〉〈ANI〉である名詞句であるが、(1)(2)(3)の「触る」「落ちる」「見る」という述語はガ格の名詞句に〈AML〉〈HUM〉や〈ANI〉であることを要求していない。具体物であれば、結びつくことが可能である。

- (1) 【馬】に 触る 〈AML〉
- (2) その【先生】が 階段から 落ちる 〈HUM〉
- (3) 【赤ちゃん】を 見る 〈ANI〉

しかし、〈AML〉〈HUM〉〈ANI〉であれば必ず具体物〈CON〉としての側面はあるので、このような場合は名詞句に〈CON〉は振らず、それぞれ〈AML〉〈HUM〉〈ANI〉を振る。また、項としての用法における述語欄にも、このような種類の述語は記載されていない。

また、「頭」「胸」「手」「大腿部」「動脈」などの身体部位は、具体物であるため〈CON〉という素性が振られる。これは(4)に示すように「何」だけでなく「どこ」という不定語でも質問することができ、このことから一方で位置／場所としての側面を持つことが分かる。

- (4)a. 【大腿部】 から 【動脈】に 内視鏡を 通す 〈CON〉
- b. 何／どこから 何／どこに 内視鏡を 通す？

また「場所」は本来的に相対的な概念なので、身体部位以外にも(5)の「コップ」「花」が「ハエ」や「蝶」にとっては場所として、「どこ」で質問される可能性は考えられる。

- (5)a. 【コップ】に 虫が 止まる 〈CON〉
- b. 【花】 から 【花】 へ 蝶が 蜜を 運ぶ 〈CON〉
- (6)a. 何／どこに 虫が 止まる？
- b. 何／どこから 何／どこへ 蝶が 蜜を 運ぶ？

このように、内視鏡や虫などの小さい物にとって場所として捉えられる場合には、「何」以外に「どこ」という不定語で質問することは可能である。ただし、具体物の解釈を優先させる述語と共起すれば、同じ名詞句は場所としての解釈を優先させる述語とも共起するはずである。つまり〈CON〉の素性が振ってあれば、〈LOC〉の素性を規則的に導くことが可能である。これと同様の問題を含む〈HUM〉〈AML〉〈ANI〉〈CON〉に対しては、場所としての側面を表す〈LOC〉の表示を略した。

他にも、一方から他方の素性を規則的に導くことが可能なものがある。実際は、見出し語のもとに、縦軸に並べた素性のいずれかが記載されれば、横軸にあげた(a)から(e)の素性がそこには並立するはずだが、作業の効率を考えて原則的に表示を略した。‘\*’は、記載される素性と、略された素性とへの対応関係を示す。

記載される素性	作業上は記載を略した素性				
	(a) ANI	(b) CON	(c) LOC	(d) KND	(e) GAT
HUM	*	*	*	*	*
AML	*	*	*	*	*
ANI		*	*	*	*
CON			*	*	*
ORG					*

同様の問題は、「第一部 第三章 意味素性(3.3)」で簡単に触れたように、並立しやすい素性についても指摘することができる。並立する素性に関して、さらに情報が蓄積されれば、それを規則化することにより素性の数を減らすことが可能になるだろう。

## 付録 1 意味素性一覧

以下に示すのは名詞辞書に記載された意味素性の一覧である。詳細については「意味素性の詳細」を参照のこと。素性を一覧するのに都合がよいように、それぞれの素性を以下の八項目に分けて解説する。

\*\*\*\*\*

- 概要 : 標記の素性を概括するためのメモ。  
名詞句例 : 標記の素性が振られる名詞句の例。( )内は必須の修飾句。  
構文 1 : 名詞句 X に標記の素性を与えるために充たす必要のある構文。  
構文 2 : 名詞句 X に標記の素性を与えるための参照用の構文。  
「構文」中には見出し語 X が標記の素性を取る場合、それと隣接する素性に限って ( ) に示す。ただし、隣接素性が特定できない場合は記載しない。便宜上に見出し語を X で、それ以外の名詞句は A, B, C で呼ぶ。  
文例 : 標記の素性に典型的な名詞句と述語との結びつきを含む文例。ただし、「構文」にあげられていない述語との結びつきを提示することも多い。  
並立素性 1 : 見出し語のもとで、標記の素性と必ず並立する素性で、記載を略したもの。ただし、‘ ; ’ の右側の素性は記載される場合もある。  
並立素性 2 : 見出し語のもとで、場合により標記の素性と並立して記載される素性。  
注記 : 注意事項。

\*\*\*\*\*

このうち「注記」は、必要と思われる箇所以外には付けられていない。また、「構文」と「並立素性」は、その重要度を 1 あるいは 2 の番号によって示す。「構文」と「並立素性」の項目については、両方の番号の付けられた項目が示される場合もあれば、片方の項目しか示されない場合もある。したがって、ある素性に「構文 2」の条件しか提示されていない場合、全体の中でその素性がしめる地位の安定度は低い。また、一つの素性を認めるために目安とした「構文」には、複数の例が提示される場合が多い。「構文」に示される述語が同一文型を取り、互いに同義または反義の関係にある場合は、‘ / ’ で区切って示す。(これらの構文を一括して、一つの素性を認めるための条件としてクラスタリングする場合に、どのような原則が働くか。今後、こうした点については考察を重ねる必要がある。)

### / ANI / 動物の領域

#### HUM (human)

- 概要 : ヒトで、特定可能なもの。  
名詞句例 : 彼, 太郎, 先生, 友達, 議長, 医者, 父親, 母親, 子供 ;  
(警察の)犬, (医者)の卵, (職場)の花....  
構文 1 : A 〈LOC〉ニ X ガいる (時制は現在)  
構文 2 : X ガ 喜ぶ / 安心する / 悲しむ / 泣く  
X ガ ことばを話す  
X ガ 亡くなる  
X ヲ 尊敬する  
文例 : 【僕】は悲しい  
【太郎】は【先生】と親しい。  
【議長】が亡くなった。  
その【医者】が患者を診察する。  
この中に警察の【犬】がいる。  
並立素性 1 : 〈CON〉〈SPA〉〈ANI〉; 〈KND〉〈GAT〉

- 並立素性 2 : 〈REL〉〈ROL〉  
「彼、あなた、私、太郎」などの単数の対象を指示する代名詞や固有  
名詞には〈GAT〉は並立しない。  
「家族、兄弟、夫婦、委員、役員、幹部、人、人間」については、  
〈GAT〉を並立させて書いた。

#### AML (animal)

- 概要 : ヒト以外の動物で、文脈情報などからその指示対象を特定することが  
可能と考えられるもの。  
名詞句例 : 犬、牛、トラ、ライオン、蛇、象、虫、昆虫、蜂....  
構文 1 : A 〈LOC〉ニ Xガ いる (時制は現在)  
構文 2 : Xガ 食べる  
Xガ 吠える／鳴く  
文例 : 【馬】がいなく。  
【鯨】が泳ぐ。  
【牛】が歩く。  
【豚】がエサを食べる。  
並立素性 1 : 〈KND〉〈CON〉〈SPA〉〈GAT〉〈ANI〉

#### ANI (animate)

- 概要 : ヒトを含む動物で、文脈情報などからその指示対象を特定することが  
可能と考えられるもの。  
名詞句例 : 親、父親、母親、赤ちゃん、子供、子、動物、生き物....  
構文 1 : A 〈LOC〉ニ Xガ いる (時制は現在)  
構文 2 : Xガ 生まれる／死ぬ  
Xガ 歩く／走る  
Xガ おとなしい  
文例 : 【赤ちゃん】が生まれる。  
その【犬】は従順だ。  
その【子供】は【父親】に似ている。  
火星には【生物】がいる。  
並立素性 1 : 〈KND〉〈CON〉〈SPA〉; 〈GAT〉

#### /CON/ 具体物の領域

#### AUT (automaton)

- 概要 : 乗物や機械などのうち、自立的な処理機能を持つもの (背後にはそれ  
を操作するヒトがいると考えられる)。  
名詞句例 : 車、新幹線、飛行機、コンピュータ、電子レンジ....  
構文 1 : Xガ 作動する  
A 〈HUM〉ガ Xヲ 作動させる  
構文 2 : Xガ 動く／故障する  
A 〈HUM〉ガ Xニ 乗る  
A 〈HUM〉ガ Bヲ Xニ 乗せる  
Xガ 走る  
Xガ 速い／遅い  
文例 : 【車】が走る。  
【飛行機】は速い。  
【電車】で行く。  
【地下鉄】に乗る。  
【エレベータ】が上がる。  
【エスカレータ】で下がる。

- 【電子レンジ】は解凍が速い。  
 【コンピュータ】を作動させる。
- 並立素性 1 : 〈KND〉〈SPA〉〈GAT〉; 〈CON〉  
 並立素性 2 : 〈PRO〉  
 注記 : 「A 〈LOC〉ニ X ガ走っている」には 〈NET〉の解釈もある。  
 「心臓が動く／停止する」は臓器の機能と考え 〈POT〉を振る。

### EDI (edible)

- 概要 : ヒトが日常的に食用とするもの。記述対象が日本語であるので、日本陣の典型的な食生活を想定する。
- 名詞句例 : 料理、ラーメン、味噌汁、お茶、ウイスキー....
- 構文 1 : X ガ おいしい／まずい  
 構文 2 : A 〈HUM〉ガ X ヲ 食べる／味わう／飲む  
 A 〈HUM〉ガ X ヲ 舐める  
 A 〈HUM〉ガ X ヲ 焼く／煮る
- 文例 : 彼の【料理】はおいしい。  
 その店の【料理】は辛い。  
 【そば】を食べる。  
 【魚】を焼く。  
 【大根】を煮る。  
 【みかん】をむく。  
 【生クリーム】を舐める。
- 並立素性 1 : 〈SPA〉〈GAT〉; 〈CON〉〈KND〉  
 並立素性 2 : 〈LIQ〉〈PLA〉〈PRO〉  
 注記 : 「A 〈HUM〉ガ X ヲ飲む」は 〈LIQ〉に入れてある。  
 「熊が【魚】を食べる」のように動物 〈AML〉が動作者である場合は、たとえ述語例と一致していても、その食べ物については 〈AML〉とする。

### LIQ (liquid)

- 概要 : 液体。物質が気体や固体への状態変化を表す述語と共起するもの。
- 名詞句例 : ジュース、スープ、墨汁、雨水....
- 構文 1 : X ガ こおる  
 構文 2 : A 〈CON〉ガ X デ 濡れる  
 A 〈HUM〉ガ X ヲ こぼす  
 A 〈HUM〉ガ B 〈CON〉ニ X を注ぐ  
 A 〈HUM〉ガ X ヲ 飲む  
 X ガ 流れる  
 X ガ 気体ニ なる
- 文例 : ジュースをごくごく飲む。  
 ジョッキにビールを注ぐ。  
 【墨汁】をこぼす。  
 【雨】が漏る。  
 【血】が固まる。  
 池の【水】がこおる。  
 【水】が蒸発する。
- 並立素性 1 : 〈KND〉〈SPA〉; 〈CON〉  
 並立素性 2 : 〈EDI〉〈PHE〉

### PAS (pasty)

- 概要 : 粘着性のもの。  
 名詞句例 : 糊、ポタージュ、クリーム....

- 構文 1 : Xガ ベタベタする。  
 構文 2 : Xガ ドロドロ流れる。  
           【糊】がドロドロ流れる。  
           ケーキに【クリーム】を塗る。  
           手に【クリーム】を擦り込む。  
 並立素性 1 : 〈KND〉〈SPA〉; 〈CON〉

### S O L (solid)

- 概要 : 固体。固体から液体や気体への状態変化を表わす述語と共起するもの。  
 名詞句例 : 固体、雪、氷、金属、凍ったジュース....  
 構文 2 : Xガ液体ニなる  
           Xガ溶ける  
           Xガ液化する  
           AガXヲ溶かす  
           AガXヲ溶解する  
 文例 : 【雪】がとける  
           【氷】をとかす  
           【金属】を溶解する  
 並立素性 1 : 〈KND〉〈SPA〉; 〈CON〉  
 並立素性 2 : 〈PHE〉  
 注記 : 次のような素性の変更が起きる場合を想定して作った素性である。  
       「ジュース〈LIQ〉を飲む→凍ったジュース〈SOL〉を齧る」  
       固体であるすべての物質〈CON〉に記載されるわけではない。

### C O N (concrete)

- 概要 : 物質としての側面を持ち、視覚を始めとする五感で認識可能なもの。  
 具体物のうち〈AUT〉〈EDI〉〈SOL〉〈LIQ〉〈PAS〉  
 のいずれにも特定できないもの（あるいは、特定する必要のないもの）。以下にあげるモノの部分ならびに身体部分が含まれる：乗物、  
 食物、文房具、衣服、建物、動物。  
 名詞句例 : 手紙、小説、本、頭、手、足、桜、部屋、岩、石、洋服、着物、靴、  
 雨....  
 名詞句例 : A〈LOC〉ニ Xガ ある（時制は現在）  
           A〈LOC〉カラ B〈LOC〉ニ／へ Xヲ 運ぶ  
           A〈HUM〉ガ Xヲ 洗う  
           A〈HUM〉ガ Bカラ Xヲ 買う  
           A〈HUM〉ガ Bニ Xヲ 売る  
           A〈HUM〉ガ Xヲ 輸入する／輸出する  
           A〈HUM〉ガ Xニ 手デ触れる  
           A〈HUM〉ガ Xヲ 手ニ持つ  
           Xガ 燃える／破れる／割れる／つぶれる  
           Xガ 大きい／小さい  
 文例 : 【手紙】を破る。  
       僕は【頭】がかゆい。  
       【部屋】が大きい。  
       【城】が燃える。  
       【手】が大きい。  
       【石】を蹴る。  
       【木】を切る。  
       【枝】をはらう。  
       【葉】が落ちる。  
       【ズボン】をはく。

- 【靴】を脱ぐ。  
 【雨】が冷たい。
- 並立素性 1 : 〈SPA〉〈GAT〉; 〈KND〉  
 並立素性 2 : 〈AUT〉〈EDI〉〈LIQ〉〈PAS〉〈SOL〉〈POT〉  
 〈PRO〉

## ／SPA／ 場所の領域

### LOC (locus)

- 概要 : ヒトが活動する場所。または、移動の始点／終点、〈CON〉が存在する場所、〈EVE〉が行なわれる場所。
- 名詞句例 : 学校、病院、外、日本、田舎、部屋、海、山、川、地球、席、場所；上、下、前、後ろ....
- 構文 1 : A 〈HUM〉ガ Xニ／へ 戻る  
 Xニ A 〈CON〉ガ ある  
 Xデ A 〈EVE〉ガ ある  
 Xデ A 〈HUM〉ガ B 〈ACT〉する
- 構文 2 : A 〈HUM〉ガ Xニ／へ 登る  
 A 〈HUM〉ガ Xヲ 歩く  
 A 〈HUM〉ガ Xニ／へ 行く  
 A 〈HUM〉ガ Xニ 住む  
 A 〈HUM〉ガ Xデ 暮らす  
 A 〈HUM〉ガ Xヲ 掃除する  
 Xガ A 〈LOC〉カラ 遠い／近い  
 Xガ 広い／狭い  
 Xガ 涼しい／寒い
- 文例 : 【学校】で勉強する。  
 【部屋】で寝る。  
 【田舎】へ帰る。  
 【台所】を掃除する。  
 【ろうか】を歩く。  
 【席】に戻る。
- 並立素性 1 : 〈CON〉〈ORG〉〈GAT〉  
 並立素性 2 : 〈ANI〉〈CON〉あるいはその部分も場所になりうるが、それに〈LOC〉は記載されない。

### INT (interior)

- 概要 : 具体的に射し示すことができるもののうち、立方体の五方または六方を囲まれているもの、あるいは平面对の三辺または四辺を囲まれているもの。建物や乗り物の内部。身体部位のうち、口や鼻など開口部を持つもの。
- 名詞句例 : 中、空間；  
 箱、穴；  
 ビル、家、二階、台所、トイレ；  
 車、電車、船、飛行機、地下鉄；  
 鼻、耳、目....
- 構文 1 : Aガ Xニ／Xの中ニ 入る  
 Aヲ Xニ／Xの中ニ 入れる  
 Aガ Xカラ 出る  
 Aヲ Xカラ 出す
- 構文 2 : Xガ 広い／狭い  
 Xガ 混む

- 文例 : 学校の【中】に忍び込む。  
 【箱】に宝物を入れる。  
 【穴】にもぐる。  
 【土】に埋める。  
 【温泉】に浸かる。  
 【雪】に埋まる。  
 【ビル】に入る  
 【二階】に運び込む。  
 【庭】が広い。  
 【電車】で寝る。  
 【船】に荷物を運び込む。  
 【電車】に乗り込む。  
 【バス】が混む。  
 【船】で寝る。  
 荷物を【飛行機】に積み込む。  
 【鼻】をほじくる。  
 【目】にゴミが入る。
- 並立素性 1 : <CON> <LOC> <AUT>  
 注記 : 「下」や「上」に関しては素性を作らないのに対して、「中」に関連する素性だけを設けるのは、「中」であることを要求する述語が比較的多いと考えられるからである。  
 「玄関から入る、窓から出る」は<INT>ではなく<CON>を振る。これらは通過点を表わしている。  
 「箱の左に入れる」「バスの後ろが混む」は「Xの中」と交替不可能なため<INT>ではなく、<CON>を振る。

#### ORG (organization)

- 概要 : ヒトがそこに所属することで成り立つ組織や活動母体。結果として、そこに属するメンバーの活動や感情がその組織全体のものであるかのように捉えられたり、あるメンバーに代表権が生じて組織全体が意思決定権を持つことになる。
- 名詞句例 : 学校、病院、警察、日本、店、PTA、チーム、グループ、家庭....
- 構文 1 : A <HUM> ガ Xノ B <ROL> だ  
 A <HUM> ガ Xデ B <ROL> ヲ している  
 A <HUM> ガ Xニ 行っている / 通っている  
 A <HUM> ガ Xニ 入る / 加わる / 就職している  
 A <HUM> ガ Xヲ 営業する / 経営する  
 A <HUM> ガ Xヲ 辞める / 退職する  
 Xデ A <ROL> ヲ 雇う  
 Xガ Aヲ 発表する  
 Xガ Aヲ 提案する  
 Xガ Aヲ 決定する  
 Aガ Xデ 人気がある
- 文例 : 【日本】は非核三原則を堅持している。  
 うちの娘はその【劇団】でダンサーをしている。  
 その【病院】に入院する。  
 その【店】は値段が高い。  
 【警察】で犯人を探している。  
 その【会社】では社長秘書を探している。  
 【家庭】を営む。  
 アパートを【経営】する。  
 その【チーム】が優勝する。

その【グループ】が活動する。

【学校】が校則を決定する。

【PTA】が校則を検討する。

並立素性 1 : ;〈GAT〉

並立素性 2 : 〈CON〉〈LOC〉〈APO〉〈PRO〉

注記 : 「海外」「九州」などが国や自治体を指す場合もあるが、上記の特徴を持たないので〈ORG〉とはしない。  
「そのチームは古い／新しい」は〈ORG〉だが、「そのチームは若い／チームが若返った」という場合は、個々の構成員の年齢に焦点が当てられているため、〈GAT〉とした。

## NET (network)

概要 : 交通網、公共エネルギー、生命保険などネットワークとしての側面を持つが、それを利用することに力点があり、たとえそこに加入あるいは利用可能でもメンバーには何の役割も振られず活動母体とは認めにくいもの。

名詞句例 : 電話、ガス、電気；  
鉄道、道路、バス、地下鉄、船、電車、飛行機；  
保険、マーリングリスト....

構文 2 : A 〈HUM／ORG〉ガ Xニ 加入する  
A 〈LOC〉ニ Xガ 通る  
A 〈LOC〉ニ Xガ 通す  
A 〈LOC〉ニ Xガ 走っている

文例 : 【電話】に加入する。  
【保険】に入る。  
【マーリングリスト】から除名する。  
村に【電気】を引く。  
【ガス】を止める。  
【ガス】が断絶する。  
【鉄道】を延ばす。  
そこへ【地下鉄】を通す。  
ここまで【バス】が通っている。  
その町に【電車】が走っている。

並立素性 1 : 〈PHE〉 〈AUT〉

## SPA (space)

概要 : 場所を表す概念のうち〈LOC〉〈INT〉〈ORG〉〈NET〉のいずれにも特定できないもの。論理・思考・作品空間を含む。

名詞句例 : 世の中、世界、地獄、胸、腹、法案、舞台、漫画、小説、巢....

構文 2 : Xニ A 〈INF〉ガ 載る  
Xニ A 〈INF〉ヲ 載せる  
Xニ A 〈INF〉ヲ 描く  
Xニ A 〈INF〉ガ 登場する

文例 : 彼とは住む【世界】が違う。  
源氏物語の【世界】にいざなう。  
【地獄】に落ちたような気分だ。  
その事実を【胸】に秘める。  
【腹】で笑う。  
政府は母性保護を【法案】に入れる。  
この小説の【舞台】は京都だ。  
3人の女性がその【小説】に登場する。  
彼の写真が【新聞】に載る。

注記 : 自分の【城】に閉じこもる。  
: 比喩的な意味を表す名詞句のほとんどに〈A B S〉が振られるが、場所についての比喩には〈S P A〉が振られる。

／ P R C ／ 出来事および動作／作用の領域

P H E (phenomenon)

概要 : 自然現象、天候現象、生理現象のうち、その成立／変化／消滅に関するもの、あるいはその程度か結果に着目したもの。ヒトの利用するエネルギーのうち実体の曖昧なもの。(他動詞のうち、否定命令が可能なものはここに含まれる)〈N A T〉〈P L A〉〈G A S〉〈E L M〉〈P O T〉以外の自然現象。

名詞句例 : 日差し、地震、噴火、雪崩、霧、波；  
光、西日、照り返し、きらめき、音、煙、炎、南風、そよ風、熱風、サーチライトの光；電気、ガス；  
空模様、雲行き、朝の空気、木枯らし；  
天気、寒さ、残暑、冷え込み、気候、北海道の冬；  
騒音、油汚れ、刺激、酸、酒；  
鳥の声(快い)、音楽；  
呼吸、鼻息、あくび、くしゃみ、よだれ、鼻水、汗、涙、  
病気、疲労、痛み、主将の故障、けが、しみ、かゆみ、ショック、  
しもやけ、障害、皮下脂肪、ひげ、歯、牙、髪....

構文 2 : Xガ はげしい／ひどい／強い  
Xガ 深い  
Xガ 重い

文例 : 【雨】が降る。  
【雪】が降る。  
【涙】を流す。  
【汗】をかく。  
【雲】がわく。  
【温泉】がでる。  
【火】が燃える。  
【地震】が起きる。  
【炎】がゆれる。  
【火】で薪を燃やす。  
【日差し】がまぶしい。  
彼は【病気】になった。  
【一酸化炭素中毒】で死ぬ。  
【雨】が強まる。  
【痛み】がひどい。  
【汚れ】がきたない。  
【おしっこ】をもらす。  
【あくび】が出る。  
【くしゃみ】が出る。  
【ひげ】が生える。  
【歯】が抜ける。  
【電気】をつける。  
【ガス】で湯を沸かす。

並立素性 2 : 〈C O N〉〈L I Q〉〈N A T〉

注記 : 自然現象の出現／移動／消滅については〈N A T〉とする。  
ヒトの感覚器官を通じて受け取る刺激「味、匂い、音、色」についてはその程度に着目している場合〈G R A〉と並立させたが、それ以外

は〈GRA〉と並立させない。「雨が強い」という場合にも〈GRA〉ではなく、〈PHE〉を振る。  
 〈RES〉は並立させない。「しみが残る」という場合にも〈RES〉ではなく、〈PHE〉を振る。  
 「息をする／止める」は「呼吸する」と同義語であると考え〈PRC〉とする。  
 「くしゃみをする／こらえる」「おしっこをする／がまんする」は〈ACT〉とする。

#### NAT (natural entity)

- 概要 : 自然現象のうち存在・移動に関するもの、あるいはその位置に着目されているもの。
- 名詞句例 : 台風、風、地球、惑星、梅雨前線、天体、海流、高気圧、寒冷前線、雲....
- 構文1 : A〈LOC〉ニ Xガ 近づく
- 構文2 : A〈LOC〉ニ Xガ ある (時制は現在)
- Xガ 進む
- Xガ A〈LOC〉ニ 接近する
- Xガ A〈LOC〉ヲ 通過する
- Xガ A〈LOC〉ニ／へ 来る
- Xガ A〈LOC〉ヲ 流れる
- Xガ 回転する
- Xガ A〈LOC〉ニ／へ 押し寄せる
- 文例 : 【太陽】が沈む。  
 【台風】が接近する。  
 台風の【目】が接近する。  
 【梅雨前線】が通過する。  
 【地球】が回転する。  
 その【風】が公転する。  
 【光】が直進する。  
 【溶岩】が流れる。  
 【雲】が流れる。  
 【夕立】が来る。  
 【雲】が視界を遮る。  
 台風一過で半日が過ぎ、ようやく【水】が引いてきた。
- 並立素性2 : 〈PHE〉

#### PLA (plant)

- 概要 : 生えたり、実ったりする主体。主に、植物、果物など。
- 名詞句例 : 木、桜、梅、茶、ソバ、農作物、実、苺、みかん、ワカメ....
- 構文2 : Xガ 枯れる
- Xガ 咲く／散る
- Xガ 生える
- Xガ なる
- A〈HUM〉ガ Xヲ 植える
- A〈HUM〉ガ Xヲ 収穫する
- 文例 : 【桜】が咲く。  
 【実】が生る。  
 【苺】が実る。  
 【花】が散る。  
 【茶】を摘む。  
 【蕎麦】を植える。

並立素性 2 : 【茶】を栽培する。  
 <CON>  
 注記 : 「収穫する」のヲ格にたつことができる貝の類（「牡蠣」など）も、  
 <PLA>とする。  
 「ひげ」「毛」などが「生える」場合は<PHE>を振る。

#### G A S (gaseous)

概要 : 気体。気体と液体・固体との状態変化を表わす述語と共起するもの。  
 名詞句例 : ガス、気体、空気、酸素、息、煙草....  
 構文 1 : A <HUM> ガ Xヲ 吸う  
 構文 2 : Xガ 液体ニ なる  
 Xガ 固体ニ なる  
 Xガ 充満する  
 文例 : 高原の【空気】はおいしい。  
 【煙草】を吸う。  
 【煙草】をくゆらす。  
 【ガス】が漏れる。  
 その【二酸化炭素】が充満する。  
 【息】を吹き掛ける。  
 注記 : 「赤ちゃんが煙草を飲み込む」の場合「煙草」は<CON>に解釈されるが、「煙草を吸う」は<GAS>にする。

#### E L M (element)

概要 : それぞれの専門分野で存在が認められているもの。  
 名詞句例 : ウイルス、細菌、タンパク質、鉄、カルシウム、種....  
 構文 2 : Xガ 繁殖する  
 Aガ Xヲ 合成する  
 Aガ Xヲ 含む  
 文例 : 【ウイルス】が繁殖する。  
 【たんぱく質】を合成する。  
 【カルシウム】を含む。  
 【栄養】を摂取する。  
 サラブレッドの【種】をつける。

#### P O T (potency)

概要 : 動物の身体部位の機能。  
 名詞句例 : 胃、心臓、内臓、のど、足、顎、肩....  
 構文 1 : Yノ／ガ Xガ Zダ／ [形容詞 (程度 ; 評価)]  
 Y <ANI> ノ／ガ Xガ 弱る  
 Y <ANI> ノ／ガ Xガ 強い／弱い  
 Y <ANI> ノ／ガ Xガ 良い／悪い  
 Y <ANI> ガ Xヲ 鍛える  
 Y <ANI> ガ Xヲ 壊す  
 Y <ANI> ガ Xヲ 弱くする  
 Y <ANI> ガ Xヲ 悪くする  
 Y <ANI> ガ Xガ 丈夫だ  
 文例 : その老人は【耳】が弱い。  
 その外野手は【肩】が強い。  
 【心臓】が弱る。  
 【胸】を悪くする。  
 【足】を鍛える。  
 そのおばちゃんは【歯】が丈夫だ。

- 並立素性 2 : 〈CON〉  
 注記 : 「強い／弱い」などが共起するが、「側面語」とは捉えにくい。  
 ただし、「弱い」に対する動詞は「弱まる」ではなく「弱る」。

### ACT (activity)

- 概要 : ヒトの意思的に行う動作（動詞のうち、肯定命令が可能なもの）。  
 名詞句例 : テニス、料理、研究、報道、要求、説明、評価、台所....  
 構文 1 : A 〈HUM／ORG〉ガ Xヲ する  
 A 〈HUM〉よ、Xヲ しろ  
 構文 2 : A 〈HUM／ORG〉ガ Xヲ 手伝う  
 A 〈HUM／ORG〉ガ Xヲ 行う  
 A 〈HUM／ORG〉ガ Xヲ 始める／やめる／済ませる  
 A 〈HUM／ORG〉ガ Xガ できる  
 A 〈HUM／ORG〉ガ B 〈HUM／ORG〉カラ Xヲ 受ける  
 Xガ 多い  
 Xガ 少ない  
 Xガ 難しい  
 Xガ 困難だ  
 Xガ 可能だ  
 Xガ 早い  
 Xガ 遅い  
 文例 : 彼は【料理】をする。  
 【研究】を始める。  
 【説明】を受ける。  
 【評価】をする。  
 【台所】を手伝う。  
 【おしっこ】をする。  
 【おしっこ】を我慢する。  
 【くしゃみ】をする。  
 【くしゃみ】をこらえる。  
 並立素性 2 : 〈MAN〉  
 注記 : 「A 〈PIT〉ニ B 〈LOC〉デ Xガある」が未来を表わすときは、  
 〈EVE〉を振る。「A 〈HUM〉ガ Xガ上手い／下手だ」のように、  
 その方法について評価を下す場合には〈MAN〉とする。  
 構文 1 が満たせなくても、意思的な動作で「A 〈HUM〉が Xヲ我慢  
 する」といえる場合には〈ACT〉を振る場合もある。

### EVE (event)

- 概要 : ある時間ある場所でヒトが集まって計画的に行われる催しもの。  
 名詞句例 : 結婚式、入学式、コンサート、授業、講義、葬式、ピクニック、  
 発表....  
 構文 1 : A 〈PIT〉ニ B 〈LOC〉デ Xガ ある（時制は未来）  
 構文 2 : A 〈LOC〉デ Xガ 開かれる／開催される／行なわれる  
 文例 : 今日は赤坂で【結婚式】がある。  
 そのホールで外国人歌手の【コンサート】が開かれる。  
 並立素性 2 : 〈PIT〉  
 注記 : 「結婚式に間に合う」「入学式が近い／近づく」は〈PIT〉とする。

### APO (appointment)

- 概要 : あらかじめ決められた予定に従って行なわれる行動。例えば、ダイヤ  
 の決められた乗物の運行、〈ORG〉の営業、サービス活動、食生活  
 を成立させる単位など。

- 名詞句例 : 約束、計画、企画；  
電車、地下鉄、終電、バス、船、飛行機；  
おやつ、朝食、お茶；  
学校、動物園、銀行、美術館、市役所....
- 構文 2 : A〈HUM〉ガ Xヲ 抜かず  
A〈HUM〉ガ Xヲ 抜く  
A〈PIT〉ニ／カラ Xガ 始まる  
A〈PIT〉ニ／デ Xガ 終わる  
A〈PIT〉ニ／カラ Xガ 開く  
A〈PIT〉ニ／デ Xガ 閉まる  
A〈PIT〉ガ Xヲ 休む  
A〈PIT〉ガ Xガ 休みだ  
まだ Xガ ある  
もう Xガ ない  
Xガ 運休する  
Xガ 止まる
- 文例 : もう【電車】がない。  
今日は【朝食】を抜いた。  
明日は【学校】がない。  
9時に【銀行】が始まる。  
今日は【動物園】が休みだ。  
5時に【美術館】が閉まる。
- 並立素性 2 : 〈PIT〉
- 注記 : 「終電に間に合う」「朝食に遅れる」は〈PIT〉とする。

### PRO (product)

- 概要 : ヒトの生産あるいは創作活動の結果生じるモノ、あるいは情報を担った作品。
- 名詞句例 : ごはん、おかず、スカート、ビル、会社、手紙、絵....
- 構文 1 : A〈HUM〉ガ Xヲ 作る／製造する／生産する／こしらえる
- 構文 2 : A〈HUM〉ガ Xヲ 焼く  
A〈HUM〉ガ Xヲ 書く  
A〈HUM〉ガ Bヲ Xニ まとめる  
Xガ できる／できあがる  
Xガ 完成する
- 文例 : 母が【ご飯】を炊く。  
母がイースト菌を使って【パン】を焼く。  
母が【湯】を沸かす。  
姉が【スカート】を縫う。  
その男が【穴】を掘る。  
その会社が【ビル】を建設する。  
彼が【論文】を書く。  
画家が【絵】を描く。  
その話を【文書】にまとめる。  
そこに【港】ができる。  
新しい【法律】を作る。
- 注記 : 行為や活動の企画、実行については〈PRO〉は振らない。  
「パンを焼く」には二義あるが、「トーストにする」という意味では〈EDI〉を振る。

### RES (resultant)

- 概要 : ある行為や変化の後に生じる状態あるいはその評価。

名詞句例 : 結果、成果、敗北、被害、記録、優勝、当選、事故、災害；  
勝利、実現、間違い、損失、息子の不始末、違反；  
達成、完成、到達、到着、収穫、成功....

構文2 : (～という) Xニ なる  
Xガ 起きる  
Xガ 残る  
Aガ Xヲ 引き起こす  
Aガ Xヲ 引き出す  
Aガ Xヲ 生み出す  
Aガ Xヲ 出す  
Aガ Xヲ 得る  
Aガ Xヲ こぎつける  
Aガ Xニ 終わる  
Aガ Xヲ もたらす  
Aガ Xヲ 免れる

文例 : 彼の【当選】は危ない。  
【事故】が起きた。  
そのチームの【優勝】が決まる。  
【違反】を犯す。  
【成果】が残る。  
【記録】を出す。  
【収穫】をあげる。

注記 : 「収穫が多い／少ない」は〈GRA〉。

#### P R C (process)

概要 : 動きや変化のうち、〈PHE〉〈NAT〉〈PLA〉〈GAS〉〈ELM〉〈POT〉〈ACT〉〈EVE〉〈APO〉〈RES〉〈PRO〉のいずれにも特定できないもの。社会現象を含む。

名詞句例 : 回転、移動、処理、変化、流れ、進行、拡大、作用、反応、変動；  
消化、吸収、文明化、技術革新、経済発展、成長、理解；  
回復、実用化、成績の向上、ピアノの上達、進歩；  
若者の台頭、意識の変化、高齢化、増加、母に会えたこと；  
遅刻、無断欠勤、牛の歩み、借金の返済、単身赴任；  
OA化、アルバイト、カラー印刷、衝撃、押し、転勤、通勤；  
コピー取り、人生、独身生活、助手生活、助手、付き合い；  
皆の協力、貿易の拡大均衡、沸騰、教育論争、戦争、攻撃；  
息、足、口、目、耳....

構文2 : Xガ 始まる／終わる  
Xガ 止まる  
Xガ 続く (断続的な繰り返しではなく、一続きの過程として捉えられる場合)  
Aガ Xガ 速い／遅い  
Xガ 進む／進行する  
Xガ 和らぐ  
Aガ Xヲ 始める

文例 : その機械は【回転】が速い。  
内需の【拡大】を図る。  
地価の【降下】を阻止する。  
合格者の【発表】があった。  
【息】をする。  
【息】を止める。  
【足】を止める。

／ A B S ／ 抽象の領域

**P R I (price)**

- 概要 : お金を表わす概念。金額やその程度に着目した述語や、お金のやり取りに着目した述語に従属するもの。
- 名詞句例 : 金、寄付；  
値段、価格、地価、物価、費用、コスト；  
賃金、電話代、家賃、給料、退職金、利子、利息；  
利益、もうけ、おつり....
- 構文 1 : Aノ／ガ Xガ B〈CUR〉ダ／ [形容詞(程度)]  
Aノ／ガ Xガ B〈CUR〉する  
A(HUM)ガ Xヲ 計算する
- 構文 2 : Aノ／ガ Xガ 高い／安い  
Aノ／ガ Xガ 高い／低い  
Aノ／ガ Xガ 多い／少ない  
Aノ／ガ Xガ 大きい／小さい  
A〈HUM〉ガ Xデ Bヲ 買う  
A〈HUM〉ガ B〈HUM／ORG〉ニ／へ Xヲ 払う／支払う  
A〈HUM〉ガ B〈HUM／ORG〉カラ Xヲ もらう  
A〈ORG〉カラ B〈HUM〉ニ Xガ 出る
- 文例 : 彼の【収入】は二十万円だ。  
その会社の【ボーナス】は五十万円だ。  
この本の【価格】は三千元だ。  
その預金の【利子】は高い。  
団体旅行の【代金】は安い。  
特別に 【ボーナス】が出る。  
【給料】をもらう。  
【寄付】を集める。  
大家さんに【家賃】を払う。  
【寄付】で施設を増築する。  
【電話代】がかさむ。  
【費用】を計算する。
- 注記 : 形容詞辞書では次にあげる〈MEA〉特別されていなかった。

**M E A (measure unit)**

- 概要 : 計測できる尺度。数量や、そこから推論可能な範囲にある、程度や評価に着目した述語に従属するもの。
- 名詞句例 : 背、身長、標高、気温、熱、血圧、温度、緯度、精度、検挙率、  
正答率、確立(高い／低い)；  
面積、幅、道幅、川幅、肩幅(広い／狭い)；  
長さ、距離(長い／短い)；  
期間、時間(長い／短い)；  
歳、年齢(若い)；  
数、量、(大きい／小さい／多い／少ない)；  
人数、水かさ、個数、回数、日数(多い／少ない)；  
水深、深さ、奥行き(深い／浅い)；  
サイズ、体積、容積、角度、勾配(大きい／小さい)；  
重量、目方、比重、重さ(重い／軽い)；  
速度、スピード(速い／遅い)；  
圧力、風力、押す力、引力、水力、握力、火力、メガネの度、アルコール度(強い／弱い)；  
濃度(濃い／薄い)....

- 構文 1 : Aノ／ガ Xガ B〈DUR／DIS／ITM／RAT／QUA〉ダ  
／ [形容詞 (程度)]
- 構文 2 : Aノ／ガ Xガ 高い／低い  
Aノ／ガ Xガ 大きい／小さい  
Aノ／ガ Xガ 広い／狭い  
Aノ／ガ Xガ 強い／弱い  
Aノ／ガ Xガ 多い／少ない  
Aノ／ガ Xガ 長い／短い  
Aノ／ガ Xガ 重い／軽い  
Aノ／ガ Xガ 深い／浅い  
Aノ／ガ Xガ 濃い／薄い  
Aノ／ガ Xガ 速い／遅い  
Aノ／ガ Xガ 若い  
C〈HUM〉ガ Xヲ 計る  
C〈HUM〉ガ Xヲ 測る  
C〈HUM〉ガ Xヲ 計測する  
C〈HUM〉ガ Xヲ 数える  
C〈HUM〉ガ 上がる／下がる  
Aノ／ガ Xガ 増える／減る  
Aノ／ガ Xガ 高まる  
Aノ／ガ Xガ 広がる  
Aノ／ガ Xガ 強まる
- 文例 : その公園は【面積】が100平方メートルだ／広い。  
今日は【気温】が20度だ／高い／低い。  
現在の車の【速度】は60km/hだ。  
このクラスは【人数】が50人だ／多い／少ない  
この洞窟は【奥行き】が30メートルだ／深い。  
彼は【年】が25歳だ／若い。  
テレビの【音】が小さい。  
システムの【精度】を計る。  
公園の【面積】が広がる。  
車の【スピード】が上がる。  
月の【引力】が強まる。  
その仮名漢字変換システムは【精度】が99%だ。  
その仮名漢字変換システムは【精度】が高い。  
その仮名漢字変換システムは【精度】が良い。  
その重りは30グラムの【重量】がある。  
この公園には十分な【広さ】がない。  
規定の【重量】を超える。  
平均の【身長】を下回る。
- 並立素性 2 : 〈INF〉
- 注記 : 形容詞辞書では「強い」に従属する名詞句は〈GRA〉を振っていたが、名詞辞書では計測可能なものは〈MEA〉とする。  
数量や計測に関連のない述語に従属する場合でも、数量や程度を表わす成分が見出し語Xを連体あるいは連用修飾することが必須である場合には、〈MEA〉を振る。  
「AガXガある」が標準より大きい値をとる意を表わす場合は、〈QAL〉。  
「AガBニXヲ尋ねる」は〈INF〉。

### S O C (social bonds)

- 概要 : 二者関係を表わす概念のうち、程度に着目した述語や二者関係の成立／消滅に着目した述語に従属するもの。
- 名詞句例 : つながり、関係、関連、縁、関わり、結びつき、結束；  
差、食い違い、格差、賃金格差....
- 構文 1 : Aト Bトノ X  
Aト Bト Xガ ある (テンスは現在を表わす)  
Aト Bトノ／ガ Xガ Cダ／ [形容詞 (程度)]
- 構文 2 : Aト Bトノ／ガ Xガ 強い／弱い  
Aト Bトノ／ガ Xガ 大きい／小さい  
Aト Bトノ Cニ Xガ 多い／少ない  
Aガ Bト Xヲ 結ぶ／樹立する  
Aト Bトニ Xガ できる  
Aト Bトノ Xヲ 損ねる  
Aト Bト Xヲ 断絶する
- 文例 : その事件は彼と【関係】がある。  
二つの品物には【差】はない。  
そのチームは【結束】が強い。  
男女間の【格差】が大きい。  
両者の言い分には【食い違い】が多い。  
新たに その会社と 【関係】を 結ぶ。  
彼は 彼女との【関係】を 損ねた。
- 注記 : 「二人の付き合いは深い」は (S O C) を振るが、「彼は付き合いが広い／狭い」は (G R A) とした。

### G R A (gradable)

- 概要 : 計ることはできないが、程度に着目した述語に従属するもののうち、〈S O C〉以外で、「高い／低い／大きい／小さい／広い／狭い／強い／弱い／多い／少ない／重い／軽い／深い／浅い／濃い／薄い」に従属するもの。また、そこから推論可能な範囲にある評価を表わす述語に従属するもの。
- 名詞句例 : 知能、身分、地位、生活水準、歌のキー、評価 (高い／低い)；  
規模、スケール、反響、支障、ダメージ、形 (大きい／小さい)；  
ざるの目、木目、肌のきめ、粒、粒子 (大きい／小さい／荒い)；  
心、了見、範囲、度量、年齢層、レパートリー、趣味、付き合い (広い／狭い)；  
知識 (広い／深い／浅い)；  
精神力、忍耐力、毒、あく、紫外線、刺激、批判、  
非難、抵抗 (強い／弱い)；  
収穫 (多い／少ない)；  
成果 (多い／少ない／大きい／小さい)；  
腰 (高い／低い／重い／軽い)；  
位置 (深い／浅い)；  
塩気、甘味 (濃い／薄い)；  
可能性 (高い／低い／大きい／小さい／強い／弱い／多い／少ない／濃い／薄い)；  
影響 (大きい／小さい／強い／弱い／多い／少ない)；  
効果 (大きい／小さい／強い／弱い／多い／少ない／薄い)....
- 構文 1 : Aノ／ガ Xガ Bダ／ [形容詞 (高い | 低い／大きい／小さい／広い／狭い／強い／弱い／多い／少ない／重い／軽い／深い／浅い／濃い／薄い)]
- 構文 2 : Aノ／ガ Xガ 高まる

- Aノ／ガ Xガ 広がる  
 Aノ／ガ Xガ 強まる／弱まる  
 Aノ／ガ Xガ 増える／減る  
 Aノ／ガ Xガ 深まる
- 文例 : 彼は【知識】が広い。  
 この雑誌は知識層からの【評価】が高い。  
 彼は【忍耐力】が強い。  
 その宣伝は【反響】が大きい。  
 彼らは【生活水準】が高い。  
 このプロジェクトは【規模】が大きい。  
 彼は【趣味】が広い。  
 この薬品は【毒】が強い。  
 彼はその仕事の【経験】が浅い。  
 母親から長男への【期待】が大きい。  
 彼は政治への【関心】が深い。  
 背景の【色】が濃い。  
 煮物の【味】が薄い。  
 今回の旅行は【収穫】が多かった。  
 君も【苦勞】が多いね。  
 経済への【影響】が強まる。  
 ピアノの【音】を強くする。  
 土地の【価値】が落ちる。  
 経営の【規模】を拡大する。  
 サービスの【質】が向上する。  
 小説の【奥行き】を増す。  
 秋の【色】が深まる。  
 【身分】が高い。  
 【身分】が良い。  
 過去最低の【規模】になる。  
 一億円の【値打ち】がある。
- 並立素性 2 : 〈A B S〉
- 注記 : 程度に関連のない述語に従属する場合でも、程度や評価を表わす成分が見出し語 X を連体あるいは連用修飾することが必須である場合には、〈G R A〉を振る。  
 〈P H E〉で、人間の感覚器を通じて受けとる刺激「味、匂い、音、色」には〈G R A〉を振るが、それら以外の自然現象や生理現象では「強い／弱い」と共起しても〈G R A〉ではなく、〈P H E〉とする。

#### A T T (attribute)

- 概要 : 程度に着目した述語に従属するもののうち、〈P R I〉〈M E A〉〈S O C〉〈G R A〉以外のもの。
- 名詞句例 : 傾斜、カーブ〈鋭い／鈍い〉；  
 決意（固い）；  
 語気（荒い）；  
 経験（浅い）；  
 非常識、誤解、時代錯誤、おかど違い、無知（甚だしい）；  
 成績の向上、進境、上達、進歩、台頭、高齢化（著しい）；  
 インフレ、男女差別、表面の凸凹、企業間の競争、この道の交通、人の往来、選挙線、練習、教育論争、戦争、議論、体力の衰え、消耗、凍結、技術革新、過疎化、好き嫌い、天候の変化、揺れ（激しい）；  
 物忘れ、空襲、叱責、乱暴〈ひどい〉；

- 塩（辛い／利き過ぎる）；  
しょうゆ（濃い／薄い）....
- 構文 1 : 以下のものが成り立たない  
C 〈HUM〉ガ Xヲ計画する／C 〈HUM〉ガ Xヲ計算する  
Aノ／ガ Xガ 高い／低い／大きい／小さい／広い／狭い／強い  
／弱い／多い／少ない／重い／軽い／深い／浅い／濃い／薄い  
Aノ／ガ Xガ 良い／悪い
- 構文 2 : Aノ／ガ Xガ 甚だしい  
Aノ／ガ Xガ 著しい  
Aノ／ガ Xガ 荒い  
Aノ／ガ Xガ 固い  
Aノ／ガ Xガ 鋭い
- 文例 : この味噌汁は【塩】が辛い。  
【非常識】も甚だしい。  
彼は【語気】を荒くした。  
青森から東京までの【道】は長い。  
そのがけの【傾斜】は緩い。

#### R E C (reciprocal)

- 概要 : 二者関係を表わす概念のうち、〈S O C〉ではなく、評価に着目した述語に従属するもの。また、二者関係の成立／消滅に関する述語に従属するもの。
- 名詞句例 : 仲、相性、間....
- 構文 1 : AトBトノ／ガ Xガ Cダ／ [形容詞 (評価)]  
以下のものが成り立たない。  
AトBトノ／ガ Xガ ある
- 構文 2 : AトBトノ／ガ Xガ 良い／悪い  
AトBトノ／ガ Xガ 良くなる／悪くなる  
AトBトノ Xガ うまくいく  
Aガ BトCトノ Xヲ 取り持つ  
Aガ BトCトノ Xヲ 裂く
- 文例 : 彼と彼女とは【仲】が良い。  
二人は【相性】が悪い。  
両者の【間】を取り持つ。  
二人の【間】を裂く。

#### P E R (personality)

- 概要 : 性格や性質を表わす概念で、評価に着目した述語に従属するもの。
- 名詞句例 : 性格（明るい／軽い／きつい／冷たい／暗い／難しい／丸い／良い／悪い／おもしろい）；  
気だて（優しい／良い／悪い）；  
気質（明るい／暗い／良い／悪い）；  
意地（きたない／悪い）；  
人柄（丸い／良い）；  
人当たり（柔らかい／良い）；  
人（良い／悪い）；  
気性、気風（荒い）；  
根性（きたない）；  
物腰（柔らかい）；  
根（明るい／暗い）....
- 構文 1 : A 〈A N I〉ガ Xガ Bダ／ [形容詞 (程度)]
- 構文 2 : A (A N I) ガ Xガ 良い／悪い

- A〈ANI〉ガ Xガ 明るい／暗い  
 A〈ANI〉ガ Xガ 柔らかい  
 A〈ANI〉ガ Xガ 丸い  
 A〈ANI〉ガ Xガ 荒い
- 文例 : 彼は【性格】が良い。  
 彼は【趣味】が悪い。  
 彼女は【気だて】がやさしい。  
 彼は【根】が明るい。  
 君も【人】が悪いね。  
 外見で【人】を判断する。  
 あの人は【人間】ができています。
- 注記 : ヒトのふるまいの仕方「良い／悪い」がいえるものは〈MAN〉。

### M I N (mind)

- 概要 : 動物の感性や知能。評価に着目した述語に従属するもの。  
 名詞句例 : 良心、理性、知性；  
 感覚、聴覚、味覚、嗅覚、感性、勘、直感；  
 眼力、神経、頭....
- 構文1 : A〈ANI〉ノ／ガ Xガ Bダ／ [形容詞 (評価)]  
 構文2 : A〈ANI〉ノ／ガ Xガ 鋭い／鈍い  
 A〈ANI〉ノ／ガ Xガ 鋭敏ダ  
 A〈ANI〉ノ／ガ Xガ 豊かダ  
 Xガ 働く  
 A〈ANI〉ガ Xヲ 働かす  
 A〈ANI〉ガ Xヲ 使う
- 文例 : あのヒトは【直感】が鋭い。  
 あのヒトは【勘】が良い。  
 あのヒトは【頭】が鈍い。  
 あのヒトは【神経】が鋭敏だ。  
 彼は【感性】が豊かだ。  
 【勘】が働く。  
 【直観】を働かせる。  
 【神経】を使う。  
 【理性】が許さない。

### M A N (manner)

- 概要 : ヒトなどの能力や傾向。評価に着目した述語に従属するもの。  
 名詞句例 : 考え方、見通し、判断、方法、ひもの結び方、動き、扱い、泳ぎ、  
 態度、理解、読み、考え、見方、詰め、口調、守り、ガード、  
 ディフェンス、スウィング、口のきき方、荷物の取扱、仕事ぶり、  
 言葉使い、人使い、金使い、行動、着こなし、仕種、ふるまい、  
 のみこみ、あきらめ、決断、芝居の設定、発想、  
 映画のキャスティング、発表、説明、手口、やり口、やり方、  
 働きぶり、センス、色づかい；  
 頭、口....
- 構文1 : A〈HUM／AML／ORG〉ノ／ガ Xガ Bダ／  
 [形容詞 (評価)]  
 構文2 : Aノ／ガ Xガ 良い／悪い  
 A〈HUM／AML／ORG〉ガ Xガ 上手い／下手ダ  
 A〈HUM／AML／ORG〉ノ／ガ Xガ 甘い  
 A〈HUM／AML／ORG〉ガ Xヲ 工夫する

- A 〈HUM／AML／ORG〉ノ／ガ Xガ 荒い  
 A 〈HUM／AML／ORG〉ノ／ガ Xガ ひどい
- 文例 : 彼は【考え方】が若い。  
 選手の【動き】が良い。  
 子供の【扱い】が上手だ。  
 猿は【泳ぎ】が下手だ。  
 あの方は【頭】が固い。  
 彼女は【口】が達者だ。  
 彼の生徒への【評価】は不公平だ。  
 彼女は【詰め】が甘い。  
 彼は【人使い】が荒い。  
 彼は車の【運転】ができる。  
 【色使い】を工夫する。
- 並立素性2 : A C T

### FOR (forms/structures)

- 概要 : 評価や具体的な属性に着目した述語に従属するもののうち、〈REC〉〈PER〉〈MIN〉〈MAN〉以外で、「良い／悪い」に従属するもの。
- 名詞句例 : 形（丸い／四角い／三角だ／整っている）；  
 色（赤い／白い／黒い／青い／緑だ／整っている）；  
 味（甘い／辛い／濃い／薄い／整っている）；  
 味つけ、味加減、〈濃い／薄い／整っている〉；  
 におい、香り（臭い／甘い）；  
 音（明るい／軽い）；  
 配色（美しい／明るい／整っている）；  
 色あい、色使い（整っている）；  
 ピント（甘い）；  
 肌ざわり、手ざわり（柔らかい）；  
 記憶力、切れ味、居心地、質、でき、性能、機嫌、体調、調子、  
 具合、環境、栄養、センス、趣味、家柄、育ち、血筋、血統、  
 デザイン、顔だち、体格、体つき、構図、雰囲気、印象....
- 構文1 : Aノ／ガ Xガ Bダ／〔形容詞（良い／悪い）〕  
 以下のものが成り立たない。  
 C 〈HUM〉ガ Xヲ計測する／C 〈HUM〉ガ Xヲ計算する  
 Aノ／ガ Xガ高い／低い／大きい／小さい／広い／狭い／強い／弱い  
 い／多い／少ない／重い／軽い／深い／浅い
- 構文2 : Aノ／ガ Xガ辛い／甘い  
 Aノ／ガ Xガ柔らかい／硬い  
 Aノ／ガ Xガ 丸い／四角い／三角だ  
 Aノ／ガ Xガ 赤い／白い／黒い／青い／緑だ  
 Aノ／ガ Xガ 臭い  
 Aノ／ガ Xガ 明るい／暗い  
 Aノ／ガ Xガ 重い／軽い  
 Aノ／ガ Xガ 鋭い  
 Aノ／ガ Xガ 美しい  
 Aノ／ガ Xガ きたない  
 Aノ／ガ Xガ 悪化する  
 Aノ／ガ Xガ 低下する  
 Cガ Aノ Xヲ 整える  
 Aノ／ガ Xガ 整っている

文例 : その壺は【色】が赤い。  
 そのピアノは【音】がよい。  
 その絵は【配色】が美しい。  
 その印の【形】は四角だ。  
 エンジンの【具合】がおかしい。  
 彼の【立場】はあやうい。  
 その職人は【腕】が良い。  
 そっちは【方角】が悪い。  
 このベッドは【クッション】が固い。  
 あの女優は【表情】が良い。  
 彼は【目つき】がきつい。  
 あの人は【雰囲気】が明るい。  
 味の【含み】を良くする。  
 【印刷】がぼやける。  
 祖父の【体調】が回復する。  
 先方の【都合】が悪くなる。  
 本の【売れ行き】が悪くなる。  
 彼の直球は【伸び】が良くなった。  
 【味】を整える。  
 この店は客の【種】がよそと違う。  
 爪の【形】を揃える。  
 血の【色】に染まる。  
 明るい【顔】をする。  
 すべすべした【手触り】を持つ。  
 規定通りの【形状】に仕上がる。

注記 : 評価や具体的な属性に関連のない述語に従属する場合でも、評価や具体的な属性を表わす成分が見出し語Xを連体あるいは連用修飾することが必須である場合には、〈FOR〉を振る。

#### EVA (evaluation)

概要 : 評価に着目した述語に従属するもののうち、〈REC〉〈PER〉〈MIN〉〈MAN〉〈FOR〉以外のもの。

名詞句例 : 経済、財政、国際情勢、戦局、就職戦線；  
 容体、事態、土地、土壌；  
 舌、目、耳、鼻....

構文 1 : 以下のものが成り立たない。  
 C 〈HUM〉ガ Xヲ 計測する／計算する  
 Aノ／ガ Xガ 高い／低い／大きい／小さい／広い／狭い／強い  
 ／弱い／多い／少ない／重い／軽い／深い／浅い／濃い／薄い  
 Aノ／ガ Xガ 良い／悪い

構文 2 : Aノ／ガ Xガ 明るい／暗い  
 Aノ／ガ Xガ おかしい  
 Aノ／ガ Xガ 厳しい  
 Aノ／ガ Xガ 苦しい  
 Aノ／ガ Xガ 肥えている

文例 : その国は【経済】が安定している。  
 この辺は【土地】が痩せている。  
 この国の【財政】は厳しい。  
 【国際情勢】が明るい。  
 【戦局】が苦しい。  
 経済の【不均衡】がひどい。  
 彼は【舌】が肥えている。

### CUR (currency)

- 概要 : 金額を表わす値。  
名詞句例 : 1000円、1万円、100万ドル....  
構文1 : Aノ／ガ B〈PRI〉ガ Xダ  
Aガ Xφ スル  
～するのニ Xφ かかる  
構文2 : C〈HUM〉ガ D〈HUM〉ニ Xφ 払う  
C〈HUM〉ガ D〈HUM〉ニ Xφ 支払う  
C〈HUM〉ガ D〈ORG〉ニ Xφ 預金する  
文例 : その服の値段は【千円】だ。  
このアパートの家賃は【5万円】だ。  
その車は【100万円】する。  
大分へ行くのに【3万円】かかる。  
その銀行に【50万円】預ける。

### DUR (duration)

- 概要 : 時間、期間、年齢（時間的な延長）を表わす値。  
名詞句例 : 3ヶ月、2週間、1秒、80年、3回、20才、50歳....  
構文1 : Aノ／ガ B〈MEA〉ガ Xダ  
構文2 : ～してカラ Xニ なる  
～するマデ Xφ ある  
来年、A〈ANI〉ガ Xニ なる  
C〈HUM〉ガ Xφ 遅刻する  
Aガ Xφ 延長する  
文例 : このプロジェクトの期間は【3年間】だ。  
プロジェクトが始まってから【1年】になる。  
プロジェクトが終わるまであと【2年】ある。  
【3ヶ月間】アメリカへ行った。  
彼は待ち合わせに【1時間】遅刻した。  
この時計は【5分】進んでいる。  
来年、彼女は【20才】になる。

### DIS (distance)

- 概要 : 距離、長さ（空間的な延長）を表わす値。  
名詞句例 : 5キロメートル、1センチメートル....  
構文1 : Aノ／ガ B〈MEA〉ガ Xダ  
構文2 : C〈CON／LOC〉カラ D〈CON／LOC〉マデ Xφ ある  
C〈CON／LOC〉カラ Xφ 進む  
C〈CON／LOC〉カラ Xφ 移動する  
文例 : 学校とその駅までの距離は【5キロメートル】だ。  
東京タワーの高さは【333メートル】だ。  
この鉛筆は【10センチメートル】だ。  
学校からその駅まで【5キロメートル】ある。  
東京から北へ【30キロメートル】進む。  
机と机とを【50センチメートル】離す。

### ITM (item)

- 概要 : ヒトやモノの数を表わす値。  
名詞句例 : 三百人、六頭、三つ、1個、10枚、二百本....  
構文1 : A〈HUM／AML／CON〉ノ／ガ B〈MEA〉ガ Xダ  
構文2 : C〈LOC〉ニ A〈HUM／AML〉ガ Xφ いる

- C 〈LOC〉ニ A 〈CON〉ガ Xφ ある  
 C 〈CON〉ニ Xφ 入る  
 A 〈HUM/AML/CON〉ガ Xφ 増える  
 A 〈HUM/AML/CON〉ガ Xφ 減る
- 文例 : このホールの収容人数は【千人】だ。  
 構内に持ち込める荷物の数は【1個】だ。  
 教室に生徒が【10人】いる。  
 かごの中にみかんが【三つ】ある。  
 このホールは【千人】収容できる。  
 入場者数は【一万人】に近い。  
 折り紙を【5枚】渡す。

#### R A T (ration)

- 概要 : 割合や率を表わす値。  
 名詞句例 : 50パーセント、0.5%、3割、2分の1、120 km/h....  
 構文1 : Aノ/ガ B 〈MEA〉ガ Xだ  
 構文2 : Bガ Dノ Xヲ 占める  
 AノBガ Xφ 上昇する  
 AノBガ Xφ 下降する
- 文例 : 12年前は、輸入ビールの国内消費に占める割合は【2%】だった。  
 この車の最高時速は【180 km/h】だ。  
 視聴率が【5%】上昇する。  
 その国は60歳以上の成人が人口の【3割】を占める。

#### Q U A (quantity)

- 概要 : 回数や量を表わす値。〈DUR〉〈DIS〉〈ITM〉〈RAT〉以外の数値。  
 名詞句例 : 5回、千件、10キログラム、八十平方メートル、3リットル....  
 構文1 : Aノ/ガ B 〈MEA〉ガ Xだ  
 構文2 : Aガ Xφ ある  
 AノBガ Xニ 達する
- 文例 : その商品に対する苦情電話の件数は【千件】だ。  
 彼の体重は【60キログラム】だ。  
 その部屋の面積は【八十平方メートル】だ。  
 その商品への苦情は【千件】に達する。  
 この荷物は【2キロ】ある。  
 この瓶は【3リットル】入る。

#### V A L (value)

- 概要 : 形や色を表わす段階性のない値。  
 名詞句例 : 赤、青、白、黄色、茶、クリーム....  
 四角、丸、リボン....  
 構文1 : Aノ/ガ B 〈FOR〉ガ Xだ  
 構文2 : C 〈HUM〉ガ A 〈CON〉ヲ Xニ 塗る/染める  
 C 〈HUM〉ガ A 〈CON〉ヲ Xニ 切る  
 C 〈HUM〉ガ A 〈CON〉ヲ Xニ 折る
- 文例 : 信号が【黄色】に変わる。  
 壁を【クリーム】に塗る。  
 折り紙を【四角】に折る。  
 ひもを【リボン】に結ぶ。  
 この【赤】は濃い。

## S T A (state)

- 概要 : ある一つの状態（いわゆる形容動詞語幹が状態副詞的な連用修飾として働く場合）。  
ある状態からある状態移行する境界としての状態（状態あるいは変化の度合いを計る物差しになる場合）。
- 名詞句例 : 神妙、静か、安易、いろいろ、穏やか、活発、頑固、かなり、可能、極端、逆、さかさま、幸福、巧妙、孤独；  
定員、定数、平均、天井....
- 構文 1 : Aノ／ガ Bガ Xダ  
構文 2 : AノBガ Xニ なる  
Cガ AノBヲ Xニ する  
Cガ Xヲ 保つ  
Cガ Xニ ～する  
Cガ Xヲ 越える／超える  
Cガ Xニ 達する  
Cガ Xヲ 上回る／下回る
- 文例 : 【空車】で走る。  
【健康】に暮らす。  
【安易】に考える。  
その問題について【いろいろ】と考えた。  
【穏やか】に生活する。  
【活発】に議論する。  
順序を【逆】にする。  
申込みが【定員】を超える。  
彼の身長は【平均】を下回る。  
株価が【天井】まで達する。

## R O L (role)

- 概要 : 役職名などの社会的な役割。
- 名詞句例 : 議長、先生、課長、秘書、生徒、患者、看護婦、大工、相談役....
- 構文 1 : A〈HUM〉ガ B〈ORG〉デ Xヲ している  
A〈HUM〉ガ Xニ ふさわしい  
A〈HUM〉ガ Xニ なる  
A〈ORG〉ノ Xガ B〈HUM〉ダ
- 構文 2 : A〈ORG〉ガ B〈HUM〉ヲ Xトシテ／ニ 雇う  
A〈ORG〉ガ Xヲ B〈HUM〉ニ 決める  
B〈HUM〉ガ Xヲ 引き受ける  
A〈HUM〉ガ Xヲ 務める  
Cガ B〈HUM〉ヲ Xニ 指名する
- 文例 : 太郎はその委員会の【議長】だ。  
太郎は【議長】にふさわしい。  
太郎は【先生】になった。  
太郎は【課長】に昇進した。  
その会社は花子を【秘書】に雇った。  
委員長が彼を【議長】に任命した。  
天皇は【総理大臣】を任命する権限を持つ。  
あの人は今【大工】をしている。
- 注記 : 特定の指示対象を持つ「医者が診察する」のような場合も、「医者」は〈HUM〉とする。
- 並立素性 2 : HUM

## REL (relational terms)

- 概要 : 親族あるいは交友関係。  
名詞句例 : 父親、娘、夫婦、いとこ、友達、ファン、種、家庭....  
構文 1 : A 〈HUM/AML〉ノ Xガ B 〈HUM/AML〉ダ あるいは  
A 〈複数のHUM/AML〉ガ Xダ  
構文 2 : A 〈HUM〉ニ Xガ いる  
B 〈HUM/AML〉ガ A 〈HUM/AML〉ノ Xニ 当たる  
B 〈HUM〉ガ A 〈HUM〉ノ Xニ なる  
A 〈複数のHUM/AML〉ガ Xニ なる  
文例 : あの人が太郎の【父親】だ。  
私には【いとこ】がいる。  
俺達は【友達】だ。  
彼らは【夫婦】だ。  
次郎と健児は【兄弟】だ。  
あの人の【種】を宿す。  
【家庭】をすてる。  
あの人は将軍の【血】を引いている。  
並立素性 2 : HUM

## DIR (direction)

- 概要 : 方向。相対的な位置や進行方向を持つベクトルを表わす。  
名詞句例 : 北、南、東、西、上、下、右、左、前、後ろ、左側、右側、後方 ;  
方角、方向....  
構文 1 : A 〈CON/LOC〉ノ Xガ B 〈CON/LOC〉ダ  
構文 2 : Cガ Xニ 向かっている。  
Cガ Xニ 向く  
Cガ Xニ 面する  
Cガ Dヲ Xニ/へ 向ける  
Cガ Xニ 傾く  
Cガ Xヲ 向いている  
Cガ Xヲ 向く  
Cガ Dヲ Xカラ 見る  
文例 : 荷物は机の【下】だ。  
その船は【北】へ向かう。  
重心を【左側】へ傾ける。  
【前】を見る。  
【上】を向く。  
その信号を【右】に曲がる。  
この道は【西】に延びている。  
【後ろ】に向ける。  
その【方向】を目指す。  
窓ガラスの【内側】から見る。  
敵が【後方】から迫ってくる。  
並立素性 2 : 〈LOC〉  
注記 : 「Xニ/へ〜」「Xカラ〜」の場合には、Xが「どっち」と置き換え可能であれば、〈LOC〉ではなく〈DIR〉とした。

## PHA (phases)

- 概要 : 話など、内容を持つ一続きのものや、記号や物などの列・並びや、幾つかの出来事の連続によって校正される一つの出来事などについての時間的・位置的順序。  
名詞句例 : 最初、最後、前、後、次、間、頭、先、末尾、先頭 ;

- 2 番目、五番目....
- 構文 1 : AノXガ Bダ あついは AXガ Bダ
- 構文 2 : Bガ Aノ Xニ ナル  
Cガ Bヲ Aノ Xニ スル  
Cガ Xカラ 数える
- 文例 : 挨拶はパーティの【最後】だ。  
面接の【最初】は花子だ。  
私の順序は花子と太郎の【間】だ。  
乾杯の【次】が挨拶だ。  
太郎の【後】は私だ。  
【頭】から数えて【3番目】だ。  
講演を【最初】から聞く。  
挨拶がパーティの【最後】に残った。  
曲の【頭】を出す。  
話の【先】を聞く。  
ゲームの【最初】が盛り上がる。  
この映画の【最後】が面白い。
- 並立素性 2 : 〈SPA〉〈TIM〉

#### REF (reference point)

- 概要 : ある基準によって相対的に決まる対象。  
(現実世界ではどの素性にあてはまるかわからないもの、あるいは  
〈ANI〉〈CON〉〈SPA〉〈PRC〉〈ABS〉の中で複数の  
素性の名詞句が該当するもの)
- 名詞句例 : 反対、逆、すべて、ほとんど、全部、以下、以上、辺り....
- 構文 1 : AノXガ Bダ あるいは AXガ Bダ
- 構文 2 : Cガ Aノ Xガ 好きだ  
Aノ Xガ 終わる  
Cガ Aノ Xニ 行く  
Cガ Aノ Xヲ する  
Aノ Xガ Cニ 賛成する
- 文例 : 「大きい」の【反対】を言う。  
本心の【逆】を言う。  
妹はいつも私の【逆】をする。  
敵の【逆】を突く。  
荷物の【ほとんど】が運び終わった。  
仕事の【ほとんど】を済ませた。  
君の【すべて】が好きだ。  
6時間【以上】が経過する。
- 注記 : ある基準によって相対的に決まるものが、  
ヒトだけに該当すれば、〈HUM〉(味方、敵、友)  
具体物だけに該当すれば、〈CON〉(頭、先、尻)  
場所だけに該当すれば、〈LOC〉(後ろ、前、裏、表)  
時間だけに該当すれば、〈TIM〉(あと、先)  
とする。

#### NOR (norms/rules)

- 概要 : 規則、法則や方法。
- 名詞句例 : 法律、規則、制度、点、基準、条件、制約、取り決め、人事評定、  
刑、刑罰、処罰、規格、決り、不文律、常識、習わし、哲学、  
原理、定理、公式、法則、ルール、  
定員、定数、定年、任期、任務；

- 標準、命令、目標、目標額、約束、  
方法、やり方、メートル法、新制度....
- 構文 2 : A 〈HUM／ORG〉ガ Xヲ 制定する  
A 〈HUM／ORG〉ガ Xヲ 規定する  
A 〈HUM／ORG〉ガ Xヲ 決定する  
A 〈HUM／ORG〉ガ Xヲ 決める  
Xガ 厳しい  
A 〈HUM／ORG〉ガ Xヲ 遵守する  
A 〈HUM／ORG〉ガ Xヲ 改正する  
A 〈HUM／ORG〉ガ Xヲ 破る  
A 〈HUM／ORG〉ガ Xヲ 立証する  
A 〈HUM／ORG〉ガ Xニ 従う  
Xニ 抛れば～  
A 〈HUM／ORG〉ガ Xヲ 採用する
- 文例 : あの学校は【規則】が厳しい。  
【法律】を遵守する。  
【規則】に従う。  
【メートル法】を採用する。  
【常識】を貫く。  
課外活動に【制約】を課す。  
【定員】が決まる。  
参議院の【定数】を是正する。  
55歳を【定年】にする。  
委員の【任期】を改める。  
その件に関する【取り決め】が成立する。  
【習わし】に逆らう。  
解決の【道】を見つける。  
その【方法】に従う。  
自分の【やり方】で行なう。

#### F L D (subfield)

- 概要 : 学籍分野、スポーツや芸術などの分野。  
名詞句例 : 数学、科学、理科、英語、生物、哲学、経営；  
100メートル競争、スキー、スケート、ジャンプ、泳ぎ；  
芸術、華道、花、お茶、油絵、手品....
- 構文 2 : A 〈ORG〉デ Xヲ 専攻する  
Aガ Xデ 賞ヲ 取る  
A 〈HUM／ORG〉ガ B 〈HUM／ORG〉ニ Xヲ 数える  
A 〈HUM／ORG〉ガ B 〈HUM／ORG〉カラ Xヲ 習う  
A 〈HUM〉ガ Xヲ 学ぶ
- 文例 : 【数学】は難しい。  
【英語】が得意だ。  
【理科】で100点を取る。  
【花】を教える。  
【お茶】を習う。  
【油絵】で入賞する。

#### I N F (information)

- 概要 : 情報の持つ内容。  
名詞句例 : 情報、手紙、小説、詩、物語、意見、考え、見通し、説教、冗談、  
せりふ、質問、言い訳、秘密、論文、記録、資料、文献、案内、  
広告、便り、電報、雑誌、本、台本、報告書、解説書、レポート；

印、漫画、映画、コント、落語、漫才；  
 ラストシーン、一幕、音楽、クラシック、曲、行進曲；  
 要求、依頼、予想、説明、判定、批判、批評、釈明；  
 住所、出身地、出生地、原産地、誕生日、日....

- 構文 2 : A 〈HUM〉ガ Xヲ 読む  
 A 〈HUM〉ガ Xヲ 聞く  
 A 〈HUM〉ガ Xヲ 理解する  
 A 〈HUM〉ガ Xヲ 把握する  
 A 〈HUM〉ガ Xヲ 解釈する  
 A 〈HUM〉ガ Xヲ 内緒に する  
 A 〈HUM〉ガ Xヲ 熟読する  
 A 〈HUM〉ガ Xヲ 参照する  
 A 〈HUM〉ガ Xヲ 参考ニ する  
 A 〈HUM〉ガ Xヲ 引用する  
 A 〈HUM／ORG〉ガ B 〈HUM〉ニ Xヲ 教える  
 A 〈HUM〉ガ B 〈HUM〉ニ Xヲ 尋ねる  
 A 〈HUM〉ガ B 〈HUM〉ニ Xヲ 伝える  
 A 〈HUM〉ガ Xヲ 知る  
 A 〈HUM〉ガ Xヲ 暗記する  
 A 〈HUM〉ガ Xヲ 記入する  
 A 〈HUM〉ガ Xヲ 間違える  
 A 〈HUM／ORG〉ガ Xヲ 断る  
 A 〈HUM／ORG〉ガ Xニ 応じる  
 A 〈HUM〉ガ Xニ 不満ヲ 持つ  
 A 〈HUM〉ガ Xニ 驚く  
 Xガ 知れわたる  
 Xガ 難解だ  
 Xガ 分かりやすい  
 Xガ 詳しい  
 Xガ 面白い／つまらない  
 Xガ 間違っている

- 文例 : 【手紙】を読む。  
 【テレビ】が面白い。  
 【研究】を発表する。  
 講演してくれという【依頼】を断る。  
 このような【批判】は間違っている。  
 審判の【判定】に不満を持つ。  
 彼女に【出生地】を尋ねる。  
 彼の【誕生日】を聞く。  
 実家の【住所】を記入する。  
 自分の【体重】を教える。
- 注記 : 「関心の【薄さ】を知る／指摘する」などのように「～であること」  
 「～ということ」と解釈できるものは、〈PRP〉。
- 並立素性 2 : 〈CON〉〈ACT〉〈LOC〉〈PIT〉

**INC (inclination)**

- 概要 : ヒトがある対象に対して持つ心理的傾向。  
 名詞句例 : 関心、不安、興味、期待、親しみ、馴染み、警戒心、哀れ、  
 さわやか、意外....
- 構文 2 : A 〈HUM〉ガ Bニ Xヲ 感じる  
 A 〈HUM〉ガ Bニ Xヲ 持つ  
 A 〈HUM〉ガ Bニ Xヲ 抱く

- A 〈H U M〉ガ Bヲ Xニ 感じる  
 A 〈H U M〉ガ Bヲ Xニ 思う  
 A 〈H U M〉ガ Bニ Xガ ある  
 Aへノ Xガ 湧く
- 文例 : 彼は君に【興味】を持っている。  
 僕は彼女に【優越感】を感じる。  
 ものの【哀れ】を感じる。  
 僕は歴史に【関心】がある。  
 現代人は将来に【不安】を抱いている。  
 私はあの浮浪者を【哀れ】に感じている。  
 僕はその事件を【意外】に思った。
- 注記 : 形容詞辞書では〈E F F〉と呼び、「影響、効果、反響、支障、ダメージ、刺激（大きい／小さい／強い／弱い）」なども含めていたが、これらは〈G R A〉とする。

### Q A L (quality)

- 概要 : ある基準や標準よりも大きい数値。  
 名詞句例 : 厚さ、厚み、重さ、重み、広さ、高さ；  
 身長、体重、背、重量；  
 数、量....
- 構文 1 : Aガ Xガ ある  
 構文 2 : Aガ Xガ 足りない  
 Aガ Xヲ 増す／減らす  
 A 〈H U M〉ガ Xヲ こなす  
 Aガ Bノ Xヲ 気にする
- 文例 : この板は【厚さ】がある。  
 この板は【厚み】がある。  
 そのビルは【高さ】がある。  
 その選手は【身長】がある。  
 彼は【体重】がある。  
 【数】をこなせば上達するだろう。  
 この机は【場所】を取る。
- 注記 : 尺度として用いられる場合には、区分を分け〈M E A〉を振る。

### P R P (proposition)

- 概要 : ある値や程度が大きいこと、あるいは小さいこと。  
 名詞句例 : 薄さ、重さ、重み、重大さ、荒さ、軽さ、細やかさ....
- 構文 2 : A 〈H U M〉ガ Xヲ 指摘する  
 A 〈H U M〉ガ Xヲ 知る  
 A 〈H U M〉ガ Xニ 驚く  
 A 〈H U M〉ガ Xニ 気付く
- 文例 : 関心の【薄さ】を指摘する。  
 最近の電子手帳の【薄さ】に驚く。  
 ことの【重大さ】に気付く。  
 任務の【重み】を知る。  
 事件の【重大さ】を感じる。

### S T G (stage)

- 概要 : ある一時的な状態で、〈S T A〉〈R E S〉〈Q A L〉でないもの。  
 名詞句例 : 緊張、姿勢、バランス、足、膝、髪、頭....
- 構文 2 : Xガ 緩む  
 Xガ 乱れる

- A ガ Xヲ くずす  
 A ガ Xヲ 整える
- 文例 : 【緊張】が緩む。  
 【姿勢】をくずす。  
 【バランス】をくずす。  
 【足】をくずす。  
 【膝】を正す。  
 【髪】を整える。  
 【頭】が乱れる。

#### A P P (appearance)

- 概要 : 視覚チャンネルから主として得られる外的な印象。  
 名詞句例 : 顔、輪郭、柄、態度、色、陰、足跡、跡、形跡、印、服装....  
 構文 2 : Xガ 目立つ  
 Xガ 目につく  
 Xガ 目に入る  
 Xガ 思い浮かぶ  
 A 〈HUM〉ガ Xヲ 思い浮かべる
- 文例 : 祖母の【顔】を覚えている。  
 顔の【輪郭】に丸みがつく。  
 水玉の【柄】が付いている。  
 厳しい【態度】が目につく。  
 驚きの【色】が見える。  
 苦悩の【陰】を浮かべる。

#### U N T (unit)

- 概要 : 通貨や単位。  
 名詞句例 : 円、ドル、ドイツマルク、リラ、元、メートル、フィート、マイル、尺、時間、分、秒、グラム、リットル、平米、坪....  
 構文 1 : A 〈HUM〉ガ Bヲ Xニ 換算する  
 構文 2 : A 〈HUM〉ガ Bヲ Xニ 直す  
 Xガ 高い／安い  
 Xガ 高くなる／安くなる  
 Xガ 強い／弱い  
 A 〈HUM／ORG〉ガ Xデ Bヲ 買う  
 A 〈HUM／ORG〉ガ Xデ 取引する
- 文例 : 90分を【時間】に換算する。  
 30坪を【平米】に直す。  
 【ドル】で取り引きする。  
 【円】が高くなる。  
 【ドイツマルク】が強い。

#### P I T (point in time)

- 概要 : 不定語「いつ」で質問された場合に、年月日／時刻／時間区分を特定して答えることができるもの。  
 名詞句例 : 今年、来月、今日、5月1日、3時、夕方、この春、運動会の日、誕生日、初日、記念日、運動会、結婚式、発表会：電車、終電、地下鉄、飛行機、バス、朝食、夕食、おやつ....  
 構文 2 : Xニ／φ A 〈EVE〉ガ ある  
 Xカラ A 〈EVE〉ガ 始まる  
 Xニ／デ A 〈EVE〉ガ 終わる

- Xニ／φ ～する  
 Xガ 近い  
 Xガ 近づく  
 Xガ 来る  
 A〈HUM〉ガ Xニ 遅れる  
 A〈HUM〉ガ Xニ 間に合う
- 文例 : 【今日】は忙しい。  
 出発の【日】が待ち遠しい。  
 展覧会の【初日】に来場する。  
 舞台の【初日】が休日と重なる。  
 【3時】にお茶を飲む。  
 この【春】に娘が小学校に上がる。  
 【誕生日】が来る。  
 【結婚式】が近づく。  
 【終電】に間に合わない。
- 並立素性2 : 〈EVE〉〈APO〉  
 注記 : 動詞辞書ではこの素性は〈TIM〉と区別れていなかった。

#### T I M (time)

- 概要 : 時間に関する概念のうち、〈PIT〉でも〈PHA〉でも〈MEA〉でもないもの。出来事間の順序関係を表わす名詞句や、時間的な幅を指す名詞句。
- 名詞句例 : 時期、タイミング、チャンス、間(ま)、将来、春、梅雨、暇、寿命、頭、尻、以前、最中、前、後、末、前後…
- 構文2 : Xガ 過ぎる  
 Xガ 来る  
 Aガ Xヲ 迎える  
 Aガ Xヲ 控える  
 Xガ ある
- 文例 : 【時間】が経つ。  
 【春】が来る。  
 【梅雨】が始まる。  
 【冬】が訪れる。  
 【チャンス】を逃すな。  
 【間】を見計らう。  
 一年後に【定年】を超える。  
 人生の【花】が過ぎる。  
 会議の【頭】で自己紹介する。  
 考えた【末】に決断する。  
 仕事の【前】に一服する。  
 春になり、【日】が長くなった。  
 患者の【命】を縮める。  
 返事を考え直す【余裕】を与える。
- 並立素性2 : 〈PIT〉〈PHA〉

#### O R D (ordinal)

- 概要 : 順序や順番などを表わすもの。
- 名詞句例 : スケジュール、手順、順序、順、予定、方向、方角…
- 構文2 : Aガ Xヲ 調整する  
 Aガ Xヲ 整える  
 Aガ Xヲ 変更する

文例 : Xガ 逆だ  
 【スケジュール】を調整する。  
 面接の【順序】を変更する。  
 【順序】が逆だ。  
 【日程】が狂う。  
 【アルファベット順】に並べる。  
 【予定】がつまる。  
 車が【方向】を変える。  
 彼が【方角】を間違える。

#### N A M (name)

概要 : ヒトやモノの名前。  
 名詞句例 : 花子、太郎、辺 A B . . . .  
 構文 1 : Aガ Bヲ Xト 名付ける。  
 Aガ Bヲ Xト 呼ぶ  
 構文 2 : Aガ Bヲ Xト 命名する  
 文例 : 彼は娘を【花子】と名付けた。  
 この辺を【辺 A B】と呼ぶ。

#### E N T (entity)

概要 : 文字や単語などのメタ言語、記号や数学的な対象、音声面に焦点が合わせられる名詞句。  
 指示語、不定語、技術用語、専門用語など。  
 名詞句例 : 単語、漢字、字、変数 a、辺、辺 A B、三角、三角形、集合；  
 これ、それ、あれ、どれ；  
 構文 2 : Xノ／ガ Aガ 大きい／小さい  
 Xノ／ガ Aガ 多い／小さい  
 Xノ／ガ Aガ 薄い／濃い  
 Xガ Aト 等しい  
 Xガ 正しい／間違っている  
 A〈HUM〉ガ B〈HUM〉ニ Xヲ 尋ねる  
 A(HUM)ガ B(HUM)ニ Xヲ 聞く  
 A(HUM)ガ Xヲ 知る  
 A(HUM)ガ Xヲ 暗記する  
 文例 : その【単語】はモーラ数が 3 だ。  
 その【漢字】は画数が多い。  
 その【字】はポイント数が大きい。  
 その【字】は薄い。  
 【変数 a】は値が 1 5 0 だ。  
 その【辺】は 4 センチメートルだ。  
 【辺 A B】は【辺 B C】と等しい。  
 その問題は【B】が正しい。  
 注記 : 不定語のうち、「いつ」は〈P I T〉、「どこ」は〈L O C〉。

#### G A T (congregation)

概要 : 複数の動物、モノ、組織。典型的に「多い」「集まる」などに従属する名詞句や、漠然と〈HUM〉や〈ORG〉を指す名詞句、〈HUM〉や〈ORG〉の条件に合致しない名詞句、〈LOC〉と並立する名詞句で、そこに存在する複数の人を表わす実後に従属する名詞句、状態副詞のように機能する「Xデ～する」という構文に現れる名詞句。  
 名詞句例 : 父兄、若者、群れ、グループ、マスコミ、世間、有志、近所、野党、

		委員....
構文 2	:	Aガ Xニ/カラ 人気ガ ある Xデ ~する Aガ Xヲ 驚かす/震撼させる
文例	:	あの小説家は【若者】に人気がある。 学校の週休2日制案は【父兄】に反対の声が強い。 負けた者は【群れ】から追い出される。 東京は【人】が多い。 世界の【頭脳】が集まる。 指示を【上】から受ける。 あの人は【下】に好かれる。 その件については助役【以下】が対処する。 【マスコミ】がその事件に注目している。 【世間】を驚かせる。 【野党】が一致団結する。 【近所】と付き合う。 【海外】に知れ渡る。 【グループ】で発表する。 【家族】で旅行しに行く。 【委員】で話し合う。
並立素性 1	:	〈ANI〉〈AML〉〈CON〉〈AUT〉〈EDI〉〈ORG〉 〈HUM〉
並立素性 2	:	〈LOC〉
注記	:	指示対象が単数/複数で曖昧な例については〈GAT〉を振らない。

#### KND (kind)

概要	:	種や類をあらわす総称的なもの。〈ROL〉以外の役割。
名詞句例	:	人類、霊長類； 人間、霊長類、恐竜、生物、動物、馬、牛； 贈り物、高級品、金、クッション、首都； さくら、主役； 毒、肴、頭、柱、(看護婦)の卵、(本の)虫....
構文 1	:	Aガ Xニ なる Aガ Xニ ふさわしい
構文 2	:	Aガ Xニ する Xガ 絶滅する Xガ 誕生する Xガ 進化する Aガ Xニ 属する
文例	:	【人類】が誕生した。 【生物】が進化する。 この木は【針葉樹】に属する。 その地方に【首都】を移す。 この指輪は【贈り物】にふさわしい。 木の枝が【クッション】になって首を折らずに済んだ。 【さくら】になります。 彼はプロジェクトの【柱】となる。 彼女はその劇の【主役】に決まった。 この料理は酒の【肴】になる。 彼は本の【虫】になる。 看護婦の【卵】を養成する。
並立素性 1	:	〈ANI〉〈AML〉；〈CON〉〈HUM〉

注記 : 「人類」は、本来が総称的な名詞なので、〈KND〉を振る。ただし、「人間、恐竜、生物、動物、馬、牛、麻、莓」などの動物、植物の個別的な名前も総称的に解釈できるが、原則として〈KND〉の表示は略す。ただし、本来は〈KND〉を与えられる名詞句が特定のヒトやモノを指すことも可能になる場合には、〈HUM〉あるいは〈CON〉を並立させる。  
ヒトの役職には〈ROL〉を振る。

## ABS (abstract)

概要 : 今までに示した以下の〈ABS〉の下位の素性の中で、いずれにも特定できないもの。

〈PRI〉〈MEA〉〈SOC〉〈GRA〉〈ATT〉〈REC〉  
 〈PER〉〈MIN〉〈MAN〉〈FOR〉〈EVA〉〈CUR〉  
 〈DUR〉〈DIS〉〈ITM〉〈RAT〉〈QUA〉〈VAL〉  
 〈STA〉〈ROL〉〈REF〉〈DIR〉〈PHA〉〈REF〉  
 〈NOR〉〈FLD〉〈INF〉〈INC〉〈QAL〉〈PRP〉  
 〈STG〉〈APP〉〈UNT〉〈PIT〉〈TIM〉〈ORD〉  
 〈NAM〉〈ENT〉〈GAT〉〈KND〉

・さまざまな語と共起するため下位素性に限定する必要のない述語と共起する名詞句

・実体として捉えようがない抽象的な概念

・慣用句相当に現れる名詞句

・比喩的な意味を表わす名詞句

名詞句例 : 不可能、テーマ、内容、責任、罪、愛、正義、特徴、価値；  
枝、木、芽、狼....

構文2 : Aニ Xガ ある／ない  
 Aガ Xヲ 無くす  
 Aガ Xヲ 持つ  
 Aガ 異なる  
 Aガ Xヲ 見つける  
 Aガ Xヲ 探す  
 Aガ Xヲ 追求する  
 Aガ Xニ こだわる  
 Xニ 応じて～

文例 : この辞書には多くの【特徴】がある。  
 彼には【欠点】がない。  
 【生きがい】を見つかる。  
 教育の【原点】を探る。  
 その計画の実現は【不可能】に等しい。  
 その小説は【テーマ】がくらい。  
 その論文は【内容】が難しい。  
 【愛】を貫く。  
 【正義】が勝つ。  
 【心】が休まる。  
 重要な【使命】を帯びる。  
 殺人の【罪】は重い。  
 【顔】に泥を塗る。  
 【血】が騒ぐ。  
 【気】が散る。  
 他人の【目】から見る。  
 言葉の【壁】を乗り越える。  
 少女が【せのび】をしてお化粧をしている。

引退試合に【花】を添える。  
悪の【芽】を摘む。

#### NON (non-featured)

- 概要 : 項としての用法がないため、素性を与えられないもの。  
文例 : 肝心の【主役】がまだ来ていない。  
実記憶装置は【固定】の容量を持っている。  
【嫌】な顔をする。  
【けち】な考えを起こす。  
部長はその新人社員をととも【評価】している。  
バーで深酒して【沈没】してしまった。

―――

- 概要 : 「サ変動詞用法」あるいは「述語としての用法 I」において、項としての位置に、文相当の表現 (S) が現れる場合に、その S に与えるもの。

#### CON \ ABS

- 概要 : 「サ変動詞用法」あるいは「述語としての用法 I」において、項としての位置に、〈HUM〉から〈ABS〉までのすべての素性を持つ名詞句が現れる場合に、すべてを列挙する代わりに与えるもの。

## 付録 2 名詞辞書と形容詞辞書・動詞辞書との意味素性の対応

名詞辞書の素性の数や枠組みは、公開済みの形容詞辞書／動詞辞書とは違いがある。以下にあげるのはその対応表である。名詞辞書で用いた素性ごとに、形容詞辞書／動詞辞書で記載されていた素性を示す。名詞辞書において各素性を決定する術後や各素性を代表する名詞を、形容詞辞書／動詞辞書から検索して作成した。形容詞辞書の場合は、違いのある部分を表中にほとんど網羅した（CON\ABS以外は対象外とした）が、動詞辞書はそこごく一部を表示したにすぎないので、注意が必要である。なお、統合辞書では、これまでに公開した動詞や形容詞を含めて、この名詞辞書の枠組みまで素性を記述する計画である。

名詞辞書と動詞辞書・形容詞辞書との意味素性対応表

名詞辞書	形容詞辞書	動詞辞書
HUM	HUM	HUM
AML	ANI	ANI
ANI	ANI NAT (チーターガ速い)	ANI
AUT	AUT	PRO (車、タクシー、ボートガ走る； 機械、モーター、エンジンガ動く) CON
PAS	PAS	PRO (鉄、納豆、油ガ粘る) CON (バター、ペンキヲ塗る； クリーム、絵の具、ペンキガ伸びる)
SOL	SOL	CON (氷、雪、霜、鉄、鉛ガとける； セメント、油、のり、ゼリーガ固まる)
EDI	EDI	CON (魚、カレー、パンヲ食べる； 酒、ワイン、料理ヲ味わう； 魚、肉、餅、食パンヲ焼く； 大根、魚、肉、野菜ヲ煮る)
LIQ	LIQ NAT (ベンジンは (蒸発ガ速い)	NAT (水ニさらす； CON (水ガ流れる； 酒、水、湯ガこぼれる； 水、酒ヲ飲む) PHE (汗、血、涙ガ流れる)
CON	CON SOL (その合金、セラミック、 鋳鉄、この建物、この土台、 この建物の土台、この台の足ガ もろい； 豆腐、このパン、あ	CON PAR (指、足ヲ切る) LOC (壁ニ掛ける； 目の上ヲ切る) PRO (ハンガー、釘ニ掛ける) PLA (稲、草、芝ヲ刈る) NAT (山、月ガかすむ；

	<p>の木、この金属が柔らかい； ダイヤモンド、この石、この金属、この豆腐、この鉛筆、亀の甲羅、鹿の角、馬のひづめが固い)</p> <p>ABS (食糧備蓄が乏しい； この設備が古い)</p> <p>LOC (先が細い； この鉛筆の先、その机の角が丸い； 鉛筆の先、ナイフの刃先、この棒の先端が鋭い； の自転車のサドル、このポケットが (位置が) 高い   低い； 腰が高   低い； 俺達のテーブル、僕の皿ニ (焼肉) が多い   少ない； 彼の家の庭、この土地、グラント、(グラントの) トラックが大きい   小さい； 柄、引き出しの側が重い； 目の下がおいしい； しっぽがまずい； 種の回り酸っぱい； ごみの山、ごみ置場、どぶ川が汚い； 彼の目もとが涼しい)</p>	<p>山ガ (雪ヲ) かぶる； 山、崖ガ崩れる)</p>
LOC	LOC	<p>LOC NAT (山カラ (こだまガ) 帰る)</p>
INT	<p>LOC (その学校、洞窟ガ広い   狭い； (この洞窟の) 内部ガ広い   狭い)</p>	<p>LOC (手術室、教室、牢屋、水の中ニ入れる 部屋、引き出し、箱の中カラ出す 蔵、書庫、懐ニおさめる) CON (鳥籠、檻、書棚、箱、カセット、 コップニ入れる； 財布カラ出す) PAR (鼻、ロカラ出す) PRO (ケース、トランク、骨壺ニへおさめる) NAT (海ニもぐる)</p>
ORG	<p>ORG KND (その子の家、彼の家庭；この国の中流家庭ガ貧しい) ABS (家、家庭ガ貧しい)</p>	<p>ORG</p>

NET		PRO (鉄道、汽車、新幹線、国道、電話が通る； 水道、ガスが止まる)
SPA	SPA GRA (範囲、レポートリー ガ広い   狭い) ORG (今の社会が明るい； 世の中、社会が暗い) LOC (世間、世の中が騒が しい； アルバムの中ニ (ア ップで写っているス ナップガ) 欲しい； ここからの視界、馬 の視野ガ広い； 重心ガ高い   低い) STA (今の社会全体、この 世の中がおかしい)	LIN (新聞、雑誌ニ出る； 古今和歌集ニおさめる) PRO (カメラ、レコードニおさめる) MEN (脳裏、心ニおさめる； 心、胸、まぶた、頭、脳裏ニ浮 かぶ； 胸、心ニ (希望) ガ湧く)
NAT	NAT	LOC (空間ヲ区切る) PAR (顔ニ出す；顔に表わす)
PLA	NAT (桜ガ速い   遅い)	NAT (川、雲ガ流れる； 太陽、月ガ昇る) PHE (雨、台風ガ近づく)
GAS	GAS ABS (食後の一服ガたまら ない)	PLA (枯れる；咲く；実る； さくらんぼ、キュウリ、バナナ、 ガなる) PAR (実、果実ガなる) DIV (草、枝、芽ガ伸びる)
ELM	ABS (ビタミンガ乏しい)	PHE (荒い息ヲ吐く) CON (煙、噴煙ヲ吐く)
POT	GRA (足腰、腹筋ガ強い   弱い) CON (胃腸、心臓ガ強い   弱い)	DIV (ビタミン、炭酸、酸素と窒素ヲ 含む) PAR (足腰、歯、足、体ガ弱る； 体、腹、胃を壊す； 体、心臓ニこたえる； 頭、歯ガ痛む) ABS (足腰ヲ鍛える)
PHE	PHE PRC (老人の脈、患者の呼 吸ガ速い   遅い)	PHE (波、天気ガ荒れる) NAT (空、海ガ荒れる) PAR (ひげ、髪、髪のコガ伸びる； ひげ、歯、髪ガ生える) DIV (匂い、傷、折り目ガつく) ABS (折り目ガつく)
ACT	ACT	ACT (改革ヲ行なう； 宿題、支払い、手紙の返事、注 意、準備、対策、用意、配慮ヲ 怠る)

EVE	EVE	ACT (授業、コンサート、運動会、父兄会、PTA、会議、試験がある；卒業式、会議、試合、試験ヲ行なう；会議、工事が始まる)
APO		ABS (展覧会、会議、シンポジウム、総会、サイン会、送別会ヲひらく；会ヲ始める)
RES	EVE (事故がない；あの事件、うちの学校の創立、湿原の成立ガ古い) PRC (台風の被害ガ著しい) STA (経済の不均衡、間違い、この高速道路の渋滞ガひどい) ABS (被害、運転手の過失、新車の欠陥がない；百万円の損ガ痛い；今年の不作ハ (天候ガ不順だったことガ大きい)	ACT (学校がある；学校ガ始まる) ORG (銀行、店、デパートガひらく；銀行、店、デパートガあく；銀行、店、図書館、郵便局ガ閉まる) ABS (成果、利益ヲ得る；利益、成果、業績ガ上がる；被害ガ及ぶ；被害、赤字、新記録、死者ヲ出す；痛い目ヲ見せる) ACT (事故がある；事故、混乱、革命、奇跡、ブームガ起きる；被害ヲ及ぼす) PHE (被害、飢饉ガ広がる) MEN (心、腹ヲ決める) DIV (足跡をたどる；跡ガつく)
PRO		PRO (住宅、アパート、家、学校、工場ヲ建てる；家、ビル、棚、戸ヲ作る；壺、パンヲ焼く) LIN (小説、詩、日記、コラム、文章ヲ書く) CON (机、酒、本、貨幣、さしみヲ作る；絵、まんが、地図ヲ書く) ABS (ルール、取り決め、規則、条例ヲ作る) ORG (チーム、委員会ヲ作る)
PRC	PRC PHE (電車の揺れガ快い) ABS (近所づきあいガわずらわしい；国会の怠慢ニ厳しい)	ACT (衝突ヲする；衝突デ割れる；摩擦デ取れる；) ABS (高気圧の影響、政権交代、政情安定、命令系統の混乱、人員不足デ緩む)
PRI	MEA (金額ガ多い   少ない；金額、額ガ大きい   小さい) ABS (資金、収入ガ乏しい)	ABS (家賃、奨学金、代金、金、月謝、料金ヲ払う；金ヲ貸す；生活費、予算、経費ヲ減らす)

ME A	<p>ME A</p> <p>GRA (今日の風力、空気の圧力、その惑星の引力、その川の水力、握力、そこに流れて入る電流、熱、磁気、このメガネの度、この酒のアルコール度が強い； そこに流れている電流、熱、磁気、彼の視力、彼の聴力、このメガネの度、この酒のアルコール度が弱い)</p>	<p>CHA (長さ、時間、目方、身長、体重、深さ、体温、震度ヲはかる)</p> <p>ABS (人数、年齢、数ヲ数える； 体重、量、数、生産台数、人口、ガ増える； 道幅ガ広がる； 時間、幅ガ緩む； 会員数；雑誌の発行部数、人口ガ減る)</p>
SOC	<p>SOC</p> <p>ABS (誤差、格差、違いガ大きい   小さい)</p>	<p>REL (遠い、差、関係、繋がりガある； 縁ヲ切る)</p> <p>ABS (差、格差ガ縮む； 差、格差ガひらく)</p> <p>ACT (結束、連体ヲ強める)</p>
GRA	<p>GRA</p> <p>EFF (理解ガ浅い； 理解、関心、造詣ガ深い； 関心、効果、信頼ガ薄い； 影響ガ濃い； 期待ガ多い   少ない 期待、影響、効果、反響ガ大きい   小さい 期待、不信感、不満、自信、意欲、好奇心、警戒心、効き目、副作用、刺激、影響ガ強い   弱い； 効果、関心ガ高い   低い； 理解、効果ガ乏しい； 効果、影響ガない)</p> <p>ACT (ユーザの反応、視聴者からの反対ガ乏しい)</p> <p>AFF (反対、批判ガ多い； 反対、反撥ガ少ない； 反対、支持、批判ガ多い   少ない； 人気、評価、評判ガ高い   低い； 反対、要望、反対の声、批判ガ強い   弱い；)</p> <p>PRC (台風の被害ガいちじるしい；)</p>	<p>ABS (語気、発言権を強める)</p> <p>CHA (長期化の様相、分裂傾向、政治色、革新色ヲ強める)</p> <p>ACT (警戒、監視、働き掛け、疑惑ヲ強める)</p>

	<p>台風の被害ガはげしい；  台風の被害ガはなはだしい；  台風の被害ガ酷い)</p> <p>P H E (その患者の症状ガ重い；  彼の症状、障害ガ軽い)</p> <p>P E R (太郎の心、彼の度量、彼女の了見ガ狭い   広い)</p> <p>M A N (太郎の心、彼の度量ガ広い)</p> <p>F O R (色、匂い、音ガ強い   弱い)</p>	
A T T	<p>M A N (経験ガ浅い；  彼の非常識、君の誤解、時代錯誤、おかしさ、心得違い、彼女の無知ガはなはだしい；  彼の決意ガ固い)</p> <p>G R A (この屋根の傾斜、この道のカーブガ鋭い；  この坂道の勾配、この斜面の傾き、そのサーキットのカーブガ緩い)</p> <p>S T A (この国のインフレ、この会社の男女の差別、表面の凹凸ガ激しい)</p> <p>P R C (企業間の競争、この道の交通、ヒトの往来、対立、選挙戦、練習、最初の沸騰、教育論争、販売競争、気体の発生、戦争、クラスの議論、彼の息遣い、物価の上昇、ライバルの巻き返し、空襲、大学のイメージの変化、体力の衰え、飛行機の消耗、路面の凍結、技術革新、表面からの脱水、この村の過疎化、好き嫌い、天候の変化、さっきの地震の揺れガ激しい；  彼の成績の向上、彼の進境、彼のピアノの上達、技術の進歩、</p>	<p>C O N (塩、砂糖、薬味、わさび、糊が利く)</p>

		若手の台頭、生活意識の変化、農業人口の高齢化、過疎地の増加が著しい； その村の過疎化がはなはだしい； 彼の物忘れ、空襲、父親の叱責、上司の乱暴がひどい)	
REC	FOR (兄弟の仲、二人の相性が良い 悪い) SOC (二人の仲があやしい)		REL (仲が裂く) ABS (二人の仲が裂く)
PER	PER		CHA (性格が異なる； 性格がゆがむ； 性格ニ(差)がある； 人柄がかう) ABS (性格が違う； 人柄が慕う； 人柄が窺われる) MEN (意地、我が張る)
MIN	FOR (若い人の感覚、イルカの聴覚、鳥類の視覚、犬の嗅覚、子供の味覚、女性の感性、船乗りの勘、彼の直観、千人の眼力が鋭い； 彼の頭の働き、彼の頭、彼女の運動神経、彼女の方向感覚、彼女の美的センス、人間の嗅覚、彼の鼻、彼の思考力が鈍い)		ABS (頭、知恵、理性が働く； 理性ニ訴える； 気、頭を使う) PAR (目が霞む； 神経ニこたえる)
MAN	MAN PRC (活動、動き、敵の攻撃、彼女の苛立ちが激しい； ネズミの動き、彼の動きが細かい； 彼女の落ち込みがひどい)		ACT (態度が変わる； 歌、英会話、演技が劣る) ABS (態度、言葉使い、考え方が変える； 態度、口調、素行があらたまる； 考え方がずれる； 使い方覚える； 処理、対応、人選、計算、判断、言葉の使い方誤る； 彼の考え方が間違っている)
FOR	FOR STA (父の容体、病人の状態があやしい； 自転車の具合がいけない； 彼の立場、このような状況が苦しい；		CHA (制服の色、楽器の色、超えの調子揃える； 味、品質が落ちる； 品質、品、栄養面、性能が劣る) 品質ニ(差)がある) ABS (調子、体調、服装を整える； 酒の味覚える；

	先発投手の立ち上がり、大都市の住宅事情ガひどい； 太郎の立場、この職場の人間関係ガ難しい)	服装ヲ正す； CON (服装ガ乱れる)
EVA	APP (体格ガたくましい； 顔ガ良い   悪い)	
	STA (国際情勢ガ明るい； 事態ガあやしい； あの人の容体、父の病状ガいけない； Aガ議員をやめず、政界に力を持っている現状、裁判そのものガおかしい； 就職戦線、入試戦線、労働者を取り巻く状況、国際情勢、財政事情、この市の財政ガ厳しい； 国際情勢ガ暗い； わが家の家計、その国の経済状態ガ苦しい； 戦況、政局ガ苦しい； 我が方の戦局ガ険しい； 経済の不均衡、隣国のインフレ、この会社の男女の差別ガひどい)	NAT (土ガ肥える； 土ガやせる) CHA (地味ガ肥える； 地味ガやせる) LOC (土地ガ肥える； 土地ガやせる) PAR (目、舌、耳ガ肥える) ABS (政局、様相、事態ガ変わる； 事態ガ進む； 情勢ガ (変化の気配) ヲ見せる)
	ABS (人を見る目ガ高い； その会社の先を見る眼ガ鋭い)	
CUR	QUA (一億円ニ近い   遠い)	QUA (一万円φ儲ける； 100万円φ増える； 5万円、100万円φする)
DUR	QUA (八十才ニ近い   遠い)	QUA (一ヶ月、一週間、一時間φ遅れる； 1. 2秒、2週間φ縮める； 20歳、50年になる)
DIS		QUA (333メートル、8メートルφある； 3cmφ縮める)
ITM	QUR (一万人ニ近い   遠い)	QUA (3人、5部屋φある； 5万人、2個φ入る)
RAT		QUA (過半数、全体の3分の1、80%ヲ占める)

QUA		QUA (300坪、50kgφある； 1リットルφ入る)
VAL	PHE (この印刷の赤、紫、 ピンクが薄い； 椿の緑色、この印刷 の赤が濃い)	CHA (紅、暮色、茶色、藍色、ピンク ニ染める； 緑色を塗る) ABS (鶴の形ニ折る)
STA	STA (薄着が寒い)	MEN (強気、弱気、不機嫌ニなる) ABS (不景気、経営難、上向きニなる； 定員、水準、基準ヲ超える； 健康、平和、秘密ヲ守る； 大人ニなる) CHA (令嬢、金持、独身、一流ニ見せ る； 健康、好調、安静、平均、中立 を保つ)
NOR	NOR STA (優勝への道が厳しい) ORD (営業のノルマが厳し い； ノルマがきつい)	ABS (規則、教え、言いつけ、法律、 約束、基準ヲ守る； 約束、契約、規則、掟、協定ヲ 守る； 規則、法律、制度ガ改まる) ACT (新しいやり方、効果的な学習法、 効果的な食事療法ヲ見つける)
FLD	NOR (芸術、数学、その分 野が難しい； 数学、英語、その分 野がやさしい； その学問が若い) KND (古典文学、国際情勢 ニ明るい   暗い； 京都の地理、相撲、 野球、政治、その道、 サラ金問題、日本文 学、源氏物語、文法、 法律、歴史、方位ニ 詳しい； 機械、数字、歴史ニ 強い   弱い)	ABS (外国語、パソコン、茶道、経済 学、ヨガヲ学ぶ) ACT (英語、バイオリン、柔道ヲ習う； 相撲、テニスニ勝つ)
INF	INF	LIN (教科書、経、漢字、小説、記事、 プログラム、暗号ヲ読む； 辞書、本、新聞、百科事典、専 門書ヲ見る； 嘘、冗談、文句、本名、お礼、 言いたい事ヲ言う； 名文、古典、詞、名画、俳句、 名曲ヲ味わう) ACT (面白いテレビ番組、映画、野球 中継、演劇ヲ見る) ABS (楽譜、グラフ、目盛り、相手の 心、相手の考えヲ読む； 礼、事実、意見、考え、理由、 開会の辞、目的ヲ述べる；

		出身地ヲ尋ねる)
		MEN (気、考えガ変わる； 勘ガ当たる)
ENT	ENT (問3の答えはBガ正しい) APP (コピーの写り、字ガ薄い； その書類の字ガ汚い； この文字ガ細かい) CON (彼の字ガ大きい) INF (漢字ガ難しい； この漢字ガやさしい)	LIN (「バス」、「あじ」、「ひやく ヲ「パス」、「あず」、「しゃ く」ト言う； 「秋」ニ「飽き」ヲ掛ける； 字、経文、友人のノートヲ写す ABS (字ヲ話す；字ガ違う； 文字ニ(濁点ヲ)施す； 方程式の答えヲ尋ねる) CON (線、文字、輪ヲ書く) CHA (三角形ヲ作る)
ROL	KND (議長ガ(彼ニ)ふさわしい； 議長、後任、新しい 時代の指導者、本校 生徒ニふさわしい； 助手ニほしい) 政治家ニのぞましい； 議長、幹事、保母さ ん、政治家ニ(彼ガ よい)	ABS (研究者、技師、会社員、八百屋 になる； 市長、代表者、議長ヲ選ぶ； ピアニスト、専門家、技術者ニ 育つ； ピアニストニ育てる) DIV (助教授ガ教授ニなる)
REL	REL (知人、いとこガ多い  少ない) KND (息子の嫁ニほしい) ABS (家族ガわずらわしい)	DIV (遠縁、私のおじニ当たる) HUM ((彼に)娘と息子、よい弟子ガ いる)
DIR		LOC (北、上、前、後ろ、下ヲ向く； 北ニ/へ向かう； 南、恩師の家の方角ニ向ける)
PHA		
REF		
INC	EFF (夫の理解、親からの 期待ガない) ABS (将来に対する不安、 恋愛についての悩み、 子供への期待、仕事 への意欲、宇宙への 関心、妻の仕事への 理解ガない)	MEN (不安、愛情、生きがい、失望、 責任、反撥、喜び、疑問、もど かしさヲ感じる； 希望、自身、興味、意欲、疑問、 実感ガ湧く； 好き、嫌い、嫌ニなる； 不満ニ思う； 哀れ、劣情ヲもよおす； 恨み、恩ガある) ABS (幸せ、歓喜ニ酔う； 幸福、苦悩、人生の悲哀、苦し み、寂しさ、満足感、開放感、 挫折感、浮世の苦勞、スリル、 旅の醍醐味ヲ味わう； 興味、自信、気、理解ガある)

QAL		CHA (スピードヲ加える ; スピードヲ出す ; 重み、力ガかかる) LOC (場所ヲ取る)
PRP	ABS (体力、人間くささ、 実現の可能性、将来 性、信頼性、一貫性 がない)	CHA (激しさ、重み、円熟味、重厚さ ヲ加える) ABS (現実性、激しさヲ増す ; 影響力、発言力、重み、重要性、 破壊力ヲ持つ) DIV (彼の大胆さ、建築の壮麗さに驚 く)
STG		ABS (姿勢、バランスヲくずす ; 姿勢ヲ整える) PAR (髪、妹の髪ヲまとめる) CON (髪ガ乱れる) PRO (ひも、結び目、帯、もつれガ解 ける)
APP	APP (その柄ガ珍しい)	PRO (模様を縫う) ABS (イメージヲかえる ; 服装、身なりニ構う ; 服装、身なりヲ構う ; 一族の顔ガ揃う) PHE (顔色ヲかえる ; 表情ガうかぶ) CHA (美貌、長所、短所ガ目立つ) MEN (好印象、嫌な印象ヲ受ける ; 悲しみの色ヲ浮かべる)
UNT		ABS (円ガ下がる)
PIT	PIT TIM (明日ガ (結婚式ニ日 ガ) 悪い)	TIM (集合時刻、10時ヲ過ぎる)
TIM	TIM EVE (春の訪れ、今年の桜、 初雪、今年の雪ガ早 い   遅い) ABS (暇がない)	TIM (契約日、時間ガ過ぎる) ABS (創立記念日、日曜日ガ日曜日、 祝日ニ重なる ; 定休日ガ変わる)
ORD	ORD (仕事のスケジュール ガきつい) スケジュールガ厳しい) STA (今回の流行のスケジ ュールガ厳しい)	TIM (スケジュールガあく ; スケジュールヲずらす) ABS (予定、スケジュールガつまる ; 順序ヲ誤る ; 予定、順序、日程ガ狂う ; 順番ガ乱れる ; アルファベット順ニ並べる ; 方向、列車のダイヤヲ変える) DIV (順序ヲ間違う)
NAM		DIV (先生、冬将軍、メタセコイヤト 呼ぶ)

GAT	<p>GAT  LOC (世間ガあわただしい)  REL (ファン、支持者ガ多い   少ない)  ABS (あの業界ガ (競争ガ) 激しい)</p>	<p>HUM (世間ガ (世界最強ト) うたう)  ORG (野党、マスコミガ騒ぐ ;  マスコミガとりあげる ;  家族ガ揃う)  ABS (世間ガ騒ぐ ;  マスコミ、世間ニ (疑問) ヲなげる ;  マスコミガまどわす ;  世間カラ (非難ヲ) 浴びる)</p>
KND	KND	<p>ABS (保証人、薬、毒、使い物ニなる ;  候補者、証人ニ立つ ;  候補者、証人、使者、見張り人ニ / ヲ立てる ;  一人前ニ育つ ;  一人前、優勝チームニ育てる)  CON (東京都代表ヲ選ぶ)  DIV (ロマン主義の母ト呼ぶ)</p>
ABS	<p>ABS (彼の小説のテーマ、このドラマの内容ガ  明るい   暗い   固い    難しい   やさしい  重い ;  ニュースの話題ガ  明るい   暗い ;  この解説書の内容ガ  詳しい、このましい、  細かい、貧しい ;  悪名ガ高い ;  彼の気持ちガ若い ;  義理人情、情ニもろい ;  権力ニ弱い ;  現実、この事実ガ  重い ;  個性、人材ガ乏しい ;  新製品への視線、男  たちの視線ガあつい ;  この小説の主題ガ  重い ;  手がかりガ乏しい ;  商魂、生命力、精神  ガたくましい ;  心、友情ガ美しい ;  精神年齢ガ若い ;  その文明ガ新しい ;  あの人の魅力ガたま  らない ;  命ガ惜しい ;  ひたむきなところ、  素直なところ、素直  に何でもやってくれ  るところガかわいい ;  住宅事情の悪化によ  るところ、天候ガ不</p>	<p>ABS  MEN (胸、心ガ躍る ;  胸、私の心ヲ打つ ;  胸、心ガガ弾む ;  魂、心ヲ売る)  CHA (腕、男ヲ磨く)</p>

順だったことが大きい)

注

- \* 北陸先端科学技術大学院大学の奥村学氏、梁慶昇氏には、動詞・形容詞・名詞（FTP：第二版）のIPAL辞書のハイパーテキスト化において発見された、草稿の誤りを教えていただいた。記して感謝申し上げます。なお、このハイパーテキスト化辞書も辞書データとともにIPAより公開する。

用語索引

あ行

言い換え	69, 70, 125, 126, 127, 128, 129, 130, 131, 132, 133, 134, 135, 136, 137, 138, 155	関連   対2	69, 83, 84
言い換え文型	130	関連   対3	69, 83, 84
言い換え例	126, 130, 131, 132, 133, 134, 135, 136, 137, 138	関連   対4	69, 83, 84
位相語	187	関連   同義	69, 83, 84
意味記述	64, 68, 69, 70	関連   類義	57, 69, 83, 84
意味情報	6, 8, 27, 57, 68	関連語	24, 27, 57, 68, 69, 70, 71, 72, 90, 200, 201
意味素性	21, 22, 65, 71, 88, 90, 126, 166, 177, 181	カンマ	139
意味的關係	30, 55, 210, 211, 212, 213, 218, 219, 220, 221, 224	機能F	125
意味分類	27	機能名	124, 126, 127, 128, 141, 142, 145
異音同語	6, 8, 27, 62, 65, 67, 184, 186, 187, 195	規定	124, 125, 127, 128, 129, 130, 133, 136, 139, 140
隠喩	212, 213	句による連体修飾 (→連体修飾の二つのあり方)	
イ形容詞	105	区分	6, 9, 10, 62
内の關係	150, 151, 152, 154, 161	句分数	62, 64, 66
「お～する」	164	区分番号	62, 64
		形式名詞	127, 128, 131, 142, 143, 148
		形態情報	6, 8, 184
		形容   ガ	57, 93, 94, 99, 100, 101, 102, 107
		形容   ニ	93, 94, 99, 100, 101, 102, 107
		形容   他	93, 91, 100, 101, 102, 107
		形容   副ニ	93, 94, 100, 101, 102, 107, 108
		形容詞	93
		形容詞辞書	1, 2, 4, 31, 34, 42, 43, 108, 166, 175, 176, 209
		形容詞転成	63, 133, 134
		形容動詞	2, 18, 20, 63, 105, 133, 198
		形容動詞語幹	2, 18, 20, 63, 71, 105, 109, 133, 174
		原則	31, 32, 34, 35, 36, 37, 38, 39, 40, 41, 42, 43, 44, 46
		構文	31, 39, 41, 46, 47, 48
		後行句	93, 94, 95, 96, 97, 98, 156
		合成   形	184, 191, 192, 197, 203, 204
		合成   他	184, 191, 192, 197, 203, 204
		合成   動	184, 191, 192, 198, 203, 204
		合成   副	184, 191, 192, 198, 203, 204
		合成   名後	184, 191, 192, 196, 197, 203, 204
		合成   名前	184, 191, 192, 195, 196, 203, 204
		合成語	19, 25, 26, 28, 29, 72, 82, 96, 118, 187, 191, 209
		合成語要素	184, 185, 186, 187, 188, 189,
か行			
「かという」	157		
「かの」	157, 160		
下位範疇	130, 131, 136		
外廷	69, 70, 74, 75, 127		
拡張	211, 212, 213, 214, 215, 216, 217, 218, 219, 220, 221, 222, 223, 224, 225		
格關係 (→内の關係)			
格形式	163, 165, 166, 167, 168, 174 175, 176		
格形式の交替	165, 170, 175		
格助詞	93, 165, 175		
ガガ	153, 161		
仮説	31, 34, 46, 47		
關係節	128, 131, 132		
慣用句	28, 29, 103, 184, 198, 199, 206, 207, 208, 209, 225		
慣用表現	6, 8, 28, 33, 55, 56, 82, 99, 100, 103, 116, 184, 206, 207, 208, 210, 224, 225		
換喩	212, 213		
関連   対1	68, 83, 84		

	191, 192, 193, 194, 195, 196, 197, 198, 203, 209		213, 215, 219
ことわざ	206, 207, 208	相対的補充	150, 151, 155, 161
コード1	63	相対名詞	63, 127, 128, 133, 134
コーパス	86, 87, 88, 89, 90, 103, 109, 115, 116, 117	属性	7, 71, 106, 107, 117, 118, 133, 136, 142, 143, 147, 161, 213
個別性	127, 128, 133	外の関係	2, 3, 4, 5, 6, 27, 149, 150, 151, 152, 153, 154, 155, 156, 157, 158, 162
コロケーション	30, 60, 86, 87, 88, 89, 90, 97, 102, 103	その他の格助詞	93, 94, 95, 96, 97, 103
さ行		た行	
サ変動詞としての用法	3, 6, 8, 10, 11, 27, 33, 34, 56, 58, 62, 65, 163, 171, 177, 182	～ダ	174, 177
サ変動詞用法	26, 34, 42, 43, 46, 52, 63, 66, 87, 163, 175	他合成語 1	29, 184, 198, 199, 209, 210, 220, 225, 226
サ変動詞用法参照	124, 125, 134, 135, 139, 140	他合成語 2	29, 184, 198, 199, 209, 210 225, 226
サ変文例	62, 65	多重読み	124, 140
参照語	62, 65, 67, 184, 199, 200, 201, 202	たて棒	93, 96, 97
シソーラス	68	他の用法	10, 19, 28, 123, 180, 210
シネクドキー	55, 212, 213, 216, 217, 218, 220	単位	26, 50, 62, 63, 81, 111, 129, 138, 145
主語	118, 145, 148, 154, 156, 160 161, 176, 179	対語	6, 10, 23, 24, 25, 27, 35, 69, 71, 76, 77, 78, 79, 80, 84
習慣	102, 127, 139, 211	対語 1	68, 71, 76, 77, 78, 79, 80, 84
述語	1, 2, 3, 31, 32, 34, 87, 97, 149	対語 2	69, 77, 78
時空間	127, 128, 130, 131	対語 3	69, 76, 78, 79, 80
十分条件	130	対語 4	69, 71, 76, 77, 79, 80
述語としての用法	3, 4, 6, 8, 10, 27, 33, 34, 46, 56, 58, 59, 174, 180	程度助詞	2, 3, 4, 5, 6, 12, 27, 174, 178
述語による連体修飾 (→連体修飾の二つのあり方)		提喩	212, 213
述語の項としての用法	3, 4, 6, 7, 8, 10, 11, 27, 33, 34, 42, 46, 49, 53, 56, 65, 86, 98, 107	典型例	40, 48, 81, 124, 127
述語用法	4, 6, 11, 12, 14, 17, 20, 27, 34, 42, 63, 106, 107, 108, 109, 118, 119, 174, 179	転義	133, 211
助数詞	6, 8, 27, 57, 68, 69, 80, 81, 82, 83, 84, 223	統語情報	3, 5, 6, 10, 27, 28, 60, 66, 86, 210
常套句	206, 207, 208	「という」	2, 149, 150, 151, 152, 156, 157, 158, 160, 161, 162
随意	31	動詞   ガ	57, 93, 95, 99, 100, 101, 102, 107
「する」	47, 97, 163, 164	動詞   ニ	57, 93, 94, 95, 99, 100, 101, 102, 107
制限用法	108, 109	動詞   ヲ	57, 93, 94, 95, 99, 100, 101, 102, 107
性状	127, 129, 131, 136, 144	動詞   他	57, 93, 94, 95, 99, 100, 101 102, 107
節による連体修飾 (→連体修飾の二つのあり方)		動詞   副ニ	93, 94, 95, 99, 100, 101, 102, 107
先行句	93, 94, 95, 96, 97, 98, 103, 156	動詞転成	63, 133
全体部分	124, 126, 129, 133, 135, 140, 142, 144, 145, 146, 153, 212,	同義語	6, 27, 34, 35, 36, 69, 70, 71, 72, 73, 74, 84
		「とする」	152, 157, 160, 161

「との」	2, 152, 157, 160, 161, 169		41, 42, 47, 48, 50, 53, 55, 165, 175, 180
な行		文類数	163, 172, 174, 178
		文型番号	62, 65, 163, 169, 171, 172, 174, 178
内包	69, 70, 126	並立関係	50
内容節	128, 131, 132, 162	並立素性	50, 53, 55, 56, 57
内容説 (→内容補充)		別見出し	210, 211
内容補充	126, 127, 128, 131, 150, 151, 155, 161	包摂	211, 212, 213, 216
ナ形容詞	2, 105	補充	126, 127, 128, 131, 133, 142, 143, 148, 150, 151, 155, 161, 162
二重主格構文	39, 41, 179		
日常性	124, 127	補足	189
人称制限	176		
ノNP O	123, 124, 125, 126, 139, 142, 143, 145, 168, 177	ま行	
一のような	208		
一のように	208	見出し	63, 185
		名詞   ガ	93, 94, 100, 101, 102, 107, 108
は行		名詞   ニ	93, 94, 100, 101, 102, 107, 108
派生語	187, 188, 201, 204, 205	名詞   他	93, 94, 100, 101, 102, 107, 108
版	64	名詞句	33, 165, 177
判断規準	126, 127, 128, 130, 131, 132, 133, 134, 135, 136, 137, 138	メタファー	55, 212, 213, 214, 215, 218, 219, 221, 222, 223, 224
被修飾語	1, 3, 6, 8, 10, 19, 20, 24, 26, 27, 33, 34, 46, 56, 58, 59, 65, 103, 108, 118, 123, 139, 141, 149, 160	メタニミー	55, 212, 213, 214, 215, 216, 217, 218, 219, 220, 221, 222, 223, 224
必須	4, 31, 45, 95, 159, 167, 169, 180	や行	
被連体文例	62, 65, 67, 123, 124, 125	役割	31, 38, 39, 40, 47, 48
表記	64, 184, 185	用言	31, 32, 34, 47, 60, 208
比喻	15, 29, 30, 52, 55, 60, 129, 133, 134, 136, 137, 158, 174, 207, 211, 212, 213	要素数	184, 189, 203, 204
		要素番号	184, 188, 189, 203, 204
頻度	64, 86, 87, 124, 127, 131, 185, 186, 189	要素表記	8, 184, 185, 186, 189, 190, 191, 202, 203, 204
ファイル	63	読み	64, 82, 98, 113, 144, 156, 184, 185, 186, 187, 188, 189, 190, 191, 192, 193, 195, 196, 199, 207, 208
副詞	2, 3, 4, 5, 6, 7, 9, 12, 27, 46, 63, 129, 138, 174, 178, 179, 184, 192, 198, 203, 204	ら行	
副詞句	31, 37, 43, 57, 149, 157, 159, 167, 168	領域	4, 31, 39, 47, 48, 49, 50, 53, 54, 55
副詞的要素	128, 132	隣接関係	32, 50, 153, 212, 213, 214, 215, 216, 218
副平叙	8, 149, 157, 159, 160	類概念	128, 129, 133, 134, 136, 137
副用例	157	類義語	6, 10, 23, 24, 25, 27, 35, 36, 69, 71, 72, 73, 74, 75, 84, 85,
複合語	45, 72, 164, 187, 188, 201, 204, 205		
プラス	93, 103		
文型	31, 32, 34, 35, 36, 37, 38, 40,		

	127	S 見出し語	152, 157 159
連体形	1, 105, 147, 149, 150, 151	S 文例	65, 149, 154, 157, 158, 160
連体修飾の二つのあり方	150	S 平叙	149, 156, 157, 160
連体修飾語	11, 14, 15, 17, 18, 19, 20, 21, 26, 29, 213, 214	φ	94, 95, 165, 166, 167, 168, 175, 179, 198
連体修飾語としての用法	2, 3, 4, 6, 8, 10, 13, 27, 33, 46, 56, 62, 65, 103, 104, 122	/	47, 96, 127, 157, 158, 159, 165, 166, 175, 177, 208
連体修飾語としての用法 1	3, 6, 8, 19, 27, 33, 65, 149, 160	/…	96
連体修飾語としての用法 2	3, 6, 8, 27, 33, 56, 65, 149, 160		93, 97, 127
連体文例	62, 65, 67, 104, 105	( )	71, 112, 140, 185, 208
AガBノCダ	180	[ ]	71, 82, 114, 126, 157, 158, 159, 185, 186, 190, 209
I P A S T a X	68	{ }	126, 157, 158, 159, 208
NP O スル	165	+	93
NP O ナ	104	—	111, 126, 139, 192
NP O ノ	104	< >	126, 208
NP O ノ／ナ	104	#	189
NP O ヲスル	170	*	64
NP 1	125, 126, 165, 175	**	64
NP 1 の NP O	124	***	64
NP 1 ノ NP O	123, 124	★	103
NP 2	135, 175	○	181
NP x	180	×	112, 181
NP y	180	△	181
S	149, 167		
S という (→S ト疑問、S ト平叙)			
S という見出し語	156		
S ト疑問	149, 157, 158, 160		
S ト平叙	149, 156, 157, 158, 160		
S ト用例	149, 153, 156, 157		

用語索引の対照は第一部のむである。項目やページの選定には精粗がある。ご了承のうえご参照ください。

意味素性索引

／ABS／	229, 230, 239, 259, 275		290, 291, 292, 293, 294, 295, 296
／ANI／	229, 262	〈INC〉	229, 239, 252, 254, 295
／CON／	229, 230, 234, 263	〈INF〉	229, 239, 241, 252, 253, 254, 255, 257, 268, 276, 295
／PRC／	229, 234, 269	〈INT〉	229, 231, 232, 233, 267, 268
／SPA／	229, 231, 233, 266	〈ITM〉	229, 239, 247, 248, 249, 284, 295
〈ABS〉	229, 239, 246, 252, 259, 260, 269, 278, 287, 295, 296	〈KND〉	229, 239, 252, 258, 259, 262, 263, 264, 265, 266, 295
〈ACT〉	229, 234, 235, 238, 245, 266, 270, 272, 274, 289	〈LIQ〉	229, 230, 231, 235, 264, 265, 266, 269
〈AML〉	229, 230, 257, 261, 264, 294	〈LOC〉	229, 231, 232, 233, 235, 236, 247, 251, 252, 254, 258, 261, 262, 263, 264, 265, 266, 267, 268, 270, 272, 283, 284, 286, 287, 289, 293, 294
〈ANI〉	229, 230, 231, 247, 250, 251, 257, 261, 262, 263, 266, 271, 279, 280, 283, 287, 294	〈MAN〉	229, 239, 240, 244, 245, 246, 272, 280, 281, 282, 295
〈APO〉	229, 234, 236, 238, 268, 274, 292	〈MEA〉	229, 239, 240, 241, 242, 246, 247, 248, 249, 256, 275, 276, 278, 283, 284, 290, 292, 295
〈APP〉	229, 239, 252, 255, 295	〈MIN〉	229, 239, 240, 244, 245, 246, 281, 282, 295
〈ATT〉	229, 239, 240, 242, 244, 295	〈NAM〉	229, 239, 252, 257, 295
〈AUT〉	229, 230, 231, 265, 266, 267, 268, 294	〈NAT〉	229, 234, 235, 238, 269, 274
〈CON〉	229, 230, 231, 232, 234, 235, 236, 237, 247, 252, 257, 261, 262, 263, 264, 265, 266, 267, 268, 269, 271, 272, 284, 287, 289, 294	〈NON〉	260, 296
〈CUR〉	229, 239, 247, 248, 249, 275, 295	〈NOR〉	229, 239, 240, 245, 252, 253, 295
〈DIR〉	229, 239, 250, 251, 286, 295	〈ORD〉	229, 239, 252, 256, 295
〈DIS〉	229, 239, 247, 248, 249, 284, 295	〈ORG〉	229, 231, 232, 233, 236, 250, 252, 257, 258, 266, 268, 272, 275, 283, 285, 288, 293, 294
〈DUR〉	229, 239, 247, 248, 249, 284, 295	〈PAS〉	229, 230, 231, 265, 266
〈EDI〉	229, 231, 236, 264, 265, 266, 273, 294	〈PER〉	229, 239, 240, 244, 245, 246, 281, 282, 295
〈ELM〉	229, 234, 235, 238, 268	〈PHA〉	229, 239, 250, 251, 252, 292, 295
〈ENT〉	229, 239, 252, 257, 295	〈PHE〉	229, 234, 235, 236, 237, 238, 242, 246, 264, 265, 268, 270, 271, 274, 278
〈EVA〉	229, 239, 240, 244, 246, 295	〈PIT〉	229, 235, 236, 239, 252, 254, 256, 272, 273, 289, 292, 293, 295
〈EVE〉	229, 234, 235, 236, 238, 266, 272, 274, 291, 292	〈PLA〉	229, 234, 235, 238, 264, 269, 271, 274
〈FLD〉	229, 239, 252, 253, 295	〈POT〉	229, 234, 235, 238, 264, 266, 269, 274
〈FOR〉	229, 239, 240, 242, 243, 244, 245, 246, 248, 255, 282, 284, 295	〈PRC〉	229, 234, 235, 236, 238, 287
〈GAS〉	229, 234, 235, 238, 269, 271, 274	〈PRI〉	229, 239, 240, 241, 247, 256, 278, 283, 295
〈GAT〉	229, 233, 239, 252, 257, 258, 262, 263, 264, 266, 268, 294, 295	〈PRO〉	229, 234, 236, 237, 238, 264, 266, 268, 273
〈GRA〉	229, 239, 240, 241, 242, 243, 244, 246, 256, 269, 270, 274, 276, 277, 278, 290, 295		
〈HUM〉	229, 230, 232, 235, 250, 251, 252, 253, 254, 255, 257, 258, 259, 261, 263, 264, 265, 266, 267, 270, 271, 272, 273, 275, 276, 279, 281, 282, 283, 284, 285, 286, 287, 288, 289,		

〈P R P〉	229, 239, 252, 255, 289, 295
〈Q A L〉	229, 239, 242, 252, 255, 290, 295
〈Q U A〉	229, 239, 241, 247, 248, 249, 295
〈R A T〉	229, 239, 247, 248, 249, 284, 295
〈R E C〉	229, 239, 240, 244, 245, 246, 281, 282, 295
〈R E F〉	229, 239, 240, 250, 251, 252, 295
〈R E L〉	229, 230, 250, 258, 259, 263, 295
〈R E S〉	229, 234, 236, 237, 238, 255, 270, 274, 290
〈R O L〉	229, 239, 250, 258, 259, 263, 267, 294, 295
〈S O C〉	229, 239, 240, 242, 244, 277, 278, 279, 295
〈S O L〉	229, 230, 231, 265, 266
〈S P A〉	229, 231, 233, 252, 262, 263, 264 265, 266, 269, 287
〈S T A〉	229, 239, 241, 243, 246, 247, 249, 255, 290, 295
〈S T G〉	229, 239, 252, 255, 295
〈T I M〉	229, 239, 252, 256, 287, 292, 295
〈U N T〉	229, 239, 252, 256, 295
〈V A L〉	229, 239, 246, 247, 248, 249, 295

意味素性索引の対象は第二部のみである。

本書の一部あるいは全部を許可なく複製すること、および、計算機で利用できる媒体に入力することを禁じます。

本辞書の電子化データは別途提供しているので、利用を希望される方は情報処理振興事業協会技術センター管理室にお問い合わせ下さい。

不許複製 禁無断転載

© 情報処理振興事業協会 1996

発行 平成 8 年 3 月 定価 1,000 円 (税込み)

発行者 〒105 東京都港区芝公園三丁目 1 番 38 号

秀和芝公園三丁目ビル 6 階

情報処理振興事業協会

技術センター

電話番号 (03) 3437-2301

報告書番号 7 技—157